

業務実績書

研究所 No. 1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	文化的景観に関する調査研究 ((1)-①-ア)					
【事業概要】 文化的景観の体系化や保護策に関する研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報の収集・発信をおこなうとともに、文化的景観の計画論に関する研究集会を開催する。また、ケーススタディーとして高知県四万十川流域の文化的景観に関する調査研究報告書の作成を進める。						
【担当部課】 文化遺産部	【プロジェクト責任者】 文化遺産部長 小野健吉					
【スタッフ】 清水重敦〔文化遺産部景観研究室長〕、惠谷浩子〔同部研究員〕、松本将一郎〔同部特別研究員〕、宮城俊作〔客員研究員〕						
【主な成果】 文化的景観に関する基礎的な情報の収集、四万十川流域や宇治の文化的景観に関する現地調査等を通じて、文化的景観の価値評価、保存計画立案、整備・活用事業の基本的な考え方を整理し、報告書・論文・Web サイトを通じて成果を報告した。また、文化的景観研究集会(第2回)を開催し、価値評価と計画策定の考え方につき情報発信するとともに、昨年度開催の研究集会(第1回)の成果報告書を刊行した。						
【年度実績概要】						
1. 基礎的情報の収集・発信	文化的景観の基礎的・体系的な調査研究の一環として、文化的景観に関する基礎的な情報(国内の関係法令、各重要文化的景観の概要、文化的景観に関する文献等)の収集をおこなった。収集した情報は、新たに開設した文化遺産部景観研究室 Web サイトにて順次公開するとともに、出版刊行物として『文化的景観資料集 1 重要文化的景観の概要』(報告書②)をまとめ、全国の関連自治体、図書館、研究機関に配布した。					
2. 文化的景観保護に関する現地調査・研究	昨年度まで実施してきた四万十川流域の文化的景観に関する現地調査成果を整理・分析し、調査研究報告書の骨格をなす発表をおこなうとともに、宇治の文化的景観に関する受託研究や全国の文化的景観の視察と担当者との協議を通して、特に都市の文化的景観の価値評価と保存計画立案、文化的景観の整備・活用事業のあり方についての基本的な考え方を整理し、報告書等にまとめた。					
3. 研究集会等の開催	「生きたものとしての文化的景観—変化のシステムをいかに読むか—」というテーマで、2009年12月18・19日に奈良県歯科医師会館講堂で文化的景観研究集会(第2回)を開催し、計158名の参加を得た。発表は、基調講演1件、基調報告5件(1. 農山村、2. 集落景観、3. 都市、4. モノと土地、5. 民俗)、重要文化的景観等に関する取組の実績と課題に関する事例報告5件の計11件である。発表後、これらの講演者及び報告者、並びに座長の計12名による総合討議を行った。これに合わせ、『文化的景観研究集会(第2回)講演・報告資料集』(資料集③)を作成した他、昨年度開催した研究集会(第1回)の成果報告書(報告書①)を刊行した。					
また、文化的景観に関する学術及び保護行政の情報・課題を共有し、議論を深める場として文化的景観学研究会を立ち上げ、会合を開いた。						
【実績値】 研究集会開催数: 1回(資料集③)、参加者数: 地方自治体職員(文化財、都市計画、企画ほか)等、158名。報告書刊行: 3冊(①~③)、論文: 7件(④~⑩)、研究発表: 6件(⑪~⑯)						
【備考】						
報告書等: ①『文化的景観研究集会(第1回)報告書』奈良文化財研究所、2009.12、②『文化的景観資料集 1 重要文化的景観の概要』奈良文化財研究所、2010.3、③『文化的景観研究集会(第2回)講演・報告資料集』奈良文化財研究所、2009.12 論文: ④惠谷浩子「文化的景観の輪郭と多様性」、『奈良文化財研究所紀要 2009』2009.6、⑤惠谷浩子「住民意識の反映としての文化的景観」(『ランドスケープ研究』73-1、2009.4)、⑥惠谷浩子「四万十川流域の文化的景観」『文化的景観研究集会(第1回)報告書』奈良文化財研究所、2009.12、⑦清水重敦「条坊パターン」「宇治の文化的景観」惠谷浩子「ため池」(「古代はいま」『朝日新聞』2009.7-10)、⑧惠谷浩子「新たな遺産」「効率的な土地利用」「合理的な水利システム」「農地と森林」「恵みと脅威の二面性」「林業地と港町」「未来描く手掛けかり」(「ふるさと原風景」『高知新聞』2009.5-6)、⑨清水重敦「都市に生まれたスキマ」(『新建築住宅特集』284、2009.12)、⑩松本将一郎「小鹿田焼の里 -焼物の里の文化的景観-」(『遺跡学研究』6、2009.11) 研究発表: ⑪惠谷浩子「文化的景観を継承するための住民意識—意識と景観保全行動との因果関係の比較—」(平成21年度 日本造園学会関西支部大会、2009.10)、⑫惠谷浩子「広域の文化的景観をどう捉えるか 四万十川流域を事例として」(文化的景観研究集会(第2回)、2009.12)、⑬惠谷浩子「近代中宇治の都市構造」清水重敦「中宇治の伝統的家屋」宇治の伝統的木造家屋調査中間報告会、2009.9、⑭惠谷浩子「輪島市三井町の「アテ」 林業の文化的景観」かやべ2010、2010.2、⑮惠谷浩子「四万十川流域の文化的景観 景観から読み解く四万十川」四万十川自然再生協議会総会、2010.3、⑯清水重敦「宇治の伝統的家屋からみる歴史の重層性」宇治文化的景観フォーラム2010、2010.3						



研究集会の様子

自己点検評価調査

研究所 No. 1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

文化的景観の保護行政が進展しつつも、基礎的情報や保護手法の具体的な事例が不足している現状に対し、①保護行政に資する基礎的情報の整理・公開、②現地調査を通じた保護行政の手法についての独創性ある提案、③学術及び保護行政の可能性を広げる研究集会の開催、④情報の共有と議論の場の設定、をおこない、文化的景観を学術及び保護行政の両面において持続的かつ発展性のある領域へと広げていくことに貢献しえた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

研究成果を3冊の報告書として出版刊行したほか、学術雑誌等における論文や研究発表による公表をおこなった。

本年度開催した研究集会には158名の参加を得、文化的景観の課題等に関する活発な議論ができた。また参加者の内92%の参加者から有意義であったという評価を得た。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化的景観に関する基礎的情報の収集・発信、四万十川流域や宇治を対象とした現地調査・研究、研究集会等の実施、学会や学術雑誌等での研究成果発表と、年度当初の計画を十分に実施し、的確な成果を公表し得た。これらの成果を踏まえつつ、今後も文化的景観に関する保護行政及び学術に資する成果の的確な公表を目指し、基礎的調査研究と現地調査研究を進めていく。なかでも、文化的景観研究集会に関しては、地方公共団体や専門家等からの評価も高く、次年度以降もこれを開催していくべき事業であると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観の体系化と保護行政に関する実践的研究に関して、基礎的研究、現地調査、研究集会の開催等を通じて、計画通り研究が進捗し、多くの成果を公表し得た。中期計画最終年度である次年度は、文化的景観に関する基礎的情報の収集・整理成果、そして四万十川流域の文化的景観の現地調査研究やその他の現地調査研究の内容を踏まえ、文化的景観の保護行政に関する調査研究報告書を刊行する。

業務実績書

研究所 No. 2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	民俗技術に関する調査・資料収集 ((1)-①-イ) 無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 ((1)-④)		
【事業概要】 風俗慣習、民俗芸能、民俗技術など無形民俗文化財の伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等についての調査研究を行い、その成果をデータベースとして構築する。さらに研究協議会の開催を通じて各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。 また文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった民俗技術に関する基礎的な調査研究を実施し、保護施策に資するデータを提供する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 宮田繁幸
【スタッフ】 俵木 悟(無形文化遺産部)、服部比呂美(客員研究員)			
【主な成果】 民俗技術の伝承実態、民俗芸能の伝承組織について現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形文化遺産研究報告』などに報告した。また無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議し、その成果を報告書にまとめ、関係者、関係機関等に配布した。さらに地方自治体で作成された無形文化遺産に関する記録の所在情報を整理・データ化し、データベース構築の検討を行った。			
【年度実績概要】 1. 民俗技術に関する調査・資料収集 民俗技術に関する調査・資料収集として、香川県西讃地方で、八朔の馬節供に飾られる団子馬製作の技術について、現地調査と資料収集を行い、その成果を『無形文化遺産研究報告』で報告した。 2. 無形民俗文化財の伝承状況に関する調査研究 無形民俗文化財の伝承状況の調査として、鹿児島県いちき串木野市に伝承される大里七夕踊りと虫追い踊りについて、とくに伝承組織に着目して現地調査と資料収集を行い、その成果を日本民俗学会年会で発表し、また『無形文化遺産研究報告』で報告した。 3. 研究集会の開催 第4回無形民俗文化財研究協議会を、「無形の民俗の伝承と子供の関わり」をテーマに、2009年11月19日(木)に、東京文化財研究所セミナー室において開催した。5件の事例報告(1.大磯の七夕行事の継承の取り組み、2.大鹿歌舞伎継承の取り組み、3.伝統文化こども教室事業の現状と課題について、4.直根小学校における民俗芸能への取り組み、5.餅・団子を通して様々な「発見」)とともに、コーディネーター1名、コメントーター2名を含めた総合討議を行なった。協議の成果は『第4回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめた。 4. 無形文化遺産の記録の所在情報のデータベースの構築 昨年度末までに収集した記録の所在情報を整理・データ化した。計5,087件(暫定)のデータが集まり、来年度のデータベース構築に向けての検討を行なった。その分析と今後のデータベース化についての見通しは、東京文化財研究所総合研究会で報告した。			
【実績値】 研究集会等開催数：1回(資料①)、参加者数：地方自治体文化財保護担当者等107名。 論文数：2件(資料②③) 研究会等発表件数：3件(資料④⑤⑥)			
【備考】 ①第4回無形民俗文化財研究協議会報告書 2010.3 ②俵木 悟「大里七夕踊にみる民俗芸能の伝承組織の動態」『無形文化遺産研究報告』4 2010.3 ③服部比呂美「八朔の馬節供 西讃地方の団子馬製作を中心に」『無形文化遺産研究報告』4 2010.3 ④俵木 悟「民俗芸能の稽古を通して見る社会組織の動態-大里七夕踊の事例から-」 第61回日本民俗学会年会 2009.10.4 ⑤宮田繁幸 “Scholar, Local government, and Local Community--A case study of the safeguarding of folk performing arts in Japan “Ayako-Mai”” 国際会議「無形文化遺産と地域共同体」香港科技大学 2009.12.4 ⑥俵木 悟「無形文化遺産の記録所在情報データベース構築に向けて-現状報告-」 東京文化財研究所総合研究会 2010.2.10			



民俗芸能の伝承組織調査の様子

自己点検評価調書

研究所 No. 2

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		

備考

無形民俗文化財の伝承状況の調査を通じて、民俗芸能、祭礼、民俗技術など無形民俗文化財の種別の特性に応じた問題点を見つけ出し、その保護に資するための検討を行なうことができた。また研究協議会では、子どもたちに無形の民俗文化を伝えていくために、学校や地域社会の様々な組織のネットワーク作りが必要であることなどを、実例をもとに提案することができた。さらに無形文化遺産記録の所在情報のデータベース化について、データの整理分析がほぼ完了し、データベースの実現の見通しをつけることができた。

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	研究会等発表件数				
判定	A	A				

備考

研究成果については、学会発表や学術雑誌等への公表を順調に行なうことができた。本年度開催した研究協議会には、107名の参加を得、無形の民俗の伝承と子供の関わりというテーマにそって活発な議論が行なわれた。また65%の参加者から「たいへん有意義だった」、35%の参加者から「有意義だった」との評価を得た。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形民俗文化財としての民俗技術や民俗芸能の伝承状況や伝承組織の調査と情報収集、無形民俗文化財の実施、学会や学術雑誌等での研究成果発表などを十分実施できた。伝承組織の実態の調査は、伝承者の不足に悩む多くの保護団体に対してアピールする面も大きいと考えられ、今後も継続していきたい。また無形民俗文化財研究協議会は、この数年、それまで以上の多数の参加者を集め、反響も大きくなっているので、テーマ設定を工夫するなどして、継続的かつ発展的に今後も取り組んでいきたい。さらに、全国の地方自治体における無形文化遺産の記録所在情報データベースは、多くの関係者の注目を集めており、実現すれば目に見える成果を多くの人々に提供することができると考えられ、来年度内の公開をぜひ実現したい。以上の状況を総合的に判断して、Aと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、目的を順調に達成した。調査研究活動については、今後もこのペースを維持していきたい。平成22年度は、通常の調査研究活動に加え、無形文化遺産の記録情報データベースを完成させ、公開することを予定している。

業務実績書

研究所 No. 3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアの美術に関する資料学的研究 ((1)-(2)-ア)		
【事業概要】 日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみを解明することを目指す。研究にあたっては、より質の高い資料の提示が求められる時勢に対応して、新しい技術、精度、信頼性、網羅性など必要な条件を満たすこれからの美術資料のあり方や可能性を探り、資料の収集・蓄積・公表等においてそれを具体的に実現することに留意している。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 塩谷 純
【スタッフ】 中野照男(副所長)、田中 淳、勝木言一郎、津田徹英、山梨絵美子、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕(以上、企画情報部)、相澤正彦、吉田千鶴子、三上 豊、森下正昭(以上、客員研究員)			
【主な成果】			
(1)情報資料の収集のための調査：近現代美術の保存・修復に関する欧州調査。 (2)美術史研究のためのコンテンツの形成：『日本絵画史年紀資料集成(15世紀)』のデータ入力。古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化。 (3)研究会の開催：研究会「セインズベリー日本藝術研究所と英國の文化財アーカイブ」の開催。オープンレクチャーの開催。 (4)研究成果報告書の編集・刊行：『黒田清輝フランス語資料集』の刊行。			
【年度実績概要】			
(1)情報資料の収集のための調査 近現代美術の保存・修復に関する調査を英國テートギャラリー、オランダ文化財研究所(ICON)を中心に行った(森下)。 (2)美術史研究のためのコンテンツの形成 平成22年度に『日本絵画史年紀資料集成(15世紀)』を刊行すべく、古美術展カタログ等に散在する情報を抽出して統合するための仮登録作業を終えた(登録総数約3,770件、重複を含む)。続いて対象を絵画資料に絞って統合作業を進めた(約560件)(綿田)。既に当研究所OBによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を行った。作業にあたっては目録(出典等)のみならず当該記事本文も入力し、公開時の利便性を図った。今年度は約500件の入力を終えた(土屋)。 (3)研究会の開催 2月25日に研究会「セインズベリー日本藝術研究所と英國の文化財アーカイブ」を平野明氏(セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館)を発表者、出光佐千子氏(出光美術館)、森下をパネラーとして開催した。またオープンレクチャーを本研究と関連させ、「人とモノの力学」というテーマのもと10月2・3日に開催した。 (4)報告書の刊行 当研究所が保存している黒田清輝宛のフランス語書簡全279件と留学中に書かれたフランス語日記(1888年、東京国立博物館蔵)の原文と翻訳、及び現地調査写真と研究論文によって構成した『黒田清輝フランス語資料集』を刊行した。			
【実績値】			
学会誌等への掲載論文数 3件(①～③) 学会等での発表件数 3件(④～⑥) 報告書刊行件数 1件(⑦)			
【備考】			
①皿井 舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織(下)」 『美術研究』398 2009.8 ②田中 淳「序論—黒田清輝フランス語資料集のために」『黒田清輝フランス語資料集』 2010.3 ③森下正昭「コンテンポラリー・アートに関する美術館の新たな取り組み—英國テート・ギャラリーとINCCAのアーティスト・インタビュー・アーカイブ」 『美術研究』400 2010.3 ④吉田千鶴子「今泉雄作「記事珠」の研究・中間報告—宝物調査日記を中心に」 企画情報部研究会 2009.9.30 ⑤土屋貴裕「「異国」をこしらえる—「玄奘三蔵絵」をめぐって」 企画情報部オープンレクチャー 2009.10.2 ⑥中野照男「大谷探検隊収集西域壁画の光学的調査」 企画情報部オープンレクチャー 2009.10.3 ⑦『黒田清輝フランス語資料集』 東京文化財研究所 2010.3			

自己点検評価調書

研究所 No. 3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文等掲載数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は英国テートギャラリー、オランダ文化財研究所(I C N)での聞き取り調査や研究会「セインズベリー日本藝術研究所と英國の文化財アーカイブ」の開催等を通して、とくに欧州における美術資料のあり方について積極的に情報収集を行い、一部を『美術研究』誌上で紹介した。一方で2007年度より継続して行っている『日本絵画史年紀資料集成(15世紀)』のデータ入力に加え、古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化に着手し、美術史研究に資するコンテンツの更なる充実を図ったためAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は『黒田清輝フランス語資料集』を刊行、さらに次年度刊行予定の『日本絵画史年紀資料集成(15世紀)』の編集も順調に進んでいる。また当研究所で所蔵する、今泉雄作の明治20年から大正2年にかけての日記である『記事珠』全38冊の、宝物調査記録としての価値が確認され、今後、こうした新資料についてもより多くの研究者に活用されるよう検討ていきたい。

業務実績書

研究所 No.4

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する総合的研究((1)-②-イ)		
【事業概要】 多様化する現代美術の動向の調査研究を含め、日本近代美術の研究資料のあり方、研究の手法の開発、研究成果の公開の仕方を研究し、文化財行政に寄与することを目的としている。そのため、具体的には、第一にこれまで未公開の基礎資料の収集整理の上、データ化等の公開にむけた調査研究を行う。第二に資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開を進める。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 山梨絵美子
【スタッフ】 田中 淳、塩谷 純(以上、企画情報部)、三上 豊、丸川雄三(以上、客員研究員)			
【主な成果】 未公刊資料の調査研究として、黒田清輝関連資料、笛木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進め、既刊の『日本美術年鑑』所載データをウェブ上に公開するための準備を行った。資料にもとづく研究協議、成果公開としては、研究会を通じて近現代美術に関する研究協議を行った。			
【年度実績概要】 1 未公開資料の収集整理とデータ化に向けた調査研究では以下の3件を行うことができた。 (1)平成21年11月に黒田記念館での展示公開を条件として東京国立博物館に寄贈された《芍薬》《舟》および日清戦争関係の作品3点について調査研究を行なった。また、黒田清輝筆《昔語り下絵》(東京国立博物館蔵)、斂光筆《眼のある風景》(東京国立近代美術館蔵)の近赤外線撮影による調査を行い、その成果の一部を黒田記念館で「赤外線の眼で見る《昔語り》」(10. 2. 25-7. 10)として展示公開した。 (2)笛木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理を進め、また、21年12月に閉廊した村松画廊からの寄贈資料の整理に着手した。 (3)既刊の『日本美術年鑑』の年史(1936年から2003年)データをウェブ上で公開するため、創IMAGINEでの試験運用を行った。 2 資料にもとづく研究協議、論文等の研究成果の公開促進としては、以下を行った。 (1)近現代研究協議として、以下を行った。 平成22年1月27日 山梨絵美子「黒田記念館の平成21年度受贈作品について—黒田清輝筆《舟》、《芍薬》、《日清役二龍山砲台突撃図》、《林政文肖像》2点」			
【実績値】 研究会等発表 3件(①~③) 論文掲載数 6件(④~⑨)			
【備考】 ①塩谷 純「川端玉章の研究—玉章の“支那画”観」企画情報部研究会 09. 7. 29 ②山梨絵美子 Beyond Nationalism- an example of Japanese Modern Art , 韓国西洋美術史学会シンポジウム「Nationalism and Art History」梨花女子大学校(韓国)09. 5. 16 ③山梨絵美子 「黒田清輝の描く女性の労働と休息—《針仕事》《読書》《湖畔》をめぐって—」石橋美術館、09. 10. 31 ④塩谷 純「川端玉章の研究(二)」『美術研究』399 2010. 1 ⑤田中 淳「研究ノート 試論・「新しい女」と「風船を持つ女」—萬鉄五郎《風船を持つ女》の制作背景と表現」『美術研究』398号、 09. 8 ⑥山梨絵美子 Beyond Nationalism- an example of Japanese Modern Art, Art History and Nationalism, Seoul Korea, 09. 9 ⑦山梨絵美子 黒田清輝の《昔語り》と白馬会の歴史主題—記紀神話主題の扱いをめぐって 『東アジア美術におけるモダニティー』 09. 11 ⑧塩谷 純「床の間の上の裸婦」東京文化財研究所編『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』 2009. 4 ⑨田中 淳「「統制」と「国際」の時代—戦中期の有島生馬を中心に」『昭和期美術展覧会の研究 戦前編』 2009. 4			

自己点検評価調書

研究所 No. 4

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研究会発表数	論文掲載数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	未公開資料の収集整理とデータ化、および近現代視覚芸術に関する調査研究とともに順調に推進することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に従って実施することができ、また、ウェブ上での公開に向けて具体的な準備を進めることができた。

業務実績書

研究所 No.5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の技法・材料に関する広領域的研究 ((1)-(2)-ウ)		
【事業概要】 文化財にかかわる諸分野との提携による作品の多角的研究を目指す。具体的には作品を構成する材料や用いられた技法、制作の過程・作品の成り立ち、生成されてから今日にまでそれがどのように受容され、あるいは伝来してきたなどを、関係の文献史料や、あるいは作品そのものに対する科学的分析(X線撮影など)を援用しながら解明し、文化財についてより深く考究していくことを目的としている。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 綿田 稔
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕(以上、企画情報部)			
【主な成果】 本研究は美術作品が基盤としている材料・技法・制作の過程等を文献史料あるいは作品に対しての科学的手法による分析を援用しながら解明することを目的とする。本年度は天平時代の脱活乾漆像、近世の屏風などについて実地調査した。また、奈良時代史料にあらわれた彩色語彙の収集につとめ、データベースをホームページ上で公開し、逐次、その更新に努めた。			
【年度実績概要】 本年度は脱活乾漆技法の解明のため如来坐像(高円寺蔵)の作例を調査した。その他、米国ポートランド美術館所蔵の屏風その他を調査し、紙継等の基本的な情報を収集した。また、X線透過撮影による仏像の調査研究について、その成果の一端をパネル展示した。 美術工芸品の彩色を考えてゆくうえで、史料にあらわれた関係語彙とその使用例を総覧することを目的に彩色関係資料データベース(語彙・史料編)のデータ集積を行った。集積に際しては『大日本古文書』などの公刊史料(活字本)をもとに、その中から奈良時代史料にあらわれた彩色関係の語彙を抽出し、分類したうえで、彩色語彙データベースをホームページにおいて公開するとともに、逐次、更新して精度を上げることに努めた。今年度は『大日本古文書』1~19巻の入力・公開を終え、次年度の報告書作成に向けて全約6,500件のデータの校正ならびに再整理にとりかかった。 研究会3件(2009年4月22日、綿田 稔「福岡城本丸御殿の雲谷派障子絵について」/2010年2月12日、清水重敦〔奈良文化財研究所〕「近代京都画壇と家:近代における和風建築の表現と画家の役割」、コメンテーター:小倉実子〔京都国立近代美術館〕・田中修二〔大分大学〕/2010年3月24日、江村知子・土屋貴裕・綿田 稔「ポートランド美術館所蔵作品調査報告」)を開催した。 前年度までに寄贈を受けた資料のうち、技法材料研究とともに関わりの深い久野健旧蔵資料および秋山光和旧蔵資料の整理に着手した。			
【実績値】 彩色関係資料データベース 入力件数 約1,300件、全約6,500件の校正並びに再整理 論文掲載数 2件(①・②) 発表件数 3件(③~⑤)			
【備考】 ①津田徹英「研究資料 脱活乾漆像 菩薩立像」『美術研究』398号 pp. 82-89 09.8 ②綿田 稔「雲谷等顔筆「梅に鴉図」考—名嶋城御成書院から福岡城対面所へ—」『美術研究』400号 pp. 16-54 10.3 ③綿田 稔「福岡城本丸御殿の雲谷派障子絵について」企画情報部研究会 東京文化財研究所 09.4.22 ④パネル展示「X線透過による仏像の調査・研究」東京文化財研究所エントランスロビー 09.9~10.2 ⑤綿田 稔・江村知子・土屋貴裕「ポートランド美術館所蔵作品調査報告」企画情報部研究会 東京文化財研究所 10.3.24			

自己点検評価調書

研究所 No. 5

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	論文掲載数	発表件数	データ集積数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術や文化財に対する理解を深めるための美術の創作のプロセスの解明を行うべく、実作例と史料の双方からアプローチを行っている。計画 4 年度としては十分な成果を得られたため、A と判断した

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全般的に計画通りに進捗したと考える。次年度以降も一層の深化が期待でき、計画的に調査研究・史料収集・データ整理を継続して、その成果を報告書にまとめたい。

業務実績書

研究所 No. 6

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	古都所在寺社の歴史資料等に関する調査研究 ((1) - (2) - エ)		
【事業概要】 古都に所在する寺社が所蔵する歴史資料や書跡資料について継続的、悉皆的に整理・調査作成・写真撮影等の調査をおこない、現存資料の実態の把握に努め、その調査成果を目録、データベース等により、また重要資料については翻刻をおこない公開する。このような文化財の総合的研究の基礎となる調査を基本とし、その上で記載内容を分析して文化財の歴史的性格・特徴等を研究し、日本の歴史、文化の研究に資する。調査にあたって撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聰
【スタッフ】 渡辺晃宏(都城発掘調査部史料研究室長)、馬場 基、山本 崇(以上、同部主任研究員)、浅野啓介、桑田訓也(以上、同部研究員)、古藤真平(同部特別研究員)、加藤 優(客員研究員)、吉川真司(客員研究員)			
【主な成果】 興福寺については、戦国時代大和国の飢饉・一揆等の生々しい実態を記した資料を紹介することができた。天候不順による凶作と年輪年代の関係も読み取れる興味深い資料である。唐招提寺に関しては、絵図調査の知見に基づいて、学会発表を行った。近世の絵図だが、江戸時代前期の絵図は古代の伽藍配置を窺うに足る内容を持っている。また、平城宮・京に関わる絵図・古文書調査を進めた。			
【年度実績概要】 本年度は、興福寺・東大寺・石山寺・仁和寺・氷室神社大宮家・薬師寺・唐招提寺所蔵の書跡資料・歴史資料調査を行った。興福寺調査は、第 105 収・106 収・107 収の調査を作成した。写真は第 90 収等を撮影している。また昨年度刊行の『興福寺典籍文書目録第四卷』(奈良文化財研究所史料第 83 冊)で提示した目録の中から、戦国時代大和国の飢饉・一揆等の実態を記した資料を『奈良文化財研究所紀要 2009』で紹介した。薬師寺調査は、第 45 収～第 54 収の調査作成と、第 24 収の写真撮影を継続して実施した。 また石山寺経巻を調査し、大智度論の熟覧・詳細な調査作成と、ブローニー版での写真撮影を行った。仁和寺は、御経蔵聖教第 31 収～35 収の調査原本校正と、第 31～33 収・第 151 収の写真撮影を実施した。			
東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第 4 号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第 5 収・第 15 収の写真撮影を実施し、また第 53 収・54 収・55 収・59 収を調査して、目録データをパソコンに入力した。唐招提寺所蔵資料については、境内とその周辺を描いた絵図類を調査・写真撮影し、その成果を戒律文化研究会の大会で報告した。			
氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成文書仮第 2 収 1 卷～35 卷の調査作成を実施した。また、平城宮跡周辺の旧家が所有する絵図・古文書について、調査・写真撮影を実施した。			
その他調査協力の依頼を受けて、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査などに協力した。			
【実績値】 論文等数：論文 2 件(①②)、発表件数 32 件(③④⑤) 収集資料点数 興福寺：調査作成資料点数 93 点、写真撮影資料点数 147 点 薬師寺：調査作成資料点数 285 点、写真撮影資料点数 47 点 石山寺：調査作成資料点数 41 点、写真撮影資料点数 41 点 仁和寺：調査原本校正資料点数 348 点、写真撮影資料点数 323 点 東大寺：調査データ入力資料点数 1779 点、写真撮影資料点数 949 点 唐招提寺：調査作成資料点数 26 点、写真撮影資料点数 26 点 平城宮跡周辺諸家：写真撮影資料点数 48 点			
【備考】 ①吉川 聰「興福寺の論義草奥書にみえる歴史—戦国時代南都の飢饉・一揆・武将—」『奈良文化財研究所紀要 2009』2009. 7 ②吉川 聰「奈良加茂道の遡及的検討—近世伊賀道から古代東海道・恭仁京に及ぶ—」『律令国家史論集』塙書房、2010. 2 ③吉川 聰「唐招提寺境内の変遷」戒律文化研究会第八回学術大会口頭報告 2009. 11 ④吉川 聰「北浦定政と平城京」奈良大学「奈良文化論」講演 2009. 11 ⑤吉川 聰「近世奈良・加茂道の遡及的検討—古代東海道・恭仁京に及ぶ—」平成 21 年度読史会大会 2009. 11			



仁和寺聖教調査・写真撮影風景

自己点検評価調査

研究所 No. 6

1. 定性的評価

観点	正確性	適時性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考

古都に所在する寺社には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。そのため、着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、正確性・継続性に優れている。このような調査が今後の所蔵者の管理の基礎となり、また研究の基礎となるものであり、発展性がある。今年度は特に、石山寺・仁和寺や、平城宮跡周辺諸家の調査を実施することができた。以上よりAと判定した。

2. 定量的評価

観点	調査対象 箇所数	論文等数	発表件数	調査点数		
判定	A	A	A	A		

備考

調査対象箇所数は、年度計画に掲げた寺社をすべて調査した。論文等数・発表件数・調査点数は、それぞれ目標値1件・1件・500件であり、実績値はそれと同等または上回っているので、Aと判定した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺、東大寺、石山寺、氷室神社大宮家の調査は計画通り実施し、興福寺はその成果の一部を公表できた。また、薬師寺・唐招提寺のほか、仁和寺や平城宮跡周辺の諸家も調査することができた。以上の進捗状況を総合的に判定してAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は堅調に実現できたと考える。仁和寺調査は、膨大な量の聖教を対象とするので、次年度も継続的に実施する必要がある。石山寺調査は、その調査結果の公表が課題である。また、平城宮・京に關係する資料の所在が判明しつつあるので、さらなる調査を行い研究を深める必要がある。

業務実績書

研究所 No. 7

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	歴史的建造物の保存・修復・活用の実践的研究((1)―(2)―オ)					
【事業概要】 わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証(調査研究)を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。						
【担当部課】 文化遺産部 【プロジェクト責任者】 建造物研究室長 島田敏男 【スタッフ】 箱崎和久 [都城発掘調査部遺構研究室長]、黒坂貴裕、大林潤、番 光、鈴木智大、海野聰、高橋智奈津 [以上、同部研究員]、清水重敦 [文化遺産部景観研究室長]、栗野隆、恵谷浩子 [以上、同部研究員]、松本将一郎 [同部特別研究員]、成田聖 [企画調整部任期付研究員]、増井正哉 [客員研究員]						
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像をデジタルデータ化し、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査をおこなった。						
【年度実績概要】 1. 所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1959年度から1961年度分のワード文書化、図版調整を行い、その成果を本文編と図版編に分けて刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板(長野県分)を整理して、画像をデジタル化した(デジタル化は外注)。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 2. 古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を開始した。本年度は、かつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査をおこなった。なお、調査にあたっては、竹中大工道具館の協力を得た。 3. 建造物の基礎データ収集等を目的とした奈良県近代和風建築総合調査および津和野町近世社寺・鷺原八幡宮を受託し、調査・図面作成・報告書原稿作成をおこなった。 4. 海外関連事業として、日中韓の3国での文化財研究所における共同研究の一環として、2009年12月に韓国ソウル市で、国際学術会議を開催した。研究発表をおこなうとともに、総合討議をおこなった。なお、国際会議後に、第2回以降の予定を協議し、22年度は奈良で開催することとなった。 5. 海外協力として、文化庁がおこなう協力事業の一環として、ベトナムフエ省フクティック村の調査をおこなった。また、奈良文化財研究所を主体として調査をおこなっている、カンボジア・アンコール遺跡群西トップ寺院について、建築的調査をおこなった。						
【実績値】 論文等数 14 件(公刊図書 3 件①～③、論文等 11 件④～⑯) 保管建造物関係資料整理: 写真乾板デジタル化 820 枚、現状変更資料入力等 1959～1961 年分 古代建築研究現地資料収集: 法隆寺古材調査 41 回 保管建造物資料の外部者利用数: 乾板写真 6 件 228 枚、建造物保存図 2 件 58 枚						
【備考】 ①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1959～1961(本文編)』2010.2 ②奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明 1959～1961(図版編)』2010.2 ③奈良文化財研究所『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 3 彩色・金具』2010.2 ④速見侑子他 3 名「平城宮第一次大極殿復原－扁額に関する研究－」⑤窟寺茂「平城宮大極殿復原－四神彩色の配置に関する研究－」⑥清水重敦「近代京都における建築の継承と復古－京都府近代和風建築総合調査から－」⑦黒坂貴裕「茨木城出土築欄間について」⑧番光他 1 名「西トップ寺院の建築調査－2008 年度の成果－」(④～⑧)『奈良文化財研究所紀要 2009』2009.6 ⑨島田敏男「日本における古代建築研究の現状と課題」『第 1 回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議』2009.12 ⑩清水重敦「日本における建築文化遺産保存修理の歴史とその特質」『第 1 回韓・中・日建築文化遺産保存学術会議』2009.12 ⑪島田敏男「観音寺遺跡出土の建築部材」『シンポジウム 発掘調査からせまる阿波国府の実像』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2009.9 ⑫島田敏男「大極殿の再現と日本の古代建築」『別冊太陽 平城京』平凡社 2010.1 ⑬島田敏男「大極殿の復原事業」『月刊 文化財 556 号』第一法規 2010.1 ⑭箱崎和久「平城宮の寺院」『月刊 文化財 556 号』第一法規 2010.1						



国際学術会議風景

自己点検評価調書

研究所 No. 7

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、新たに「技術・技法」等の視点を加え研究するもので、独創性のある研究内容といえる。特に、法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査おこない、成果を資料化することは、古代建築研究の展開におおきく貢献するものである。受託業務として行った奈良県近代和風建築総合調査では、近代化の中で発展した諸建築の具体相を解明することができ、わが国の近代和風建築の研究と保存に対して貢献をなす成果をあげた点は、高く評価できる。また、津和野町近世社寺・鷺原八幡宮調査は、文化庁がおこなっている「文化財総合的把握事業」の一環であり、国の施策に合致した研究として評価できる。

2. 定量的評価

観点	論文等数	資料整理数				
判定	S	A				

備考

論文等数では、目標値の6件に対して14件に達し、Sと判定した。資料整理数は特に目標値を掲げていないが、十分に成果が認められるので、Aと判定した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。受託の形態で行った奈良県近代和風建築総合調査や津和野町社寺調査で、諸建築の具体相を究明できたことは、委託者はもちろん、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査に反映できる。古代建築の研究に関しては、新規に開始した、法隆寺古材調査は基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールさせたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究として、今次中期計画に掲げたものであり、研究成果をより高める必要がある。今年度の成果を元に、次年度においては本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

業務実績書

研究所 No. 8

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究 ((1)-(3))	
<p>【事業概要】 わが国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成をおこなう。 また、無形文化遺産分野についての国際的研究交流として、アジア地域を中心とした諸外国の関係機関との具体的交流を推進するための協議を行う。</p>		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】 無形文化遺産部長 宮田繁幸
<p>【スタッフ】 高桑いづみ、飯島 満、俵木 悟、菊池理予(以上、無形文化遺産部)、福岡裕子、森下愛子(以上、客員研究員)</p>		
<p>【主な成果】 文化財保護委員会が作成した音声資料、現在伝承されている狂言歌謡、文化財保護法による工芸技術の保護の実態等について調査研究をおこなうとともに、無形文化遺産部所蔵音声資料の整理をおこない、伝承の危ぶまれる伝統芸能について実演記録を作成した。無形文化遺産分野での国際的研究交流では、韓国国立文化財研究所の無形文化遺産研究室との合意書に基づき、研究員の相互派遣を実施した。</p>		
<p>【年度実績概要】 現在伝承されている狂言小歌について、現在の伝承と江戸後期の譜本を比較対照し、狂言小歌本来の拍節について検証した。成果は楽劇学会大会で口頭発表し、『楽劇学』17号に掲載した。 文化財保護委員会作成の音声資料について調査を行い、豊竹山城少掾と四世鶴沢清六による『平家女護島』鬼界が島の段について、12月16日、江戸東京博物館ホールにおいて開催した第4回無形文化遺産部公開学術講座で発表した。 連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、伝承が変化しつつある宝生流謡曲及び喜多流謡曲について、今井泰男師、近藤乾之助師、喜多六平太師による実演記録を作成した。 人形浄瑠璃文楽の伝承演目の中で最も中核的な諸作品を執筆した浄瑠璃作者について、現時点における伝統芸能の伝承の実態について報告を行った。その再認識を促す展覧会、早稲田大学演劇博物館主催『並木宗輔展—浄瑠璃の黄金時代—』の企画に参画し、展覧会図録の編集を行った。</p>		
<p>【実績値】 学会等発表件数 3件(資料①②③) 論文等発表件数 2件(資料④⑤)</p>		
<p>【備考】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①高桑いづみ 「小歌は拍子合か拍子不合か—狂言小歌「十七八」をきっかけに」 楽劇学会第17回大会 2009.7.12 ②高桑いづみ 「紀州徳川家蔵楽器コレクションの調査報告」 東洋音楽学会第60回大会 2009.10.18 ③飯島 満 「昭和24年3月収録「鬼界が島の段」」 第4回無形文化遺産部公開学術講座 江戸東京博物館 2009.12.16 ④飯島 満 「古典芸能の伝承と変遷—人形浄瑠璃文楽の場合」 第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会報告書 2010.3 ⑤高桑いづみ 「狂言小歌拍節溯源—狂言小歌は拍子合か拍子不合か—」 『楽劇学』17号 2010.3 ⑥飯島 満 展覧会図録『並木宗輔展—浄瑠璃の黄金時代—』 早稲田大学演劇博物館 2009.12 		

自己点検評価調査

研究所 No. 8

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

文化財保護委員会の録音は他所では扱いにくい資料であるが、それを継続して調査し、一般にその成果を公開したのは、独自性、継続性の点で高く評価できる。また、狂言歌謡についても、独自な視点から調査を行っており、その成果は次年度に開催する公開学術講座で公表する予定である。伝承が危ぶまれる芸能の実演記録も他で行っていない事業であり、録音対象者はいづれも80歳を越えている。現在をのがしては記録が残らない危険性をはらんでいる点で、適時性にかなうものである。また、文楽の調査については、早稲田大学演劇博物館の事業に協力することができた。資料を多く所蔵する他所との研究協力なくしては今後の調査の発展は望めない。以上、さまざまな視点から無形文化財の伝承について多角的に調査を行うことができた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	さまざまな視点から無形文化財の伝承について、総合的な調査、および記録作成を行うことができた。今井泰男師の記録は、93曲に及び、宝生流の主なレパートリーを網羅しつつある。狂言歌謡の調査は緒に就いたばかりだが、次年度も継続しておこない、公開講座で公表するべく計画を立てている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講座や学会発表などを通じて、研究成果を効率よく公表することができた。実演記録等においても、当初の計画通り進んでおり、順調と判断した。

業務実績書

研究所 No. 9

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	平城宮跡東院地区(第446次)の発掘調査 ((1)~(5)ア)					
【事業概要】 平城宮東院地区の発掘調査。近年、中期計画にもとづき重点的に発掘調査を遂行している東院地区のうち、調査区は西辺部にあたり、調査面積は約 1505 m ² 。調査期間は平成21年10月1日～平成22年3月31日である。現地説明会を2月20日に開催し、840名の参加があった。						
【担当部課】 都城発掘調査部(平城) 【プロジェクト責任者】 都城発掘調査部長 井上和人						
【スタッフ】 鈴木智大、難波洋三、林正憲、桑田訓也、海野聰、国武貞克、渡邊晃宏、中村亜希子〔以上、都城発掘調査部〕、山崎健〔埋蔵文化財センター〕、中村一郎〔企画調整部〕						
【主な成果】 南隣の調査区においても検出していた大規模な総柱建物を検出し、東院西辺部の利用状況を明らかにした。また塀や回廊など区画施設が、数度にわたり建て替えられた状況を検出した。東院地区全体の構成と性格を明らかにするという点において非常に大きな成果である。						
【年度実績概要】 平城宮東院地区の発掘調査。調査区は東院の西辺部にあたると考えられ、南は第128次・第381次・第423次の、西は第22次の、各調査区に接している。調査面積は約 1505 m ² 。発掘調査は平成21年10月1日にはじめ、平成22年3月31日に終了した。主な調査成果は次の通り。 ①調査区南部で大型総柱建物を検出、第381次調査で検出した分とあわせて 9間×4間の規模を有することが判明した。 ②調査区北部で東西 5間の総柱建物を南北 2間分検出した。 ③西に隣接する第22次調査区で検出した基壇をもつ門遺構に対応する、通路空間を形成する東西塀を検出した。通路は南北 50 尺幅で、東院の中核部につながると考えられる。 ④南に接する第381次調査区で検出した南北塀 SA17817 のつづきを、調査区南端から北端まで検出した。③の東西塀に接続し、通路の南北の区画をそれぞれ形成する。東院西辺部の非常に整理された区画とその内側の利用状況を明らかにした。③の成果とあわせて、東院の全体的な構成を明らかにする上で重要な成果をえた。						
 調査区全景（南東から）						
【実績値】 論文等数：4件(①~④) 発表件数：2件(報道発表1回、現地説明会1回) 出土品：金属器1箱、石器4点、木器1箱、土器35点、軒丸瓦25点、軒平瓦13点、丸瓦・平瓦147箱 記録作成数：実測図43枚、遺構写真85枚						
【備考】 ①『平城宮東院地区(平城第446次調査)記者発表資料』2010.2.17 ②『平城宮東院地区(平城第446次調査)現地説明会資料』2010.2.20 ③鈴木智大「平城宮東院地区(平城第446次)の調査」『奈文研ニュース』No.36 2010.3 ④鈴木智大「東院地区の調査－第446次」『奈良文化財研究所要2010』2010(予定)						

自己点検評価調書

研究所 No. 9

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	適時性			
判定	A	A	A			

備考
正確性：正確な発掘調査を実施した。
継続性：中期計画にのっとり実施した第381次・第421次・第423次調査の成果とあわせて、東院地区の全体構造の解明に寄与した。
適時性：調査成果を迅速かつ広く公表した。

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考
論文等数：『奈良文化財研究所紀要 2010』で調査成果を報告する。また、調査の概要是『奈文研ニュース』No.36 や『平城宮東院地区(平城第446次調査)現地説明会資料』などで、上記報告に先駆けて公開している。
発表件数：報道発表や現地説明会で、調査の成果を国民に広くかつ迅速に公開した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東院地区の構造およびその性格の解明に寄与し、その成果を論文として発表するとともに、現地説明会を開催し、新たな知見を広くかつ迅速に国民に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿ってすでに実施した第381次・第421次・第423次調査の成果を踏まえ計画をたてることで、的確な調査を遂行でき、東院地区西辺部の様相を明らかにした。 また、次年度予定している東院地区の調査計画の立案にも寄与した。

業務実績書

研究所 No. 10

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院地区内庭広場(第454次)の発掘調査 ((1)~(5)-ア)					
【事業概要】 平城宮第一次大極殿院内庭広場東南隅部の発掘調査。調査区は、大極殿院東面回廊と南面回廊に挟まれた場所で、調査面積は約 1556 m ² 。調査期間は平成21年4月13日~7月15日である。現地説明会を6月20日に開催し、参加者数は755名であった。						
【担当部課】 都城発掘調査部(平城) 【プロジェクト責任者】 都城発掘調査部長 井上和人						
【スタッフ】 大林潤、今井晃樹、浅野啓介、芝康次郎、森先一貴 [以上、都城発掘調査部]、中村一郎 [企画調整部]、惠谷浩子 [文化遺産部]						
【主な成果】 ①奈良時代前半の第一次大極殿院内庭広場の礫敷舗装の変遷を明らかにした。 ②樓閣の増築にともない、地表面の傾斜を変更し、広場の排水計画を改めた様子を確認した。 ③SD5590の北で、矩形の大土坑を検出した。 その他、遺物として包含層より乾元重宝(唐銭・758年発行)が1点出土した。						
【年度実績概要】 平城宮第一次大極殿院内庭広場東南隅部の発掘調査。調査区は、大極殿院東面回廊と南面回廊に挟まれた場所で、北は第27次、東は第41次、西は第77次、南は第431次の、各調査区に接する。調査面積は約 1556 m ² 、調査期間は平成21年4月13日~7月15日である。 調査成果は以下の通り。 ①奈良時代前半の第一次大極殿院内庭広場の礫敷舗装の変遷を明らかにした。礫敷は全部で3層あり、下層より平城宮造営当初、樓閣増築時、還都直後、に比定される。 ②樓閣の増築にともない、地表面の傾斜を変更し、広場の排水計画を改めた様子を確認した。造営当初は北から南に流していた排水を、南面回廊際に土を盛り傾斜を変え、新たに設けた南北溝SD5590に流し、東に排水していたことが明らかになった。 ③SD5590の北で、矩形の大土坑を検出した。 遺物は瓦を中心に出土したが、全体量は極めて少ない。目立った遺物としては、調査区中央付近の包含層より乾元重宝(唐銭・758年発行)が1点出土した。そのほか、軒瓦、磚、隅木蓋瓦、奈良時代の須恵器・土師器、古墳時代の埴輪片などが出土した。 なお、現地説明会を6月20日に開催し、755名の参加があった。						
 調査区全景（南東から）						
【実績値】 論文等数：4件(①~④) 発表件数：2件(報道発表1回、現地説明会1回) 出土品：軒瓦72点、丸瓦・平瓦約9000点、磚6点、土器8箱 記録作成数：実測図51枚、遺構写真36枚						
【備考】 ①『平城宮第一次大極殿院内庭広場(平城第454次調査)記者発表資料』2009.6.18 ②『平城宮第一次大極殿院内庭広場(平城第454次調査)現地説明会資料』2009.6.20 ③大林潤「平城宮第一次大極殿院の調査(平城第454次)」『奈文研ニュース』No.34 2009.9 ④大林潤・今井晃樹・芝康次郎・森川実「第一次大極殿院広場の調査—第454次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010(予定)						

自己点検評価調書

研究所 No. 10

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	適時性			
判定	A	A	A			

備考

正確性：正確な発掘調査を実施した。

継続性：過去 45 年に及ぶ第一次大極殿院の発掘調査の最後としておこない、過去の調査成果と合わせて大極殿院内庭部の様相を明らかにした。

適時性：現地説明会では、第一次大極殿院内庭部の姿を、復原中の大極殿正殿との関係が分かるように表現し、発表した。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

論文数等：『奈良文化財研究所紀要 2010』において、調査成果を報告する。また、調査の概要是『奈文研ニュース』No.34 や『平城宮第一次大極殿院内庭広場(平城第 454 次調査)現地説明会資料』などで、上記報告に先駆けて公表している。

発表件数：報道発表や現地説明会で、調査の成果を国民に広くかつ迅速に公開した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第一次大極殿院の最後の調査としておこない、これまで不明だった内庭隅部分を解明した。過去 50 年間の調査成果と合わせ、平城宮第一次大極殿院の解明に寄与した。また、調査成果は迅速に報告・公表している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に調査をおこない、業務を完了した。

業務実績書

研究所 No. 11

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	薬師寺(第457次)の発掘調査 ((1)~(5)ア)					
【事業概要】 薬師寺境内における防災施設設置にともなう事前の発掘調査。調査は大きく4箇所(A~D区)に分かれ、調査面積は全体で約152m ² 。調査期間は平成21年6月25日から断続的に11月19日までおこなった。なお、10月2日には、調査成果を報道発表した。						
【担当部課】 都城発掘調査部(平城) 【プロジェクト責任者】 都城発掘調査部長 井上和人						
【スタッフ】 浅野啓介、今井晃樹、大林潤、箱崎和久、馬場基、森川実、芝康二郎、森先一貴、林正憲、難波洋三、鈴木智大、海野聰、桑田訓也 [以上、都城発掘調査部]						
【主な成果】 薬師寺中心伽藍の東方にある東院堂の北東の調査区(D1・D2地区)で、未知の建物跡を検出した。掘込地業をもち、精緻な版築をしており、基壇外装には二上山産凝灰岩を用いている。現在の東院堂は1733年に南向きから西向きに変えた記録が残るが、この遺構は奈良時代に創建された東院の主要な建物跡と考えられる。						
【年度実績概要】 薬師寺中心伽藍北方に位置する本坊周辺のA・B・C区、また東院堂周辺のD区のうち南方のD3区では、既設埋設管の影響、あるいは近年の厚い盛土のため、奈良時代の遺構面に達することができなかった。湧水等で調査区が崩落する危険性もあったため、掘り下げを断念した。						
東院堂周辺の調査区のうち、北方のD1区とそれに接続する東方のD2区では、貴重な成果が上がった。まず、D1区西端で掘立柱穴を1基検出した。調査区からみて東方には展開せず、西方には中心伽藍の東面回廊が迫ることから、この柱穴は南北方向の掘立柱塀で、薬師寺東院の西限塀の一部と推定された。D1区東方およびD2区北方では、掘込地業をともなう版築基壇を検出した。D1区では南北方向の、D2区では東西方向の、凝灰岩製基壇地覆石あるいはその残欠を検出し、前記の版築が建物基壇にともなうと判断できた。検出した基壇の規模は東西8.2m、南北13.0mにおよぶ。D1区では東西方向の礎石の据付穴・抜取穴を3箇所で確認した。柱間寸法は東の間が約3.3m、西の間が3.0mである。またD1東端では掘込地業底部に施した砂利敷きを検出したが、掘込地業全体には及んでおらず、建物の中心付近のみと推定され、その性格は不明である。掘込地業はD1区では基壇西辺より西へ1.5mほどのがて上がるが、D2区では基壇南辺より8m以上も続くので、掘込地業を共有する建物が南方にもう1棟建つ可能性がある。これらの遺構は精緻な版築や凝灰岩製の基壇地覆石、出土瓦の年代から、奈良時代の遺構と判断される。						
現在の東院堂(1285年建立)は、1733年に南向きから西向きにされたことが記録に見え、また現東院堂は奈良時代の尺度をもって建てられており、今回発見した建物跡は、奈良時代に創建された南向きの東院堂とみて柱間寸法等矛盾がない。						
また、D2区南端付近は中世以降、池状となり、何度か浚渫がなされたことが判明した。						
【実績値】 論文等数: 3件(①~③) 発表件数: 1件(報道発表1回) 出土品: 軒瓦54点、丸瓦・平瓦820kg、土器6箱 記録作成数: 実測図30枚、遺構写真(4×5)124枚						
【備考】 ①『薬師寺東院堂周辺の調査 平城第457次調査記者発表資料』2009.10.2 ②箱崎和久「薬師寺の調査」『奈文研ニュース』No.34 2009.12 ③箱崎和久ほか、「薬師寺境内の発掘調査—第457次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010(予定)						



礎石根石と版築および掘込地業底面の砂利敷

自己点検評価調書

研究所 No. 11

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
備考						
D1・D2 地区は幅 1.0~1.5m、延長 70mにおよぶ狭小な調査区であったにもかかわらず、薬師寺東院に関する貴重な成果を得ることができた。 適時性：限られた調査期間と調査面積にもかかわらず、大きな成果をあげた。 発展性：調査成果は、薬師寺東院ひいては古代寺院の別院についての研究に大きく貢献すると考えられる。 継続性：今回の調査成果は薬師寺旧境内においてこれまで継続的に実施してきた発掘調査の成果を基礎とするものであり、今回の成果も今後の周辺地域における発掘調査に寄与すると考えられる。 正確性：発掘調査における緻密な観察と基壇建物についての綿密な知識に裏打ちされた成果である。						

2. 定量的評価

観点	資料収集数	発表件数				
判定	A	A				
備考						
遺物の出土量は調査者の意志で左右できるものではないが、薬師寺東院堂周辺の調査区では、偶然にも分析をするための十分な出土量を得ることができ、整理を進めている。また調査成果を記録保存するための図面類や写真は必要かつ十分な数を採取した。調査区が狭小のため、一般への現地説明会等はおこなうことができなかつたが、10月2日には調査成果を報道発表し、各メディアの注目を集めた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既設管の埋設状況や安全性から判断して奈良時代の遺構面に達することができなかった調査区があったが、東院堂周囲の調査区では未知の基壇建物を発見し、基壇建物あるいはその上に建つ建物構造を考慮しながら調査をおこない、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営をおこなうことができた。発掘成果の学術的意味は非常に大きいと考えられる。

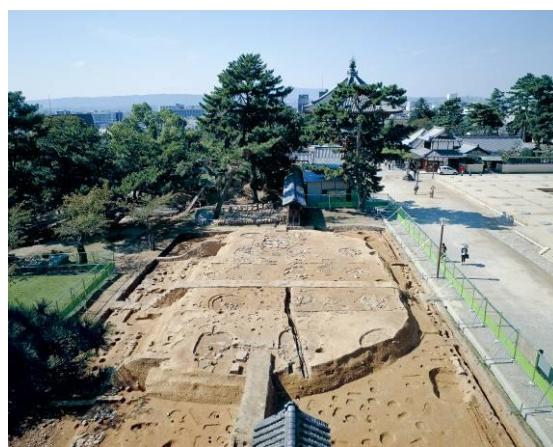
4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性の高い調査であったが、高い学術的水準を維持した調査を実施し、予想以上の成果をあげた。

業務実績書

研究所 No. 12

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	興福寺南大門跡(第458次)の発掘調査 ((1)-(5)-ア)		
【事業概要】 興福寺南大門の全面的な発掘調査。調査面積は約774m ² で、調査期間は平成21年7月13日～12月22日。9月27日に現地説明会を開催し、2,265名の参加があった。			
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 井上和人
【スタッフ】 森川実、箱崎和久、馬場基、森先一貴、芝康次郎 [以上、都城発掘調査部]、牛嶋茂、中村一郎 [企画調整部]			
【主な成果】 調査の結果、南大門の基壇および建物の規模、基壇外装(地覆石)の変遷、基壇造営以前の地形および基壇建築の過程などを明らかにした。さらに、基壇上では金剛力士像の基礎2基と、創建時の鎮壇具埋納遺構などを発見した。また、調査期間中に2度の記者発表をおこない、9月27日には現地説明会を開催した。			
【年度実績概要】 本事業は、興福寺南大門の発掘調査である。調査面積は約774m ² で、調査期間は平成21年7月13日～12月22日。調査の成果は次の通りである。 ①南大門の基壇および建物の規模を確定した。基壇の規模は東西31.0×南北16.7mである。建物は2間×5間、東西23.1m、南北9.0mに復元できる。また、基壇上で金剛力士像の基礎2基を検出した。 ②基壇外装の変遷を明らかにした。創建時(I期)の地覆石は残存しないが、最初の改修(II期)で地獄谷溶結凝灰岩の地覆石・羽目石に、2度目の改修(III期)で花崗岩の地覆石・羽目石に、それぞれ改修したことが判明した。花崗岩の地覆石・羽目石を撤去したのは明治時代であろう(IV期)。なお、基壇本体は明治時代以降に大きく削られており、その後、盛土によって土壇を復元したことが明らかとなった。 ③創建時の鎮壇具を基壇中央で検出した。南都諸大寺の門では初の発見である。鎮壇具の容器は須恵器の広口壺で、埋納穴の中央部から正位で出土した。X線写真・高エネルギーX線CT写真の撮影により内容物は和同開珎、ガラス小玉などと判明し、その後の室内調査で魚骨や布の細片も検出した。 ④基壇中央部における断面調査により、門造営以前の旧地形や、基壇の造営過程が判明した。門の東半分は谷にかかり、これを厚い整地層で埋めて平坦地を確保している。基壇の造営にあたっては掘込地業をおこない、丁寧な版築で基壇を築いていることが明らかになった。			
【実績値】 論文等数：4件(①～④) 発表件数：4件(報道発表2回、現地説明会1回、2010年出土銭貨報告会発表1回) 出土品：丸瓦・平瓦・軒瓦・道具瓦55箱、土器15箱 記録作成数：実測図57枚、遺構写真102枚			
【備考】 ①『興福寺南大門の発掘調査—現地説明会資料—』2009.9.27 ②『平城第458次 興福寺南大門の調査—記者発表資料—』2009.12.10 ③森川実・箱崎和久・森先一貴・芝康次郎『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報V』2010.3 ④森川実・箱崎和久・森先一貴・芝康次郎「興福寺南大門の調査—平城第458次」『奈良文化財研究所紀要2010』2010(予定)			



調査区全景(東から)

自己点検評価調書

研究所 No. 12

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
適時性：調査期間中に記者発表・現地見学会をおこない、調査成果を迅速に公表した。 継続性：既往の調査成果を踏まえ、興福寺中心伽藍の構造解明に寄与した。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	調査回数				
判定	A	A				
備考						
論文等数：『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報V』で発掘成果を報告した。また、『奈良文化財研究所紀要 2010』でも成果を報告する。 調査回数：年度計画に従い、発掘調査を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査により興福寺南大門の構造や遺構変遷を明らかにし、調査成果を論文・発表で迅速に公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に発掘調査をおこない、着実に成果をあげた。

業務実績書

研究所 No. 13

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	平城宮跡東方官衙地区(466次)の発掘調査 ((1)~(5)ア)					
【事業概要】 平城宮東方官衙地区の発掘調査。調査区は小字部門の西隣で、東方官衙の中央やや南よりである。調査面積は約 666 m ² 。調査期間は平成 22 年 1 月 21 日~4 月 30 日(予定)である。						
【担当部課】 都城発掘調査部(平城) 【プロジェクト責任者】 都城発掘調査部長 井上和人						
【スタッフ】 渡辺晃宏、国武貞克、桑田訓也、海野聰、中村亜希子 [以上、都城発掘調査部]、 山崎健 [埋蔵文化財センター]、中村一郎 [企画調整部]						
【主な成果】 ①奈良時代後半の官衙の、区画内の建物配置を確認した。 ②建物の礎石が当時の位置をとどめている状態を確認した。 ③東方官衙地区を南流する基幹排水路が東へ折れ曲がることを確認した。						
【年度実績概要】 平城宮東方官衙地区の発掘調査。東方官衙地区では、平成 18 年度から継続的に発掘調査を実施してきたが、今年度はその 4 カ年目にあたる。調査区は小字部門の西隣で、東方官衙地区の中央やや南よりであり、その南端が第 29 次調査区と接している。調査期間は平成 22 年 1 月 21 日~4 月 30 日(予定)である。現状での調査成果は以下の通りである。 奈良時代の官衙の、区画内の建物配置を確認した。東西方向に長い基壇をもつ礎石建物が 3 棟、溝を挟んで南北に計画的に配置されていることが判明した。建物の基壇は良好に残っており、礎石も当時の位置をとどめていた。 東西方向に流れる、石組をもつ幅 4m の溝が検出され、東方官衙地区を南流する基幹排水路が、今回の調査区内で東へ折れ曲がるか、あるいは分岐することを確認できた。 遺物は土器、瓦、木器を中心に出土し、全体量が多い。また、奈良時代中ごろの鬼瓦が 1 点出土した。						
						
礎石が遺存する基壇(南西から)						
【実績値】 論文等数：2 件(①②) 出土品：丸瓦・平瓦・軒瓦 100 箱、土器 50 箱、磚 10 箱、木器 20 箱(以上、3 月 30 日現在) 記録作成数：図面 19 枚、遺構写真 140 枚(以上、3 月 30 日現在)						
【備考】 ①国武貞克ほか「東方官衙地区の調査—第 466 次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010(予定) ②国武貞克「平城宮跡東方官衙地区の調査」『奈文研ニュース』No.37 2010(予定)						

自己点検評価調書

研究所 No. 13

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	適時性			
判定	A	A	A			

備考

正確性：正確な発掘調査を実施した。

継続性：過去 50 年に及ぶ平城宮跡の発掘調査の成果に基づき、詳細が判明していない東方官衙地区について計画的かつ継続的に調査を企画し、実施した。

適時性：調査成果がまとめた時点で、直ちに記者発表等により情報を広く国民に公開する。

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				

備考

論文数等：『奈良文化財研究所研究紀要 2010』において調査成果を報告し、調査成果の概要は『奈文研ニュース』No.37 により一般に広く公開する。

発表件数：調査終了後短期間に成果をまとめ、学術的な報告と一般向けの報告に分けてそれぞれ発表する。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮東方官衙地区の継続的な調査計画の、4カ年目の調査として実施した。北から順に進めてきたこの地区におけるこれまでの発掘調査の成果と併せて、東方官衙地区の官衙区画の構成やその変遷の詳細の解明に寄与することができた。調査成果については迅速に公開・報告する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	適切かつ順調に調査を行いつつある。

業務実績書

研究所 No. 14

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡朝堂院地区の発掘調査 ((1)~(5)ア)		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は、わが国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、平成11年度から中枢部の実態解明のための計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹
【スタッフ】 山本 崇、高橋知奈津、豊島直博、青木 敬、加藤雅士、若杉智宏、庄田慎矢、[以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)] 井上直夫、岡田 愛 [以上、企画調整部]			
【主な成果】 大極殿院回廊の東南隅と朝堂院北面回廊との接続部の発掘調査を実施し、回廊の建設から解体までに至る遺構や、大極殿院内庭・朝堂院朝庭の礎敷を確認した。また、下層遺構の調査では、藤原宮造営期に資材運搬などに利用されたと考えられる南北・東西の大溝など検出し、これらの変遷から藤原宮の造営過程の解明につながる重要な手がかりを得た。			
【年度実績概要】 本調査は、藤原宮大極殿院回廊と朝堂院回廊の接続部の規模や構造を明らかにすることと、藤原宮造営に関わる遺構を検出することを主たる目的として実施した。調査期間は2009年7月1日～2010年2月26日、調査面積は1425m ² である。 調査の結果、回廊に関わる遺構として、推定された位置に礎石据付穴と抜取穴を検出した。回廊建物の柱間寸法は、桁行14尺梁行10尺(ただし、東西方向の回廊の調査区西より1間分は桁行12尺)で、回廊の接続部は、桁行・梁行とも10尺である。回廊基壇の両端には基壇外装抜取溝、さらにその外側に雨落溝にあたる浅い砂の堆積を確認した。回廊基壇の規模は、基壇外装の抜取溝の心々間距離で約8.4mである。そのほか、回廊建設・解体に伴う足場穴や廃棄された瓦溜を検出した。また大極殿院内庭部、朝堂院朝庭部では、礎敷を確認した。 下層調査においては、昨年度の調査(飛鳥藤原第153次)によって確認されていた斜行溝Bの延長部を検出した。この溝は、南門部分を避けて掘られた運河から分岐する溝で調査区外北方にさらに延びる。さらにこの溝は、次の段階には回廊の南で東西溝(幅約3.5m、深さ0.9m)に付け替えられていた。資材運搬や排水を目的として掘削され、大極殿院南門や回廊の建設にあたって、建設地を迂回するよう順次進路変更されたと考えられる。			
なお、2009年11月27日に記者発表をおこない、11月29日の現地説明会では、945人の見学者があった。			
 現地説明会の様子			
【実績値】 論文等数 3件(調査報告1件①、その他2件②③) 発表件数 2件(現地説明会1件④、報道発表1件⑤) 出土遺物 軒瓦476点、丸平瓦710箱、土器23箱、加工木10箱、木製品、錢貨、獸骨など 記録作成数 遺構実測図80枚、写真(4×5)274枚			
【備考】 ① 山本 崇・高橋知奈津・豊島直博・若杉智宏・石田由紀子「藤原宮跡大極殿院・朝堂院回廊の調査—飛鳥藤原第160次」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6(予定) ② 山本 崇「藤原宮跡大極殿院回廊の調査(飛鳥藤原第160次)」『奈文研ニュース』No.35、2009.12 ③ 高橋知奈津「藤原宮跡大極殿院回廊の調査(飛鳥藤原第160次)」『奈文研ニュース』No.36、2010.3 ④ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院回廊の調査(飛鳥藤原第160次調査現地説明会資料)」2009.11 ⑤ 奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院回廊の調査—飛鳥藤原第160次調査記者発表資料」2009.11			

自己点検評価調書

研究所 No. 14

1. 定性的評価

観点	継続性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			

備考

継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための継続的な計画調査

独創性：都城の造営から解体までの一連の過程を解明

発展性：藤原宮中枢部の造営過程を復元するための手がかりを得、さらなる研究課題への展望が生まれた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等、適切におこない、定性的・定量的評価においてすべてAと判定されるため、総合的評価もAと判定した。 計画調査として、次年度以降も継続的に調査をおこなう予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、課題であった朝堂院回廊と大極殿院回廊との取り付き部の構造や造営過程を解明するなど、藤原宮の全体像の解明に向けて、目的を順調に達成した。

業務実績書

研究所 No 15

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進	
プロジェクト名称	甘樺丘東麓遺跡の発掘調査 (1)-(5)-ア)	

【事業概要】

飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。甘樺丘は、蘇我氏が邸宅を構えたことで知られ、本遺跡はその関連遺跡として、実態解明のための計画調査を実施している。

【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹
--------	-------------	-------------	-----------------

【スタッフ】

次山 淳、番 光、小田裕樹、黒坂貴裕、石田由紀子、木村理恵、玉田芳英、高田貫太、庄田慎矢 [以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)]、井上直夫、岡田 愛 [以上、企画調整部]

【主な成果】

第157次調査では、7世紀前半から8世紀にかけての石垣、掘立柱建物、掘立柱塀、石敷遺構、石組溝、土器廃棄土坑、土器埋設遺構などを検出した。特に、調査区中央で検出した石垣遺構は、前回の調査と合わせて全長34mにおよぶものであることが判明し、構造・時期に関する資料が得られた。第161次調査では、谷の北東の斜面に設定した調査区において掘立柱列を検出し、丘陵上においても遺構の展開することを確認した。

【年度実績概要】

甘樺丘東麓遺跡は、飛鳥川左岸、丘陵の東麓にある谷の一つに立地し、2006年度の造園修景に先立つ確認調査によって、7世紀の建物群の存在が明らかにされた。2007年度より学術調査に着手し、石垣、掘立柱建物群、炉跡などを検出した。第157次調査区は、2007年度の第146次調査で検出した石垣状遺構の全容の解明、石垣以東の大型建物、居住空間の有無の確認、遺構群のより詳細な変遷の解明を目的として、第146次調査地に南接する谷の北東部に設定した。調査面積は、1150m²。調査期間は、2008年12月16日～2009年8月25日。本次調査では、7世紀前半から8世紀にかけての石垣、掘立柱建物、掘立柱塀、石敷遺構、石組溝、土器廃棄土坑、土器埋設遺構などを検出した。2009年6月21に現地見学会を開催し、1134名の見学者があった。

第161次調査区は、上記の石垣のさらなる展開の有無、第157次調査で検出した石敷遺構の全容の解明、石敷遺構背後の斜面の利用状態、丘陵上の遺構の有無の確認を目的として、第157次調査地の東に隣接した調査区と、北東の斜面に伸ばした調査区を設定した。調査面積は846m²。調査期間は2009年12月14日より開始し、2010年3月現在継続中である。本次調査では、斜面の調査区において掘立柱列を検出し、丘陵上においても遺構の展開することを確認した。2010年3月20日に現地見学会を開催し、1,245名の見学者があった。



第157次調査で検出した石垣

【実績値】

論文等数	3件(調査報告2件①②、その他1件③)
発表件数	4件(現地見学会2件⑤⑦、報道発表2件④⑥)
出土遺物	軒瓦4点、丸平瓦8箱、土器77箱、石製品・石材1箱、金属製品・冶金関連遺物1箱など
記録作成数	遺構実測図71枚、写真(4×5)240枚

【備考】

- ①次山 淳・小田裕樹・石田由紀子・木村理恵「甘樺丘東麓遺跡の調査—飛鳥藤原第157次」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6
- ②番 光「甘樺丘東麓遺跡の調査—飛鳥藤原第161次」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6
- ③次山 淳「甘樺丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第157次)」『奈文研ニュース』No.34、2009.9
- ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「飛鳥藤原第157次調査(甘樺丘東麓遺跡)記者発表資料」2009.6
- ⑤奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樺丘東麓遺跡(飛鳥藤原第157次調査現地見学会資料)」2009.6
- ⑥奈良文化財研究所都城発掘調査部「飛鳥藤原第161次調査(甘樺丘東麓遺跡)記者発表資料」2010.3
- ⑦奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樺丘東麓遺跡(飛鳥藤原第161次調査現地見学会資料)」2010.3

自己点検評価調書

研究所 No. 15

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			

備考
適時性：蘇我氏邸宅推定地の解明に向けた調査
継続性：計画調査の継続による遺跡全容の解明
発展性：遺構の広がりを確認し、今後の調査への見通しを得た

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第157・161次調査では、計画調査の目的である遺跡東辺の遺構のありかたを確認したことにより、遺構の広がり、遺跡の全体像解明に向けての良好な資料を得ることができた。また、7世紀代の基準資料となる土器の良好な一括資料が出土し、今後の研究に有益な資料を得ることができたため、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、課題であった石垣遺構の延長部を確認し、全体のありかたを明らかにするとともに、整地ならびに周辺の土地利用の状況を確認したことで、甘樋丘東麓遺跡の性格、および全体像解明に向けての目的を順調に達成した。

業務実績書

研究所 No. 16

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	平城京跡出土遺物・遺構の調査研究等((1)～(5)－イ)					
【事業概要】						
平成21年度の発掘調査によって平城宮・京跡から出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の整理・分析研究を、年間を通じて実施し、昨年度以前の調査で出土した遺物について、報告書刊行またはその準備作業としての再調査を行う。また、出土遺物の科学的保存処理を継続して実施する。						
【担当部課】 都城発掘調査部(平城) 【プロジェクト責任者】 都城発掘調査部長 井上和人						
【スタッフ】 難波洋三、国武貞克、芝康次郎、神野恵、森川実、城倉正祥、中村亜希子、今井晃樹、林正憲、森先一貴、渡辺晃宏、馬場基、浅野啓介、桑田訓也、箱崎和久、大林潤、鈴木智大、海野聰、[以上、都城発掘調査部]、牛嶋茂、中村一郎 [以上、企画調整部]						
【主な成果】 本年度の発掘調査で出土・検出した遺物・遺構の整理・分析研究、図面・写真の作成などの基礎作業を行い、平成22年刊行予定の『奈良文化財研究所紀要2010』の報告を準備した。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物についての調査を継続して実施した。また、『地下の正倉院—二条大路木簡の世界』を開催した。						
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦磚類・木簡などの整理・分析研究、出土遺構の図面作成・写真作成・分析研究、及び出土遺物の科学的保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行して、これを遅滞なく実施した。 ・平成21年度以前の出土遺物について 『平城宮発掘調査報告(第一次大極殿院)』、および『平城宮木簡七』の刊行に向けての再整理・分析を重点的に実施した。 ・昭和63年に長屋王邸の北にあたる地点から出土した、約7万4千点の木簡は、光明皇后宮やそれを支えた藤原麻呂の家政機関にかかわる木簡を主体とする。この二条大路木簡の中から優品を選び、本部棟一階のガイダンスコーナーにて特別企画展「地下の正倉院展—二条大路木簡の世界」を開催し、広く公開した(平成21年10月20日から11月29日まで)。 ・報告書などの刊行について 『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十九)』を刊行し、特別企画展「地下の正倉院展—二条大路木簡の世界」に伴って、展示解説図録『地下の正倉院展—二条大路木簡の世界』を作成した。また、平成21年3月には、『平城宮木簡七』を刊行する予定である。						
【実績値】 論文等数：4件(報告書等3件②～④、解説等1件①)						
【備考】 ①『地下の正倉院展—二条大路木簡の世界』2009.10 ②『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十九)』2009.11 ③『平城宮木簡七』2010.3 ④『奈良文化財研究所紀要2010』2010(予定)						



展示リーフレット表紙

自己点検評価調査

研究所 No. 16

1. 定性的評価

観点	正確性	継続性	発展性	適時性		
判定	A	A	A	A		
備考						
正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し公表した。						
継続性：厖大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続した。						
発展性：新出土の厖大な資料を活用してより高度な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求した。						
適時性：新出土品の資料価値を明確にし、重要なものについては迅速に情報公開し、国民の文化財としての活用を計った。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
備考						
論文等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果を適時公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡で出土した厖大な考古・文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上のさまざまな重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたことで、総合的にみてAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい方法を加味・活用して、研究を深化した。

業務実績書

研究所 No. 17

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等 ((1)~(5)-イ)					
【事業概要】						
本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。						
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹			
【スタッフ】						
玉田芳英、次山 淳、降幡順子、豊島直博、山本 崇、廣瀬 覚、青木 敬、木村 理恵、小田裕樹、若杉智宏、高田寛太、庄田慎矢、石田由紀子、加藤雅士、黒坂貴裕、番 光、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕、西口壽生(客員研究員)						
【主な成果】						
本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を年間を通じて実施し、成果の一部を公表した。						
【年度実績概要】						
① 本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦塼類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は、発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2010』等で公表した。 ② 前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。7世紀を中心とした時代の瓦について、これまでの調査成果をまとめた『古代瓦研究IV』『同V』を刊行した。						
【実績値】						
公刊図書等数 9 件(①~⑨)						
【備考】						
① 奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6(予定) ② 奈良文化財研究所『古代瓦研究IV』2009.11 ③ 奈良文化財研究所『古代瓦研究V』2010.3 ④ 木村理恵・石田由紀子「古宮遺跡の調査—第 152-8 次」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6(予定) ⑤ 石田由紀子「大官大寺の縄文土器(2)」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6(予定) ⑥ 加藤雅士・松谷暁子「藤原宮跡出土土器付着炭化粒の SEM 觀察」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6(予定) ⑦ 西口壽生「東海地方産陶硯について」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010.6(予定) ⑧ 木村理恵「古宮遺跡の調査(飛鳥藤原第 152-8 次)」『奈文研ニュース』No. 33、2009.6 ⑨ 高田寛太「奈文研ギャラリー(25)「花組」と「星組」—飛鳥寺の瓦—」『奈文研ニュース』No. 33、2009.6						

自己点検評価調書

研究所 No. 17

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	独創性	発展性		
判定	A	A	A	A		

備考
適時性：新出土資料の迅速な公開と活用
継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究及び保存
独創性：新たな資料分析方法の追究
発展性：蓄積された歴史資料の正確な資料化

2. 定量的評価

観点	公刊図書数					
判定	A					

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、ほぼ予定通り進めることができた。出版物の刊行も計画通りに行い得た。

業務実績書

研究所 No. 18

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究((1)～(5)～ウ)

【事業概要】

- A : 漢長安城桂宮発掘調査報告書および付篇の論文集の作成、漢魏洛陽城跡の発掘調査を中国社会科学院考古研究所と共同して実施し、日本の都城との比較研究をおこなう。また、調査成果の概要を公刊する。
- B : 朝陽地区隋唐墓出土副葬遺物について中国遼寧省文物考古研究所と共同で整理・比較研究し、日本都城成立期の交流を考察しその成果を公表する。
- C : 鞏義市黃治唐三彩窯跡および製品の中国河南省文物考古研究所との共同研究を実施し、日本の奈良三彩との関連を考察し、成果を公刊する。
- D : 日本と韓国の都城・王京形成について韓国国立文化財研究所と共同研究を実施し、古代における両国の文化交流を跡づける。

【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 井上和人
--------	-------------	-------------	---------------

【スタッフ】

- A : 井上和人、今井晃樹、城倉正祥 [以上、都城発掘調査部] 他 9 名 (王巍、錢國祥他)
- B : 井上和人 [都城発掘調査部]、小池伸彦 [企画調整部] 他 7 名 (田立坤、呂學明他)
- C : 玉田芳英、森川実 [以上、都城発掘調査部] 他 6 名 (孫新民、趙志文)
- D : 深澤芳樹、次山淳、高田貴太 [以上、都城発掘調査部] 他 23 名 (黃仁鎬、鄭太垠他)

【主な成果】

- A : 漢魏洛陽城において 1800 m² の共同発掘調査を実施。日中双方で都城研究についての討論会を開催。
- B : 遼寧省における隋・唐代墓出土品の調査を実施。
- C : 黃治窯および白河窯で生産した陶磁器の系統的把握の基礎視点が明確になるとともに漢魏洛陽城出土陶器との比較研究を実施。
- D : 日本の古代都城ならびに韓国古代王京の形成と発展に関する共同研究を実施。

【年度実績概要】

- A : 漢魏洛陽城については延べ 8 名の研究員を現地に派遣し、平成 21 年 4 月～5 月、11 月～12 月の約 4 箇月間、漢魏洛陽城宮城内において 1800 m² の共同発掘調査を実施した。
- B : 平成 21 年 6 月に 8 名、平成 22 年 3 月に 6 名の研究員を派遣し、隋韓暨家族唐墓・織維廠唐墓などの出土遺物を調査した。平成 21 年 10 月には、遼寧省文化庁・文物考古研究所他の 5 名を招聘して、学術講演会を開催した。
- C : 平成 21 年 6 月・10 月、平成 22 年 3 月に研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区および漢魏洛陽城から出土した唐三彩・北朝白磁・青磁などを調査するとともに、中国古陶磁学会に参加した。平成 21 年 9 月には中国から 5 名を招聘して、学術講演会を開催した。
- D : 韓国国立文化財研究所との共同研究では、13 件の研究テーマのもとに、17 名の研究者が参加し、6 名の派遣、6 名の招聘を実施した。なお、共同研究に関連して研究報告会を開催し、調査研究協力等を行っている。



漢魏洛陽城の調査風景

【実績値】

論文等数: 4 件(①～④)

記録作成数: A 遺構図等 25 枚、写真(4×5)約 50 枚、デジタル写真約 1000 枚、B 写真・3D デジタイザ・調書・実測図等の記録多数、C 写真・調書等の記録多数、D 調書約 250 枚、写真約 300 枚

【備考】

- ①金甫相「韓・日発掘調査交流を行ってみて」『奈文研ニュース』No.33 2009. 6
- ②小池伸彦「遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査」『奈文研ニュース』No.34 2009. 9
- ③玉田芳英「中国河南省文物考古局との共同研究」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010(予定)
- ④城倉正祥「漢魏洛陽城 北魏宮城 3 号建築遺構の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要 2010』2010(予定)

自己点検評価調書

研究所 No. 18

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	適時性			
判定	A	A	A			
備考						
独創性：東アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本古代史の再検討に貢献した。						
発展性：海外の研究機関と連携し、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積を継続している。						
適時性：成果報告を迅速に作成し、公表した。						

2. 定量的評価

観点	成果報告	記録件数				
判定	A	A				
備考						
成果報告：速報性を重視した報告を行った。						
記録件数：未公開の貴重な学術資料について多くの記録調書を作成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国および韓国で、関係研究機関との連携のもとに遺跡・遺物を調査し、相互の研究を向上させたほか、計画どおりに事業を実施できたので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに実施し、成果をあげることができた。国際共同研究は都城発掘調査部が担当しており、4本の研究を総合的に組み立てることにより、古代史の解明に資する成果を達成することを目指す。

業務実績書

研究所 No. 19

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	庭園に関する調査研究((1)～(5)～エ)		
【事業概要】 平成21年度は平安時代中期・後期の発掘遺構・現存庭園・史料等について情報収集・調査を行い、文化庁との共催の下、中国及び韓国の専門家とともに「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を開催した。また、森・村岡資料をはじめとする庭園関係資料の整理・検討を進めた。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	遺跡整備研究室長 平澤 豊
【スタッフ】 小野健吉(文化遺産部長)、栗野隆、恵谷浩子(以上、文化遺産部研究員)、高橋智奈津(都城発掘調査部研究員)、高瀬要一(客員研究員)、			
【主な成果】 国際研究会を開催し、東アジアにおける日本庭園、とりわけ「浄土庭園」の位置づけを明らかにし、その成果を報告書(英語版・日本語版)として取りまとめた。また、過年度の成果について、報告書を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。			
【年度実績概要】			
1. 庭園に関する調査研究活動の一環として、現地調査・情報収集を実施した。	東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会開催風景		
2. 文化庁との共催の下、2009年5月19～21日に、日中韓の専門家による「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を平城宮跡資料館小講堂で開催した。日中韓における理想郷と庭園との関わりを検討し、特に日本における浄土庭園の国際的位置づけを明らかにした。			
3. 上記の国際研究会の成果について、報告書(英語版・日本語版)を刊行した。			
4. 「平安時代の禁苑と離宮の庭園」をテーマとした昨年度の古代庭園研究会の成果について、報告書を編集・刊行した。			
5. 森蘊及び村岡正の庭園関係資料について、整理・調査する環境整備を進めた。			
6. Japanese Garden Dictionary を奈文研ホームページで公開し、海外の日本庭園研究者等に対する情報提供を進めた。			
7. その他、庭園史及び歴史的庭園の保護等に関する調査研究を実施した。			
【実績値】			
1. 研究会等開催数：1回(資料集①)、参加者数：国内外の庭園研究者等38名			
2. 刊行図書数：3件(②～④)			
3. 論文等数：15件(論文9件⑤～⑯、講演・発表等6件⑰～⑲)。			
【備考】			
①文化遺産部遺跡整備研究室編『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会 講演・報告資料集』、2009.5			
②奈良文化財研究所『平安時代庭園に関する研究 3』、2009.10			
③Nara National Research Institute for Cultural Properties ed. 「Paradise and Gardens in Eastern Asia -Final Report of the International Expert Meeting on Paradise and Gardens in Eastern Asia」、2009.11			
④奈良文化財研究所編『東アジアにおける理想郷と庭園』、2009.11			
⑤平澤豊「造園遺産と目録作成の方向性について」、『平成21年度日本造園学会全国大会分科会講演集』、2009.5			
⑥小野健吉「古代の庭園」、『歴史と地理』、第625号、日本史の研究(225)、2009.6			
⑦栗野隆「擬石・擬木を用いた近代和風庭園—琴ノ浦温山荘園の庭園調査から—」、『奈良文化財研究所紀要2009』、2009.7			
⑧栗野隆「コンドルの庭園構成手法」、『一丁倫敦と丸の内スタイル』、求龍堂、2009.9			
⑨栗野隆「古河家の邸宅と旧西ヶ原本邸の庭園」、『日本庭園学会誌』第21号、2009.10			
⑩小野健吉「奈良時代の浄土庭園—阿弥陀浄土院とその前身たる觀無量寿院—」、『東アジアにおける理想郷と庭園』、2009.11			
⑪小野健吉「近世の庭園」、『歴史と地理』、第630号、日本史の研究(227)、2009.12			
⑫小野健吉「池庭から枯山水へ」、『季刊悠久』、第118号、2009.12			
⑬小野健吉「平城宮・京の庭園」、『月刊文化財』No.556、2010.1			
⑭栗野隆「琴ノ浦温山荘園(旧温山荘)の特色と価値」、第6回文化財庭園フォーラム、2009.9			
⑮栗野隆「古鎌莊庭園の特徴」、伊豆屋伝八文化振興財団シポジウム「第7回文化財を守る」、2009.10			
⑯栗野隆「近代大阪・阪神間を中心とした擬石・擬木の導入と展開」、平成21年度日本造園学会関西支部大会、2009.10(第1回日本造園学会関西支部賞受賞)			
⑰栗野隆「琴ノ浦温山荘庭園について」、木津宗詮研究会、2010.2			
⑱栗野隆「日本近代の擬石と擬木～庭園家具から猿ヶ島まで～」、奈良文化財研究所総合研究会(第20回)、2010.2			
⑲小野健吉「春日権現験記絵」に見る貴族邸宅の庭園と自然、国際日本文化研究センター第37回国際研究集会「都市文化とは何か—文化論からの日本「発見」」、2010.2			

自己点検評価調書

研究所 No. 19

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A

備考

昨年度開催の研究会のテーマ「禁苑と離宮の庭園」は奈良時代の松林苑を検討する上でも重要であり、その検討成果を報告書として刊行し、関係研究者等に配布して共有したことは高く評価できる。また、平安時代庭園の極めて重要な事例である「淨土庭園」について、「平泉の文化遺産」(世界遺産一覧表暫定一覧表登載名称)の世界遺産登録の再推薦作業とも関連し、文化庁と共に『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』は、庭園史の分野において文化財保護行政との連携が図られたという重要な意義とともに、中国・韓国の研究者を交え、東アジアにおける古代の日本庭園の位置づけや重要性を検討した点で、その意義は極めて大きい。また、Japanese Garden Dictionary を奈文研ホームページで公開し、海外の日本庭園研究者等への情報提供を進めたことの国際的な貢献も大きい。以上、必要性、公共性、国際性、緊急性、公開性の観点で極めて顕著な成果を達成したことから、適時性をSとした。さらに、日本庭園研究の基盤的資料として重要な森蘊氏及び村岡正氏等の庭園史等関係資料の整理・研究の環境整備を大幅に進めたことなどを含め、調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	報告書等刊行数			
判定	A	S	A			

備考

これまで十分に取り組まれて来なかった「淨土庭園」の国際的評価に関し、文化庁との共催により、中国・韓国から第一線の研究者の出席を得て『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』を開催し、国際的に也有意義な結論を取りまとめ、英語版・日本語版で報告書として刊行したことは極めて重要な成果である。加えて、昨年度の古代庭園研究会の報告書を刊行しており、古代庭園に関する合計3冊の報告書の刊行は高く評価できる。また、古代から近代に及ぶ種々の研究成果を9件の論文、6件の講演・発表等として公表できたことは、研究成果の社会的還元であるとともに、古代都城における庭園研究を相対化し、かつ、その保存整備に対しても多くの示唆を与える重要な学術的成果の蓄積として評価でき、極めて有意義であったと言える(論文等件数について当初目標値は設定していないが、絶対数においてSと評価できる)。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、文化庁との共催した『東アジアにおける理想郷と庭園』においては、古代日本の庭園の位置づけの一部を国際的に明らかにした点で極めて有意義であり、今後も、このような国際的観点に立った庭園研究を推進していくべきであると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	古代庭園に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、国際研究会での極めて有意義な検討成果も踏まえ、平安時代庭園を中心とした調査研究については、今後、古代庭園研究の基礎的資料の一つとなるよう『古代庭園研究II』(奈文研学報)として取りまとめる必要がある。また、今年度に基盤的環境を整備した森蘊氏及び村岡正氏等の庭園史等関係資料については、さらに整理を進め目録作成準備等を視野に入れていく必要がある。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良文化財研究所 处理番号 4155

業務実績書

研究所 No. 20

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジア史における飛鳥の研究及び飛鳥時代工芸技術の研究 ((1)ー(5)ー才)		
【事業概要】 重要文化財山田寺出土部材を第2展示室で展示しており、その経年変化の計測研究をおこなう。東アジア史の中の飛鳥文化の研究として、飛鳥地域の壁画古墳の研究をおこなう。飛鳥時代の工芸技術の研究として、飛鳥・奈良時代の金工品の研究をおこなう。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 加藤真二
【スタッフ】 成田聖、丹羽崇史 [以上、飛鳥資料館]			
【主な成果】 山田寺出土部材については、経年的に計測調査をおこなっており、本年も計測を継続した。その結果、大きな変化がないことを確認した。飛鳥地域の壁画古墳の研究としては、四神図を中心に研究を進め、関連文献の収集、奈良文化財研究所所蔵出土遺物における朱雀・鳳凰文の調査、群馬県立歴史博物館所蔵の唐代壁画墓四神図の模写等の調査をおこなった。飛鳥時代の工芸技術の研究としては、奈良県平吉(ひきち)遺跡出土の鋳造関連遺物および奈良市出土鏡の調査を行った。			
【年度実績概要】 山田寺出土部材の 経年変化の研究：第2展示室で常設展示中の重要文化財山田寺出土部材について、ひずみ計を設置して、その経年変化を計測している。近年、春期のキトラ古墳壁画の特別公開にともない、多数の来客があることから、その影響の有無に特に注意を払っている。計測によれば、大きな変化は生じておらず、展示を継続している。 飛鳥地域の壁画古墳の研究：関連する文献資料を収集するとともに、奈良文化財研究所が所蔵している出土遺物に見られる朱雀・鳳凰文、群馬県立歴史博物館が所蔵している唐代壁画墓四神図の模写の調査をおこない、キトラ・高松塚古墳壁画との比較をこころみた。なお、本研究の成果は平成22年度春期特別展、およびその展示図録の基礎となる。 飛鳥時代の工芸技術の研究としては、奈文研都城調査部(飛鳥・藤原地区担当)が所蔵している奈良県平吉遺跡出土鋳造関連遺物および、奈良市埋蔵文化財センターが所蔵している奈良市出土の唐式鏡の調査を行い、その結果を飛鳥資料館研究図録第12冊として刊行した。前者は、近年、増加している飛鳥地域における鋳造関連遺物、遺構を研究するにあたっての基礎的データ集としても位置付けられ、後者は、継続的に行っている唐式鏡研究の最新成果となる。			
			
韋氏墓壁画模写 (群馬県立歴史博物館蔵)		平城宮跡出土鳳凰文鬼瓦	
【実績値】 山田出土回廊部材 経年変化計測値 飛鳥地域の壁画古墳の研究 群馬県立歴史博物館所蔵唐代壁画模写 写真3点、 奈文研所蔵出土品の朱雀・鳳凰図像 写真30枚 新聞紙上における研究成果の発表 飛鳥時代の工芸技術研究 研究図録1冊(①)			
【備考】 ①『平吉遺跡出土鋳造関連遺物の調査/奈良市出土鏡の分析調査』飛鳥資料館研究図録第12冊 2011年3月			

自己点検評価調書

研究所 No. 20

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考 工芸技術の研究は、飛鳥・奈良時代の金工技術の解明のための貴重な基礎データを提供し、学界からも高く評価されている。また、高松塚古墳出土海獸葡萄鏡の評価にあたっては不可欠なデータとなっている。壁画古墳の研究もその成果が正倉院展やその図録のほか、関連文献に引用・参考されるなど、壁画にとどまらず飛鳥・奈良時代の図像の研究に独創的で新鮮な学説を提示してきている。また、山田寺の出土部材の研究も保存処理をおこなった大型部材に関する継続的なデータは、従来我が国になかった長期的なデータとなり、保存科学および大型木製品の展示保管に大いに資している。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

当初計画どおり、研究図録1冊を刊行した。調査・分析についても必要な回数を実施し、成分分析データ、画像データ等を得ることができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の研究計画通り、金工品、鋳造関連遺物の調査を進め、研究図録を刊行することができた。また、壁画古墳の研究は、春期特別展示およびその図録刊行に必要な成果をあげることができた。山田寺の出土部材についても、継続的な調査を推進し、展示・保存にかかる異常変化を見出すことなく、順調に展示を継続するとともに、保存処理を行った大型木製品の展示・保存に関するデータを蓄積することができた。以上の進捗状況を総合的に評価し、Aと判定する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の予定どおり遂行したことから、当事業は順調であると判定した。

業務実績書

研究所 No. 21

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	遺跡の保存・整備・活用に関する調査研究 ((1)~(6)ア)					
【事業概要】						
遺跡等の調査・保存・整備計画段階から整備後における管理・運営と公開・活用に至るまでの調査研究を行うとともに、庭園等を含め遺構の露出展示を伴う整備事例の資料収集・現地調査を踏まえたデータベース構築を進め、遺構露出展示の成果と課題を整理した。また、遺跡整備・活用研究集会(第4回)「遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～」を開催した。						
【担当部課】 文化遺産部 【プロジェクト責任者】 遺跡整備研究室長 平澤 穀						
【スタッフ】 小野健吉(文化遺産部長)、栗野隆(文化遺産部研究員)、黒崎直、高瀬要一(以上、客員研究員)						
【主な成果】						
遺跡等における遺構露出展示について、基礎的な情報収集をおこなうとともに、その意義や分類などについて検討を進め、遺構露出展示の持続的管理に関する検討をおこなうとともに事例に関する整理を改訂した。また、過年度の成果について、報告書を刊行・配布するなど、その普及等をおこなった。						
【年度実績概要】						
1. 遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。また、文化遺産の保護と遺跡整備との関連について検討した。 2. 2010年1月28・29日に、「遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～」をテーマとして、平成21年度遺跡整備・活用研究集会(第4回)を、奈良市ならまちセンターで開催した。発表内容は、「研究集会開催趣について」のほか、「遺跡の保護と計画」に関する基調講演2件、『遺跡の環境と復元』に関する事例報告3件、『遺跡の景観と保全』に関する事例報告2件で、講演・報告を踏まえた総合討議をおこなった。なお、研究集会参加者からアンケートの回収率は出席者の92%で、うち94%から有意義であったとの回答を得た。 3. 研究集会開催後、来年度にこの研究集会の報告書を刊行する準備として総合討議の内容の整理等をおこなった。 4. 昨年度の研究集会「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」の成果について、「奈良文化財研究所紀要2009」に報告するとともに、報告書を編集・刊行した。 5. 昨年度開催した研究集会の成果を踏まえつつ、遺構の露出展示に関する整情報収集を継続するとともに、データベース化を進めるにあたっての項目の見直しや、管理マニュアルの作成など、露出展示における問題点の把握と今後のあり方について検討を進めた。 6. 全国各地の遺構露出展示の事例に関して、昨年度の成果を再検討し、都道府県教育委員会文化財保護主幹課に対し、遺構露出展示事例の把握について協力を求め、所在事例一覧表を改訂した。 7. 全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主幹課及び埋蔵文化財センター等に対して平成20年度に刊行した報告書の配布をおこない、過年度の成果の公表に努めた。						
【実績値】						
1. 研究集会等開催数：1回(資料集①)、参加者数：地方自治体職員等約100名。 2. 刊行図書数：1件(②) 3. 論文等数；10件(論文6件③～⑧、講演・発表等4件⑨～⑫)。						
【備考】						
①文化遺産部遺跡整備研究室編『平成21年度遺跡整備・研究集会(第4回) 講演・報告資料集』、2010.1 ②奈良文化財研究所『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』、2009.12 ③平澤穀「造園遺産と目録作成の方向性について」、『平成21年度日本造園学会全国大会分科会講演集』、2009.5 ④平澤穀・高妻洋成「遺構露出展示の今日的課題」、奈良文化財研究所紀要2009、2009.7 ⑤平澤穀「世界遺産」をめぐる現状と課題」、「世界遺産の普遍的価値」、京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター、2009.8 ⑥小野健吉「特別史跡平城宮跡保存整備基本構想推進計画について」、「遺跡学研究」、第6号、2009.11 ⑦平澤穀「遺産の類型」、「遺跡学研究」、第6号、2009.11 ⑧⑨平澤穀「日本における文化遺産としての風致景観の保護と保全—特にその歴史と「名勝」の保護についてー」、国際学術シンポジウム「名勝の現況と展望」(於、韓国)、2009.10 ⑩平澤穀「世界遺産のいま、そして、文化遺産保護の課題」、奈良大学、2010.1 ⑪平澤穀「遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～」、遺跡整備・活用研究集会(第4回)、2010.1 ⑫平澤穀「文化的景観と世界遺産－「紀伊山地の霊場と参詣道」、「石見銀山遺跡とその文化的景観」、「平泉の文化遺産」などの事例から、国際シンポジウム「大山・隠岐・三徳山－山岳信仰と文化的景観」、2010.2						



遺跡整備・活用研究集会（第4回）

自己点検評価調査

研究所 No. 21

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考 昨年度開催した研究集会のテーマである「遺構露出展示」は、現在の中期計画における遺跡整備分野に関する中心的な調査研究課題であり、密接に関連する保存修復科学分野と合同で開催した研究集会『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』の報告書を取りまとめ、また、全国各地の「遺構露出展示」事例の基礎的把握については追補・改訂して、併せて公表したことは極めて高く評価できる。また、平成19年10月の文化審議会文化財分科会企画調査会の報告に基づき文化庁が平成20年度以来推進している「文化財の総合的把握」や「歴史文化基本構想」、さらには、文部科学省・農林水産省・国土交通省の三省共管で平成20年11月に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」の現在の動向とも関連して開催した研究集会『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～』をはじめ、時宜に適った調査研究の取組の成果は極めて良好であると評価できる。

2. 定量的評価

観点	研究会等の開催回数	論文等件数	事例調査等件数	報告書等刊行数		
判定	A	A	A	A		

備考 遺跡内外の環境と景観への取組を軸にこれから遺跡整備と地域づくりとの新たな関係に関する課題を網羅的観点から検討するために開催した研究集会は、全国各地及び様々な分野から約100名の参加が得られ、その情報や課題の共有等において高く評価できる。また、昨年度の成果を踏まえつつ都道府県教育委員会文化財保護主管課等の協力の下、再照会により収集・整理した遺構露出展示の調査すべき事例について、1,000件(900遺跡)余りを確認できたことは、今後の調査研究を進める上で不可欠の情報を把握した点で重要な意義を有する。また、国内外の現状を踏まえつつ、論文・講演等を通じ、文化遺産の保護に関して、保存管理対象の理解、保存管理手法及び技術的事項を含む遺跡整備に関わる観点から近年の国内外の動向や調査研究成果等の解説・普及を行った件数も極めて高く評価できる。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施でき、また、今後の調査研究について取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、第4回を迎えた研究集会については、遺跡整備を広く地域づくりの中で評価すべきことが詳らかにされ、今後の学際的検討の具体的な基礎を築くことができたことが有意義であり、参加者の評価も高く、文化財保護と地域活性化の観点などから最新の動向を踏まえつつ、さらに充実を図っていくべき事業であると判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡整備に関する情報の収集・整理・公開に関する検討を様々な観点から進めることができた。特に、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で遺構露出展示について開催した研究集会の成果を踏まえ、追加して収集・整理した遺構露出展示の事例所在一覧は、次年度に計画しているデータベース構築の重要な基礎的成果として評価できる。次年度は、遺構露出展示に関する調査研究として包括的かつ詳細な検討を進め、中期計画における適切かつ効果的に成果を取りまとめ、広く公表を図る。

業務実績書

研究所 No. 22

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術並びに監視技術の開発的研究((1)ー(6)ーイ)		
【事業概要】 遺構の安定した公開・展示を行うことを目的とした事前調査法、保存技術ならびに監視技術の開発的研究の一環として、遺跡の水分状態や石材の劣化状態を把握する技術の応用研究、平城宮跡遺構展示館等における遺構安定化薬剤の実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [埋蔵文化財センター]			
【主な成果】 遺跡内の水分移動を推察し、さらに露出展示した場合の変化を予測するために、遺跡の土を採取してこれらの不飽和水分移動特性の推定をおこなった。そして、その成果とボーリング調査による土層層序、地下水に関する情報をもとに、遺構における水分移動のシミュレーションをおこなった。また、数値実験をつうじて、水を用いた土質遺構の安定化の可能性について検討した。			
【年度実績概要】 遺構の露出展示をおこなうためには、遺構内における土中水移動の現状を把握するとともに、遺構を露出した場合の土中水移動変化について予測することが必要である。そこで、これらの定量的な扱いが可能となるよう、福島市宮畠遺跡および日田市ガランドヤ古墳の土を試料として、不飽和水分移動特性を表すパラメータの推定をおこなった。 1. 宮畠遺跡では、現地のボーリング調査で得られた地層層序および地下水面上に関する情報をもとに、数値実験をおこない、土質遺構を露出展示した場合の土壤含水率変化についてシミュレーションをおこなった。その結果、宮畠遺跡の土はひじょうに透水性が低いために、地下水面上からの水の上昇が緩慢であり、乾燥による崩壊あるいは塩類析出による劣化が生じる可能性が示された。そこで、遺構表面から定期的な給水をおこなうことによって、土質遺構を安定化することが可能であるのかを、数値実験により検討した。この結果、遺構表面からの給水によって乾燥の進行を抑制し、かつ塩類析出を大幅に抑制しうることが推測された。 2. 装飾古墳であるガランドヤ古墳は封土のほとんどを失っており、石室が半ば露出した状態にある。現在、石室は、降雨から保護するために遮水シートで覆っているが、石室内部の石材表面には、濡れや黒の発生が認められることがある。そこで、雨量や土壤含水率測定などについて現地調査をおこなうとともに、水の移動方向を調べるために、土中水ポテンシャルおよび石室内の温湿度を測定して、動水勾配に関する調査をおこなった。その結果、動水勾配に従って土中水が石室へと移動し、蒸発した水蒸気が結露することにより、石室石材表面の濡れが生じていることが判明した。この土中水移動については、室内実験においても確認された。			
【実績値】 発表件数：3件 論文等数：3件			
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			



ガランドヤ古墳全景

自己点検評価調書

研究所 No. 22

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

宮畠遺跡およびガランドヤ古墳から採取した土試料を用いた室内実験の結果と、フィールド調査の結果に基づき、遺跡内における土中水の移動について定量的に推定することが可能となった。これらの基礎的研究をもとに、遺跡の露出展示保存に限らず、埋め戻しによる保存など、遺跡のさまざまな保存方法について定量的に検討しうる可能性を示せた点が高く評価できる。また、遺跡保存にともなう環境負荷を考慮して、積極的に水を用いた土質構造の安定化法について検討したことが、独創性および発展性という点で評価できる。

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				

備考

2009 東亜古遺跡保護国際学術研討会、東アジア文化遺産保存学会第1回大会およびCIPA2009 国際シンポジウムにおいてそれぞれ発表1件をおこない、東アジア文化遺産保存学会第1回大会発表要旨集およびCIPA2009 国際シンポジウム発表論文集に1件、『保存科学』第49号に1件の、合計3件の論文を発表した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をAと判定した。遺跡土壤を安定化させるためには、それぞれの遺跡土壤の不飽和水分移動特性を定量的に把握する必要があり、次年度には、不飽和水分移動特性をもとに、水分および塩類の起源となる溶質の移動について、三次元のシミュレーションをおこなう予定である。また、数値実験をつうじて、遺跡土壤安定化の最適条件についても検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できることから、順調と判定した。次年度は、このペースを維持しつつ、遺跡保存に関するより実践的な室内実験をおこなうとともに、その結果を反映したフィールドでの試験を実施し、新たな遺跡保存法の開発に取り組む予定である。

業務実績書

研究所 No. 23

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿正殿復原をはじめとする整備・公開・活用に関する専門的・技術的な援助・助言((1)ー(6)ーウ)

【事業概要】

平城宮跡・藤原宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、文化庁の行う平城宮跡第一次大極殿院地区の復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施するとともに、『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づく具体的整備に対して専門的・技術的な援助・助言を行うため、復原に関する資料の整理、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示するとともに、文化庁記念物課や文部科学省文教施設企画部の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言を行う。

【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部長 井上和人
--------	-------------	-------------	---------------

【スタッフ】

井上和人、渡辺晃宏、難波洋三、箱崎和久、大林潤、鈴木智大、海野聰 [以上、都城発掘調査部]、小野健吉、島田敏男、清水重敦 [以上、文化遺産部]、今西康益 [管理部]

【主な成果】

長年にわたって行ってきた第一次大極殿に関する諸研究を、報告書に纏めた。また、文化庁が行う第一次大極殿復原事業に伴う文部科学省文教施設部主催の会議等に出席し、専門的な観点から、助言を行った。さらには、平城宮跡の国営公園化に伴って、国営飛鳥歴史公園事務所が主催する『平城宮跡 基本計画検討委員会』及び『国営平城宮歴史公園第一次大極殿院広場設計検討業務検討委員会』開催にあたり事務局に資料提供するとともに委員会に出席した。

【年度実績概要】

約12年間にわたって行ってきた大極殿復原に関する諸々の研究成果を4冊の報告書として出版する計画で、今年度は4冊のうち残り2冊の『II 木部』と『III 彩色・金具』を出版した。報告書の内容は、大極殿復原に直接関わる研究のみならず、古代建築復原に資する数多くの論考からなる。また、可能な限り、基礎データを示すこととし、本報告書は大極殿の復原根拠及び復原の経緯を示すだけでなく、各地で行われている古代建築復原検討に資するような基礎データ及び研究成果を提供し得た。また、本研究で明確となった課題について、今後の古代建築研究につながるものと考える。

第一次大極殿復原事業に関しては、連絡会議等を通して、専門的な見地から助言を行うとともに、施工監理者・施工者の要請に基づき、隨時指導・助言を行った。また、工事工程の写真撮影を行い、工事記録の作成に努めた。

また、平城宮の整備に関しては、平城宮の国営公園化に伴って、昨年5月に文化庁が策定した『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づいて今後の平城宮の整備計画を策定する国営飛鳥歴史公園事務所が主催の『平城宮跡 基本計画検討委員会』及び『国営平城宮歴史公園第一次大極殿院広場設計検討業務検討委員会』の開催にあたり事務局に資料提供するとともに委員会に出席した。

【実績値】

刊行図書：『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 II 木部』(2010年3月)

『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 III 彩色・金具』(2010年2月)

文化庁宮跡整備関連事業への協力：

『大極殿復原事業に関する連絡会議』 出席 2回

『特別史跡平城宮跡等の整備に関する工程等関係機関連絡調整会議』 出席 6回

国土交通省国営公園整備関連事業への協力： 8回

【備考】

自己点検評価調書

研究所 No. 23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

第一次大極殿復原に関する研究は、これまでにない視点での研究も行い、出版した報告書では、古代建築の復原研究に資する数多くのデータを掲載した。また、第一次大極殿の復原及び大極殿院の復原整備計画に向けて、発掘遺構の再検討及び整備事業計画者への資料提供を積極的に行った。

2. 定量的評価

観点	協力回数					
判定	A					

備考

会議出席のみならず、様々なかたちで協力を得た。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第一次大極殿の復原について、進行中の工事に際して隨時適切な助言を行ったこと、復原の根拠となった研究成果を整理して報告書の刊行を行ったこと、また、平城宮の整備に関して、度重なる資料提供及び会議出席を行い、事業の目的を十分に達したと考え、総合的評価をAとする。次年度も引き続き、平城宮の整備に関わる諸資料の提供及び研究を継続する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究事業は、継続的に行っているもので、研究の段階も順調に進み、同時に文化庁事業への協力も順調に行っており、今後もこのペースを維持しつつ、研究内容の向上に努めたい。

業務実績書

研究所 No. 24

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	高精細デジタル画像の応用に関する調査研究((2)-①)		
【事業概要】 前の中期計画5カ年中に開発した高精細デジタル画像形成の手法を用い、着色仏画・彩色壁画・油彩画・日本画・漆絵などの美術品を対象とし、それぞれについて、1)光に対する物性の検討、2)光物性の画像化に関わる技術開発、3)形成画像の汎用的な活用法(表示・出力)に関する条件整備を行い、広範な文化財研究を支援するために不可欠な研究画像を形成し、それらを応用・利用する方法を探ることを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中 淳、山梨絵美子、勝木言一郎、塩谷 純、綿田 稔、皿井 舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、中村節子、中村明子、井上さやか、鳥光美佳子(以上、企画情報部)			
【主な成果】 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財の高精細な画像や特殊撮影画像の公開と多目的な利用に供すべく、平等院と行った共同研究成果を『平等院鳳凰堂調査資料目録—近赤外線画像編』として刊行した。また、他機関との共同調査研究として宮内庁三の丸尚蔵館と「春日権現記絵巻」「動植彩絵」の調査撮影を行った。また、奈良国立博物館との共同調査研究として「大徳寺五百羅漢図」の判読がこれまで出来なかった銘文の解説を行った。また、昨年、撮影と調査を行った春日大社所蔵の春日権現記絵巻披見台の報告書ならびに法隆寺金堂釈迦三尊ならびに薬師如来台座(下座板絵)の報告を行った。			
【年度実績概要】 1. 他機関との共同研究：本研究は、先の中期計画において開発した画像形成技術を用いた画像の汎用的な活用・運用を行う方法・技法の研究に重点を置いている。脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財を間近で精査・鑑賞する機会は限定されている。文化財の高精細な画像や特殊撮影画像を公開し、多目的な利用に供することは、文化財への理解を深め、実物の保存と共に活用の道を開く有効な方法である。デジタルコンテンツの多目的利用の一環として、『平等院鳳凰堂調査資料目録—近赤外線画像編—』『春日権現記絵巻披見台調査報告書』を刊行するとともに、奈良国立博物館記要『鹿園雑集』18号に「法隆寺金堂所在釈迦三尊像および薬師如来像台座(下座板絵)の光学調査」についての成果報告を行った。 2. 今年度の他機関との共同調査研究： 奈良国立博物館：「大徳寺五百羅漢図」の調査(09.5.11-17、9.12-19、3.1-6)を行うとともに、研究協議会を開催し(09.4.22、8.25-26、11.5)、一乗寺藏天台高僧像の画像解析を行った。 徳川美術館：「本田平八郎屏風」「歌舞伎図巻」の光学調査を行った(10.1.20-22)。 宮内庁三の丸尚蔵館：「春日権現記絵巻」の光学調査に関する研究協議会を行った(10.3.26)。 3. デジタルコンテンツの多目的利用の一環としての画像展示：長野県立信濃美術館『いのりのかたち—善光寺信仰展』における「東大寺俊乗堂阿弥陀如来像(快慶作)」高精細デジタル画像パネルの公開展示(2010.4.4-5.31)、奈良国立博物館『聖地寧波』展における大徳寺蔵「五百羅漢図」高精細デジタル画像の公開展示(2009.7.18-8.30)、奈良国立博物館『おん祭と春日信仰の美術』における春日大社蔵「春日権現記絵巻披見台」高精細デジタル画像の公開展示(2009.12.8-2010.1.20)をそれぞれ行った。			
【実績値】 報告書の刊行 2件(①②) 学術雑誌等への掲載論文数 4件(③④⑤⑥) 画像展示の件数 3件(⑦⑧⑨)			
【備考】 ①『平等院鳳凰堂仏後壁調査資料目録—近赤外線画像編』10.2 ②『春日権現記絵巻披見台調査報告書』10.3 ③早川泰弘・城野誠治「春日権現記絵巻披見台の光学調査」 ④江村知子「春日権現記絵巻披見台の表現について」 ⑤津田徹英「春日権現記絵巻台の金具について」(③～⑤は②に論文として掲載) ⑥奈良国立博物館記要『鹿園雑集』18号「法隆寺金堂所在釈迦三尊像および薬師如来像台座(下座板絵)の光学調査」10.3 ⑦長野県立信濃美術館『いのりのかたち—善光寺信仰展』における「東大寺俊乗堂阿弥陀如来像(快慶作)」高精細デジタル画像パネルの公開・展示(2010.4.4-5.31) ⑧奈良国立博物館『聖地寧波』展における大徳寺蔵「五百羅漢図」高精細デジタル画像の公開・展示(2009.7.18-8.30) ⑨奈良国立博物館『おん祭と春日信仰の美術』における春日大社蔵「春日権現記絵巻披見台」高精細デジタル画像の公開展示(2009.12.8-2010.1.20)。			

自己点検評価調書

研究所 No24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査箇所数	論文数	画像展示件数	報告書刊行数		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査手法の研究開発がすすみ、これを応用した調査成果の報告書(2件)を刊行することができ、また他機関との共同研究等も積極的にすすめることができた。次年度からは、光学的調査の成果を刊行物として公表することにとどまらず、H P上でも積極的に公開をすすめたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高精細デジタル画像の文化財への応用研究について関心は高く、それに応えての報告書・論文・発表によって、その成果についての認知度・注目度は大きい。今後も積極的に成果公開に努めたい。

業務実績書

研究所 No. 25

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の非破壊調査法の研究(2)-②)		
【事業概要】 文化財の材質調査をその場で行うことを目的に、小型可搬型機器に関する調査・研究と、その応用研究を行う。金属文化財や顔料などの無機化合物に対する元素分析法、および染料など有機化合物の物質同定を目的とした分光学的手法の調査・研究を中心に行い、絵画・彫刻・工芸品など実資料への適用を図る。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 早川泰弘、佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英(以上、保存修復科学センター)			
【主な成果】 ポータブル蛍光X線分析装置や反射分光システム、デジタル顕微鏡システムなど複数の非破壊的手法を用いて、博物館・美術館等の所蔵作品の彩色材料調査を実施した。また、分光学的手法に関する染料分析の高度化のための検討を併行して行った。			
【年度実績概要】 5年計画の第4年度として、下記の3点に重点をおいて研究を実施し、以下の成果を得た。 (1)無機顔料に関する材質調査とデータ解析 日本絵画作品の彩色材料調査を重点的に実施し、鎌倉期絵画として三の丸尚蔵館所蔵「春日権現験記絵巻」を詳細に調査した。鎌倉期代表作として顔料や描写技法に関する基準データを取得できた。また、琉球絵画を集中して調査し、琉球の地域的特性を明らかにした。 (2)有機染料に関する材質調査と検討 国宝三十帖冊子に使われている染料の材料調査を行った。さらに、江戸期の国絵図の彩色材料調査を実施し、江戸期染料の基本データの収集に加え、スペクトルからは判別しにくい染料に関して、高次微分法などによる検討を行った。また、可視から近赤外域の単色光写真の中の彩色材料を解析するための画像解析手法を検討した。 (3)非破壊調査法に関する基礎的研究 特定の有機材料(染料など)に対して、主に分光学的手法を用いて材料検出・物質同定のための最適条件を検討した。			
【実績値】 論文等数 2件(①、②) 発表件数 2件(③、④) 報告書 1件(⑤)			
【備考】 ①早川泰弘：「国宝伴大納言絵巻の蛍光X線分析」『保存科学』49、pp.13-24、10.03 ②吉田直人：「発光ダイオードを光源とした赤外線撮影について」『保存科学』49、pp.119-124、10.03 ③早川泰弘、城野誠治、神居文彰：「平等院鳳凰堂仏後壁の図像と彩色に関する調査」日本文化財科学会第26回大会、名古屋大学 09.7.11-12 ④吉田直人、松島朝秀 「デジタルカメラを使った色材の可視光反射率測定とその応用」文化財保存修復学会第31回大会、倉敷市芸文館 09.6.13-14 ⑤伊藤若冲「動植綵絵 全三十幅」宮内庁三の丸尚蔵館・東京文化財研究所編、小学館、10.01			

自己点検評価調書

研究所 No25

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各博物館・美術館などと協同した作品調査研究、さらに速やかな成果公開を果たし、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第4年度として、各博物館・美術館に所蔵される多くの作品調査を実施し、貴重な調査データの蓄積を図った。論文・学会発表などで速やかな成果公開も果たし、計画通りの研究進捗状況である。

業務実績書

研究所 No. 26

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開((2)ー(3)ーア)		
【事業概要】 官衙関連遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡発掘調査において抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析をおこない、一般公開する。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 山中敏史 [奈文研客員研究員]、森本晋 [企画調整部]、馬場基、小田裕樹、青木敬 [以上、都城発掘調査部]、志賀崇、清野陽一 [以上、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程]			
【主な成果】 官衙関係遺跡の建物データについて、各遺跡における建物群の性格・建物の性格を細分化して追加した。とくに、官衙における門遺構のデータを重点的に収集し、データベースの更新および公開をおこなった。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から近畿地方の一部まで公開した。			
【年度実績概要】 <ol style="list-style-type: none"> 各地の官衙関連遺跡について、建物群の性格および個々の建物の性格に関する属性項目のデータを追加入力した。 建物規模について、より詳細な数値を入力し、データ化した。 平成20年度以前刊行の官衙関連遺跡に関する報告書のめくり作業をおこない、門遺構に関する資料を収集整理した。 門遺構のデータに関して、今年度に開催した研究集会「官衙と門」の資料集成を編集した。 平成18年度以降刊行された報告書のめくり作業をおこない、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関連遺跡等の資料を収集整理した。また、平成20年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業をおこなった。 新たに収集した資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理をおこない、近畿地方以西のデータについて、奈良文化財研究所ホームページで一般公開した。 			
 <p style="text-align: right;">古代寺院建物データ入力画面(部分)</p>			
【実績値】 官衙関連遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約150件、文献データ約2,000件、建物データ約500件、画像データ約650件 古代寺院遺跡データベース入力・補訂件数：遺跡数約450件、文献データ約4,200件、建物データ約500件、画像データ約800件 公開データ数：官衙関連遺跡：遺跡数約1,400件、文献データ約13,300件、建物データ約15,700件など 古代寺院遺跡：遺跡数約700件、文献データ約6,500件、建物データ約1,100件など 研究集会資料集：1件(①) 論文等数：1件(②) 講義件数：1回(③)			
【備考】 ①馬場基ほか編『「門」遺構資料集成』、奈良文化財研究所、2009.12 ②青木敬「飛鳥・藤原地域における7世紀の門遺構」、『第13回古代官衙・集落研究集会 官衙と門』、奈良文化財研究所、2009.12 ③山中敏史「律令国家の成立と在地社会」(静岡大学人文学部集中講義)、2009.9.22～25			

自己点検評価調書

研究所 No. 26

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	効率性	正確性	独創性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
情報の共有化が要望されてきた古代寺院遺跡について、データ数の拡大をともなうデータベースを充実させている点で、適時性と発展性が認められる。また、毎年増加する官衙関連遺跡に関するデータを逐次補足・補充することにより、正確性と継続性、適時性を確保している。						

2. 定量的評価

観点	データベース 入力件数	データベース 公開件数				
判定	A	A				
備考						
毎年増加する官衙関係遺跡のデータの追加入力に加えて、新たに門遺構を全国的に集成し、データベースの充実化を図った。また、寺院遺跡データの収集・入力作業を進め、データの公開も着実に達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を大幅に上まわったほか、官衙関係遺跡における門遺構資料収集とデータベース化を新たに開始した。古代寺院遺跡のデータベースを、近畿地方の一部を除く西日本について一般公開できたことは、とくに各地で寺院遺跡の調査研究にあたっている者にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。今後も、新発見の官衙関係遺跡データを継続的に収集・整理するとともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し、公開していくことにしたい。

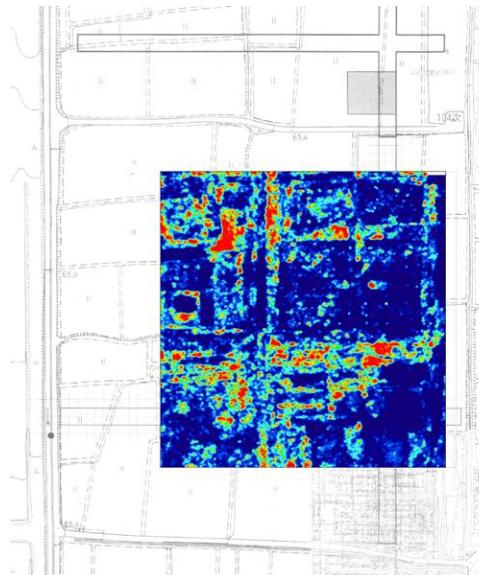
4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開とともに、宮・都城の門についてもデータ収集を開始し、データベースの一層の充実化を図っている。昨年度に構築した寺院遺跡のデータベースについては、近畿地方の一部を除く西日本のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開することができた。今後は、官衙関連遺跡および寺院データの収集とデータベース化を継続し、利用しやすいかたちでの一般公開をさらに推進していくことが必要である。また、これにくわえて、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析をおこない、整理・収集とデータベース化を始めることにより、官衙関連遺跡の調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

業務実績書

研究所 No 27

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法の研究((2)-③-イ)		
【事業概要】 遺跡の測量・探査における新たな技術の有効利用法を研究し、全国の遺跡調査の質的向上と発掘作業の効率化に資するべく、方法の検討と実地での実践によるデータの収集と分析をおこなう。本事業は、現在の遺跡調査の実態に鑑み、従前の方法との乖離を埋めつつ、新たな技術の有効利用法を研究・提示することで、当該分野における指針としての役割を果たすことを目的としている。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大 [埋蔵文化財センター]、西村康、西口和彦 [以上、奈文研客員研究員]			
【主な成果】 遺跡の測量・探査技術の向上と有効利用法の研究を推進し、大学や地方公共団体と連携して実践をおこなった。測量では、三次元レーザースキャナーおよび写真測量の技術的検討をおこない、遺跡・石造物や考古遺物の図化法の検討と摩滅資料の判読、安価で導入可能な機器の試験を実施した。探査では、GPRの走査方法改善と新たな機器の試作、GPSによる位置精度向上実験をおこない、多様な条件下で建物跡の確認に成功した。			
【年度実績概要】 探査分野では、台渡里遺跡(茨城県)、西都原古墳群(宮崎県)、伊勢国府(三重県)、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡(群馬県)、胡桃館遺跡(秋田県)、芝生城(徳島県)、平城宮、藤原宮、桜井茶臼山古墳(奈良県)、鋼山製鉄所、苗代川窯(鹿児島県)、大宰府(福岡県)で地方公共団体や大学と共同調査をおこなった。なかでも、伊勢国府での試行を基礎に改良を加えたGPR機器は、天良七堂遺跡での総柱建物の確認、三軒屋遺跡での下層遺構の形状の確認、平城宮での建物等の詳細の確認といった成果を生んでいる。 測量・計測分野では、低価格の三次元レーザースキャナーの実用化を達成し、従来の記録法に加えて三次元計測が現実的に導入可能などを示した。現在、連携した研究者とともに、解説書を作成中である。くわえて、生駒本願寺裏山古墓群(奈良県)、檜前遺跡(奈良県)、京都国立博物館藏安祥寺盤竜石柱(京都府)、東京国立博物館藏塑像(東京都)、遼寧省出土遺物(中国)などの計測をおこない、三次元計測の有効性を検証することができた。 このほかに、考古学情報の流通の改良を目的とする、SVGおよびXMLを利用したデジタル実測図の流通に関する研究、平城京条坊の既往の発掘成果の整理、遺跡の位置情報データの活用、窯業遺跡の考古学的研究、考古学の研究成果の一般化を進めるためのテストケースとして、生駒市教育委員会と連携した企画展示などの活動をおこなった。 また、UNESCO-ICOMOSの委員会であるCIPAの国際学会を京都で開催し、世界各国より参加者を得た。			
【実績値】 発表件数：3 件 論文等数：4 件 遺跡探査実施件数：15 件 三次元計測資料数：84 点 研修実施件数：3 件 大学講義件数：1 件			
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			



平城宮東方官衙のGPR探査成果

自己点検評価調書

研究所 No. 27

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						
適時性：技術革新が進行するなかで的確な指針を欠く現況の改善。 発展性：全国の遺跡調査への応用性と影響力。 効率性：時間的投資・人的投資の効率化。 継続性：事業中断以前を含めた、黎明期以来のデータの継続的収集。						

2. 定量的評価

観点	探査実施件数	計測実施件数	発表件数	研修件数		
判定	S	A	A	A		
備考						
いずれの項目も当初の目標値を上回っている。とくに探査実施件数はそれが著しい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	測量・探査とともに、課題としているワークフローの確立や機器の開発が進展し、それに対応して作業の迅速化や結果の向上、地方公共団体などへの協力と成果の還元が達成できたため、Aと判定する。反面、多方面からの要求に応えるための研究補助者の確保が必要だが、現状では充分に対処できていないことから、スタッフの負担が大きくなってしまっており、これ以上の研究の拡大は事実上困難である。また、本年度後半の2度にわたる漏水事故により、かなりの機材が使用できない状況となり、その事後処理にも追われているため、現況では次年度に同様の調査研究を維持するのは難しく、早急な対応を必要とする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現状では、新しい方法や機器の導入と試行、成果の蓄積という点では、当初の予想を超える進展をみせており、全国各地からの依頼や問い合わせも急増している。三次元データや探査データの処理は時間を要する作業であるが、研究補助者の雇用と育成により、三次元データについては、一定量の処理が可能になった。探査についても、RTK-GPSの導入などが進み、今後、さらなる進展が期待できる。しかし、漏水事故によって、かなりの機器が使用不能となり、ほかの機器との連携ができなくなったものもあるため、このままでは、故障した機器の利用を想定していた試験および外部の依頼には応じられない。したがって、次年度の調査研究の計画を大幅に見直す必要があり、すみやかな対応措置が求められる。

業務実績書

研究所 No. 28

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	年輪年代学研究 ((2)~(4))

【事業概要】

遺跡出土木材、木造建築物、木造美術工芸品などの年輪年代測定を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究室で開発したX線CTやデジタル画像を用いた測定方法は、非破壊を原則とする文化財調査にとって理想的なので、実施事例の拡充を図る。また、年輪画像計測技術のさらなる進歩と普及を目指し、技術開発についても取り組む。これらの研究成果を、学会、学術論文、各種報告書として発表する。

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	年代学研究室長 大河内隆之
--------	-----------	-------------	---------------

【スタッフ】

光谷拓実、伊東隆夫、藤井裕之 [以上、奈文研客員研究員]、児島大輔 [日本学術振興会特別研究員]

【主な成果】

3府県下3遺跡から出土した考古学関連の木材試料、2府県下3棟の建造物、7府県下9軀の木彫像ならびに1件の現生木試料群に対して年輪年代調査を実施した。また、マイクロフォーカスX線CT装置を用いた文化財の高精度な非破壊分析を2件実施した。さらに、年輪の非破壊計測に関する技術開発にも取り組んだ。以上の研究成果の一部を、論文等7件、学会発表等4件として発表するとともに、特許1件を取得した。

【年度実績概要】

1. 文化財の年輪年代調査：本年度の年輪年代調査実績の件数は上述のとおりだが、とりわけ注目に値するのが、奈良国立博物館で陳列された金峯山寺釈迦如来坐像と兵庫県所蔵天部立像の年輪年代調査である。両像は、作風などから同一作者の手による可能性が高いと鈴木喜博氏(奈良国立博物館)によって指摘されていたが、今回の年輪年代調査で、ともに930年代頃の作であることが明らかになり、その蓋然性の高さを裏づけることになった。また、平成13年から20年度にかけて継続的に実施してきた法隆寺西院伽藍の総合的な年輪年代調査の成果について、査読誌に論文として発表することができた(下記論文⑦)。
2. 調査対象樹種の拡大：奈良文化財研究所では、ヒノキ、スギ、コウヤマキ、ヒバの4樹種を主な調査対象としてきたが、近世の建築用材に多用されるツガについても基礎研究を取り組み、年輪年代測定への応用の可能性が高いことを確認した。
3. 文化財の非破壊構造分析：当研究室に設置したマイクロフォーカスX線CT装置は、当初は非破壊年輪年代測定を目的に設計されたものであるが、その後、三次元撮像への対応など技術的な性能向上を図り、文化財の高精度な構造分析などにも幅広く活用可能となっている。本年度は、恵庭市柏木川4遺跡出土編布の製作技法分析などを実施した。
4. 技術開発：非破壊年輪年代測定の根幹をなす技術として、「木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定方法」(発明者：大河内隆之、特許第4310374号)を特許取得した。



兵庫県所蔵天部立像の年輪年代調査作業

【実績値】

論文等数：7件(①~⑦)、学会発表件数：5件(⑧~⑫)、特許取得件数：1件(特許第4310374号)

【備考】

- ①大河内隆之・児島大輔 「長徳寺木造薬師如来坐像の年輪年代調査」、『奈良文化財研究所紀要2009』、2009.7
- ②降幡順子・大河内隆之 「黒漆塗工具及び刀子の事前調査」、『奈良文化財研究所紀要2009』、2009.7
- ③児島大輔 「甲冑修復の精神史—近世における修復二例を中心の一」、『サムライの美学—甲冑師明珍宗恭とそのコレクション—』展図録、早稲田大学會津八一記念博物館、2009.9
- ④児島大輔 「正倉院宝物樹皮色袈裟について」、『奈良美術研究』第10号、早稲田大学奈良美術研究所、2010.3
- ⑤光谷拓実 「年輪年代調査」、『月刊文化財』554、第一法規、2009.11
- ⑥Mitsutani Takumi: "Tree-ring dating: its precision and applications in Japan" Papers presented at the International Symposium of Conservation Science for Cultural Heritage 2008, National Research Institute of Cultural Heritage, 2009.12
- ⑦光谷拓実・大河内隆之 「年輪年代法による法隆寺西院伽藍の総合的年代調査」、『佛教藝術』308、毎日出版社、2010.1(査読あり)
- ⑧大河内隆之・光谷拓実・児島大輔・松岡久美子・佐々木進「善勝寺本尊木造千手観音立像の年輪年代調査」、日本文化財科学会第26回大会、2009.7
- ⑨尾崎大真・坂本稔・今村峯雄・光谷拓実 「日本樹木年輪試料による古墳時代以降の炭素14年代較正曲線作成の試み」、日本文化財科学会第26回大会、2009.7
- ⑩藤井裕之・竹口泰生・後藤玉樹 「日本産ツガ属の年輪年代測定(2)—複数の近世建造物におけるデータ比較—」、日本文化財科学会第26回大会、2009.7
- ⑪Itoh Takao "Database of wood species used for archaeological wooden objects unearthed in Japan" Pacific Regional Wood Anatomy Conference(環太平洋木材解剖学会議)、マレーシア国 クアラルンプール、2009.8
- ⑫児島大輔 「日本古代における銀造仏像の鋳造について」、アジア铸造技術史学会東京大会2009、2009.8

自己点検評価調書

研究所 No 28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	S	A	S	S

備考

適時性：解体修理や博物館での展示替などの機会を逃すことなく調査を実施し、考古学・建築史・美術史等に関連した木材から得られた年輪年代情報を提供することができた。ただし、本年度は室長の一時休職という事情により、例年よりも対応の迅速性という点において反省すべき点もあり、前年度より評価を1ランク下げる。

独創性・発展性：マイクロフォーカスX線CTによる非破壊年輪年代測定やデジタル画像計測の技術は、当研究室で開発した新規性を伴う独創的なものであり、その根幹部分をなす技術について特許取得を果たした意義はたいへん大きい。また、高精度な非破壊構造分析の実施や、年輪年代法の適用可能な樹種を広げる研究にも着手しており、これらについては前年度以上の評価に値する。

効率性：測定対象に応じて、年輪読取機による計測手法、デジタル画像計測手法、マイクロフォーカスX線CTによる非破壊年輪計測手法などを適材適所で選択し、効率的に研究を遂行した。ただし、室長の休職期間中はマイクロフォーカスX線CTのラインが事実上ストップしたため、研究室内に操作可能者を複数養成する必要性を痛感するとともに、前年度より評価を1ランク下げる。

継続性：年輪データを継続的に集積している。とくに、平成13年から20年度まで継続してきた法隆寺西院伽藍の総合的な年輪年代調査の成果について、査読誌に論文発表した意義は大きい。

正確性：1年単位の正確さで年代を特定できるのが年輪年代法の最大の特徴であり、本年度の研究においても、その特徴がいかんなく発揮されている。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

論文等数・発表件数とともに、当初の目標値を上回っている。ただし、昨年度実績と比較すると、論文等数・発表件数ともに下回っている。とりわけ発表件数の減少が顕著であり、これには、予定していた国際学会や国内学会等への参加を、室長の休職により中止せざるをえなかったという特殊事情もある。そうした反省の意味を込めて、前年度よりも評価を1ランク下げる。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価がSとA、定量的評価がAであることを勘案して、総合評価を昨年度より1ランク下げ、Aと判定する。本年度は、室長の一時休職という特殊事情があったにもかかわらず、その間、客員研究員と日本学術振興会特別研究員諸氏の努力により、評価Aに値する実績を残すことができた。従来、当研究室における年輪年代学研究は、前室長の時代から室長個人の努力に負うところが多分にあり、そのため今回のような事態になると、研究活動が停止しかねない危惧をはらんでいる。本年度は最小限の失態で回避することができたものの、今後は研究室内での技術の共有化や、役割分担と相互補完を図るなど、研究活動を円滑に進めるためにも、研究室運営上の課題の改善にも着手したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当該年度における調査研究事業は、その進捗度からみて、順調に実施できたと考えられる。本年度の順調な進捗に満足することなく、ひきつづき中期計画の遂行に邁進したい。

業務実績書

研究所 No. 29

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡出土の動物遺存体や古土壤の考古科学的分析による環境考古学研究((2)－(5))		
【事業概要】 動植物遺存体による環境考古学的研究を継続して行う。また、出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。日本の先史時代の動植物利用と対比できる中国、韓国、台湾、北米北西海岸などの遺跡の発掘調査に積極的に参加し、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行う。そして、東アジアや環太平洋地域の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】 山崎健〔埋蔵文化財センター〕、橋本裕子〔奈文研客員研究員〕、樋廻理恵子、藤田英美〔以上、奈文研派遣職員〕、菊地大樹、納屋内高史、ルブナ・オマル〔以上、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程〕、永井理恵、大和楨、金原裕美子〔以上、京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程〕			
【主な成果】 国内外の学会や研究会において、環境考古学とくに貝塚や湿地遺跡から明らかとなる動物利用などの研究成果を発表し、研究交流を深めた。研究の基礎となる動物骨格標本についても継続的に収集するとともに、広く活用されるように所蔵標本リストの公開を行った。また、継続して分析を行っている佐賀県東名遺跡や兵庫県兵庫津遺跡について、発掘報告書を執筆した。			
【年度実績概要】 2009年4月にDale Croes教授(アメリカ・South Puget Sound Community College)らを招き、「北西海岸の低湿地遺跡に関する研究会」を開催した。また、同4月にアメリカ・アトランタで開催されたSAA(アメリカ考古学会)において、日本における貝塚の研究成果について発表を行った。7月には韓国の三江文化財研究所において、金海貝塚から出土した動物遺存体や骨角器の調査分析を行った。8月はモンゴルにおいて、遊牧民の動物資源利用に関する民族考古学的調査を行った。10月には、広島県福山市で開催された部落解放研究第43回全国集会において「動物と関わった人々」という講演を行った。12月には、茨城で行われた動物考古学研究集会に参加し、中世遺跡の鹿角製馬具(オモゲー)や東名遺跡の骨角器製作など4本の発表を行った。2010年2月にはリークアンチー教授(台湾・台湾中央研究院)を招き、講演会を開いた。3月はラオスにおいて、狩猟や家畜に関する民族考古学的調査を行った。			
動物骨格標本は、口之島牛、カマイルカ、カワネズミ、セキショクヤケイ、ミノヒキなどの希少な骨格標本を含む、166点を収集した。また、奈文研に所蔵されている鳥類・両生類・爬虫類の標本リストを『埋文ニュース』138号として刊行し、他の組織、研究者への公開を行った。この本では、標本リストとともに、現生動物の骨格標本を作成する方法を概説的にまとめた。			
このほか、佐賀県東名遺跡、兵庫県兵庫津遺跡から出土した動物骨の分析を進め、発掘調査報告書を作成した。とくに、佐賀県東名遺跡では、動物骨や鹿角に残された加工痕を観察して、骨角器の製作工程や加工技術を明らかにした。			
【実績値】 標本作製(収集)数：魚類113点、鳥類28点、哺乳類16点、両生類／爬虫類19点 論文等数：論文 2件、報告書 4件、その他 16件 発表件数：海外 1件、国内 9件			
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			



モンゴルの調査風景

自己点検評価調書

研究所 No. 29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						
適時性：昨年度の『哺乳類標本リスト』に續いて『鳥類・両生類・爬虫類リスト』を刊行し、所蔵標本が広く活用されるよう、リストの公開に努めた。						
独創性：国内外の遺跡で幅広い時代を対象として、人間と動物の文化誌を考古学から明らかにした。						
発展性：動物考古学から出発し、歴史学、民俗学、民族学へと幅広い学問分野における研究に拡大した。						
継続性：研究の基礎となる動物骨格標本を、継続的に収集・作製・管理している。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数	標本収集数			
判定	A	A	A			
備考						
査読誌 2 本を含む 22 本の論文等の刊行、国内外の学会や研究会で 10 本の発表を行った。また、動物骨格標本 116 点を収集したことから、評価を A とする。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、継続的な動物骨格標本の収集とともに、昨年度の「哺乳類標本リスト」に続き、所蔵する鳥類・両生類・爬虫類の所蔵標本目録を刊行した。これにより、従来多くの研究成果を上げてきた所蔵標本が広く活用されることが期待できる。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学に関する研究について、国内外で数多く論文等や学会発表を行った。以上の点から、総合的にAと評価するのが妥当と考える。

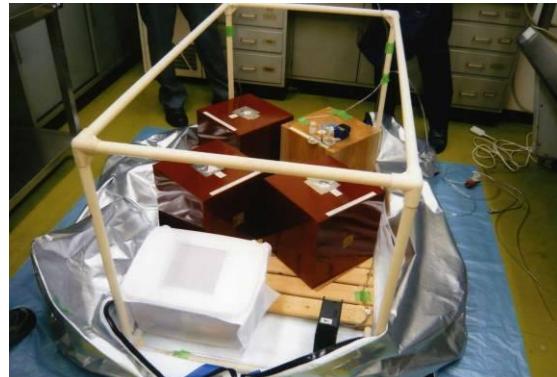
4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も多くの国際学会、国内研究会などで研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。また、現生動物骨格標本の収集も継続的に行うとともに、広く活用されるための所蔵リストの刊行・公開を順調に進めている。

業務実績書

研究所 No. 30

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	文化財の生物劣化対策の研究(3)-①)					
【事業概要】 歴史的建造物や彫刻等、屋外環境に近い空間にある文化財は生物被害を受けやすい環境にあるが、その劣化の早期検出や被害防止対策について、研究はまだ十分な状況とはいえない。本プロジェクトでは、特に屋外に近い環境に置かれた文化財の生物劣化対策を確立することを目標に、生物による被害の現況についてデータを集め、早期発見のためのシステム作りや劣化の防止手法の開発などの研究を行う。						
【担当部課】 保存修復科学センター 【プロジェクト責任者】 保存修復科学センター長 石崎武志						
【スタッフ】 木川りか、佐野千絵、犬塚将英、吉田直人、川野邊 渉(以上、保存修復科学センター)、藤井義久、間渕創(以上、客員研究員)、鳥越俊行、今津節夫、本田光子(以上、九州国立博物館、保存修復科学センター併任)、吉川也志保(日本学術振興会特別研究員)、小峰幸夫((財)文化財虫害研究所)、トム・ストラング(カナダ保存研究所)						
【主な成果】 歴史的建造物での生物被害状況調査で日光輪王寺本殿の虫害を調査した結果、オオナガシバンムシによる被害であることが明らかになった。今年度は、レジストグラフやCTなどの手法を用いて、さらに詳細な調査を行い、殺虫処理についても検討を進めた。また、調査結果および修理、今後の殺虫処理などに関する専門家向け研究会を開催し、今後取り組むべき問題点を明らかにした。						
【年度実績概要】 (1)歴史的建造物など、屋外環境に近く、高湿度になる現場の生物被害状況調査 日光輪王寺本殿の修理において虫害が発見され、本プロジェクトで、その加害虫および加害の性質について詳細な調査を行った。また、レジストグラフを用いた梁など重要な材の内部状況の調査結果とともに、CTによる調査をさらに進めた。殺虫方法の策定に向けて、被害材や漆塗りのケヤキ材試験ブロックなどを用いて、二酸化炭素やフッ化スルフリルなどによる殺虫効果の試験を開始した。 (2)古墳など、高湿度環境の微生物活性についての基礎研究 これまで浮遊菌数、付着菌の調査を行っていたが、それらとあわせ、微生物に由来する生体活性から微生物の量や活性を検出するATP発光法について検討し、微生物濃度とその発光量との相関を検証した。 (3)歴史的建造物の被害検出、害虫調査、殺虫法に関する専門家向け研究会の開催 専門家向け研究会を東京文化財研究所地下会議室にて開催し、今後の問題点を明らかにした。 テーマ：「文化財の生物劣化の非破壊調査と虫害調査、および修理における利用」 平成21年11月20日(金) プログラム：(財)日光社寺文化財保存会 原田正彦 日光山輪王寺本堂での隠れた虫害 -対応と修理について (財)文化財虫害研究所 小峰幸夫 害虫の調査と同定結果、生態などについて 京都大学大学院農学研究科 藤井義久・藤原裕子 レジストグラフ、AEなどによる調査結果について 九州国立博物館・東京文化財研究所 鳥越俊行・木川りか X線CTによる被害材の調査と応用について						
【実績値】 論文数 2件(①、②) 学会研究会等での発表件数 2件(③、④) 研究会 1回						
【備考】 ①穿孔抵抗測定法を用いた文化財建造物の構造部材の虫害評価に関する一考察(第2報)日光輪王寺における虫害を事例として(藤井義久、藤原裕子、原田正彦、木川りか、小峰幸夫、川野邊涉)「保存科学」49、pp.183-190、10.03 ②文化財公開施設等におけるATP拭き取り検査の活用について(間渕創、木川りか、佐野千絵)「保存科学」49、pp.1-12、10.03 ③X線CTスキャナによる虫損部材の調査(木川りか、川野邊涉、鳥越俊行、今津節生、本田光子、原田正彦、小峰幸夫) 文化財保存修復学会第31回大会 倉敷 09.6.13-14 ④紙資料の褐色斑における菌体と代謝物の蛍光に関する考察(吉川也志保、吉田直人、木川りか) 文化財保存修復学会第31回大会 倉敷 09.6.13-14						



漆塗装したケヤキ材試験片を用いた殺虫試験

自己点検評価調書

研究所 No. 30

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
歴史的建造物や古墳など、生物被害を受けやすい文化財の生物劣化対策は急務である。 本研究は時機を得たテーマであり、研究を進めるなかで従来あまり知られていなかった害虫の存在や、歴史的建造物特有の問題点が明らかになり、具体的な検討とともに今後の方向性を探ることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	研究発表件数	研究会開催数			
判定	A	A	A			
備考						
研究成果は、論文、学会での研究発表を通して、すみやかに公表することができた。 また、研究会では、関連分野の専門家間で問題点を共有し、議論をすることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現場調査、基礎研究の実施、専門研究者間の交流、すみやかな研究成果公開を果たし、本課題について必要不可欠な調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本課題において重要な劣化診断について現地で調査を行い、被害の非破壊調査に関する基礎研究の成果も取り入れて検討することができた。また、次年度以降の対策の方針について、議論および検討を進めることができた。

業務実績書

研究所 No. 31

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究((3)-②)		
【事業概要】 文化財を取り巻く保存環境の現状を把握し改善することを目的として、様々な文化財を取り巻く環境の調査手法、モデル実験やシミュレーション技術を用いた環境の解析手法の確立のための研究を行う。また、地方公共団体等が設置する文化財の収蔵・公開施設に対して、その依頼に応じて環境調査を行い、専門的・技術的な援助・助言を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、犬塚将英、早川泰弘、木川りか、吉田直人(以上、保存修復科学センター)、呂 俊民(以上、客員研究員)、小椋大輔、三村 衛(以上、京都大学、客員研究員)、白石靖幸(北九州市立大学、客員研究員)			
【主な成果】 文化財施設内の温湿度解析の対象として、いくつかの博物館を選択し、熱・換気回路網計算プログラムを用いて温湿度解析を行った。空気汚染物質への対策研究としては、建築部材から発生する汚染ガスの簡易測定法に関して、実験を行い、研究成果をまとめた。また、12月8日に「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」というテーマで研究会を開催した。さらに「文化財施設内の温湿度解析および建築部材内の熱・水分移動解析に関する研究会」というテーマで研究会を開催した。			
【年度実績概要】 本年度は、文化財施設内の温湿度解析に、いくつかの博物館を選択し、熱・換気回路網計算プログラムを用いて温湿度解析を行い、実測した温湿度データとの比較を行った。今回作成した計算モデルから得られた計算結果と実測結果は概ね対応した。また、1月26日に、「文化財施設内の温湿度解析および建築部材内の熱・水分移動解析に関する研究会」というテーマで研究会を開催した。さらに、1月28,29日に建築部材内の熱・水分移動解析手法に関するワークショップを開催した。 博物館資料の保存のための空気汚染物質への対策研究としては、これまでの成果を学会等で報告すると共に、建築部材から発生する汚染ガスの簡易測定法に関して、実験を行い、研究成果をまとめた。 12月8日に開催した「文化財の保存環境を考慮した博物館の省エネ化」というテーマの研究会では、ドイツのラトゲン保存研究所のステファン・シモン氏に「欧洲での博物館の省エネ化と展示、収蔵施設内の保存環境」、京都大学の鉢井修一教授に「温熱環境からみた博物館の省エネ化」、国土交通省の足永晴信氏からは「低炭素社会での持続可能な都市空間実現に向けた取り組み」の講演を頂きさらに東京国立博物館の神庭信幸氏から「低炭素社会と共に存する文化遺産の保存」という題で、東京国立博物館での取り組みについて講演を頂くと共に討論を行った。 また、1月26日の文化財施設内の温湿度解析および建築部材内の熱・水分移動に関する研究会ではドレスデン工科大学のグルネワルド教授、ニコライ研究員、プラーゲ研究員らに、温湿度のシミュレーション解析手法や建築部材の物性測定などに関する講演を頂くと共に討論を行った。			
【実績値】 論文等数 3件(①、②、③) 研究会開催 2件 発表件数 3件(④、⑤、⑥)			
【備考】 ①呂 俊民、佐野千絵:「文化財保存のための保管空間に影響するガス放散体の簡易試験法」『保存科学』49, pp. 139-150, 10.03 ②佐野千絵:美術館・博物館に求められる設備機能、建築設備、2, pp. 25-29, 10.02 ③R. Plagge, J. Grunewald, T. Ishizaki and M. Takami, Lehm Baukonstruktionen in Asien - Experimentelle und numerische Studien zur Umverteilung von Feuchte Europaischer Sanierungskalender, pp. 61-70. 09.04. ④呂 俊民、佐野千絵:美術館における内装材からの拡散ガス簡易試験法、文化財保存修復学会第31回大会、09.6.13-14 ⑤犬塚将英、石崎武志他、汎用伝熱換気計算法による美術館展示室温湿度環境のモデル検討、文化財保存修復学会第31回大会、09.6.13-14 ⑥隅田登紀子、犬塚将英、杉野学園衣装博物館における西洋衣装の保存と活用、文化財保存修復学会第31回大会、09.6.13-14			



研究会でのシモン氏の講演

自己点検評価調書

研究所 No. 31

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	学術雑誌等への掲載論文等数	学会研究会等での発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術館・博物館での環境調査、海外の研究者との情報交換、研究会の実施、学会や紀要での研究成果公表など予定通り実施し、高い調査研究水準を保つことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第4年度として、環境のシミュレーションに関する現地調査および基礎的な研究もを行い、研究は予定通り進んでいる。

業務実績書

研究所 No 32

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究((3)-(3))		
【事業概要】 屋外に位置する美術工芸品、文化財建造物等は、周辺環境の変化が大きな劣化要因となる。本研究では、周辺環境が文化財に及ぼす影響を評価し、予測手法の確立や新たな保存修復技法や材料の開発を目的とする。また、石造文化財の保存修復に関して韓国・国立文化財研究所との共同研究を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 早川典子、森井順之(以上、保存修復科学センター)、朽津信明(文化遺産国際協力センター)			
【主な成果】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、周辺環境の影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、(1)臼杵磨崖仏における劣化要因調査、凍結防止策やクリーニング手法の検討、(2)木造建造物の腐朽菌や藍藻類の生息分布と周辺環境の調査、(3)大韓民国・国立文化財研究所との共同調査、共同研究発表会等を実施した。			
【年度実績概要】 石造文化財や木造建造物など屋外に位置する文化財について、周辺環境の観測を行った。また、その結果に基づいて劣化要因を解明し、その影響を軽減する方法および修復材料・技法の開発・評価を試みた。 今年度の主な成果は次の通りである。 (1)臼杵磨崖仏では今後の修復事業のために、劣化機構の把握を目的とした気象や岩体水分などの長期連続観測を実施している。平成21年度は、臼杵磨崖仏古園石仏群、ホキ石仏第二群第一龕を対象に、殺菌灯照射による着生生物のクリーニング施工および評価を実施した。また、ホキ石仏第二群の凍結破碎防止策として寒冷時の覆屋閉鎖実験を継続した。 (2)木造建造物の腐朽に関して富貴寺大堂(豊後高田市)を対象に周辺環境調査を継続し、腐朽菌や藍藻類の生息分布と周辺環境の関係について把握を行った。 (3)今年度の大韓民国・国立文化財研究所との共同研究は、2010(平成22)年3月19日、東京文化財研究所地階会議室にて研究発表会を開催した。また、2009年夏・秋には臼杵磨崖仏(日本)にて、2009年夏には雲住寺(韓国)にて両国の研究者が集合し、寒冷時の石材凍結およびその周辺環境に関する調査を共同で実施した。			
【実績値】 報告書: 1件(①) 論文等: 4件(②~⑤) 発表等: 6件(⑥~⑪)			
【備考】 ①『2009 日韓共同研究報告会—石造文化財の保存と修復—予稿集』 東京文化財研究所／大韓民国文化財庁国立文化財研究所 73p 10.3 ②森井順之、川野邊渉、柏谷博之 殺菌灯を用いた磨崖仏着生生物除去手法の実用化 『2009 日韓共同研究報告会予稿集』 pp. 63-73 東京文化財研究所／国立文化財研究所(大韓民国) 10.3 ③山路康弘、稗田貞臣、森井順之 赤外線サーモグラフィーによる石造文化財の劣化診断 『2009 日韓共同研究報告会予稿集』 pp. 31-38 東京文化財研究所／国立文化財研究所(大韓民国) 10.3 ④森井順之、川野邊渉、柏谷博之 重要文化財及び史跡 熊野磨崖仏における磨崖仏表面のクリーニング 『保存科学』 49 pp. 159-164 10.3 ⑤MORII, Masayuki Conservation Environment and Conservation Studies for Stone Heritages in Japan "Papers presented at the International Symposium of Conservation Science for Cultural Heritage 2008" pp. 17-22 09.12 ⑥森井順之 臼杵磨崖仏における覆屋内風環境と表面劣化に関する考察および対策 日本国文化財科学会第26回大会 名古屋大学 09.7.11-12 ⑦森井順之、川野邊渉、早川典子、朽津信明 臼杵磨崖仏におけるデジタルカメラ間欠撮影による表面劣化監視システムおよび応急的な修復技術の開発 日本国文化財科学会第26回大会 名古屋大学 09.7.11-12 ⑧森井順之、山路康弘、稗田貞臣、DO Min-hwan, KIM Sa-dug, LEE Chan-hee 熔結凝灰岩製文化財の非破壊診断手法に関する評価—熱画像解析の有効性— 2009 東アジア文化遺産保存技術国際研究集会および東アジア文化遺産保存学会第一次年会 故宮博物院(中華人民共和国) 09.10.16-19 ⑨MORII, Masayuki Case Report: Some Preservation Problems of the Buddhist Images Carved on Natural Cliff Seminar on the conservation of stone monuments 東京文化財研究所 09.12.10 ⑩森井順之 国際共同研究「文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究」に関する日韓共同研究 一共同研究の成果と将来— アジア文化遺産国際会議「東アジア地域の文化遺産—文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか—」 東京文化財研究所 10.3.4-6 ⑪森井順之 「日本における凝灰岩製磨崖仏の劣化とその対策」 The 2010 International Cooperation Symposium of Korea/Japan Conservation Science 国立現代美術館(大韓民国) 10.3.27			

自己点検評価調書

研究所 No. 32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究について、石造文化財を中心に劣化要因を解明し対策の提案が出来た。また、大韓民国・国立文化財研究所との共同研究では、情報交換のみならず共同成果を意識した研究交流を継続することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。特に、石造文化財の保存修復では、凍結破碎や植物繁茂など主要な劣化要因に関して対策の立案が出来た。今後も、必要な調査研究などを進めていきたい。

業務実績書

研究所 No. 33

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する調査研究((3)-(3))					
【事業概要】 阪神淡路大震災などの大地震で被害を受けた文化財は数多く、また、平成10(1998)年の台風7号による倒木被害を受けた室生寺五重塔など、自然災害による文化財被害の甚大さは記憶に新しい。本調査研究では、文化財の地震防災対策として、東大寺に安置される仏像群を対象に基礎的調査を行うとともに、文化財防災情報システムから地震や台風など過去の災害を対象に調査を行う。						
【担当部課】 保存修復科学センター 【プロジェクト責任者】 保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉 【スタッフ】 中山俊介、森井順之、加藤雅人(以上、保存修復科学センター)、二神葉子(文化遺産国際協力センター)						
【主な成果】 平成21年度は、(1)東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像(戒壇堂所在)の耐震対策を講ずるため、対象となる仏像の三次元計測を行うとともに、重心など三次元計測から得られた情報を用い地震による転倒可能性について考察を行った。(2)地理情報システム(GIS)に基づいた文化財防災情報システムの開発では、行政機関における活用実験を継続した。						
【年度実績概要】 平成21年度の成果は次の通りである。 (1)東大寺法華堂安置仏像群および塑像四天王立像(戒壇堂所在)の耐震対策を講ずるため、重量や重心などを推定するために三次元形状を計測した。計測には、凸版印刷株式会社により開発中の「ステレオカメラの移動撮影に基づいた簡易形状計測システム」を使用し、法華堂のように狭い領域内に仏像が多数安置された状態でも、移動を行わずに安全な計測が可能となった。また、法華堂建物および須弥壇の常時微動計測を行い、現在須弥壇が不安定な構造となっており改良が必要であることを把握した。 (2)地理情報システム(GIS)に基づいた文化財防災情報システムについて、問題点の把握をおこなった。詳細には、文化庁において運用上の問題点を抽出するとともに、鎌倉市役所世界遺産登録推進担当および教育委員会文化財課と協力し、本システムの地方公共団体による活用実験を開始した。詳細には、①文化財防災情報システム(地方版)の導入、②本システムを活用した広域地震観測ネットワークの構築に向けた基礎調査を実施した。						
【実績値】 論文等: 1件(①) 発表等: 4件(②~⑤)						
【備考】 ①FUTAGAMI, Yoko, MORII, Masayuki and KUMAMOTO, Takashi Construction and Integration of GIS Databases for Risk Assessment of Nationally Designated Cultural Properties Due to Earthquakes and Typhoons in Japan "Papers presented at the 22nd CIPA Symposium" http://cipa.icomos.org/fileadmin/papers/Kyoto2009/61.pdf 09.10 ②森井順之、二神葉子、隈本 崇 地理情報システムに基づく文化財防災情報システムの構築—史跡・重伝建地区への適用— 文化財保存修復学会第31回大会 in 倉敷 倉敷市芸文館 09.6.13-14 ③森井順之、二神葉子 GIS を用いた文化財防災情報システムによる博物館防災 J. ポール・ゲッティ美術館・国立西洋美術館共催国際シンポジウム 美術・博物館コレクションの地震対策 国立西洋美術館 09.7.21-22 ④森井順之 文化財防災における活断層基本図の利用について ミニシンポジウム「活断層基本図への期待とその利活用に向けて」 東京文化財研究所 09.9.28 ⑤FUTAGAMI, Yoko, MORII, Masayuki and KUMAMOTO, Takashi Construction and Integration of GIS Databases for Risk Assessment of Nationally Designated Cultural Properties Due to Earthquakes and Typhoons in Japan CIPA 2009 XXII International Symposium Kyoto Terrsa 09.10.11-15						

自己点検評価調書

研究所 No. 33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

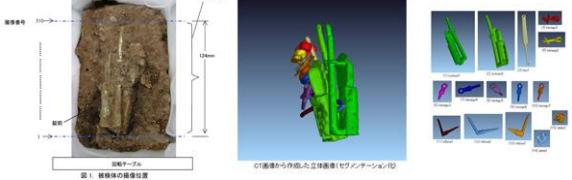
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の防災計画に関して、文化財防災情報システムの行政への導入や問題点抽出など、実用化に向けた取り組みを行った。また、仏像群の耐震対策に関する研究を進め、仏像群の三次元計測や建造物の常時微動調査を行った。今後は耐震診断を行ったうえで対策を講ずる予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5年計画の中で、調査研究は順調に進んでいます。今年度は予定通り、文化財防災情報システムの問題点抽出のために、協力機関へのシステム提供を行った。今後は、運用に向けて問題を抽出し改良を進める予定である。今後もさらに仏像群の耐震対策に関する研究について評価を行い、対策立案を進めていきたい。

業務実績書

研究所 No. 34

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究((3) - (4))		
【事業概要】 標記プロジェクトに関して、1)考古遺物の完全非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、2)高エネルギーX線CT法およびX線CR法の応用研究、3)纖維製遺物や漆製遺物などの分析法の実用化とデータベース作成、4)木製遺物に対する超臨界溶媒乾燥法の基礎的研究と実用化、5)埋蔵文化財の露出展示に関する課題を広く検討するための保存科学研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [埋蔵文化財センター]、肥塚隆保、田村朋美 [以上、企画調整部]、佐藤昌憲 [奈文研客員研究員]、北野信彦 [東京文化財研究所]、本田光子、今津節生、鳥越俊行、志賀智史、村田忠繁 [以上、九州国立博物館]			
【主な成果】 1)ガラス製品のレーザーラマン分光分析に関する文献を収集し、標準試料のスペクトルを蓄積した。 2)九州国立博物館と共同で、平安時代の錠前をXCT撮影し、三次元モデルを作成した。 3)漆製遺物および纖維製遺物の分析をおこない、データを蓄積した。 4)トレハロース含浸処理した試料からトレハロースを析出させる、貧溶媒法の応用実験に取り組んだ。 5)「遺構・遺物の保存と展示・活用の諸問題」の研究集会を九州国立博物館と共催した。			
【年度実績概要】 1)ガラス製品の製作技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究を継続し、既往の研究成果に関する文献資料を収集するとともに、ガラス標準試料のラマンスペクトルを取得・収集した。 2)土ごと取り上げられた平安時代の錠前を九州国立博物館で迅速にXCT撮影し、土の中での状況を把握した。その後、奈良文化財研究所で高エネルギーX線CT撮影したデータから、三次元モデルを作成した。これらの情報をもとに、九州国立博物館、奈良文化財研究所ならびに植木町教育委員会で協議をおこない、クリーニング方針を策定するための有用な情報を提示した。 3)中世城館より出土した漆滌し布などについて、漆や纖維製遺物の分析をおこない、考古資料の分析データを蓄積した。また、縄文時代の土器に付着した黒色物質に対して、東京文化財研究所と共同で熱分解ガスクロマトグラフ質量分析をおこない、アスファルトの存在を確定した。このほか、東京国立博物館との機構内協力事業により、塑像の保存修理のための材質分析を実施し、保存修理をおこなった。 4)木材にトレハロースを含浸処理後、貧溶媒としてエチルアルコールに投入し、トレハロースを材内に析出させる予備実験をおこなった。 5)九州国立博物館との共催で「遺構・遺物の保存と展示・活用の諸問題」の研究集会を開催し、装飾古墳をはじめとする遺跡の保存問題、遺物の保存処理の現状と課題などについて技術報告と総合討議をおこない、問題点を共有するとともに、今後の課題について議論した。			
 植木町向原遺跡出土錠前の XCT による調査 左から埋没状態、XCT による 3D 全体像、部品分割像			
【実績値】 発表件数：14 件 論文等数：11 件			
【備考】 論文発表・学会発表等については、別紙「論文等発表実績一覧」「学会、研究会等発表実績一覧」参照			

自己点検評価調書

研究所 No. 34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

レーザーラマン分光分析の応用研究の一環としてガラス製遺物への応用を継続し、標準試料のラマンスペクトルの蓄積をおこなった。木製品の保存処理法の開発研究では、継続して超臨界溶媒乾燥法の開発に取り組み、含浸処理法に貯溶媒法を適用する基礎研究を実施した。また、継続して遺物の調査分析をおこない、多くの遺物について重要な知見を得ることができた。本年度は東京文化財研究所、九州国立博物館および東京国立博物館と共同することで、より有効な成果を上げることができた。

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会参加者数			
判定	A	A	A			

備考

文化財保存修復学会で2件、日本文化財科学会で8件、東アジア文化遺産保存学会で4件の、合計14件の学会発表をおこない、文化財保存修復学会研究発表要旨集に2件、日本文化財科学会研究発表要旨集に8件、奈良文化財研究所紀要に1件、合計11件の論文を発表した。また、研究集会では110名の参加者を得て、事例報告や技術報告に加え、総合討議でも活発な議論をおこなうことができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができたことから、総合的評価をAと判定した。次年度は、このペースを維持しつつ、とくに木製遺物の超臨界溶媒乾燥法における貯溶媒法の応用、ならびにテラヘルツ波およびミリ波を用いた新たな分析調査技術の応用開発を進める予定である。また、保存修復科学分野において、東京文化財研究所や東京国立博物館、九州国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館などとの共同研究も推進していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できることから、順調と判定した。次年度は、このペースを維持しつつ、とくに木製遺物の超臨界溶媒乾燥法における貯溶媒法の応用、ならびにテラヘルツ波およびミリ波を用いた新たな分析調査技術の応用開発を進めたい。また、中期計画最終年度にあたり、各プロジェクトの総括をおこなう予定である。

業務実績書

研究所 No. 35

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究((3)-(5))		
【事業概要】 各種の文化財に使用される材料は、天然素材をもとに膠と顔料、糊と紙、木と漆などを組み合わせて複合的に使用されている。それらのいずれかの材料に劣化が進むと、剥離や剥落などの損傷の原因となる。日本ではこれまで和紙、糊、膠、漆などの伝統的な文化財修復材料が、劣化の程度に応じて修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これらの伝統的な修復材料について、製造法・適用法などを調査研究し、製法・技法・材料物性などに関する基礎的な情報を蓄積する。また伝統技術を記録して、有効性や改良点などを科学的に検証することも行う。一方、合成樹脂などの新しい材料も世界的に文化財修復に幅広く使用されているが、使用の歴史は伝統的なそれに比較して、実用上の知見が少ない。そのため、これまでの初期段階の使用事例を含めてその現状を再確認する調査も行う。この調査研究から得られた成果をもとに、現在の環境も踏まえてより文化財修復に適した技術や材料を開発することを目的とする			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 北野信彦、加藤雅人、早川典子(以上、保存修復科学センター)			
【年度実績概要】 <ol style="list-style-type: none"> 建造物に使用する漆塗装の耐候性向上に向けた基礎実験の調査結果を纏めるとともに、日光東照宮や厳島神社などの建造物における過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図った。また、あらたに PY-GC/MS 分析装置を用いた建造物の塗装材料をはじめとする各種修復材料の分析を開始した。 岩手県二戸市淨法寺地区周辺で継続していた漆塗料および漆工品生産に関する伝統技術の調査は、本年度を持ってこれを終了した。また、新たに伝統的な膠材料に関する調査研究を開始した。 研究所が所蔵する過去の修復事業の資料を分類整理、目録作成、ネガフィルムのデジタルデータ化は継続してこれを進めた。 「建造物の塗装材料である漆塗料-その現状と課題-」というテーマで、2010年1月21日に研究会を開催し、計111名の参加を得た。発表：本多貴之(明治大学／東文研)「漆塗料の劣化メカニズムを探る」、北野信彦(東文研)「建築文化財における塗装の歴史」、佐藤武則(日光社寺文化財保存会)「日光社寺建造物群における塗装の修理」、西 和彦(文化庁)「建築文化財における塗装修理の考え方」 			
【実績値】 研究会開催数：1回(参加者数：111名) 報告書：1冊(①) 論文数：2件(②～③) 研究発表件数：6件(④～⑨)			
【備考】 <ul style="list-style-type: none"> ①『伝統的修復材料及び合成樹脂に関する調査研究報告書 2009年度』東京文化財研究所、p. 108、2010.3 ②北野信彦・本多貴之・佐藤則武「初期の日光社寺建造物に使用された赤色塗装材料に関する調査」『保存科学 vol. 49』、pp. 25-44、2010.3 ③北野信彦「重要文化財 島田神社本殿の外観塗装材料に関する調査」『重要文化財 島田神社本殿修理工事報告書』、pp. 33-41、京都府教育委員会、2009.4 ④岡田祐輔、平井利博、藤松 仁、滝沢辰洋、川野邊 渉、早川典子、坪倉早智子、中條利一郎「顔料剥落止めとして利用されたポリビニルアルコールの白化状態の調査と白化原因の探索」『文化財保存修復学会第31回大会』倉敷市文化会館、2009.6.13-14 ⑤北野信彦・本多貴之・宮腰哲雄・窪寺 茂「建築文化財における塗装技術の調査とその評価・応用に関する研究」、『文化財保存修復学会第31回大会』倉敷市文化会館、2009.6.13-14 ⑥北野信彦「伝統的漆室と使用道具の調査・保存・活用 -国際研修教材としての1ケーススタディ-」『日本民具学会第28回大会』京都造形芸術大学、2009.12.6 ⑦加藤雅人「補紙・補絹の動向」『第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 日本絵画の修復—先端と伝統—』東京国立博物館平成館大講堂、2009.11.12-14 ⑧早川典子「絵画修復に使われる糊と布海苔」『第33回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 日本絵画の修復—先端と伝統—』東京国立博物館平成館大講堂、2009.11.12-14 ⑨加藤雅人「紙文化財の研究と保存修復」『アジア文化遺産国際会議 東アジア地域の文化遺産—文化遺産保護国際協力活動を通じて我々は何を発見し共有しうるか—』2010.3.4-6 			

自己点検評価調書

研究所 No. 35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文件件数	刊行書発行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	建造物などに使用する屋外漆塗装の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験、紙の分析手法、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。本研究所が携わった修復事業のうち、研究所が所蔵する資料を分類整理し、目録作成を継続してすすめた、情報公開のための整備が促進できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行してきた手法の有効性が明らかになってきており、それに伴い重要な知見も蓄積されつつあることから、計画の実施状況は順調である。次年度はこの成果をまとめるとともに調査を実行し、基礎的知見の収集と資料目録化をさらに推進する予定である。

業務実績書

研究所 No. 36

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	国際研修「漆の保存と修復」(3)-(5)
【事業概要】	
<p>海外の美術館・博物館の保管する漆工品には、専門的知識を持つ担当者の不在などから、損傷を持ったまま保存・活用されている作品がある。そのため海外の日本美術品保管担当者や学芸員から漆工品の保存と修復についての問い合わせが増加している。それらの疑問や問い合わせは、海外において日本の修復材料・技法に関する学習や作品の取り扱いに関する経験が少ないためといえる。これらの問題に対処するため、東京文化財研究所は I C C R O M と共同で、約 10ヶ国、10人の参加者を募り、漆の国際研修『漆の保存と修復 2009』を開催し、漆の保存と修復についての研修を行う。</p> <p>また漆塗料を使用した伝統的な漆工品の保存修復作業は特殊であり、国内外での修復技術者自体が少ない分野である。そのため 2009 年度には新たな試みとして I C C R O M と共同開催して行う国際研修とは別に東京文化財研究所単独で 1 カ月の実践研修『漆工品の保存と修復』も実施して、海外における修復技術者養成に貢献する。</p>	
<p>【担当部課】 保存修復科学センター 【プロジェクト責任者】 保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉 【スタッフ】 北野信彦、加藤雅人、早川典子(以上、保存修復科学センター)</p>	
【年度実績概要】	
<p>I C C R O M と共同の開催である国際研修(2009年9月2日～9月15日)『漆の保存と修復 2009』は、9カ国 10 名(オーストリア、ハンガリー、ポーランド、ロシア、ドイツ、英国、ポルトガル、カナダ、米国)の研修生で行い、日本における漆工の歴史、漆の科学と調査方法、伝統的な漆工技術、漆工品や漆塗装の修復理念の講義と修復方法の基礎実習を行った。またスタディーツアーを 9 月 6 日～9 月 9 日の 3 泊 4 日で企画し、日本産漆の 80% ちかくを生産している二戸市浄法寺町周辺を訪れ、日本の漆文化財の歴史と伝統、現状を観察した。アンケート：回収率 100%、満足度 100%。</p> <p>一方、東京文化財研究所独自の国際研修『漆工品の保存と修復』(2009年9月16日～10月15日)は、2カ国 2 名(ハンガリー、ドイツ)の研修生で行った。研修内容は東京都港区實相寺所蔵の会津松平家縁の常香盤を題材として、修復技術者の山下好彦氏から漆塗料を使用した本格的な保存修復作業の実践実習を行った。またスタディーツアーを 9 月 21 日～9 月 23 日の 2 泊 3 日で企画し、姫路、奈良、京都の漆文化財の現地見学を行った。さらに修復対象の教材である常香盤を所蔵する東京都港区内の實相寺の視察を行った。</p> <p>また、上記の漆の国際研修に使用するテキストブック『漆 -中級編-』を作成した。</p>	
【実績値】	
<p>報告書： 2 冊(①～②) テキスト：1 冊(③)</p>	
【備考】	
<p>①『漆の保存と修復 2009 : Urushi 2009 International Course on Conservation of Japanese Lacquer』 National Institute for Cultural Properties, Tokyo, 150p 2010.3</p> <p>②『漆工品の保存と修復 2009 : International Training Program: The Preservation and Restoration of Urushiware 2009』、National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, 92p 2010.3</p> <p>③『Textbook Japanese Lacquer -Intermediate-』 National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, 143p 2009.8</p>	

自己点検評価調書

研究所 No36

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	研修会開催数	報告書刊行数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	漆文化財の修復技術者、保存担当(責任)学芸員などを海外から 10 名招いて国際研修『漆の保存と修復』を行ったが、アンケート結果から満足度が高いとの評価を得た。また、漆工品の保存と修復の実践実習を 2 名の研修生を対象に行い、今後海外におけるこの分野の修復技術者の育成を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順 調	継続的に、海外への技術移転・交流、海外への日本文化の発信を行っており、順調であると判断した。

業務実績書

研究所 No37

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	在外日本古美術品保存修復協力事業((3)-(5))
【事業概要】	
海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関する研究を行う事業である。この事業により修復した作品の公開によって、わが国の修復技術に対する理解が深まり交流が促進されている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。	
【担当部課】 保存修復科学センター 【プロジェクト責任者】 保存修復科学センター副センター長 川野邊 渉	
【スタッフ】 中山俊介、北野信明、加藤雅人(以上、保存修復科学センター)、高橋直久、梶山利夫、井手真二(以上、管理部)、中野照男(副所長)、津田徹英、塩谷 純、綿田 稔、江村知子、城野誠治、勝木言一郎、皿井 舞(以上、企画情報部)、清水真一、岡田 健(以上、文化遺産国際協力センター)	
【主な成果】 平成 21 年度は、7 館 11 点の作品(絵画 5 点、工芸品 5 点)を修復した。うち 2 点(絵画 1 点、工芸品 1 点が 20 年度からの継続、4 点(絵画 2 点、工芸品 2 点)を海外で修復した。工芸品の事前調査はロイヤルコレクション／ドロットホルム城、グリップスホルム城、アムステルダム国立博物館、ライデン民族学博物館などヨーロッパで 4 館 17 点の調査を行った。また、平成 20 年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。	
【年度実績概要】 平成 21 年度は、7 館 11 点の作品を修復した(うち 2 点が 20 年度からの継続、4 点が海外での修復(◆印))。 <絵画> 1) 「歌舞放下芸観覧図屏風」 6 曲 1 隻 アシュモリアン美術館 2) 「源平合戦図屏風」 6 曲 1 双(裏に、竹に雀図) ベルン歴史博物館(2 年計画の 1 年目) 3) 「四季花鳥図屏風」 6 曲 1 双 ブルックリン美術館(2 年計画の 1 年目) 4) ◆「達磨図」 1 幅 ケルン東洋美術館(2 年計画の 2 年目) 5) ◆「唐子図」 1 幅 ベルリン国立アジア美術館 <工芸品> 1) 「菱繫文螺鈿簾笥」 1 基 国立ナーフルステク博物館(2 年計画の 1 年目) 2) 「花樹鳥蒔絵螺鈿簾笥」 1 基 アシュモリアン美術館(2 年計画の 1 年目) 3) 「和歌浦蒔絵将棋盤」 1 基 ケルン東洋美術館 4) 「樓閣山水蒔絵香棚」 1 対 市立ヴェルケメディジチ博物館(2 年計画の 2 年目) 5) ◆「蕪蒔絵大鼓胴」 1 本 ベルリン国立アジア美術館 6) ◆「秋草虫籠蒔絵茶葉入」 1 口 国立ナーフルステク博物館 平成 21 年度、工芸品の事前調査はロイヤルコレクション／ドロットニングホルム城、グリップスホルム城、アムステルダム国立博物館、ライデン民族学博物館などヨーロッパで 4 館 17 点の調査を行った。また、平成 20 年度に修復した絵画、工芸品の修復状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。	
【実績値】 事前調査 1 件 修復件数 11 件 ケルンにおけるワークショップ 1 件 ベルリンにおけるワークショップ 1 件 報告書刊行数 1 件(①)	
【備考】 ①『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書 平成 21 年度 (絵画／工芸品)』 225p 東京文化財研究所 10.3	

自己点検評価調書

研究所 No37

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査件数	修復件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は7館、11点の作品の修復を実施した。海外においても、修復家を派遣し、修復作業を実施したとともに海外の修復家、学芸員などを対象にしたワークショップを開催した。このように海外における日本絵画や工芸品を修復したり、ワークショップを開催することによりその技術、取扱い方法を伝えるだけでなく再び展示することができるようになりその価値を高めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度も引き続き、事前調査を実施しており、来年度に向けて、修復する候補作品を抽出している。今後はより広範囲な美術館、博物館から、収蔵庫に眠っている価値ある日本絵画と工芸品を修復し、再度展示可能な姿にするべく努力を重ねる。また、海外において修復技術を伝えることにもなお一層の努力を傾注する。

業務実績書

研究所 No38

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究((3)-(6))		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 川野邊 渉、森井順之、中村明子(以上、保存修復科学センター)、朽津信明(文化遺産国際協力センター)、小堀信幸、横山晋太郎、長島宏行(以上、客員研究員)			
【主な成果】 今年度は近代化遺産の中でも屋外保存されている文化財の保存と修復に関する研究を行った。中でもコンクリート構造物の保存に関する関係者を招き、研究会を開催しそれぞれの立場からコンクリート構造物の保存と活用に関する発表をし問題点の整理や解決法についての討論を行った。また、設計図面などに多く使われている青図の再発色に関する研究も実施した。屋外展示されている鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 今年度は近代化遺産の中でも屋外保存されている文化財の保存と修復に関する手法や問題点をテーマとして研究を行った。保存修復に実際に携わっている担当者の方々四人と国外の方二人を招き、屋外展示されているコンクリート構造物の利活用を考えた保存と修復方法に関する手法や問題点に関する検討会を平成22年3月1日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。さらに、オーストラリアにおいて、国立博物館や戦争記念館、パワーハウス博物館、国立海事博物館等における展示物の保存方法や材料の分析手法について現地にて情報交換を実施した。また国内においては愛知県豊田市の産業遺産群、新潟県佐渡市の佐渡金山関連施設、長崎県長崎市の端島(軍艦島)などの現地調査を実施した。さらに、屋外展示されている鉄道車両や航空機等の金属を主体とした文化財に関する現地調査を実施した。加えてそのような屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために各種サンプルを作成し小樽市総合博物館、船の科学館、かかみがはら航空宇宙科学博物館、大樹町多目的航空公園、海上自衛隊鹿屋航空基地での曝露実験も継続して実施している。これらの地点では、試料の受けた紫外線量をはじめ、温度、湿度などの測定も行い、これらの塗装仕様と劣化速度の相関についても検討している。屋外展示航空機の環境測定も継続している。			
【実績値】 論文数 2件(①～②) 発表件数 4件(③～⑥) 報告書刊行数 2件(⑦～⑧)			
【備考】 ①中山俊介 「Conservation and Utilization of Aircraft Heritage」 Preserception and Utilization of Aircraft Heritage, pp. 5-14, 10.3 ②中山俊介 「鉄構造物の保存と修復」 『鉄構造物の保存と修復』, pp. 5-16, 10.3 ③中山俊介ほか「二酸化炭素処理・酸化エチレン処理がジアゾタイプ複写物に及ぼす影響」文化財保存修復学会第31回大会 6.13-14 ④中山俊介 「初代南極観測船「宗谷」の保存と修復」 日本機械学会合同見学会、船の科学館、 10.2.12 ⑤中山俊介 「近代文化遺産と産業遺産 -東京文化財研究所の取組み-」 東京産業考古学会、物流博物館、 10.2.13 ⑥中山俊介 「コンクリート構造物の保存と修復」 近代の文化遺産の保存修復に関する研究会、東京文化財研究所、 10.3.1 ⑦『Preservation and Utilization of Aircraft Heritage』 東京文化財研究所 62p 10.3 ⑧『鉄構造物の保存と修復』 東京文化財研究所 60p 10.3			

自己点検評価調書

研究所 No38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存と活用について、各種の調査及び関係する専門家を招いた研究会を開催した。今後の修復材料の開発、修復技法の開発に関する重要な成果を得る事が出来た。また、現地調査や研究会を通じて近代文化遺産の重要性を多くの方々に認識していただいた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第四年次として、継続している現地調査から重要な調査結果を収集することが出来、また、研究会を通じて多くの研究者との連携も可能となり、今後の研究を進める上で、重要な成果を得た。次年度以降も今年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となつた。

業務実績書

研究所 No39

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)-①)					
【事業概要】						
高松塚古墳：壁画の修理及び修理環境の保全並びに壁画の劣化原因及び劣化防止対策措置などの調査・研究を実施 キトラ古墳：石室内の環境調査と壁画の取り外し作業を実施						
【担当部課】 保存修復科学センター 【プロジェクト責任者】 保存修復科学センター長 石崎武志						
【スタッフ】 佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、川野邊 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人(以上、保存修復科学センター)、間渕 創、坪倉早智子(以上、客員研究員)						
【主な成果】 高松塚古墳では、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天井石 2 の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層陥没以外のすべての項目について、透明シートへの描き込みを完了した キトラ古墳では、5~6月、10~11月、11~12月の3期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行った。石室内の点検及びカビ処置も定期的に行なった。また、石室内微生物調査および環境調査は継続して行った。						
【年度実績概要】 高松塚古墳 昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天井の漆喰層陥没、青龍の表層面損傷、漆喰層陥没以外のすべての項目について、透明シートへの描き込みを完了した。天井・白虎・西男子・玄武については脆弱化した漆喰層の1度目の強化を常温水出し布海苔水溶液を用いて行い、完了した。東女子については、昨年度中に1度目の強化を終えており、今年度は無地場の黒かび及びバイオフィルムによる汚れの除去及び漂白を次亜塩素酸ナトリウム溶液にて行った。 文化庁による高松塚古墳壁画劣化原因調査検討会に提出すべき基礎データとして、今年度は、主に最近の壁画の微生物汚染の原因となった微生物の詳細な調査、微生物の生理的性質などを含む生物学的特徴(Bio-profile)の調査を行なった。その結果、昭和50年代の壁画の剥落止めの作業で使用された樹脂(現在入手できるものとしてパラロイドB72)について、高湿度条件下では、高松塚古墳の主要なカビの分離株のいくつかが生育することがわかった。また、高松塚古墳から分離されたカビ、酵母、バクテリアのなかに、酢酸などの有機酸を産生するものが見出された。 キトラ古墳 5月~6月、10月~11月、11月~12月の3期にわたり、集中的に漆喰の取り外しを行なった。ヘラ、ダイヤモンド・ワイヤーソーを使用して天井の漆喰をすべて取り外し終え、北壁・東壁・西壁の取り外しにも着手した。集中取り外し期間中で作業のない土曜日・日曜日、及び取り外し期間外は石室内に紫外線灯を設置し、週に1回のカビ点検を行なった。 これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行なった。「青龍」については平成21年5月の公開のための額装を完成させ、平成22年度の公開に向けて「朱雀」の処置を行なった。また、剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法を検討するために模擬漆喰を作成して実験を行い、作業台の検討・製作を行なった。これらの作業についての記録、資料整理も随時行なった。 有機物を残留させない方法である殺菌灯による紫外線(UV)の間欠的照射、およびカビなどを除去する際に低濃度の次亜塩素酸ナトリウム溶液を使用する方法について、殺菌効果試験を実施して検討を行なった結果、人が入らない間の微生物対策については、紫外線殺菌灯を間欠的に照射する方式に切り替えられた。その結果、現在のところ、カビなどの大発生にはいたっておらず、おむね石室内は良好な状況にはあるが、紫外線や次亜塩素酸にも耐性の強い <i>Burgoa</i> sp.の菌などの繁殖が目立ってくるような場合は、物理的な除去も併用する必要があると考えられる。						
【実績値】 論文 10 件 (①~⑩)						
【備考】 ①高松塚古墳石室内・取合部および養生等で使用された樹脂等材料のかび抵抗性試験(木川りか・佐野千絵・高島浩介・喜友名朝彦・杉山純多・安部倫子・中右恵理子・坪倉早智子・早川典子・川野邊涉・石崎武志)「保存科学」49、pp. 61~72、10. 03②過去の高松塚古墳石室内の温湿度解析(2)(小椋大輔・鉢井修一・李 永輝・石崎武志)「保存科学」49、pp. 73~86、10. 03③過去の高松塚古墳石室内の温湿度変動解析(3)(小椋大輔・鉢井修一・李 永輝・石崎武志)「保存科学」49、pp. 87~96、10. 03④高松塚古墳丘部の動的解析(三村 衛・長屋淳一・石崎武志)「保存科学」49、pp. 97~110、10. 03⑤高松塚古墳石室内より分離された主要な微生物のギ酸・酢酸生成能(佐野千絵・西島美由紀・喜友名朝彦・木川りか・杉山純多)「保存科学」49、pp. 209~220、10. 03⑥高松塚古墳壁画修理施設における生物対策について(木川りか・高島浩介・久米田裕子・辻本与志一・川野邊涉・佐野千絵・宇田川滋正・建石 徹)「保存科学」49、pp. 221~230、10. 03⑦高松塚古墳・キトラ古墳石室の微生物分離株のアルコール系殺菌剤資化性試験(木川りか・佐野千絵・喜友名朝彦・立里臨・杉山純多)「保存科学」49、pp. 231~238、10. 03⑧高松塚古墳石室および周辺部由来カビの薬剤に対する馴化(高島浩介・久米田裕子・木川りか・佐野千絵)「保存科学」49、pp. 239~242、10. 03⑨高松塚古墳石室および周辺部由来カビの温度帯による生理的性状(高島浩介・高島美奈子・久米田裕子・木川りか・佐野千絵)「保存科学」49、pp. 243~252、10. 03⑩キトラ古墳の微生物調査結果と微生物対策について(2009)(木川りか・佐野千絵・喜友名朝彦・立里 臨・杉山純多・高島浩介・久米田裕子・森井順之・早川典子・川野邊涉)「保存科学」49、pp. 253~264、10. 03						

自己点検評価調書

研究所 No39

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性			
判定	A	A	A			
備考						

2. 定量的評価

観点	援助・助言 実施件数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	キトラ古墳、高松塚古墳とともに、本年度の計画を予定通り遂行し、良好な成果を上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い調査研究の水準で事業を進めることができた。

業務実績書

研究所 No. 40

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力 ((4)-①)		
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査および保存・活用に関して技術的な協力を行った。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹
【スタッフ】 玉田芳英、若杉智宏、番 光、廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、石田由紀子 [以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)]、井上直夫、岡田 愛、辻本与志一[以上、企画調整部]			
【主な成果】 文化庁が進める高松塚古墳仮整備事業や保存・活用に関する事業が円滑かつ適切に施工されるよう協力するとともに、来年度刊行予定の『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』に関する編集作業を鋭意進めた。 今年度のキトラ古墳壁画の剥ぎ取り作業を支援するとともに、今後のキトラ古墳壁画、および古墳の保存、活用、整備の方向性を議論・検討するための技術的な支援・協力を行った。			
【年度実績概要】 高松塚古墳の仮整備工事に際しては、適宜、研究員を現場に立会させ経過を観察・記録するとともに、遺構面が安全に保護されるよう施工業者を監督した。保存施設1階部分撤去後の発掘調査を実施するとともに、墳丘復元工事に対しては、墳丘や周溝の細部の状況に対して、現地にて学術的な助言や協議を行った。工事期間中の10月8日に、台風の影響を受け表面仕上げ用の土が8ヶ所にわたって崩落したが、その際にただちに研究員を派遣し、状況把握を行い、文化庁と連携しながら対応にあたった。また、春・秋の壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員(のべ5名)を派遣した。『国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策事業報告書』の刊行にむけて、これまでの一連の調査成果を整理・検討した。 キトラ古墳では、春・秋の壁画の集中剥ぎ取り作業に研究員(1名)を派遣して、これを支援した。また、キトラ古墳壁画の今後の保管、活用について、それにふさわしい場所や施設の内容・条件について検討を行った。さらに、古墳本体の整備方針を検討するため、これまでのキトラ古墳の発掘成果を総括するとともに、高松塚古墳、マルコ山古墳、中尾山古墳、天武・持統天皇陵、東明神古墳、牽牛子塚古墳などの墳丘の現況および整備状況を確認するため、現地踏査を実施した。それらの内容は文化庁開催の「古墳壁画保存活用検討会保技術ワーキンググループ」で報告した。 なお、8月11日の大雨、10月8日の台風によりキトラ古墳史跡地内の土砂が崩落した際には、ただちに文化庁に状況を報告するとともに、現地に研究員・作業員を派遣して応急的な処置にあたった。			
 <p>高松塚古墳仮整備立会風景</p>			
【実績値】 論文数：4件(①～④)			
【備考】 ①松村恵司・廣瀬 覚「高松塚古墳仮整備のための発掘調査」『月刊文化財』第547号 2009.4 ②廣瀬 覚「高松塚古墳の墳丘仮整備工事が竣工」『奈文研ニュース』No.35、2009.12 ③廣瀬 覚「高松塚古墳の発掘調査—飛鳥藤原154次」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6(予定) ④松村恵司・玉田芳英・廣瀬 覚「高松塚古墳とキトラ古墳」『遺跡学研究』第6号、2009.11			

自己点検評価調書

研究所 No. 40

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

- ・適時性：現地への緊急事態等に対して迅速かつ適切に対応することができた。
- ・独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・活用に助言を行うことができた。
- ・発展性：緊急性を有する文化財の保存・活用に対する今後の方向性を示すことができた。
- ・効率性：高松塚古墳の発掘調査の成果を、整備、公開に直結させることができた。
- ・継続性：高松塚古墳の実績を基に、今後、キトラ古墳の整備・活用を進めていく見通しが得られた。
- ・正確性：古墳や壁画に関する学術的成果を高い精度で得ることができた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	発表件数				
判定	A	A				

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳壁画の恒久保存対策に係る一連の発掘調査および整備工事を完了させることができ、壁画修理が完了するまでの高松塚古墳の適切な現地公開が可能となった。その実績に基づいて、今後のキトラ古墳の保存・活用・整備等の事業が円滑に進められることが期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	壁画古墳という重要かつ緊急性の高い文化財に対して、保存・活用に関するモデルケースを構築することができ、今後の方向性を示すことができた。

業務実績書

研究所 No. 41

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存活用に関する技術的協力 ((4) -②)		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を復元するべく、遺跡周辺の調査を行うものである。檜隈寺は、飛鳥の古代寺院として重要な遺跡であり、この遺跡の実態解明および保存活用に資するため、2008年度より発掘調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹
【スタッフ】 黒坂貴裕、加藤雅士、若杉智宏、次山淳、木村理恵、小田裕樹、石田由紀子、山本崇、青木敬、豊島直博、高橋知奈津、庄田慎矢、玉田芳英、高田貫太、番光、[以上、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)]、井上直夫、岡田愛[以上、企画調整部]			
【主な成果】 昨年度の試掘調査の成果をもとに檜隈寺の主要伽藍の存在する丘陵の東裾部および、講堂北西約25mの地点の発掘調査を実施した。丘陵東裾部からは掘立柱建物やそれらを区画する掘立柱塀を検出し、檜隈寺の主要伽藍に関連する建物群の具体的な状況を明らかにした。また講堂北西の調査区では、7世紀前半から中頃までのL字形カマドをもつ堅穴住居を検出し、渡来系という檜隈寺の特徴を補強する重要な資料を得ることができた。			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、昨年度の試掘調査の成果をもとに、檜隈寺北側の丘陵東裾部に5ヶ所(第1~5調査区)、講堂の北西約25mの地点に1ヶ所(第6調査区)の調査区を設け、発掘調査を実施した。調査期間は2009年4月22日~2010年3月3日。調査面積は計1222m ² である。			
第1~5調査区では、掘立柱建物7棟、掘立柱塀6条、素掘り溝1条、柱穴列2組、炭の入る焼成遺構2基、土坑1基を検出した。これらの掘立柱建物や掘立柱塀は、柱筋の方向や出土遺物の年代観から、檜隈寺の中心伽藍と同様の時期に造営された建物群であると判断できる。これらの遺構を確認したことで、丘陵裾部にも檜隈寺の関連施設が存在していたことが明らかとなり、丘陵全体を利用し寺院地を形成していたことが確認できた。			
中心伽藍から北西25m地点に設定した第6調査区では、石組のL字形カマドをもつ堅穴住居を検出した。L字形カマドは渡来系のカマドと考えられており、渡来系氏族の寺である檜隈寺の特徴をさらに際立たせる遺構である。全国的に見たL字形カマドの存在時期と今回の堅穴住居から出土した土器・瓦の年代観から、この堅穴住居は7世紀前半から中頃までのものと判断できた。石組のL字形カマドとしては、国内最古の例となった。			
今年度の調査では、檜隈寺の伽藍全体の具体的な相が明らかになったこと、渡来系という檜隈寺の特徴を補強する遺構を検出したこと、これまで手掛かりが少なかった7世紀前半から中頃までの遺構を検出したことなどの成果を上げ、報道発表や論文などで積極的に成果の公開をおこなった。			
【実績値】 論文等数 3件(論文1件①、その他2件③④) 発表件数 1件(報道発表1件②) 出土遺物 軒瓦22点、丸平瓦56箱、土器77箱、金属製品20箱、石製品3点、石材1点など 記録作成数 遺構実測図97枚、写真(4×5)132枚			
【備考】 ①若杉智宏・黒坂貴裕・加藤雅士・高田寛太・小田裕樹「檜隈寺周辺の調査」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6(予定) ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「キトラ古墳周辺地区(檜隈寺)の発掘調査 飛鳥・藤原第159次調査 第6区検出の堅穴建物遺構について—記者発表資料」2009.9 ③黒坂貴裕「檜隈寺周辺の調査(飛鳥・藤原159次)」『奈文研ニュースNo.35』2009.12 ④若杉智宏「檜隈寺周辺の調査(飛鳥・藤原159次)」『奈文研ニュースNo.36』2010.3			



第6調査区 堅穴住居(南から)

自己点検評価調書

研究所 No. 41

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						
適時性：檜隈寺周辺の遺構状況解明への寄与 独創性：L字形カマドをもつ堅穴住居や、主要伽藍に関連する建物群を確認した 効率性：奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会と協力し、計画的に調査を進めた 継続性：昨年度の試掘調査の成果をうけ、檜隈寺伽藍の全体像復元にかかる継続的な調査を行った						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺伽藍の全体像復元にかかるデータが得られ、また、渡来系氏族の氏寺という檜隈寺の特徴を補強する遺構を検出し、これまで手掛かりが少なかった7世紀前半から中頃の檜隈寺についての重要な資料を得ることができた。また、報道発表や論文などで調査成果の公開も適切に行い得たので、総合的にAと判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目的を順調に達成した。

業務実績書

研究所 No.

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業に関する技術的協力 ((4)-③)		
【事業概要】飛鳥・藤原地域は、わが国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・文化の中心地であった。本研究は、国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業とともになう本地域の埋蔵文化財の調査・研究に対して協力・支援を行うものである。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 深澤芳樹
【スタッフ】次山淳、山本崇、小田裕樹、青木敬、高橋知奈津、石田由紀子			
<p>【主な成果】 「大和平野県営飛鳥2号幹線（右岸）その3」について、山田道、大官大寺にかかる部分にたいして厳重立会のかたちで対応することとなった。</p>			
<p>【年度実績概要】 農水路改修工事の実施にたいし、遺構への影響が生じないよう研究員を派遣し、工事の進行に立ち会った。「7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上」の項目にも記載したが、飛鳥・藤原158-6次（山田道）の立会時に、斜行溝1条を検出し、これを記録し、かつ保護した。</p>			
<p>【実績値】 出土遺物 なし</p>			
<p>【備考】 「表3 2008・2009年度都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）発掘調査・立会調査一覧」『奈良文化財研究所紀要2010』2010.6（予定）</p>			

自己点検評価調書

研究所 No _____

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				

備考
適時性：工事の状況に応じて迅速に対応して文化財を保護・記録することができた。
継続性：飛鳥・藤原地域の遺跡情報を継続的に収集することができた。

2. 定量的評価

観点	援助・助言数					
判定	A					

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国土交通省が行う大和紀伊平野土地改良事業にともなう埋蔵文化財の影響について、迅速かつ適切に処理することができ、遺構の保護・記録を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査について効率良く対応し、飛鳥地域の基礎資料を蓄積することができた。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①-iii)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳
【スタッフ】 ○島谷弘幸(学芸研究部長)、谷豊信(列品管理課長)、田良島哲(列品管理課登録室長)、白井克也(列品管理平常展調整室長)、古谷毅(列品管理課列品情報整備室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、富坂賢(調査研究課書跡・歴史室長)、竹内奈美子(調査研究課工芸・考古室長)、今井敦(調査研究課東洋室長)、神庭信幸(保存修復課長)、救仁郷秀明(保存修復課保存修復室長)、猪熊兼樹(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、瀬谷愛(列品管理課平常展室研究員)、河内晋平(列品管理課アソシエイトフェロー)、安藤香織(列品管理課アソシエイトフェロー)、三輪紫都香(列品管理課アソシエイトフェロー)、小林達朗(調査研究課絵画・彫刻室主任研究員)、酒井元樹(調査研究課工芸・考古室研究員)、品川欣也(調査研究課工芸・考古室研究員)、川村佳男(調査研究課工芸・考古室研究員)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、土屋裕子(保存修復課保存修復室主任研究員)、日高慎(保存修復課保存修復室主任研究員)、三笠景子(保存修復課保存修復室研究員)、鈴木晴彦(保存修復課アソシエイトフェロー)、米倉乙世(保存修復課アソシエイトフェロー)、沖本明子(保存修復課アソシエイトフェロー)、池田宏(上席研究員)、岩佐光晴(上席研究員)、後藤健(上席研究員)、原田一敏(上席研究員)、金子啓明(特任研究員)、望月幹夫(特任研究員)、澤田むつ代(特任研究員) ○松本伸之(学芸企画部長)、井上洋一(企画課長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、木下史青(企画課デザイン室長)、立道恵子(企画課出版企画室長)、鬼頭智美(企画課国際交流室長)、加島勝(博物館教育課長)、浅見龍介(博物館教育課教育普及室長)、鷺塚麻季(博物館教育課教育講座室長)、高橋裕次(博物館情報課長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、小林牧(企画課広報室長)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、矢野賀一(企画課デザイン室主任研究員)、勝沼早苗(企画課アソシエイトフェロー)、遠藤楽子(企画課国際交流室研究員)、鈴木みどり(博物館教育課教育普及室主任研究員)、神辺知加(博物館教育課教育講座室研究員)、高梨真行(博物館教育課ボランティア室主任研究員)、藤田千織(博物館教育課ボランティア室研究員)、村田良二(博物館情報課情報管理室研究員)、佐藤祐介(博物館情報課アソシエイトフェロー)、恵美千鶴子(博物館情報課アソシエイトフェロー)、原田明夫(博物館情報課アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品および今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域について、美術史・考古学・博物館学の各見地から学会・研究会・学術雑誌上で各種の発表をした。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会で、各種の発表をした。 ・学術雑誌に各種の論考を発表し、著書を刊行した。			
【実績値】 学会・研究会等発表件数：19名36件 澤田むつ代(特任研究員)「出土纖維の種類と調査方法」ほか 論文等掲載数：30名52編 松本伸之(学芸企画部長)「HISTORY AND COLLECTIONS OF TOKYO NATIONAL MUSEUM」ほか			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

東京国立博物館『MUSEUM』をはじめとする各種学会誌・紀要等の学術誌や学会・研究会において、平素の調査研究で得た成果、あるいは平常陳列・特別展に係る業務・他館への協力の中で得た最新の学術情報を、多岐の分野にわたって発表した。

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等発表件数	論文数等				
判定	A	A				

備考

学会・研究会等発表件は海外を含み 19 名 36 件、論文等の掲載は 30 名 52 編。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	絵画・書跡・工芸・考古などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信した。特別展や通常業務などを通して蓄積されている研究成果を、よりすみやかに公開したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)特別調査法隆寺献納宝物(第31次)「聖徳太子絵伝」第5回((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では、明治9年法隆寺から献納された法隆寺献納宝物319件を所蔵している。昭和54年の伎楽面を最初として、平成21年度まで31次にわたりて献納宝物の調査を館内および館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。献納宝物は飛鳥、奈良時代の日本最古に属する仏教関連の文化財であるが、経年によって脆弱化しており、各分野の研究者に直接的な調査をすることは難しい。本事業はすべての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。また、毎次の調査研究については「法隆寺献納宝物特別調査概報」、さらに研究図録を発刊し、画像については研究資料としてウェブ上で一般に公開することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 原田一敏
【スタッフ】 島谷弘幸(学芸研究部長)、澤田むつ代(特任研究員)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、小林達朗(調査研究課主任研究員)、小山弓弦葉(企画課特別展室主任研究員)、神庭信幸(保存修復課長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、救仁郷秀明(保存修復課保存修復室長)、沖松健次郎(企画課特別展室主任研究員)			
【主な成果】 本年度は、国宝聖徳太子絵伝10面のうち9面と10面を調査対象とした。従来料綢については大柄な立湧文を織り出した綾綢の使用は認められていたが、新たに菱文様の綾綢が使用されている箇所が発見された。また、剥落や劣化などにより画の見えないところについて、現法隆寺絵伝に嵌められた吉村法眼周圭充貞の模写(天明7年=1787)を比較検討することによって、その内容が新たに確認できた。			
【年度実績概要】 平成20年度に実施した第30次特別調査の報告書として、『法隆寺献納宝物特別調査概報30』「聖徳太子絵伝3」を刊行した。また、高精細デジタルカメラによって1面132カット(2面合わせて264カット)撮影し、それを合成することによって原寸大に引き伸ばすことが可能となった。本年度の報告書は平成23年に発刊する予定である。			
【実績値】 調査回数 3回			
 			
国宝 聖徳太子絵伝 10面 国宝 聖徳太子絵伝 9面			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当該調査は、絵画史、工芸史だけでなく、歴史の専門家を含めた調査であり、各場面の検証、用絹、絵具など総合的な作品評価が可能である。改良点としては、今後は絵具の分析や赤外線写真撮影なども取り入れて科学的な側面からのアプローチも図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	22年度は当該調査研究の成果を公表する概報の発刊を行う予定である。また10面すべての高精細デジタルカメラ撮影の画像公開に向けて整理をおこなう。

【書式B】

(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」第7回((5)-①-iii)					
【事業概要】						
本年度は断続的に行われてきた当館書跡収蔵品の中の奈良～安土桃山時代にかけての古写経・仏典について、情報の整理・統合と整備の完成を目指し、全2期間の古写経調査を実施。特に断簡写経の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに法量計測、写真撮影など基礎データを収集する。						
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸			
【スタッフ】						
田良島哲(列品管理課登録室長), 富田淳(調査研究課長), 富坂賢(調査研究課書跡・歴史室長), 高梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員), 高橋裕次(博物館情報課長), 赤尾栄慶(京都国立博物館学芸部企画室長), 羽田聰(京都国立博物館学芸部企画室研究員), 野尻忠(奈良国立博物館学芸部情報サービス室研究員), 斎木涼子(奈良国立博物館列品室研究員), 藤田励夫(九州国立博物館学芸部博物館科学課保存修復室長), 丸山猶計(九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員), 酒井芳司(福岡県立アジア文化交流センター展示課研究員), 横内裕人(文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官)						
【主な成果】						
当館所蔵の手鑑装・巻子装・折本装・掛幅装・屏風装の古写経について、法量計測、写真撮影を実施するとともに、書写された文字の筆致、巻子装の軸端や使用された料紙の材質分析、奥書に記載された事項の検討等から書写年代推定した。また掛幅装や手鑑装の古写経は断簡であるため、書写経文の検討によってその原典を可能な限り特定して、当館所蔵古写経の基礎データ情報を整理した。						
【年度実績概要】						
対象: 当館書跡収蔵品について手鑑装11件、掛軸装22件、巻子装26件、折本装15件、冊子装5件、屏風装1件の調査を実施						
結果: 261点の写経断簡(手鑑装および掛幅装・屏風装)、60点の巻子装写経、19点の折本装写経、6点の冊子装写経について基礎データを採取						
175カットの写経画像を撮影						
270点の写経断簡の原典を確認						
						
手鑑装の写経断簡の調査		手鑑装の写経撮影				
		写経断簡の原典調査作業				
【実績値】						
第1回 平成21年7月22日(水)～24日(金)						
調査日数	3日間	調査員・調査補助員	のべ44人			
第2回 平成21年12月7日(月)～9日(水)						
調査日数	3日間	調査員・調査補助員	のべ27人			
採取データ						
全2回の調査採取データ数						
合計346点の写経および写経断簡の基礎データ、175カット分の画像撮影						
約270点の写経断簡の原典特定(調査対象の約75%)						
特集陳列 日本・中国・朝鮮の料紙(平成21年9月28日～10月24日)						
論文等						
・恵美千鶴子「扇面法華経冊子模本—岡倉天心・小堀鞆音と帝国博物館の模写事業—」『MUSEUM』第621号、平成21年8月)						
・赤尾栄慶「料紙について—古写経を中心にして—」(『料紙科研報告書—東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的考察』)東京国立博物館、平成21年3月						
【備考】						

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

当館収蔵品の内の古写経について、今回の事業で基礎データについては網羅したこととなる。特に平常陳列では奈良・平安時代の古写経について年間9回前後の陳列替を行いながら通年の展示を行っている。今回の成果を展示解説などに反映させることによって、来館者に対する収蔵古写経について新たな情報を提供することができ、その理解と鑑賞を助けることができると思われる。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	採取データ			
判定	B	A	A			

備考

2回にわたる調査により必要とする基礎データはほぼ収集し終えた。本年度は基礎的情報の整備をすることができた。この事業を受けて平成22年度には基礎データと得られた新知見などの成果を基にして、『東京国立博物館図版目録・古写経編』の刊行を予定している。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今まで断続的に行ってきました当館収蔵古写経の基礎データ調査は、本年度の事業によってほぼ完成を見たことは非常に大きい。こうした新知見は一方で展示情報に反映させれば、来館者に対する新たな情報提供につながる。他方、来年度の図版目録刊行により、専門家への情報公開も可能となる。古写経研究における学際的な発展性を導き得たものとして評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今回の事業における調査の実施により、当館で所有する書跡列品のうち古写経の基礎データと新知見の収集と整備がほぼ完成した。この成果は外部研究者への公開情報が完成したことを意味する。ナショナルセンターとして古写経という分野における国内外を視野に入れた学際的な研究の基盤整備の確立と判断される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																										
プロジェクト名称	4) 特別調査金地屏風の金箔地についての調査研究—尾形光琳風神雷神屏風を中心とした(5)ー①ーiii)																										
【事業概要】 尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA 美術館蔵)の金地が金箔ではなく、金泥によるものだという調査結果が注目されている。これをうけて、当館が収蔵する光琳の「風神雷神図屏風」をはじめ、各派各時代の金地屏風を、同条件の下で調査し、金地についての客観性のあるデータを蓄積することを目的とする。																											
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀																								
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)																											
【主な成果】 当館収蔵の狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」、土佐光祐筆「栄華物語図屏風」、尾形光琳筆「竹梅図屏風」を対象として、蛍光エックス線と実体顕微鏡による分析調査を行ない、データの集積を進めた。																											
【年度実績概要】 当館収蔵の絵画作品の中から、尾形光琳と時代的に近い画家の作品である狩野永敬筆「十二ヶ月花鳥図屏風」、土佐光祐筆「栄華物語図屏風」を選んで金色部分の化学分析を行なった。本年度は9回実施し、データの検討会を1回行なった。 昨年行なった尾形光琳筆の「風神雷神図屏風」調査と同様に、肉眼観察で金箔の厚さが異なって見える部分数箇所を選んで、顕微鏡観察と蛍光エックス線により金箔と想定される部分のサンプル調査・成分分析を行なった。 また、調査結果をふまえて分析結果の検討を行い、調査箇所により金の存在を示す蛍光エックス線の強度に違いのあること、顕微鏡写真により紙の繊維の見え方に違いのあることが判明した。																											
【実績値】 <table> <tr> <td>調査回数</td> <td colspan="3"></td> </tr> <tr> <td>分析調査 9回</td> <td colspan="3"></td> </tr> <tr> <td>蛍光エックス線調査 2作品</td> <td>16ヶ所</td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td>顕微鏡写真 3作品</td> <td>21ヶ所</td> <td>76カット撮影</td> <td></td> </tr> <tr> <td>エックス線撮影 4作品</td> <td></td> <td>504カット撮影</td> <td></td> </tr> <tr> <td>分析結果検討会 1回</td> <td colspan="3"></td> </tr> </table>				調査回数				分析調査 9回				蛍光エックス線調査 2作品	16ヶ所			顕微鏡写真 3作品	21ヶ所	76カット撮影		エックス線撮影 4作品		504カット撮影		分析結果検討会 1回			
調査回数																											
分析調査 9回																											
蛍光エックス線調査 2作品	16ヶ所																										
顕微鏡写真 3作品	21ヶ所	76カット撮影																									
エックス線撮影 4作品		504カット撮影																									
分析結果検討会 1回																											
【備考】																											



自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	B	A	B	B	

備考

本調査は、現在注目されている金地作品の箔使用に関する調査で、多くのサンプルからデータを集めるごとで、各時代のさまざまな流派の絵画制作上の特徴をより客観的に研究する基礎調査としてきわめて重要なものである。20年度におこなった尾形光琳筆「風神雷神図屏風」の調査の正確性を確認するため本年度は、関連画家の作品で調査、データ収集をおこなった。サンプルの収集法など、方法は、確立したが、分析結果検討会では、サンプル数を多くしデータのばらつきを少なくする必要があることから、再度それぞれの作品のデータ収集が必要と判断された。また年度途中からより正確なデータを得ることのできる蛍光エックス線分析装置を用いることができるようになったが、より正確なデータとするために、昨年度までに収集したデータを再度収集する必要も生じた。昨年度調査を行った尾形光琳筆の「風神雷神図屏風」を含め新たにエックス線撮影を行なった。

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				

備考

他の業務との組織的調整が難しかったが、実作品を対象とした調査を9回行ない検討会を開催することができた。今後は、本年度途中から用いた蛍光エックス線分析装置によるデータ収集を進め、外部への発表ができるように、サンプル数を増やしデータの客觀性を高めるための確認調査を行なっていきたい。そのために22年度には、他業務との調整を図り、十分な作業時間を確保し、他機関の調査と連動させることのできる調査を行なう。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本年度の9回の調査により、一応の方法論確立とデータ集積をはじめることが出来た。今後は、他の機関による同種の調査と連動できるようなデータ収集を行い、共通の分析ができる体制を確立したい。また、21年度までに調査行なった作品を対象として再度サンプリング調査を実施することで、客觀性のあるデータ集積をめざしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	尾形光琳筆の「風神雷神図屏風」以外の狩野派・土佐派の作品調査を行ってデータを収集し、光琳作品と比較することができた。検討会での分析により、今後は、調査データの客觀性が必要なことが確認された。そのためには綿密な計画を立てて調査回数を増やすことで、データ集積をさらに進め、基準となるデータを求める必要がある。 今後は、同様な調査・データ集積を行なっている機関と連携した検討を行なうことで、調査内容の検討を充実させ、結果の外部公開を目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 応挙館障壁画の復元に関する調査研究(今年度は、主に修理未了(まくりの壁画)の障壁画について検討)((5)-①-v)		
【事業概要】 大日本印刷株式会社の特別協力を得て、応挙館の一の間、二の間の障壁画をすべて、デジタル画像処理によって複製するための調査研究を行い、その成果として複製を完成させ、応挙館の室内空間を復元することによって、一般に公開する。 とりはずした障壁画については、必要な修理を行い、隨時、平常展において一般公開する予定である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋雅人
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、救仁郷秀明(保存修復課保存修復室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)			
【主な成果】 現在まくりの状態で保管されている壁画の現状を調査検討し、その保存状態を把握することで、適切な修理方法を決定するための重要な参考資料を得ることができ、今年度は壁画3枚の修理を実施することができた。さらに来年度以降に修理が実施される予定の壁画の保存状態を把握し、あわせて表現技法の詳細を把握することができた。			
【年度実績概要】 1. 調査の実施 今年度は、隨時、平常展において一般公開を可能とする適切な修理方法を検討するため、修理が実施される壁貼付3枚以外のまくりの状態で保管されている壁画の調査を行った。 2. 修理の実施 調査成果に基づき、本年度は壁貼付3枚の修理を実施(施工中22年上半期までに完了)した。			
【実績値】 1. 調査回数 2回 まくりの紙質等の調査、水墨表現の精査。			
  			
<p>雁図壁貼付(応挙館二之間) 雁図 細部 雁図 細部</p>			
2. 修理実施 1回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	B	B	A	

備考
調査の成果によって、将来的に応挙館内での展示も可能な展示手法も兼ね合わせ検討することで、適切な修理計画を立てることができ、応挙の水墨画表現の詳細をさらに把握することができた。

2. 定量的評価

観点	調査回数	修理回数				
判定	A	A				

備考
修理対象の画面については、調査回数は十全であった。今年度中においては、次年度以降の修理対象の画面も合わせ調査することができなかつたので、来年度はより多くの調査を重ねて、修理計画に遺漏ないようデータをさらに収集していきたい。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は、次回修理対象となる壁貼付(違い棚部分等)の調査を行い、とりはずした障壁画の修理実施の方針を立てる上で、個々の建築部位の壁画に関わる参考資料を得ることができた。この調査研究により、さらに建築物に付随する障壁画の保存と公開について、汎用できる方法論とデータを得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今後は、とりはずした障壁画の修理計画の立案、実施のため、適切な修理方法を決定するため、さらには展示方法の検討も含めた、まくりの壁画の調査研究を多角的な方法によって、さらに進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究((5)－①－iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群よりなっている。また洋書にはドイツ人医師シーボルトより献納された数百冊を含んでいる。詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋 裕次
【スタッフ】 田良島 哲(列品管理課登録室長)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> * 明治時代前期に博物館が収集した洋書のうち、歴史的意義の深いものについて、調査を行った。 * 前年度に調査を行った書籍も含め、明治初期の館蔵の洋書に関する特集陳列を企画して展示するとともに、学術的意義を紹介したパンフレットを作成、配布した。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> * 本年度は、明治前期に博物館が購入、寄贈、交換等によって入手した洋書とその伝来に関する調査を行った。 * 平成22年1月19日から3月7日まで本館第16室を会場として、特集陳列「東京国立博物館の洋書コレクション2—初期博物館の図書収集」を開催し、調査を行った洋書及び関連資料19件を公開した。 * 特集陳列にあわせて、陳列の内容を紹介するリーフレット(カラー、4ページ)を刊行した。 			
【実績値】			
刊行物 1件 リーフレット『東京国立博物館の洋書コレクション2—初期博物館の図書収集—』(平成22年1月刊) 調査回数 4回 展示反映回数 1回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	B

備考

明治前期の博物館における図書収集の実態と方針を原資料及び当時の記録を通じて確認することができ、洋書の歴史的資料としての評価を行うことができた。

2. 定量的評価

観点	調査回数	刊行物発行	展示反映回数			
判定	B	A	A			

備考

時間的な制約から洋書収集の概略的な実態把握をめざしたため、逐一の目録作成等には至らなかった。今後、調査体制を整えて、既存の目録等との照合を進めたい。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	*館蔵洋書の資料的意義を明らかにすることことができた。 *前年度に引き続き、成果を特集陳列に反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館洋書コレクションの時代的特徴の系統的な把握を進めることができた。今後は個別書籍の書誌調査に基づく、目録の作成を進める。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) ガンダーラの仏教寺院の伽藍配置と遺物に関する研究((5)-①- ii)		
【事業概要】 1992 年～2000 年に東京国立博物館で実施したパキスタンにおけるザールデリー遺跡の考古学調査の成果を総括し、最終的に調査報告書を作成する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 小泉恵英
【スタッフ】 望月幹夫(特任研究員)			
【主な成果】 ザールデリー遺跡の発掘調査報告書の和文執筆、英文翻訳を行なった。翌年度の出版に向けて、出版社の選定などの準備を進めている。			
【年度実績概要】 ザールデリー遺跡発掘調査の成果についての本報告原稿を執筆、翻訳し、図版作成を進めた。 また、ガンダーラの仏教寺院に関して、以下の講演を行なった。「ガンダーラの仏教寺院」(於:平山郁夫シルクロード美術館)			
【実績値】 翌年の刊行に向けて論文を執筆、翻訳、図面を作成した。 講演:「ガンダーラの仏教寺院」(於:平山郁夫シルクロード美術館) 研究発表回数 1回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考	当館の実施した海外調査で考古学的な成果も大きく、諸外国の学界からの注目度も高い。					

2. 定量的評価

観点	論文発表数	研究発表回数				
判定	B	B				
備考	翌年の報告書刊行に向けて、執筆、翻訳に従事しており当該年度の公開の予定はない。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	報告作成に向けて、関連論文作成、翻訳に大いに成果を示している。が、一部の作業に遅れも見られるので、翌年度の刊行に向けて調整を行なう。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	報告書作成準備について進行中であるが、当初計画よりもやや遅れが出ている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	8)博物館の環境保存に関する研究((5)-①-i)					
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の保存環境及び展示環境について調査研究し、今後の環境の向上に結びつけることを目的として実施する。						
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸			
【スタッフ】 荒木 臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、和田 浩(保存修復課環境保存室主任研究員)						
【主な成果】 東京国立博物館は二酸化炭素削減に関して、省エネ法に関する規制及び東京都環境確保条例に基づく規制を受けるために複雑な対応が強いられる。こうした社会的な方向性に対応するために、保存科学的観点からの行動指針について検討した。						
【年度実績概要】						
1. 季節変化に応じた温度環境	法隆寺宝物館の夏期の温度設定を区域毎に緩やかに変化させた。24時間運転を実施している施設であることから、設定の変更で僅かでも空調負荷が小さくなれば、その分のエネルギー削減の効果が出やすい。					
2. 展示室の環境条件と合意形成	海外の貸与館と事前に十分な協議を行い、東京の気象条件を説明し、相対湿度に関しては展示条件をそのまま受け入れ、温度については東京の環境に可能な限り即した条件に貸与館が理解を示す事例が出てきた。現実的な面を重視した合意形成により、正直な環境条件の設定は今後ますます必要となるだろう。					
3. 空調運転の最適化	東博平成館の収蔵庫は、調湿性の高い豊富な内装材、そして断熱性と気密性を担保するエアースペースを備えた2重構造、入り口の開閉の際に外からの影響を小さくするための前室など、日較差を抑制できる設備が整っている。日較差が小さい環境を保ちつつ、長期間の安定を得るために、かつ省エネルギーを目指す観点からエアースペースと前室の空調運転に重点を置く方法について検討した。					
4. 太陽光エネルギーと展示照明	展示室で使用する照明の電力はすべて太陽電池が生み出す電力で賄い、かつLED光源を用いることにより、自然光エネルギーを用いて環境に配慮し、かつ文化財に安全な光を使用した新しい概念の『自然光照明』の検討を行った。					
【実績値】						
研究会発表件数	文化財保存修復学会 1回 東京文化財研究所研究会 1回					
調査回数	年間を通じて対象となる場所341の温湿度計測を継続的に実施している。					
						
【備考】 低炭素社会と共に存する文化遺産の保存—東京国立博物館の取組み—、文化財保存修復学会31回研究大会(倉敷)6月13日 低炭素社会と共に存する文化遺産の保存—東京国立博物館の挑戦—、東京文化財研究所研究会、12月8日						

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
二酸化炭素削減にむけた取り組みに対する保存科学的観点からの行動指針を検討した。本年は空調稼働時間、温度制御、照明などについて基礎的な検討を行った。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	A	B	A			

備考

基礎的な検討に基づいて、法隆寺宝物館における夏期の温度設定を外気に合わせ変更した。館内の作品、相対湿度への影響はないことを確認した。研究発表によって広く現状を報告することに努め、論文についてはさらなるデータの蓄積によって、問題点等を明らかにし、解決策を見出した上で発表予定であり、現在その準備中である。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	事業規模に見合う二酸化炭素の削減量を得るために、事業規模の縮小か新規の設備投資を図るしかない。収蔵庫あるいは展示室における空調の運転時間が対象になることは十分に考えられ、保存科学的観点からの対応あるいは指針は、今後重要な課題になると考える。また、事業規模の縮小を伴わないCO ₂ 削減に向けた積極的な取り組みも、同じく博物館施設が目指すべき方向であると考え、今後の活動に反映できる調査であると考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究をおこなう。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からぬ情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課長 谷豊信
【スタッフ】 東京国立博物館：川村佳男(調査研究課東洋室研究員) 客員研究員：丸山清志			
【主な成果】			
<ol style="list-style-type: none"> 当館所蔵の東洋民族コレクションの総合的なデータベースの作成により、研究・展示・保存などに必要な基礎情報が従来よりも一層充実した形で整備された。 とくに台湾先住民族の資料について、民族誌や最新の研究成果と照合することで、過去の台帳の記載内容を補足、修正することができた。 特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」を実施し、当館が所蔵する南太平洋将来の代表的な民族資料 15 件を陳列することで、調査研究の成果を公開した。 			
【年度実績概要】			
<ol style="list-style-type: none"> 東洋民族資料に関する調査研究 昨年度から引き続き、各資料の計測値・員数・形状・材質・所在・画像・保存状態を調査し、データベースに入力した。また明治から昭和初期にかけて当館に収蔵される以前の箱書きや札が添えてあれば逐一その内容を記録し、伝来や年代の解明に役立てるようにした。 台湾先住民族資料の調査研究 台湾先住民族のものについては、客員研究員の丸山清志氏の協力のもと民族誌や最新の研究成果と照合しながら、他の民族資料よりも詳細に調査を行った。これにより平成 23 年度に計画している特集陳列「台湾先住民族の工芸(仮)」の陳列案作成の準備が大きく前進した。 特集陳列の開催 「南太平洋の暮らしと祈り」というタイトルで、2009 年 4 月 7 日から 6 月 7 日まで東洋館 3 室で特集陳列を実施した。展示は、イモ用杵、ココナッツ搔器など南太平洋で広く使用されてきた代表的な生活道具 9 点、および大面、ワニの彫刻などメラネシア地域の木彫を中心とした祭祀・儀礼の道具 6 点の合計 15 点で構成されていた。全体の解説、地図のパネルの他に、個別の作品解説もすべて掲示した。 また会期中の 5 月 29 日に展示会場で列品解説「南太平洋の暮らしと祈り」を行い、あわせて資料を作成・配布した。 			
【実績値】			
調査回数：11 回、調査件数：222 件(調書作成件数も同じ)、データベース入力件数：約 2500 件(この数には昨年度調査を実施したが、データベースに未入力だった分が含まれている)			
展示回数：1 回(関連する列品解説の実施回数：1 回、参加人数：35 名)			
【備考】			



特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」の展示風景

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	B	A	A

備考

本年度から始まった耐震補強工事を経て2012年に再開する東洋館で以前より充実した展示をいかに実現するか、現在関係者間で活発な議論が行われている。その結果、東洋民族資料が新しい展示体系の一環として、専用コーナーで常時陳列されることになった。当館収蔵の同分野のコレクションは比例のない独自の価値を持ちながら、これまで展示公開されたことがほとんどなかった。昨年度から継続している本調査、および特集陳列による調査成果の段階的公開の実験は、東洋民族資料の展示活用という3年後の新しい試みに直結しており、その適時性において特に際立った意義を認めることができる。

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査件数	データベース 入力件数	展示回数		
判定	A	B	A	A		

備考

耐震補強工事の開始前に東洋館から収蔵品を移動する業務に夏まで掛かりきりとなるなど、本年度は時間が予想以上に限られた。その結果、昨年度末に掲げた調査目標回数の下方修正を余儀なくされたが、それでも11回の調査を実施できたことは評価したい。また調査ができない時期でもデータベースの作成を進めた結果、昨年度の遅れから回復し、目標数値に追いつくことができた。しかし台湾先住民族資料の調査を完了させるまでには至らず、調査件数については課題が残った。調査成果の公表については、特集陳列の実施によって目標を達成することができた。

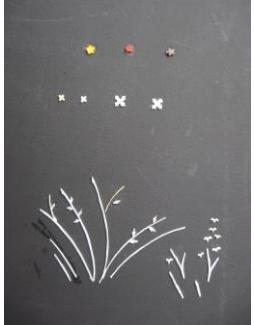
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は東洋民族資料を対象とした調査研究、特に展示活用を見据えた台湾先住民族資料に対するより精度の高い調査研究、南太平洋民族資料の調査研究結果の特集陳列による公開など、各方面で十分な成果が見られた。これまでの成果を踏まえつつ、今後も東洋民族資料の調査研究とデータベースの一層の充実を継続的に行い、当館における東洋民族資料のより有効な保管、修理、そして何よりも展示公開のあり方を検討していく。なかでも台湾先住民族資料は質量ともに極めて貴重なコレクションであり、来年度も優先的に調査を行い、再来年度の展示実現を目指す。来年度も特別展の準備など他の業務に夏まで集中せざるを得ない状況が見込まれ、時間的な条件は本年度と同様に極めて厳しい。そのため次年度も調査の目標回数は本年度並みに据え置き、調査件数については人員を増やすことで本年度以上の数値を目指す。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	東洋民族資料の調査研究、データベースの作成、特集陳列「南太平洋の暮らしと祈り」の実施によって、昨年度からの成果の積み上げと公開を実現することができた。2012年再開の東洋館で新設予定の東洋民族のコーナーでは、南太平洋と並んで台湾先住民族の資料が最も重要な一群となる。その試験の意味も兼ねて、2011年には台湾先住民族資料の展示を工事中の東洋館以外の建物で実施することが望ましく、本年度中に完了できなかった同資料の調査を速やかに終わらせ、陳列の準備に取り掛かることが重要である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 韓国国立中央博物館所蔵の高麗漆器の保存に関する国際共同研究((5) -① - ii)		
【事業概要】 韓日両国の国際共同研究による高麗螺鈿漆器の修理・復元事業は、劣化・崩壊した漆器に対して、両国で蓄積された研究および技術的ノウハウを適用し、漆器の本来的価値をだれもが認識可能な状態に回復し、公開することが目的である。本事業の研究プロセスは、高麗漆器の再評価にとどまらず、韓日の保存修理および復元複製に関し、理念と技術の両面において一層の発展をもたらす。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 北村謙一(重要無形文化財保持者・漆工品修理)、室瀬和美(重要無形文化財保持者・目白漆芸文化財研究所代表)、岡田文男(京都造形芸術大学教授)			
【主な成果】 数百の小片に分かれた断片の詳細な観察を通じて、各小片の位置、箱の形状及び寸法、木地及び塗膜の構造、顔料の種類、螺鈿・描金の組成などについて多数の知見を得ることができた。			
【年度実績概要】			
<ol style="list-style-type: none"> 1. 修理後の外観をどの程度まで復元するか(あるいはできるか) 断片状の漆塗膜の変形をどの程度まで修整できるかが、その後の作業プロセスを検討。 2. 断片の強化・クリーニング・変形修整の方法 変形修整を実施する際には、劣化した塗膜面を扱うので、事前の強化処置が必要である。塗膜の変形修整の程度によって、最終的な姿は大きく異なることになるので、変形修整に関する技術検討を行う。 3. 強化後の断片の接合方法、接合した断片を箱状に保持する方法 変形修正を終えた段階で、各塗膜片の正確な位置を決定し、その大きさに応じた木地に相当する芯構造の材質および形状を決定する。塗膜断片同士の接着方法、塗膜と芯構造との固定方法について検討。 4. 塗膜残片の欠失部の処置 欠失部に対する処置は、オリジナル塗膜の変形修正の程度と欠失部の面積により異なるので、両者の状況を見ながら最終的に決定することになる。 			
【実績値】 これまで実施した蛍光X線分析、顕微鏡写真など調査結果に関して、 詳細分析を実施した。			
調査回数 東博にて写真及び分析データの解析を3回実施。			
			
北村謙一氏が試作した復元模造のための螺鈿手板			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
極めて希少な漆工品遺物である高麗漆器の破片残片に関して、漆工品の保存修理および分析の国際専門家チームによって共同調査及び研究を行い、遺物の保存指針のみならず、具体的な修理について検討を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
備考						
東博にてすでに採取したデータと写真をもじいて調査データの詳細分析を実施。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで得られたデータを精緻に調査し、修理および復元製作のための方法論、材料などの検討を進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																		
プロジェクト名称	11) 日本における木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)																		
【事業概要】 日本に現存する仏像、神像等の木彫像の樹種について調査研究し、日本特有の木の文化、歴史の理解を深めることを目的として実施する。																			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 金子啓明																
【スタッフ】 岩佐光晴(上席研究員)、浅見龍介(博物館教育課教育普及室長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域樹種識別担当チーム長)、藤井智之(森林総合研究所関西支所長)																			
【主な成果】 今年度は、東京国立博物館で開催された特別展「伊勢神宮と神々の美術」に出品の静岡・伊豆山神社の男神立像、島根・成相寺の神像23体、岐阜・華厳寺の十一面観音立像を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。昨年調査した一部の像のサンプルについて放射性炭素年代測定を試み、今後の研究への応用の可能性を協議した。これまでの研究成果の一部を研究論文としてまとめた。																			
【年度実績概要】 静岡県熱海市の伊豆山神社の男神立像、岐阜県松江市の成相寺の平安～鎌倉時代の神像23軀(うち5軀は島根県立古代出雲歴史博物館に寄託)、岐阜県揖斐郡の華厳寺の本尊十一面観音立像を調査し、美術史的基礎データ、写真データ、樹種の科学的識別のための木片資料の収集を実施した。樹種の分析については森林総合研究所の能城が担当し、伊豆山神社の像はサクラ属の材、成相寺の像はその多くがカヤであり、一部の像がヒノキあるいはコウヤマキであることが判明した。華厳寺の像については現在分析中である。なお、華厳寺の像は従来秘仏であり、本格的な調査は今回が初めてである。調査は大阪大学と共同で実施したが、制作時期が奈良時代末まで遡る可能性があり、当該研究において重要な像となることを認識した。 昨年調査を行った岐阜県関市高賀神社の神像、高山市の飛騨一宮水無神社の神像、高山市荒城神社の神像から平安時代の像各1軀を選んで、放射性炭素年代測定を実施した(株式会社パレオ・ラボに調査依頼)。その結果、飛騨一宮水無神社の神像は制作時期よりもかなり遡る飛鳥時代に用材が伐採されたことを示すデータが確認された。今後、こうしたデータが蓄積されれば、用材の伐採時期と像の制作時期との関係が明らかになる可能性があり、年輪年代の調査とともに用材観の研究に有効な新たな視点となることを認識した。 これまで調査した木彫像のうち、樹種のデータを公表していない8・9世紀の木彫像及び鉛彫像について論文をまとめた(平成22年4月に東京国立博物館研究誌『MUSEUM』に掲載予定)。また、これまで調査した神像彫刻のデータについて検討を行い、その研究成果については来年度中に順次論文としてまとめて報告していくことを協議した。																			
【実績値】 <table><tr><td>調査作品件数</td><td>全28件</td><td>神像27件</td><td>仏像1件</td></tr><tr><td>写真データ</td><td>360点</td><td></td><td></td></tr><tr><td>木片資料</td><td>80点</td><td></td><td></td></tr><tr><td>放射性炭素年代測定</td><td>3点</td><td></td><td></td></tr></table>				調査作品件数	全28件	神像27件	仏像1件	写真データ	360点			木片資料	80点			放射性炭素年代測定	3点		
調査作品件数	全28件	神像27件	仏像1件																
写真データ	360点																		
木片資料	80点																		
放射性炭素年代測定	3点																		
論文掲載数 1件 金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之 「日本古代における木彫像の樹種と用材観III一八・九世紀を中心に (補遺)一」 (『MUSEUM』平成22年4月予定)																			
【備考】																			



男神坐像 (島根・成相寺)

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

神像彫刻は非公開のものが多いが、近年神社側の方針転換により調査を受け容れる神社も出てきた。日本固有の文化としての神の研究が求められているのであろう。神と木は密接な関係があり、用材観に基づく神像の調査研究は今後注目を集めると考えられる。ただし、調査の許可を得るまでに時間がかかるため、調査日程に非効率なところがあるのは否めない。早い段階での所蔵者との交渉が必要である。

2. 定量的評価

観点	調査作品件数	収集資料数	論文掲載数			
判定	B	B	B			

備考

神像彫刻は非公開のものが多く、調査も困難であり、今年度は調査場所の設定にやや難航した。神像調査の27件は比較的多い数字といえる。各像について詳細な写真データと、木片資料が得られた。また、今年度初めて放射性炭素年代測定を実施した。論文については、データをある一定のまとまりごとに公表するため、作成には相応の時間が必要である。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	神像彫刻については所蔵者が非公開とする例が多く、美術史的調査が充分には行き届いていない。また、樹種の科学的識別についてはほとんど実施されていない状況にある。今回は島根県の成相寺にまとまって伝存する神像彫刻23件について重点的に調査を実施し、地域的な面からも見ても興味深いデータを得ることができた。また、今年度初めて試みた放射性炭素年代測定による調査も、本研究の今後の展開を考える上で有効であった。神像彫刻についてはこれまで相当数のデータを蓄積してきており、その成果を22年度には論文としてまとめ、公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。今後もこのペースを維持しつつ、今年度試みた放射性炭素年代測定、さらに年輪年代分析なども取り入れ、科学的な調査の充実をはかりたい。

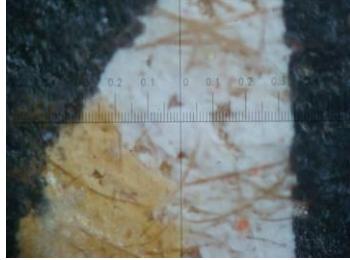
【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-12

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を実証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、作品の修理にともなうカルテなどの情報から、さらに詳しい分析を行う。これらによって、書の作品の存在意義を、料紙と書風という二つの側面から科学的に解明し、料紙と書風の相関関係をも考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 島谷弘幸
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(調査研究課長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、恵美千鶴子(学芸企画部博物館情報課アソシエイトフェロー)、丸山猶計(九州国立博物館学芸部主任研究員)、赤尾栄慶(京都国立博物館)			
【主な成果】 東京国立博物館・陽明文庫・三の丸尚蔵館などに収蔵されている作品で、装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、展示履歴などによって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリストを完成させた。昨年度に引き続き、今年度は作成したリストをもとにデジタル写真撮影と、作品の筆跡および料紙に関する基礎調査を実施した。また、今年度は最終年度にあたるため、これまでの研究成果をまとめて、報告書を作成した。			
【年度実績概要】			
1. 東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化 昨年度に引き続き、東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。今年度は、これまでの成果をもとに、研究成果報告書を作成した。また、来年度の東京国立博物館において、本研究成果を生かした特集陳列を企画中である。			
2. 特別展に関係する作品の調査とデータ化 本年度、東京国立博物館で開催した特別展「皇室の名宝」においては、本研究と関係の深い作品が一堂に展示された。それらの作品についても、詳細なデータを収集した。			
3. 他機関への調査 今年度は、京都・陽明文庫、高知県・山内家資料館、三の丸尚蔵館、中国・遼寧省博物館などに出張し、他期間の所蔵する装飾料紙を用いた写経・古筆・典籍等の調査を行なった。許可の出た作品に関しては、東京国立博物館内部での調査と同様に、顕微鏡による料紙の拡大画像の撮影を行い、データの充実をはかった。			
 <p>料紙の 100 倍の画像 作品ごとに料紙と書風のデータを 収集・蓄積した</p>			
【実績値】			
研究会などの発表 島谷弘幸「古筆の魅力」(平成 21 年度岡山県文化のつどい第 2 回講演会)平成 21 年 9 月 12 日			
論文掲載数 島谷弘幸『和様の書』(『日本の美術』519 号、ぎょうせい、平成 21 年 8 月) ほか 8 件			
調査件数 50 件、写真撮影点数 500 点、データ入力点数 300 点、文献資料のデジタル化 5 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

本研究は三年目にあたり、調査方針の再検討も行ったが、その調査方法は確立したと言える。その方法にしたがって他機関においてもすみやかに調査を進めることができた。科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数	文献資料のデジタル化	研究会発表
判定	A	A	A	A	A	A

備考

科学研究費補助金を活用して、国内での出張調査に加えて、中国や韓国への調査が実施できた。さらに、他機関においても、ほとんどの場合顕微鏡による料紙の拡大写真を撮影し、装飾料紙に関するより詳細なデータを得ることができた。また、研究成果報告書を作成した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東アジアの書道史に関わる膨大な資料を有する博物館の特徴を生かした調査を実施し、研究成果報告書を作成した。光学顕微鏡などの科学機器を用いた客観的なデータを広く収集して、調査の内容をさらに充実したものにするとともに、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中国、韓国など、これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、海外においても、東アジアの書道史に関わる資料の調査を今年度も行うことができた。その調査を継続的に行っていく必要がある。また、国際シンポジウムなどを開催することを目標に、所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 目録学の構築と古典学の再生(科学研究費補助金)((5)-①- ii)		
【事業概要】 日本独自の目録学を構築し、「知のネットワーク」で結ばれた公家社会の文庫群(=データベース)の復原や伝統的知識体系を解明することにより日本古典学の研究基盤を再生する(研究代表者 東京大学史料編纂所教授 田島公)。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室長 田良島哲
【スタッフ】 島谷弘幸(学芸研究部長)、福原紗綾香(研究支援者)			
【主な成果】 * 昨年度に續いて、列品のうち歴史資料及び和書に含まれる、公家の儀礼や家職に関する絵画資料を網羅的に確認し、調査を行った。一部については、写真撮影により画像を作成する。 * 国宝『延喜式』の詳細調査実施に向けて、予備的な調査と打ち合わせを行った。			
【年度実績概要】 * 昨年度に引き続き、列品(歴史資料及び和書)の網羅的な調査を行い、本研究に関連する主として絵画資料について、資料自体の詳細な調査及び館蔵の記録による伝来等に関する調査を行った。 * 上記資料の一部について、写真撮影を実施する。 * 公家の儀式に関する絵画資料である『旧儀式図画帖』の継続的な撮影を行った。 * 国宝『延喜式』の詳細調査についての準備を行った。			
【実績値】 調査資料数 216 件(354 点)。写真撮影 562 枚 特集陳列「有職」(平成 22 年 2 月 3 日 - 3 月 28 日、担当研究員: 猪熊兼樹)は、本研究の調査成果を利用した。			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
本創成研究にふさわしい素材を選定し、公家文化と関連する資料の伝来の研究素材として必要十分な基礎情報を蓄積し、今後の発展的研究に備えることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査資料数	撮影画像数	展示反映回数			
判定	A	B	A			
備考						
研究支援者が日常的に調査を行い、これまで調査の機会がほとんどなかった歴史資料及び和書のうちから、まとまった資料の詳細を把握することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	* 昨年度に引き続き、館列品の中から公家文化に関する資料を、網羅的に抽出することができ、今後の研究の基礎データとなる情報の取得を適切に行うことができた。 * 情報を館内で提供することにより、成果を特集陳列に反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査を通じて、列品に関する情報の確認が順次進んでいる。 今後、列品データベースに集約することにより、館業務及び外部への情報サービスに資することしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 国立博物館の機能と役割の変遷に関する基礎的研究—館史資料の分析を中心に— (科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では、2,046件が館史資料として登録されている。内容は日本における博物館の歴史そのものであり、昭和25年(1950)に文化財保護法が施行され、文化財保護委員会が設置されるまで、日本の文化財保護行政の中心に位置した博物館のあり方を検討する際の貴重な資料である。本研究では、これらの資料について調査を実施し、その細目などを明らかにして、今後の博物館学研究の指針となるべき資料を整理、分類、分析し、研究の成果を一般に公開していくことを目標とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 丸山士郎
【スタッフ】 島谷弘幸(学芸研究部長)、高橋裕次(博物館情報課長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、鬼頭智美(企画課国際交流室長)、木下史青(企画課デザイン室長)、伊藤嘉章(九州国立博物館学芸部長)			
【主な成果】 東京国立博物館保管の近代彫刻208件について、列品録・列品台帳の資料調査と、作品調査を実施した。作品調査では、調書と写真を作成した。それらをまとめた上で『東京国立博物館図版目録』(近代彫刻篇)を刊行した。			
【年度実績概要】 東京国立博物館が保管している、列品録、列品台帳、収蔵品目録を中心に、館蔵品の収蔵にかかる経緯等の調査を実施した。			
【実績値】 調査件数 208件 調書作成点数 220件 写真撮影点数 156件 データ入力点数 220件 調査報告書刊行 『東京国立博物館図版目録(近代彫刻篇)』			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調書作成点数	写真撮影点数	データ入力点数	調査報告
判定	A	A	A	A	A
備考					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館保管の近代彫刻については、これまでまとまった調査・研究はなかったが、本研究によって、作品の形状等のほか、銘記、制作事情、受入なども明らかとなった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度が研究の最終年度であるが、その成果である『東京国立博物館図版目録(近代彫刻篇)』を刊行する。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-15

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 油彩画の材料・技法に関する共同調査((5)-①-i)		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の油彩画約150件の中から、明治期を中心とした約70件を調査対象とする。東京芸術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、及び透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通して、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考える。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 木島隆康(東京芸術大学大学院教授)、鈴鴨富士子(東京芸術大学大学院助教)、松嶋雅人(企画課特別展室長)、土屋裕子(保存修復室主任研究員)、荒木臣紀(環境保存室主任研究員)、和田浩(環境保存室主任研究員)			
【主な成果】 平成20年11月から開始し、可能な限り月1回のペースで調査を進めてきた。調査は朝10時から午後17時までであり、1回の調査では終了しない調査もあるが、これまでのところ調査が終了した作品は、11点におよぶ。次第にデータが蓄積されているが、その中から、今年度は3点についての調査内容を発表する紀要(45号)を出版する予定である。			
【年度実績概要】 平成21年度に調査が終了した作品は、①A-11261 フォンタネージ筆《風景》、②A-11251 原田直次郎筆《ドイツの少女》、③A-11687 フォンタネージ筆《不忍池》、④A-11299 国沢新九郎筆《海景》、⑤A-11552 高橋由一筆《最上川舟行の図》、⑥A-739 高橋由一筆《長良川鵜飼実況図》、⑦A-720《蜜柑と玉葱》、⑧A-721《ラグーナ肖像》、⑨A-722《少女像》、⑩A-730《牧羊図》、⑪A-731 高橋由一筆《国府台真景》であり、それぞれについてのデータをCDに保存し、カルテを作成した。			
【実績値】 調査回数 : 10回 調査作品数 : 11点 研究発表・論文 : 次年度公表に向けて準備中			
			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
今年度は、東京芸大が集積しているデータベースに追加情報をもたらす作家の作品についての調査を行うことができた(高橋由一、フォンタネージなど)。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数	調査件数		
判定	B	B	A	A		
備考						
本調査の結果として得たデータの一部は、まず、この3月出版の『東京国立博物館紀要』第45号に掲載予定であり、本調査の意義などについて、文化財保存修復学会32回大会に発表の予定であり、現在準備中である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味での存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、芸大作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。今後の調査の進捗が更なる可能性を開いていくものと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 萩原守衛「女」の石膏原型とブロンズ鋳造に関する共同研究((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京藝術大学と共同で実施する共同研究で、東博所蔵・萩原守衛作「女」石膏原型からブロンズ鋳造を計画している。これまで試みられたことのない大型の像に対する非接触・非破壊の方法を用いたブロンズ製作に関し、一連の製作工程について実証的な調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 北郷 悟(東京藝術大学美術学部副学長)、古田 亮(東京藝術大学大学美術館准教授)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、田良島哲(列品管理課貸与特別観覧室長)			
【主な成果】 3次元計測を石膏原型に対して実施し、取得したデジタル3次元画像を元に、デジタルデータの解析を行った。表面のテクスチャー等を様々に変化させ、デジタルプリンターによる立体縮小模型を作製し、原寸大ブロンズ鋳造に向けた準備を行った。最適なテクスチャーに基づいた原寸大鋳造を実施した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3次元計測データの解析を実施した。 ・ 3次元プリンターによる縮小モデルを作製した。 ・ 原寸大ブロンズ像を鋳造した。 			
【実績値】			
調査回数 東京国立博物館にて1回 東京藝術大学にて1回			
東京藝術大学にて鋳造作業1回 研究発表・論文：次年度公表に向けて準備中			
			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
3次元デジタルデータを用いたブロンズ鋳造に向けた準備、及びブロンズ鋳造の実施など、当初の計画に従い所定の成果を得ることができた。

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	調査回数			
判定	B	B	A			

備考
東京国立近代美術館、芸大、中村屋、碌山美術館、遠山記念館などの既存のブロンズ像との比較を行うために、総てのプロセスを明確にした原寸大ブロンズの鋳造を完了した。今後これら一連の調査研究工程を学会等で発表し、かつ論文として公刊するための準備中である。

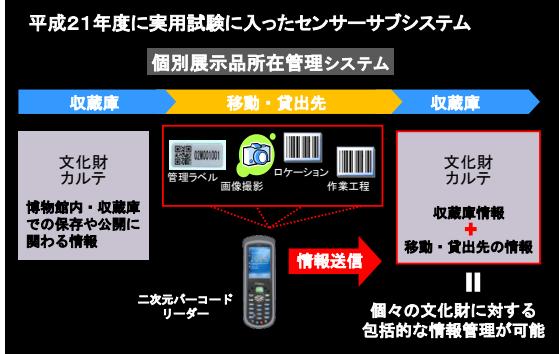
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石膏原型と今回制作したブロンズ像を基準にしながら、様々なブロンズ像との定量的な比較を実施することが可能となり、次年度以降の研究の基礎が整った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 博物館における文化遺産の保全と持続的公開を目指した包括的保存システムの研究 ((5)-①-iv)		
【事業概要】 保存と公開という博物館の使命を持続的なものとするためには、あらゆるリスクを予測し、リスクを回避するための対策を事前に講じることによって、高い安全性に裏付けられた活動へと博物館を質的に転換する必要がある。そのためには、従来行われてきた基礎研究及び個別の対処を統合し、機動的かつ実効的な臨床保存学を確立する必要がある。その具体的な方法論としてトータルケアシステムの構築について研究を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 土屋 裕子(保存修復室主任研究員)、和田 浩(環境保存室研究員)、荒木 臣紀(環境保存室主任研究員)、大場詩野子(研究支援者)、大河原典子(研究支援者)			
【主な成果】 これまでに集積した各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」の主要部分の構築を完了した。具体的には、各種保存カルテ、各種写真記録、各種環境記録、作品・関連資材の所在情報を統合的に扱うことが可能になる。			
【年度実績概要】 平成21年度は、システムを構築する上で必要な4つの基本段階、すなわち測定(Measure)、分析(Analysis)、改善(Improve)、管理(Control)の中から、センサー及びデータ管理サブシステムの充実、データ分析システムの本格的な立ち上げを行った。 ・センサーサブシステムの一層の整備を図り、測定内容を充実した。 ・2次元バーコードによる移動・管理の運用実験を開始した。 ・保存カルテの電子カルテ化とデータ管理サブシステムの運用を開始した。 ・博物館全域の平面図CADをデータ分析システムに入力した。			
【実績値】 研究会発表件数 国際会議 1回、国際シンポ 2回、国内学会 2回 論文掲載数 共著論文「包装技術」1篇所載			
 <p>センサーサブシステムの構造に関する模式図</p>			
【備考】 ・博物館における包括的保存システムの構築に関する研究、文化財保存修復学会 31回研究大会(倉敷) ・地震対策としての文化財の転倒防止に関する検討、J.P. ゲッティ美術館・国立西洋美術館共催国際シンポジウム「美術・博物館コレクションの地震対策」(国立西洋美術館) ・国際航空貨物における留意点—文化財の輸送環境調査よりー、第 47 回全日本包装技術研究大会(福岡) ・The characteristic of vibration during a transport of cultural heritage、東アジア文化遺産保存学会(北京) ・Toward the Establishment of a Guideline for the Concentration of Indoor Atmospheric Contaminants in Exhibition and Storage Rooms、The 2010 International Cooperation Symposium of Korea・Japan Conservation Science(Seoul) ・神庭信幸、和田浩、高木雅広、今北憲：空港内のドーリー搬送工程で発生する振動・衝撃-文化財の国際輸送環境調査よりー、包装技術、平成 22 年 3 月			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
作品の状態、履歴及び環境の情報の収集と解析に関して、実践を通じた研究を行った。当初の計画に従い、所定の成果を得ることができている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載件数	研究計画・方法			
判定	A	A	A			

備考

科学研究費補助金(基盤(S)(平成 20 年～24 年))を活用して、各種のデータを博物館の空間と関連付けて保存・検索できるデータ活用システム「文化財収蔵場所環境情報管理システム」及び二次元バーコードによる所在管理システムを導入し、初期の実用実験を実施した。また、一部成果を共著にて刊行 1 篇、および学会などで 4 回の発表を行った。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存と公開を実践しつつ、安全性をより向上させるために、現状の解析と改善を具体的に実施し、臨床保存学の具体的な機能が明確化できた。現在構築中の支援システムの精度の向上を図ると同時に、将来予測に立脚した現状判断が可能なように、目標とするシステムの確立を目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を 100% 達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	18) 東京国立博物館所蔵・正倉院関係資料の研究—「正倉院裂」を中心に— (科学研究費補助金)((5)ー①ーiii)

【事業概要】

東京国立博物館(以下、東博)が所蔵する約1,300点の正倉院裂の調査とデータ収集を目標とする。東博は、明治5年(1872)の正倉院開封以来、昭和22年(1947)まで正倉院宝物の管理に関わってきたため、明治時代の正倉院宝物の修理に関する資料等、正倉院宝物の模写・模造、古写真、展覧会の記録、出版物を所蔵する。それら東博所蔵資料の調査や、宮内庁書陵部・奈良国立博物館など所蔵する関係資料も調査とデータ収集を行なう。

【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 澤田むつ代
--------	-------	-------------	-------------

【スタッフ】

高橋裕次(博物館情報課長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、浅見龍介(博物館教育課教育普及室長)、西山厚(奈良国立博物館学芸部長)

【主な成果】

作品のデジタル画像について、個々に番号を付けるとともに、各作品については、現状、法量、品質、技法、用途等についての詳細を記録化する作業を行った。

東博が所蔵する正倉院関係資料についても、デジタル写真での記録撮影を進め、詳細データを収集した。

【年度実績概要】

- ① デジタル撮影した画像に番号と名称等を付け、画像データの整理を行なっている。
- ②撮影した各作品について、調査カード用のデータの整理を行なっている。
- ③東博所蔵の正倉院の模写、模造・模織作品のデジタル写真撮影と、それらの資料に関するデータの収集を行った。とりわけ、模織作品については個々の作品ごとに拡大画像を撮影し、調査カード用のデータの整理を行なった。
- ④これらの調査の成果を踏まえ、今回は特に織物について特集陳列を行ない、図録を刊行した。



今年度制作した図録の表紙(左)と内容(右)

【実績値】

1. 資料収集(写真撮影と調査カードのデータ化)

- ①調査カードのデータ整理は全体の50パーセント程度完了。
- ②模造・模織作品の写真撮影 80枚

2. 研究発表、論文発表、展示への反映

研究発表 2回、論文掲載数4件、調査概報 1件

- ①澤田むつ代「正倉院フォーラム2009 福岡」(2009年9月5日、於:アクロス福岡)〈天平の美と技〉パネリストとして発表した。

②澤田むつ代 特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の織物」を実施した:平成21年11月10日~12月6日(於:東京国立博物館・本館特別2室)

③澤田むつ代 特集陳列「東京国立博物館所蔵 正倉院の織物」にかかる『東京国立博物館所蔵 正倉院の織物』と題した図録を刊行し、「東京国立博物館所蔵 正倉院の織物」ほか3件の論文を掲載した。

④澤田むつ代 宮内庁正倉院事務所の委嘱により「正倉院宝物模造作製調査委員」とし模造予定作品と関連作品等について調査し、調査結果について報告書を提出した。

⑤澤田むつ代 国際シンポジウム『上代裂をまもる』(於:東京国立博物館・大講堂)において「法隆寺の染織品」について発表した。

3. 調査回数 11回

【備考】

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

代表者澤田が以前執筆した論文「正倉院頌布製」のデータをもとに、効率よく正倉院製のデータ収集とデータ入力を行なうことができた。科学研究費補助金によって、奈良国立博物館の研究者の補充ができ、奈良国立博物館での調査もすみやかに行なうことができた。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	収集資料数	調査概報		
判定	A	A	A	A		

備考

正倉院製の調査を 11 回行ない、充実した調査および内容の検討ができた。また、デジタルによる新規撮影が順調と、東京国立博物館・奈良国立博物館所蔵の関係資料のデータ収集も行なうことができた。さらに、特集陳列を開催し、図録を刊行した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館所蔵の正倉院製は、美術史上重要な作品であるにもかかわらず、従来、詳細な図版が公刊されてこなかった。今年度は、その一部であるが、特集陳列の図録として公開することができた。さらなる成果を刊行物等で公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの成果を特集陳列で一般に公開でき、調査研究は順調に進んでいる。図版公開を目指すとともに、今後もこのペースを維持しつつ、さらに関係資料のデータの充実をはかりたい。

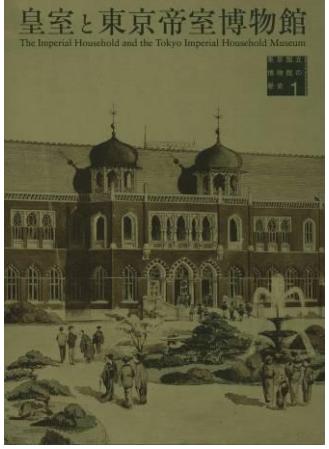
【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-19

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	19) 文化財保護の歴史に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館(以下、東博)は、明治5年(1872)の創立以来、「古器旧物保存」や「臨時全国宝物取調」など文化財保護の活動に関わってきた。東博で保管してきた文化財保護の歴史に関わる宝物調査の資料、報告書、宝物の模写絵図や拓本類を可能な限り収集、整理し、そのデータを公開することを目標とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 浅見龍介(博物館教育課教育普及室長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、島谷弘幸(学芸研究部長)、恵美千鶴子(博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 東博に収蔵されている関連作品や関連資料について、展示履歴などによって把握できる情報をもとに、調査対象となる作品のリストを完成させた。一部、デジタルカメラによる記録撮影やスキャニングによるデータ保存を進めている。また、特集陳列「皇室と東京帝室博物館」で関連資料を公開するとともに、図録を作成した。			
【年度実績概要】			
1. 東京国立博物館所蔵の関係資料のリスト化 東京国立博物館が所蔵する文化財保護に関する資料のリストを作成した(明治～昭和初期の分)。戦後の資料に関しては、いまだ各部署で保管されていたが、収集して整理を行った。			
2. 特集陳列の開催による資料の公開 本年度、東京国立博物館で開催した特集陳列「皇室と東京帝室博物館」において、文化財保護の歴史に関わる資料を展示し、あわせて図録を刊行した。			
3. 他機関への調査 今年度は、国内では京都国立博物館などに出張し、他期間の所蔵する文化財保護の歴史に関する資料の調査を行った。海外では、韓国中央博物館に出張し、外国の博物館が自身の歴史をどのように研究・公開しているのか調査を実施した。			
			
特集陳列で作成した図録の表紙			
【実績値】			
論文掲載数 高橋裕次「宮内省管理下における博物館の活動について」(『皇室と東京帝室博物館』特集陳列図録、東京国立博物館、平成21年10月)			
調査件数 20件、写真撮影点数 1000点、データ入力点数 300点			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考						
本研究は今年度はじめたものであり、効率性がよかったとは言いがたい。調査方針を再検討する必要がある。しかし、科学研究費を使用して、協力者を増やし、より多くの情報を得ることができた。情報収集も成果を挙げることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査件数	写真撮影点数	データ入力点数		
判定	A	B	A	A		
備考						
科学研究費補助金を活用して、国内での出張調査に加えて、韓国への調査が実施できた。まだ調査対象リストを作成中であり、調査件数は20件であった。しかし、特集陳列の開催により、すみやかに関連資料の公開と、図録を作成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保護の歴史に関する資料は、東京国立博物館ほど所蔵している機関はほかにないとと思われる。その貴重な資料について全体像を把握するとともに、特集陳列で公開することができた。調査の内容をさらに充実したものにすると同時に、さらなる成果を刊行物などで公開していく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの博物館の国際交流の実績を反映して、韓国中央博物館においても調査を実施することができた。その調査を継続的に行っていく必要がある。また、国内外の関連資料を総合的に調査するために、所在情報や、調査方法について、相互に連絡を取り合っていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 隋唐時代の仏舍利信仰と莊嚴に関する総合的調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 本調査研究は隋唐時代の舍利莊嚴に注目し、その実際を美術史、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が詳細に調査し、総合的に考察を加えようとするもので、本年度は陝西省、河南省において現地調査を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島勝
【スタッフ】 松本伸之(学芸企画部長)、和田浩(保存修復課環境保存室主任研究員)、東野治之(奈良大学)、岡林孝作(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)、泉武雄・長岡龍作(東北大)			
【主な成果】 中国陝西省及び河南省において実施した現地調査によって得た内容を整理し、開催した研究集会等を通じて、隋唐時代の仏舍利信仰と莊嚴に関する検討を行なった。			
【年度実績概要】			
1. 事前調査 研究代表者加島が2009年4月に西北大学(中国陝西省西安市)に赴き、中国側研究協力者である西北大学教授王建新、冉万里らと、本年度の陝西省及び河南省内における現地調査実施に関する打ち合わせを行なった。			
2. 現地調査の実施 (1) 2009年9月に研究代表者及び研究分担者全員が参加し、中国側研究協力者の協力のもと、中国陝西省及び河南省において2週間に及ぶ現地調査を実施した。これにより両省における①仁寿舍利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舍利塔出土遺物と隋代関連遺物、③慶山寺舍利塔址出土遺物、④関連岳廟・墳墓壁画、等に関する詳細なデータを収集することができた。 (2) 2010年2月に研究代表者と研究分担者和田が、西北大学に赴き、鑑真が菩薩戒を受けた寺院として著名な実際寺址(西北大学校地内所在)出土品など関連遺品に関する科学的調査を行ない、成分組成に関するデータを収集した。			
3. 国内関連調査の実施 2010年3月に西北大学教授冉万里を招聘し、研究代表者及び研究分担者の参加をえて、岐阜県、滋賀県、京都府内において国内関連遺跡及び遺物の調査を行なう予定である。			
4. 研究会の実施 3. 国内関連調査に引き続き、研究代表者及び研究分担者、中国側研究協力者参加による研究会を開催し、本年度の調査の成果をまとめ、次年度の調査に備える予定である。			
【実績値】 研究会開催数: 1回、参加者数: 8名。 調査回数: 3回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

隋唐時代の仏舍利信仰と莊嚴の実際について、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学を専門とする研究分担者が中国陝西省及び河南省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集した。これにより、中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察をくわえる基礎が構築された。

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					

備考

研究成果については、学会や学術雑誌等への公表を順調に行うことができた。本年度開催した研究集会には 195 名の参加を得、文化的景観の課題等に関する活発な議論ができた。また参加者の内 97% の参加者から有意義であったという評価を得た。

3. 総合的評価

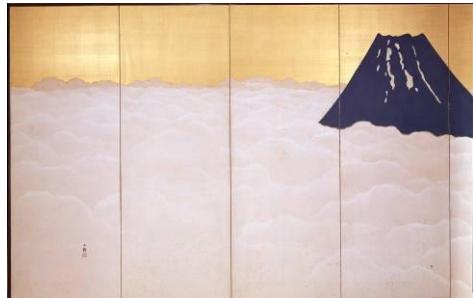
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	隋唐時代の仏舍利信仰と莊嚴の実際について、中国陝西省及び河南省において詳細な現地調査を実施し、基礎資料を収集することができた。本年度は 3 カ年の研究期間の初年度であったため、研究分担者による研究発表や発表論文はなかったが、集積された基礎的データは従来にない重要な新知見を数多く含んだものである。本年度の調査により次年度以降の現地調査が着実に実施される基礎が確立されたので、次年度以降の調査による基礎データが集積されれば各分野の研究発表及び研究論文が成果と数多くなるものと確信している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	隋唐時代の仏舍利信仰と莊嚴の実際について、現地調査や研究会等を通じて、美術史(彫刻史、絵画史、工芸史)、考古学、歴史学、保存科学的見地からのデータ収集を当初計画の通り進めることができた。本年度の成果を受け、次年度以降も、中国現地調査及び国内関連調査による基礎資料の収集とそれにもとづいた研究のとりまとめを進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する基礎的研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
【事業概要】 美術史家・矢代幸雄とも親しい関係にあった日本近代の豪商・原三溪の形成した日本近代美術コレクションは、日本美術院を中心とした美術家の代表的作品群といえる。その一つ一つの作品の基礎的な調査、および当時の制作事情とパトロンの関係、原三溪を中心とした当時の美術家ネットワーク、それらの作品の評価史を洗いなおすことが、本研究の目的である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室任期付研究員 植田 彩芳子
【スタッフ】			
【主な成果】 今年度は、原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する関連資料の収集、先行研究の整理、資料のデータ整理とデータベース化を進めた。また、昭和初年に行われた「明治大正名作展」に関する関連資料の収集、先行研究の整理、データ整理を行った。さらに、書簡調査など、基礎資料調査を集中して行うことで、次年度以降の本格的な調査研究、論文執筆に必要な基礎的作業を大幅に推進することができた。			
【年度実績概要】 今年度は、関連する情報資料の収集、先行研究の整理と問題点の整理、データ整備と新規調査のための機器の準備、および本研究の中核をなす原三溪旧蔵近代日本画のデータ整理と横山大観を中心とした調査研究を行った。具体的には、東京国立博物館・横浜美術館・三溪園・東京国立近代美術館が所蔵する原三溪旧蔵作品をファイルメーカーで画像をつけてデータベース化した。そのデータを三溪園所蔵の原三溪の購入記録である『美術品買入覚』と照合した。また、『美術品買入覚』記載の情報もデータベース化した。 これらのデータ整理を通して、従来制作年のはっきりしていないかった横山大観筆《雲中富士》(東京国立博物館、原三溪旧蔵)の制作年について、具体的な知見を得た。 また、原三溪所蔵作品が多く出品され、明治大正期の「名作」を選出した昭和初期の「明治大正名作展」について、資料を収集し、データを整備した。 これに加え、横山大観記念館の所蔵する原三溪関係書簡の調査研究を行い、具体的な知見を得た。 なお、近代日本画における横山大観の位置を大局的に考察するために、近年新たに展覧会出品作であることが確認された横山大観作品の調査を宮城県美術館で行い、具体的な知見を得た。			
【実績値】 〈調査〉 5月9日 宮城県美術館調査 7月17日～18日 京都国立近代美術館・大和文華館調査 10月16日 横浜美術館・神奈川県立図書館調査 10月23日 横山大観記念館調査 11月13日 三溪園調査 〈資料収集数〉 書籍 31冊 新聞雑誌資料 515件			
【備考】			



横山大観筆《雲中富士》部分

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

本研究は昨今の研究動向を意識しつつ、現在の多角的な研究手法の一つとして注目を集めているパトロン研究という視点から、原三溪旧蔵近代絵画についての考察を行っている。本研究では、原三溪一人に限らず、細川護立などの同時代の他のコレクターによる活動も視野に入れつつ、明治大正期の美術を包括的に捉えなおす試みであり、発展性・拡張性がきわめて高い。上記項目についていずれも十分な成果を挙げることができたと考えられる。

2. 定量的評価

観点	資料収集数	調査回数				
判定	A	B				

備考

通常業務の繁忙のため、今年度予定していた調査が制約された。しかし、今年度の研究に最低限必要な調査は実施でき、資料収集も順調に行うことができた。充分な成果を挙げることができたと考えられる。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	原三溪旧蔵近代絵画・彫刻を対象とした調査研究や情報の収集などを十分実施できた。これらの成果を踏まえつつ、今後も引き続き情報収集や調査研究を通じて、原三溪ひとりの問題に関わらず、広く日本近代美術におけるパトロン研究という視点から考察を図っていく。特に、「明治大正名作展」に関しては、明治大正美術を包括的に見直す試みでもあり、次年度以降もこれを継続していくべきであると判断される。さらに、次年度においては、今年度の調査の結果を踏まえた上で、研究成果の公表等も目指していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する調査や研究等は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できた。本年度の成果を受け、次年度以降は、「明治大正名作展」や原三溪旧蔵近代絵画・彫刻に関する調査研究のとりまとめを進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査および研究の推進		
プロジェクト名称	22) 高度な復元作業のための制作空間の情報化(科学研究費補助金) ((5)-①-i)		
【事業概要】 工芸文化財デジタルデータの活用法について、復元職人の実制作空間の情報化を行うことにより、従来にない視点から文化財閲覧デバイスを開発することを目的とする。復元作業に精通した職人の制作空間を参考にすることで、制作者の作業意図や技能に合わせた文化財デジタルデータ閲覧デバイスの開発について考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 河内 晋平
【スタッフ】			
【主な成果】 復元職人(上野修路)が作業前に行う文化財の調査風景、調査状況のビデオ記録の編集解析をおこなった。ビデオ記録時間は編集後、約7時間(400分)となり、現在それらの編集映像のデータベース化を開始している。 また、タッチディスプレイや3Dディスプレイ、映像インターフェースなどの調査を行い、次年度の閲覧デバイス設計のための基礎調査をおこなった。			
【年度実績概要】 1. 復元職人が作業前に行う文化財調査の状況解析 約7時間(400分)の映像記録編集調査データとともに、計測箇所、閲覧場所、閲覧時間等のカテゴリに分類した。現在これらの編集映像のデータベース化を進めている。 (右写真は編集映像キャプチャ画像)			
			
2. 閲覧デバイス開発の基礎調査 3Dディスプレイやタッチディスプレイなどの映像閲覧デバイスについて、株式会社アスナへの訪問や画像先端機器展などに出席し、文化財閲覧デバイスのための情報収集をおこなった。 インターフェース以外のコンテンツ表示やビューアーについてのプログラム作成にとりかかる。			
3. 文化財デジタルデータ取得の検討 次年度開発する閲覧デバイスでの文化財データの取得に伴い、撮影手法、映像編集プログラムの検討を行った。撮影手法に関しては、デジタル一眼レフカメラを使用した3Dデジタルデータ取得に関して実験を行った。また、映像編集プログラムに関しては、processingなどの言語をはじめとして、3Dmax、mayaなどのソフトを用いた方法について検討した。			
【実績値】 復元職人の文化財調査の状況解析 映像記録編集調査データ約7時間(400分)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

文化財閲覧に関するデジタルデータの活用法については今後必要となってくる分野であり、当研究を通じ、文化財デジタルデータについて職人が活用できるデータという視点から考察していくことは、文化財復元や文化財閲覧の新たな方向性を示す上でも有効であり、将来に結びつく重要な情報の取得ができた。

2. 定量的評価

観点	情報収集					
判定	A					

備考

情報収集に関しては予定していた職人への調査動画を十分に解析し、7時間ほどのデータ編集ができた。研究初年度での基礎データ収集ということもあり、論文等の発表は行っていない。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	復元職人が文化財復元に際して実際にどのような情報を必要としているのかについての調査を実施できた。これらの成果を踏まえつつ、今後も制作者である職人の視点に関する調査研究を通じて、文化財閲覧時の必要情報について検討を引き続き図っていき、それらの結果をデジタル閲覧デバイス開発に活かしていく。特に、制作者である職人の視点について考察することは新たな文化財情報提示の可能性があると考える。今後、より多くの制作者の意見を収集し、閲覧デバイス開発に活かしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	復元職人が復元作業を行う前に必要とする情報について記録映像から取得することができた。より細かな部分に至るまでの情報を取得するためにも、映像記録とその編集を継続し、他の職人に対しても調査を行っていきたい。デジタルデータ編集プログラムや閲覧デバイスのハードウェアについても実際に運用されている状況を体験することができ、次年度の開発に向けある程度の方向性が決まった。 次年度実際に閲覧デバイスとしてデジタルデータを編集する際に、再度復元職人を交えて考察することが必要となる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23) 狩野晴川院養信筆「法隆寺什物図」の研究(科学研究費補助金) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 江戸末期の幕府御用絵師・狩野養信は、古画・古絵巻の模本制作に積極的に取り組んだと知られているが、それ以外に寺社宝物の模写もしており、東京国立博物館の所蔵する「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」と「法隆寺什物図」は代表作例と言える。既に報告書の刊行にまで至っている前者と合わせることで、今後、養信による寺社宝物模写の全容を明らかにできるよう、まず本研究では後者の基礎的な調査研究を目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 安藤 香織
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、「法隆寺什物図」の基礎データをそろえる第一歩として、全巻の写真撮影を行い、合わせて翻刻のための部分写真も撮影した。同時に、全巻の計測・細部の観察も行った。また、作品の具体的な考察へ向けて、調査で得た情報を整理し、表として整備する作業に着手した。			
【年度実績概要】 1、「法隆寺什物図」(全11巻)撮影 調査を効率的に行い、かつ今後の幅広い研究に使用できるよう写真撮影を行った。その際、撮影担当のカメラマンと作業補助のための協力者に作業を依頼し、利便性と普及性を考えて、当館における基本的な撮影条件を満たすかたちで全巻を撮影した。			
<p>2、「法隆寺什物図」調査 全巻の計測と、描かれている宝物の特定を行い、なつかつ後の翻刻作業に役立てるため墨書の注記(添え書き)部分の写真撮影を行った。また、後の絵画的考察に必要であるため、技法(彩色・白描、あるいは拓本など)や描法に注目しながら、細部の観察を進めた。</p> <p>3、表作成と翻刻 基本的な情報の整備という観点から、表の作成と翻刻を行った。表は、描かれた宝物名、各宝物が何点の図で構成されているのか、担当した模倣者名、現存する法隆寺宝物の有無などを一覧に示した。翻刻は、本作品にみられる墨書、すなわち宝物の名前や担当画家、模写年月日、その他の注記を対象とした。</p>			
 <p>撮影の様子</p>			
【実績値】 調査・撮影日数：6日(協力者：撮影者1名、撮影補助1名、調査補助1名) 撮影枚数：360枚 情報整理・入力日数：12日(協力者：1名)			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A

備考

独創性をBとしたのは、撮影・調査・情報整理のみを終えた現段階における評価である。今後、具体的な考察へと研究段階を進めることで、十分な成果を得られると考える。この他の観点に関しては、撮影・調査いずれも順調に終了し、発展的考察への準備が整ったという意味で成果はあったと評価する。

2. 定量的評価

観点	撮影・調査回数	撮影枚数	情報整理・入力日数	協力者数	
判定	A	A	A	A	

備考

撮影・調査は、作業を確実かつ安全に遂行するのに必要な回数を確保でき、予定通り終了した。また撮影枚数、作業協力者三名も適当であったと考える。協力者1名に作業を委託した、撮影・調査後の情報整理・入力も、協力者数、日数ともに過不足ないものであった。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「法隆寺什物図」を研究するための基礎的な情報収集作業として、撮影・調査・情報整理を順調に終えることができた。次年度は、今年度の成果を大いに活用しつつ、研究を進めたい。また今年度、改めて必要性を感じたのが、周辺作品の調査である。「法隆寺什物図」の考察に取り組むと同時に、同筆の「高野山学侶宝蔵古器及楽装束図」やその他模写作品にも目を向けて、調査・撮影を継続できるよう努力したい。そして以上を踏まえ、充実した情報とともに「法隆寺什物図」を広く紹介できるよう、研究成果の公表を目指す所存である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	当初の計画では、養信筆『公用日記』中に「法隆寺什物図」関連の記事があるか確認・翻刻する作業は今年度行う予定であったが、撮影・調査・情報整理を優先させた結果、これは次年度行うこととした。上記以外は順調に計画を達成しており、次年度へ向けた準備を整えることができた。引き続き研究計画に基づき、模写の手順・技法の検討や、周辺作品との比較など、具体的な考察に取り組みたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	24) 東京国立博物館所蔵写真資料データベース(科学研究費補助金) ((5)-(1)-iii)					
【事業概要】						
東京国立博物館では、江戸時代末から昭和初期にかけて撮影された 15,000 点余りにのぼる写真資料を所蔵している。これらの写真資料については、以前より外部の機関や研究者から利用の要望があるにもかかわらず、画像を簡便に確認するすべがなかった。本事業は画像データベースを作成し、各分野に寄与できる研究資料としてウェブ上で一般に公開することを目的とする。						
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 富田淳			
【スタッフ】						
富坂賢(調査研究課書跡・歴史室長)、高梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員)、藤瀬雄輔(列品管理課列品情報整備室員)、関紀子(調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)						
【主な成果】						
これまで未整理であった写真資料を整理し、公開することができた。また、本事業の成果として、平成 22 年 5 月 24 日～7 月 4 日に「清朝末期の光景—小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真—」の特集陳列を行う。						
【年度実績概要】						
『東京帝室博物館美術課列品写真目録』(大正 8 年刊行)、『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真資料目録 1 ~3』(平成 11・12・14 年刊行)に基づき、写真資料の撮影およびデータ入力を行った。今年度は明治 4 年に横山松三郎によって撮影された旧江戸城写真東京国立博物館の草創期を伝える湯島聖堂、山下門内、浅草文庫や、サウスケンシントン博物館やウィーン博物館、アメリカ自然史博物館等外国の博物館、明治 14 年の内国勧業博覧会や文久元年の第一回遣欧使節や文久三年の第二回遣欧使節、また勝海舟や岩倉具視、皇帝ヴィルヘルム一世やリチャード・ワグナーなどの国内外の人物写真、中国やインドなどの景観・風俗写真を対象とした。撮影は写真資料の体裁、装丁を明らかにするため、全紙撮影、台紙の裏面、またアルバム等では表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影を原則とし、文字データは画像番号、名称、撮影者、法量、品質形状、時代、員数、墨書、備考(題箋、付箋、印章、特記事項)について制作した。また、検索システムでは、上記の項目による詳細検索のほか、新たに分類別検索を設け、撮影場所、アルバム名、撮影者からの検索を可能とした。						
【実績値】						
○データ作成件数 4,200 件 (主な作品内訳) 旧江戸城 42 件 明治 4 年展覧会写真帖 54 件 第 1 回・第 2 回遣欧使節 30 件 澳國維府博覧会出品撮影 264 件 鹿児島景勝 35 件 卑露国リマア都之景 61 件 伊太利亞国ベニース夜景 20 件 べる一人写真帖 155 件 中国風俗写真 1598 件 法隆寺金堂壁画 151 件 など ○公開画像 4,462 画像						
【備考】						
「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/)、東京国立博物館所蔵古写真 WEB データベース」(http://dbs.tnm.jp/kaken/oldphotos.html)						



横山松三郎撮影 明治 4 年
「江戸城本丸書院二重櫓・重箱櫓」

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考	台紙全紙、裏面、表紙、見返し等の撮影も行い、これまで問い合わせが多かった台紙張りの状態やアルバムの装丁、文字データが確認できるよう、撮影に配慮した。					

2. 定量的評価

観点	データ作成件数	公開画像件数				
判定	A	A				
備考	予定数4,200件を超える画像を公開することができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブ上での画像データベースの公開も一般に知られるようになり、館外からの問い合わせも増えつつある。 撮影は完了し、次年度中には全画像の公開を予定している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	4年計画の最終年度であり、事業計画はほぼ達成できた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	25) 東京国立博物館所蔵古文書データベース(科学研究費補助金)((5)-①-iii)					
【事業概要】						
文部科学省科学研究費補助金(公開促進費データベース)を利用して、東京国立博物館で所蔵する古文書について、書跡収蔵品を対象に調査を実施。古文書学によって記載内容の検討、形式・様式の分類、使用された料紙の素材分析を行い、1通ごとの古文書名称の特定、法量計測、写真撮影など基礎データを収集した。記載された文字を翻刻し最終的に画像とテキストを統合したデータベースを東京国立博物館情報アーカイブスで公開する。						
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課ボランティア室主任 研究員 高梨真行			
【スタッフ】 高橋裕次(博物館情報課長)、丸山猶計(九州国立博物館学芸部文化財課資料登録室主任研究員)						
【主な成果】 当館書跡列品の内、B1721 諸寺院文書、B1854-1875 白河結城家伝来文書、B1773 里見家伝来文書、B1829 堀部家伝来古文書などの古文書群、B1761 三島神社文書などの古文書写に加え、B1627 古文書、B1719 古文書、B1898 松平定信書状、B1913 徳川頼宣書状、B1932 徳川斉昭書状、B2034 毛利家家老連署申渡書、B2035 毛利就隆任官状、B2045 徳川家康書翰などの掛幅装の古文書のデータベース化を完了。						
【年度実績概要】 平成19年度および20年度に行った古文書調査におけるデータを基礎として、下記対象古文書について、古文書名検討、差出・宛所の特定、作成時代特定、様式・検討、料紙・内容分析、釈文翻刻、1点ごとの写真撮影を行った。						
   B1680 白河結城家伝来文書 (足利義満御判御教書)1幅 B2034 毛利家家老連署申渡書 1枚 B2045 徳川家康書翰 1幅						
【実績値】						
○調査件数 総計 40 件 214 レコード 506 カット ・古文書1通を1レコードとする。 ・1レコードは古文書、差出・宛所、年代、様式、料紙・内容、釈文と数カットの本紙画像で構成 B-1721 諸寺院文書 全2巻 →42 レコード、48 カット画像撮影 B1854-1875 白河結城家伝来文書 全1幅・22枚 →64 レコード、59 カットの画像撮影 B1773 里見家伝来文書 全8巻 2枚 →12 レコード、20 カットの画像撮影 B1760 日御碕文書 全2巻 →26 レコード、38 カットの画像撮影 B1829 堀部家伝来古文書 全1冊・20枚 →21 レコード、116 カットの画像撮影 B1761 三島神社文書 全1巻 →25 レコード、29 カットの画像撮影 B1627 古文書 全9幅 →9 レコード、21 カットの画像撮影 B1719 古文書 全3幅・1巻 →8 レコード、19 カットの画像撮影 B1720 古文書 全1幅・18枚 →19 レコード、59 カットの画像撮影 B2016 髪結床壳渡証文 全12枚・1個 →18 レコード、30 カットの画像撮影 B1780 古文書 全1幅 →3 レコード、8 カットの画像撮影 B1898 松平定信書状 全1幅 →2 レコード、4 カットの画像撮影 B1913 徳川頼宣書状 全1枚 →1 レコード、3 カットの画像撮影 B1932 徳川斉昭書状 全1枚 →1 レコード、5 カットの画像撮影 B1974 條目請印帳 全1冊 →1 レコード、28 カットの画像撮影 B2008 松平楽翁自警 全1枚 →1 レコード、2 カットの画像撮影 B2034 毛利家家老連署申渡書 1枚 →1 レコード、4 カットの画像撮影 B2035 毛利就隆任官状 全1枚 →1 レコード、2 カットの画像撮影 B2045 徳川家康書翰 全1幅 →1 レコード、2 カットの画像撮影 ○論文等 特集陳列「戦う武士の世界」21年6月24日～7月20日、列品解説 21年7月7日「戦う武士の世界」						
【備考】 本成果は当館情報アーカイブス上「東京国立博物館所蔵古文書データベース」にて2010年6月公開予定						

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
古文書の重要な項目である文書名の付与と文字内容のテキスト化に成功した。また公開を前提とした比較的精細度の高い画像による撮影が実施し得た。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査件数				
判定	B	A				
備考						
科学研究費補助金を活用して、恒常的に調査・研究を行うとともに、前年度までに実施した当館における特別調査「書跡」(古文書)の成果も取り入れ、公開の促進につながったことは大きい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨今、博物館等の研究機関で収蔵する資料データの公開は必須となっている。外部研究者によるニーズにとどまらず生涯学習機会の増加から、学生はもとより多くの層からの利用が期待できる。古文書の画像と訳文を総合化した本データベースの公開によって、国民全体の資源としての有効利用に資することができたと判断される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今日韓国の各機関で所蔵する朝鮮王朝時代の王や大臣による古文書、そして中国清朝による奏折とよばれる行政文書の研究進展には目覚しいものがある。昨年度より継続して、漢字を利用した古文書というアジア圏に共通する題材を、科学的研究補助金の導入によって調査・研究を実施し、データベースという形で公開を促進できたことは、法人全体としての計画にある「我が国における博物館のナショナルセンターとしての機能の強化」および当館の年度計画にある「博物館情報アーカイブを運用し、収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る」という事項に対応した、一定の成果として位置づけられるのではないかと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	26) 東京国立博物館所蔵印譜データベース(科学的研究費補助金) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 東京国立博物館では、昭和 51 年に横田実氏から漠南印譜コレクションを、平成 14・15 年の両年度には、小林斗盦(庸浩)氏から懐玉印室コレクションの寄贈を受けた。歴代の主要な印譜を網羅するこれらのコレクションには、製作部数の少ない原鈐本や、編者自らが注記を書き加えた本地中国でも見ることのできない稀観本が多数含まれている。これらの印譜は内外からの閲覧希望が多いにもかかわらず、保存上の問題から、必ずしも十分な公開が行われていない。本事業では、これら東京国立博物館が所蔵する中国古銅印譜・中国近人印譜・日本近人印譜およそ 2,300 件約 7,500 冊の画像データベースを作成することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室 任期付研究員 関紀子
【スタッフ】 富田淳(調査研究課長)、高梨真行(調査研究課書跡・歴史室研究員)			
【主な成果】 小林斗盦(庸浩)氏寄贈による懐玉印室コレクションのうち中国古銅印譜について撮影を行い、データを入力した。平成 22 年 6 月に「東京国立博物館情報アーカイブ(http://webarchives.tnm.jp/archives/)において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベース」として公開予定である。			
【年度実績概要】 平成 21 年度は、平成 14 年に小林斗盦(庸浩)氏から寄贈を受けた懐玉印室コレクションのうち、吳叡『吳氏印譜』や顧從徳『集古印譜』、甘暘『甘氏集古印正』など中国古銅印譜の撮影およびデータ入力を行った。本データベースの撮影は、印譜の体裁、装丁を明らかにするため、表紙、見返し、白紙を含む全頁撮影、半丁 1 カットを原則とし、レコード数は半丁 1 カットを 1 件とする。また、データの項目は、画像番号、資料番号、名称、作者・編者、時代、員数、形質、法量、備考である。			
【実績値】 ○データ作成件数 14,029 件 (内訳) 吳叡 吳氏印譜 明時代・15~16c 110 件 顧從徳 集古印譜 明時代・万曆 3 年(1575) 552 件 甘暘 甘氏集古印正 明時代・万曆 24 年(1596) 414 件 甘暘 集古印譜(朱墨揭) 明時代・万曆 24 年(1596) 546 件 来行学 宣和集古印史 明時代・万曆 24 年(1596) 574 件 潘雲木 集古印范 明時代・万曆 35 年(1607) 676 件 羅王常 秦漢印統 明時代・万曆 36 年(1608) 668 件 など ○公開画像 15,501 画像			
【備考】 「東京国立博物館情報アーカイブ」(http://webarchives.tnm.jp/archives/)において、東京国立博物館所蔵印譜 WEB データベースとして平成 22 年 6 月から公開予定。			



顧從徳『集古印譜』

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考	表紙、見返し、裏表紙、序文、跋文等の撮影も行い、装丁の状態や、文字データが確認できるよう、撮影に配慮した。					

2. 定量的評価

観点	データ作成件数	公開画像数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定画像数 14,000 を超える 15,501 画像の撮影とデータ入力を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	5 年計画で、撮影、データ入力は概ね順調に進んでいる。 23 年度もこのペースを維持しつつ、撮影をすすめ、あわせて諸データの充実をはかり、より完備されたデータベースとして公開したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	27)明治時代の宝物調査における写真資料に関する調査—横山松三郎、小川一眞、早崎稟吉、安村喜当の事跡を中心に— ((5)-①-ⅲ)		
【事業概要】 東京国立博物館では江戸末から昭和初期にかけて撮影された写真資料を 15,000 件あまり収蔵する。『東京国立博物館所蔵幕末明治期写真目録』の刊行や古写真WEBデータベースにより、多くの写真が公開されるにいたったが、未だ充分な調査研究が進んでいない状況にある。本事業では当館が収蔵する写真資料のうち、横山松三郎、小川一眞、早崎稟吉、安村喜当の 4 人の写真師に焦点をあて、彼らが手掛けた宝物調査に関する撮影についての調査を進め、特集陳列や図版目録の作成に寄与できる研究を目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室長 富坂賢
【スタッフ】 関紀子(調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)			
【主な成果】 鄭州から西安に至る行程、杭州・紹興、上海、北京で現地調査を行い、宝物調査で撮影された写真資料と対照できる画像を撮影した。また、茨城県天心五浦美術館において早崎稟吉の日記を調査し、写真が撮影された状況を検証した。これらの成果により、平成 22 年 5 月 24 日～7 月 4 日に「清朝末期の光景—小川一眞・早崎稟吉・関野貞が撮影した中国写真—」の特集陳列を行う。			
【年度実績概要】 本事業では、明治時代に行われた文化財調査での記録写真に注目し、本館収蔵写真に関わる横山松三郎、小川一眞、早崎稟吉、安村喜当の事績を追う。今年度は、明治 34 年(1901)に東京帝国大学の調査で北京城を撮影した小川一眞と、明治 36 年(1903)に中国に渡り、龍門石窟や西安周辺の史跡の撮影を行った早崎稟吉、元当館職員であり明治 30 年代に近畿から関東の宝物写真を撮影、後に自費で中国に渡り、北京、上海、南京、杭州の写真撮影を行った安村喜当が撮影した写真のうち、鄭州から西安に至る行程、杭州・紹興、北京で撮影された写真について実地調査し、撮影された場所の特定と現状との比較を行い、写真撮影を行った。 鄭州から西安に至る行程では、函谷関、龍門石窟、熊耳山、白馬寺、潼關、石空寺等(早崎稟吉)、杭州・紹興では、西湖・蘭亭・東湖・禹廟(安村喜当)、北京では五塔寺(安村喜当)、紫禁城(現故宮博物院)、景山公園、北海公園、雍和宮(小川一眞)を調査し写真撮影を行った。 また、茨城県天心五浦美術館にて早崎稟吉の日記を調査し、写真が撮影された状況を検証した。			
【実績値】 ○鄭州から西安に至る調査：函谷関、龍門石窟、熊耳山、白馬寺、潼關、石空寺などを調査… 945 画像撮影 ○杭州・紹興調査：西湖、蘭亭、東湖、禹廟などを調査… 359 画像撮影 ○北京調査：紫禁城(現故宮博物院)、景山公園、北海公園、雍和宮、五塔寺などを調査… 1316 画像撮影 ○茨城県天心五浦美術館調査：早崎稟吉の明治 35 年～39 年の日記を調査… 545 画像撮影			
【備考】			



「禹門口」

早崎稟吉撮影 明治 38 年

平成 21 年 8 月現在

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考	これまで、あまり知られていなかった写真資料に注目し、写真が撮影された状況を、他機関が収蔵する資料から検証できた。					

2. 定量的評価

観点	調査回数	写真撮影件数				
判定	A	A				
備考	平成 22 年 5 月 24 日～7 月 4 日に「清朝末期の光景一小川一眞・早崎梗吉・関野貞が撮影した中国写真」の特集陳列を行う。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現地調査によって、すでに失われたものや、撮影当初とは異なる状況など、被写体の現状を確認することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	2 年計画の最終年度であり、計画はほぼ達成できた。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-28

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 古文書および古典籍の修復と装幀形態に関する用語の研究(科学研究費補助金)((5)-①-iii)		
<p>【事業概要】 紙文化財の修復技術に関して、用語・名称に着目して研究を行うものである。紙文化財の修復技術には様々な系統があり、それぞれの系統によって、手法・工程、道具、材料をはじめ、用語・名称が異なっていることがある。そこで、工程全体の流れ、手法・各工程の内容と名称、道具と材料の使用法や名称を調査して分類することにより、紙文化財および無形文化財である装こう(表具、表装、装丁)技術に対する理解をより深めることを目的とする。</p>			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
<p>【スタッフ】 加藤雅人(代表者)、川野邊 渉、稻葉政満、半田正博(東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター教授)</p>			
<p>【主な成果】 東京国立博物館に収蔵されている古典籍・古文書を中心に、形態、料紙などについてデータを収集した。また、料紙の製作技法に関する成果の一部を、全国漢文教育学会の『新しい漢字漢文教育』第49号において公開した。</p>			
<p>【年度実績概要】 調査対象とすべき作品を選定し、その装丁形態、使用している料紙の種類や材質などについて調査を実施した。デジタルカメラや顕微鏡を用い、細部にわたって記録撮影を行った。そのデータにもとづき、作品の構造や、過去の修理において施された手法・工程などを検討した。</p>			
<p>【実績値】 論文掲載 高橋裕次「漢籍善本紹介－東京国立博物館(1)－」『新しい漢字漢文教育』第49号、全国漢文教育学会、平成21年11月 調査回数 3回、調査件数 15件</p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考						
作品の構造を具体的に検討し、その手法・工程などを明らかにする点で成果があった。今後、用語・名称などの情報の照合について作業を進めていく必要がある。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	調査件数	収集資料数		
判定	A	B	A	A		
備考						
東京国立博物館には、古典籍・古文書がまとまっており、時代や種類なども多岐にわたっている。調査回数は3回であったが、作品15件について調査を作成し、所定の成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後、調査の内容を充実させるとともに、さらに成果をまとめていく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査を継続的に行い、総合的に検討するために、内外の関連資料などの情報を収集していきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	29)金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 文部科学省科学研究補助金基盤(C)金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究(研究代表 金沢文庫主任学芸員永井晋)の研究分担者として、室町時代以降の文献収集を担当。下総国下河辺庄の文献研究・地誌研究を行う。同地に関する古文書・記録等収集と編年的整理。近世・近代に伝わる中世文書に関する地誌類の精査。寺社・城館跡・遺跡・文化財・古地図・航空写真・都市計画図などによる中世的景観の復元。中世利根川の流路・水路・水量・水運・に関する調査と分析などを行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課ボランティア室主任研究員 高梨 真行
【スタッフ】			
【主な成果】 室町から江戸時代(15~17世紀)にかけての下総国下河辺庄(埼玉県吉川市・春日部市・庄和町・松伏町, 千葉県野田市, 茨城県古河市・五霞町)の支配に関連する古文書・古記録など文献資料を収集した。特に在地領主戸張氏の変遷が解明できた。			
【年度実績概要】 下総国下河辺庄に関する中世(戦国~安土桃山時代)の文献収集 平成21年8月20日 金沢北条氏領下総国下河辺庄の総合的研究にかかる報告書についての検討会実施 於横浜市・神奈川県立金沢文庫 平成21年11月 1日 旧下河辺庄域野方地区(茨城県古河市)巡見フィールド調査実施 関戸地区(関戸宝塔・建治5年板碑・小堤城跡/円満寺・正定寺・旧金剛院), 水海地区(三島神社・旧戒光寺跡・前林郷両新田地区・安禅寺築田氏墓所・旧鎌倉街道中道周辺・字凍ノ山地区・水海城跡) 古河地区(中世古河城跡/頼政曲輪跡・近世古河城跡/諫訪曲輪跡・中世古河城下町地区・古河公方鴻巣御所跡)			
   安禅寺中世梁田氏墓所 旧积迦沼・水海沼・水海城跡遠景 古河公方鴻巣御所跡			
平成21年12月12日 旧下河辺庄域野方・河辺地区(茨城県五霞町, 千葉県野田市)巡見フィールド調査実施 栗橋城跡の周辺, 法宣寺・香取神社・若宮八幡宮 関宿城本丸跡, 大手門跡, 関宿関所跡, 昌福寺, 宗秀寺, 旧関宿城下町石垣, 関宿藩刑場跡, 千葉県立関宿城博物館			
  栗橋城跡近景 関宿城本丸跡			
平成22年3月6日 前ヶ崎城址・守谷城跡巡見フィールド調査 平成22年3月12日 報告書編集会議 於神奈川県立金沢文庫 平成22年3月28日 戸張城跡(柏市戸張地区)巡見フィールド調査			
【実績値】			
収集文献 中世史料(室町~戦国時代) 古文書35通, 系図3件 関連論文・著書 12本			
実地調査 11月1日調査 関戸地区・水海地区・古河地区巡見調査 確認 8箇所16項目 撮影画像83カット 12月12日調査 栗橋城跡・関宿城跡・旧関宿城下町巡見調査 確認 10箇所18項目 撮影画像61カット 3月6日調査 前ヶ崎城址・守谷城跡巡見 確認 2箇所22項目 撮影画像104カット 3月28日調査 戸張城跡・香取神社 確認 2箇所 10項目撮影画像40カット			
調査内容の概報 高梨真行「中近世移行期の戸張氏 一市域の在地領主層の動向と変遷(続編)」(『吉川市史編さんだより』16号, 2009年11月, 吉川市教育委員会) 高梨真行「戦国期下河辺庄域の領主支配と変遷」(科研報告書掲載論文, 2010年3月)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	B	B	A

備考

実地調査によって、下河辺庄に属した現在の地勢についての大まかな理解につながった。また戸張氏という同地域内に室町時代から江戸時代にかけて活躍した在地領主の調査・研究が進められ、その成果を吉川市における自治体史編纂事業に活用することで、研究成果の地域への還元・公開が図れたと判断できる。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	収集文献			
判定	B	A	A			

備考

実地調査は下河辺庄に属した現在の地勢についての大まかな理解を目的とする。その結果と収集した史料や関係論文や著書等の文献情報との総合化を図った上でかつての庄域の把握を目指すため、両者の平行実施が不可欠である。その為、論文等でのコンスタントな報告や成果の定量評価が困難な点が認められた。

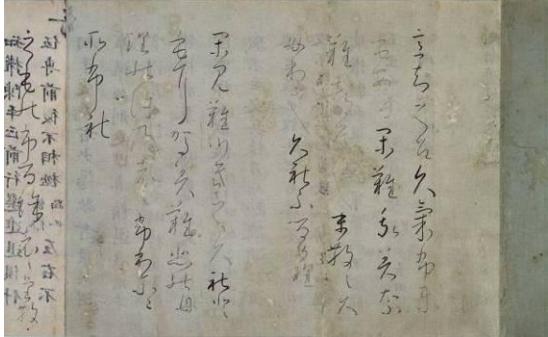
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度からの成果をうけ、本年度実施の現地調査を通して、関連文献情報と現在の地勢的な情報との総合化が図られたと判断される。室町から江戸時代にかけての当該地域の歴史的変遷と地勢の変化も一応の把握が完了したと思われる。また地方自治体史編纂事業での本研究情報の提供と活用によって地域への一定程度の還元が可能となったと思われる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究における中世庄園の旧域における現況の地勢調査と文献資料との総合化による情報統合は、文化財文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観の保全につながるものと考えられる。急速に失われつつある首都圏近郊地域の景観の変遷と現状の把握はその底辺をなすものと判断される。地方自治体史編纂を通じた研究成果の還元は、景観を文化財とする意識の普及にもつながると思われる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	30) 東アジアの書画料紙における装飾加工と保存に関する総合的研究((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究では、日本・中国・韓国を中心とした東アジアの書画料紙について、作品の歴史的背景の研究をはじめ、科学的な分析方法を用いることによって、料紙の製作技術を解明するとともに、保存状態などから、料紙の保存法や、修理の際の基本方針を検討することを目的とする。そして、書画料紙の加工技術がいかにして伝播し、派生していったかなど、総合的な考察を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋 裕次
【スタッフ】			
【主な成果】 東京国立博物館の所蔵作品を中心に、国内外の資料の情報を精査し、調査対象となる作品のリスト作成と選定を行い、書画料紙基礎データベースを構築した。さらに、調査では料紙の材質、製法や、保存状態などから、書画料紙の加工技術の変遷などを考察した。			
【年度実績概要】 1. 書画料紙の調査 国内に所在する書画料紙のなかから、作品を選定し、デジタルカメラと顕微鏡を併用することで、料紙の材質や加工法など、細部にわたって記録撮影を行った。7世紀より13世紀までの写経や文学作品などをはじめとする日本・中国・韓国の料紙を対象に、データを収集し、装飾料紙の加工技術のあり方を検討した。			
			
【実績値】 <input type="radio"/> 論文数等 高橋裕次「朝廷と料紙—図書寮紙屋院を中心に」(特別展『皇室の名宝』図録、東京国立博物館、平成21年10月)			
<input type="radio"/> 調査回数 5回 <input type="radio"/> 調査件数 35件 <input type="radio"/> 収集資料数 200点			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
調査機器の改良による安全性の確保と同時に、材質・保存状態などの情報を収集するための方法において、進展がみられた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	調査件数	収集資料数		
判定	A	B	A	A		
備考						
調査回数は5回であったが、35件の作品について精査したことで、多くの新知見を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東アジアの書画面紙の材質、技法、保存状態などを検討し、加工技術について、一定の成果をあげることができた。今後、調査の内容をさらに充実させるとともに、成果をまとめていく方針である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査は当初の計画にそって順調に進んでおり、その成果を、今後の図版目録の刊行や、特集陳列などに役立てていきたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-31

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	31)東京国立博物館所蔵ラグーザ寄贈資料の研究((5)-①-iii)		
【事業概要】 工部美術学校のお雇い外国人、イタリア人彫刻家ヴィンチェンツオ・ラグーザ(1841-1927)が、帰国前に東京国立博物館に寄贈した118件の美術品の詳細調査。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 土屋裕子
【スタッフ】			
【主な成果】 これまで、ほとんど知られてこなかった東京国立博物館のラグーザ寄贈関連作品を整理し、イタリアでの現地調査なども加わり、より詳細な情報提供が可能となった。成果として全容は、平成22年3月発行の第45号東京国立博物館紀要に掲載される予定である。			
【年度実績概要】 1. ラグーザ寄贈関連の作品調査 物質的側面の詳細な観察、撮影、作品リスト作成、作品の状態に応じて、対症修理を行った。 2. イタリアにおける歴史的側面の情報の収集 ラグーザらが将来した工部美術学校の教材などのルーツおよび、教育カリキュラムについての由来などの調査およびラグーザら教師の作品調査のため、ローマ、トリノ、ミラノ、ピアченツア、パレルモの関連機関を訪問し、関係者へのインタビューや情報交換を行った。 3. 研究成果の公表 「ヴィンチェンツオ・ラグーザによる帝国博物館への寄贈品の発見—東京国立博物館蔵 工部美術学校の教材および習作を中心として—」 (平成22年3月発行予定『東京国立博物館紀要 第45号』)に掲載予定			
 油彩画の応急修理			
 ラグーザらが将来した石膏像 を販売した石膏店（ミラノ）			
【実績値】 論文数：1件(①) 調査回数：1回			
【備考】 ①「ヴィンченツオ・ラグーザによる博物館への寄贈品—東京国立博物館蔵 工部美術学校の教材および習作を中心として—」(平成22年3月31日『東京国立博物館紀要 第45号』)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

これまで国内外に知られてこなかったラグーザ自身による博物館への作品寄贈が明らかになった。さらに、東京国立博物館の文化財の出納記録でもっとも古い『列品録』の調査を進めることで、これまで不明であった、工部美術学校(現在の東京大学工学部建築学科)から博物館への作品の管理換えの実態、さらに博物館から東京美術学校(現在の東京藝術大学)への流れが明らかとなり、国内外の研究者に新たな情報提供となることが期待される。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数				
判定	A	A				

備考

研究成果については、平成 22 年 3 月発行の第 45 号東京国立博物館紀要に掲載の予定。さらに、東京藝術大学が秋に開催するラグーザに関する展覧会において、一部成果が公表される。将来的には、東京国立博物館にて特集陳列を開催し、情報発信したい。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	保存修復の立場から、作品の保存状態観察を含め、作品を物質的な面から捉えることはもちろんのこと、博物館の台帳、出納帳におよぶ調査、イタリアでの現地調査を行い、ラグーザ関連資料に関するより詳細な情報を得ることができた。平成 20 年度に一部を紹介した展覧会により、ラグーザ寄贈品の中の貴重な作品は、イタリア本土のラグーザ研究者の知るところとなり、それをきっかけに、イタリアの研究者との連携関係も確立しつつある。この研究結果は、これまで不明とされてきた工部美術学校関連事項について、多くの情報をもたらし、外部専門家などの評価も高く、今後の研究に役立つものとなると判断される。さらなる歴史的側面の解明、イタリアでのさらなる詳細な調査を行うことも必要であるが、外部の専門家とコミュニケーションをとりながら、保存修復専門の立場を機軸として、情報発信を目指していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は単年度の申請によるものである。研究そのものは、紀要および特集陳列というかたちで、公表し、とにかく情報を外部に発信することに努めたい。

【書式B】

(様式 1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-32

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	32) 曹洞宗寺院に伝来した中世彫刻の調査及び研究 ((5)-(1)-ii)		
【事業概要】 従来、研究蓄積のきわめて少ない曹洞宗の寺院に伝来した中世の彫刻を調査・研究し、禅宗寺院を介した中国文化との交流の歴史を解明する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	教育普及室長 浅見龍介
【スタッフ】 岩佐光晴(上席研究員)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、桑原英文(カメラマン)			
【主な成果】 曹洞宗大本山永平寺と、道元が永平寺開創前に開いた京都・興聖寺、福井・吉峰寺を調査。永平寺に、従来知られていなかった中世彫刻 7 件(鎌倉時代 2 件、南北朝時代 5 件)を見出し、精査、撮影を実施した。			
【年度実績概要】 平成 21 年 6 月 22 日 永平寺の事前調査。仏殿、法堂、三門とその楼上、聖宝閣(宝物館)および収蔵庫の仏像を見て歩く。このうちすでによく知られている法堂観音菩薩坐像(平安時代作)を除き、仏殿本尊三世仏坐像 3 身、伽藍神立像 2 身、達磨大師坐像、女神倚像を本格調査の対象とした。仏殿の三世仏は、高い須弥壇上の台座上に安置されており、下に降ろして調査するためには足場を組む必要がある。また、像も等身大の大きさであるため、作業員も複数人要する。後日あらためて作業の下見を行なうことを永平寺担当者に伝える。 6 月 23 日 吉峰寺調査。道元禪師坐像、韋馱天立像等所在調査は行なったが、中世彫刻は見出せなかった。 11 月 13 日 永平寺仏殿作業下見。日本通運の美術品専門の作業員、カメラマンと現場で打ち合わせ。経費の見積もりを依頼。 11 月 14 日 京都・興聖寺調査。中世彫刻は見出せなかった。 12 月 6 日 永平寺仏殿調査。日本通運作業員 6 名足場を組み、三世仏 3 身を壇より降ろす。カメラマンの撮影と仏像の調査を実施。 12 月 7 日 永平寺仏殿調査。引き続き三世仏の調査・撮影を行なう。夕刻、三世仏をもとの場所に戻し、仏殿調査は終了。 12 月 8 日 永平寺聖宝閣にて伽藍神立像 2 身、達磨大師坐像 1 身、女神倚像 1 身の調査・撮影を実施。 平成 22 年 2 月 20 日 九州国立博物館にて妙心寺展出品作品の調査。 2 月 21 日 長崎歴史文化博物館にて道教展出品作品調査。その後、市内の黄檗宗寺院安置仏像の調査。以上は、曹洞宗寺院ではないが、中国風を色濃く伝える禅宗寺院の作品を多く含んでいるため、参考すべき点が多い。			
【実績値】 調査作品件数 全 30 件 写真(4×5 ポジフィルム) 156 点 デジタルデータ 200 点			
 監齋使者立像 福井・永平寺			
【備考】 平成 22 年中に調査報告なしし研究論文を東京国立博物館研究誌『MUSEUM』に発表する。			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

禅宗寺院は從来中世前期の彫刻はほとんどないと考えられ、調査の対象となることが少なかった。しかし、最近の調査により、臨済宗の寺院は中世彫刻を豊富に伝えていながらわかつてきる。曹洞宗の根本である永平寺の調査は今回が初めてであり、注目を集めると考えられる。ただし、大寺院の本尊等の調査の許可を得るには時間と要し、また事故のないように調査計画を立てるため、非効率なところがあるのは否めない。

2. 定量的評価

観点	調査作品件数	収集資料数				
判定	B	B				

備考

高い場所に安置される像を安全に調査・撮影するために足場を組み、作業員を依頼したため経費がかさみ、予定していた富山・瑞龍寺の調査を実施できなかった。調査した作品の質は高いが、量的には多いとは言えない。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	曹洞宗の寺院の彫刻に関しては、従来調査・研究があまり行なわれていない。今回、曹洞宗のもっとも根本となる永平寺の本尊等を調査し、鎌倉時代、南北朝時代の作品を複数発見できたことはきわめて注目すべきことである。単に彫刻史にとどまらず、宗教史、文化史等にも寄与するところが大きい。これを機に今後曹洞宗寺院の文化財調査が進展する可能性がある。 平成22年度には論文としてまとめ、公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財に関する調査及び研究という計画の中で、着実な結果を得ることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																						
プロジェクト名称	33) 特別調査「工芸」第1回((5)-①-iii)																						
<p>【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人文化財機構国立博物館4館および文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示公開の向上に結びつけることを目的とする。</p>																							
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸・考古室長 竹内奈美子																				
<p>【スタッフ】 原田一敏(上席研究員)、池田宏(上席研究員)、松本伸之(学芸企画部長)、今井敦(調査研究課東洋室長)、三笠景子(保存修復課保存修復室研究員)、酒井元樹(調査研究課工芸・考古室研究員)、伊藤嘉章(九州国立博物館学芸部長)、伊藤信二(九州国立博物館学芸部企画課特別展室長)、川畠憲子(九州国立博物館学芸部企画課 特別展室研究員)、今津節生(九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室長)、鳥越俊行(九州国立博物館学芸部博物館科学課環境保全室主任研究員)、清水健(奈良国立博物館学芸部教育室研究員)、伊東哲夫(文化財部美術学芸課文化財調査官)</p>																							
<p>【主な成果】 昨今、三次元計測やX線CTスキャン等の新型光学機器を用いた文化財調査が話題を集め、さまざまな研究機関で行われるようになってきたが、機種やシステムの違いもあり、同じ専門分野の研究者であってもその調査結果を共有しがたい情況にある。 そこで今年度の本調査会では、独立行政法人国立文化財機構国立博物館4館および文化庁の工芸関係者が集まり、上記のような新型光学機器を用いた調査の一例を同時に実見した上で、調査方法やその結果得られるデジタルデータの活用性について討議を行った。 新型光学機器を用いた工芸品の調査方法の確立や、調査の結果得られるデータの形式の標準化を目指すための共通認識を築くことができた。</p>																							
<p>【年度実績概要】 実施期間 平成22年2月17日(水)～19日(金) 2月17日 陶磁・漆工X線CTスキャン調査、青銅器形状三次元計測調査(九州国立博物館)、討議 2月18日 刀身高精細スキャン調査、討議(東京国立博物館) 2月18日 漆工レリーフ状加飾三次元計測調査、討議(東京国立博物館)</p>																							
<p>【実績値】</p> <table> <tbody> <tr> <td>調査回数</td> <td>4回</td> </tr> <tr> <td>調査日数</td> <td>3日間</td> </tr> <tr> <td>調査員</td> <td>14名</td> </tr> <tr> <td>調査対象作品</td> <td>12件</td> </tr> <tr> <td>F-20108</td> <td>太刀(青江守次)</td> </tr> <tr> <td>F-19968</td> <td>太刀(長船光忠)</td> </tr> <tr> <td>H-3916</td> <td>摸南天薄絵枕</td> </tr> <tr> <td>H-34</td> <td>男山薄絵硯箱</td> </tr> <tr> <td>H-4231</td> <td>御所車薄絵硯箱</td> </tr> <tr> <td>TH-372</td> <td>犀皮盆 他</td> </tr> </tbody> </table> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>陶磁X線CTスキャン調査 九州国立博物館</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>刀身高精細スキャン調査 東京国立博物館</p> </div> </div>				調査回数	4回	調査日数	3日間	調査員	14名	調査対象作品	12件	F-20108	太刀(青江守次)	F-19968	太刀(長船光忠)	H-3916	摸南天薄絵枕	H-34	男山薄絵硯箱	H-4231	御所車薄絵硯箱	TH-372	犀皮盆 他
調査回数	4回																						
調査日数	3日間																						
調査員	14名																						
調査対象作品	12件																						
F-20108	太刀(青江守次)																						
F-19968	太刀(長船光忠)																						
H-3916	摸南天薄絵枕																						
H-34	男山薄絵硯箱																						
H-4231	御所車薄絵硯箱																						
TH-372	犀皮盆 他																						
<p>【備考】</p>																							

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	

備考

三次元計測やX線CTスキャン等の新型光学機器を用いた工芸品の調査方法の確立や、調査の結果得られるデータの形式の標準化を目指すための共通認識を築くことができた。特に陶磁・漆工のX線CTスキャン調査や刀剣の高精細スキャン調査は、今後の研究の進展や列品管理に大いに資することができた。

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査作品数			
判定	B	A	A			

備考

本事業は年度が始まってから計画が立ち上がったため、今年度は1回しか調査会を開くことができなかつた。なお、新型光学機器を用いた調査やそのデータ処理には時間がかかるため、1日に調査できる作品の数は非常に限られている。

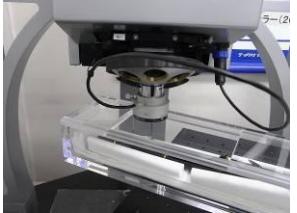
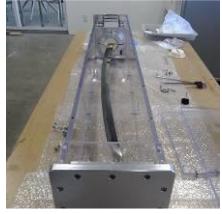
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>機種やシステムの違いもあり、同じ専門分野の研究者であってもその調査結果を共有しがたい情況にある、三次元計測やX線CTスキャン等の新型光学機器を用いた文化財調査について、専門を同じくする研究者が集まり、同じ条件で調査、討議をすることにより、新型光学機器を用いた工芸品の調査方法の確立や、調査の結果得られるデータの形式の標準化を目指すための共通認識を築くことができた。</p> <p>今回は第1回ということもあり、工芸各分野の担当者が一堂に会することとなったが、今後議論を深めて行くためには、各分野に分かれて調査会を開いて行くことが望ましい。それにより調査回数や調査作品数を増やし、効率的に調査を進めて行くことができる。</p> <p>また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有でき、今後の研究および展示公開に寄与する点が多い。21年度以降も継続する。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	<p>昨年度まで、東京国立博物館の工芸文化財に関する包括的な調査研究は、年度計画に盛り込まれてこなかった。今年度の本事業では、各機関の同じ分野の研究者が集まって調査を行うことにより、精度の高い成果が得られ、最新の研究結果を反映させた知見を共有できることが確認された。</p> <p>本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことにより、工芸分野の文化財に関する調査・研究の推進をはかることができる。</p>

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	34) 高精細デジタル測定技術と職人の知識を融合させた工芸文化財復元の研究 ((5)-①-vi)		
【事業概要】 高精細3次元デジタル測定技術と復元作業に精通した職人の知識を融合させて、従来にない制度と視点を持って、主に刀剣と刀装具の工芸文化財復元を行う手法を開拓するものである。最新の高精細3次元デジタル測定技術を用いることで、これまでのように目視だけでは十分に分析できなかった技巧を解明して復元作業に活用することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 河内晋平
【スタッフ】 佐藤雅彦(東京芸術大学教授)、桐山孝司(東京芸術大学准教授)、桂英史(東京芸術大学准教授)			
【主な成果】 本年度は、テックサイエンス社 Alicona機と Tesco 社 X線 CT スキャン機器での文化財(刀装具)撮影のための安全面と撮影精度を落とさない治具開発のための打ち合わせ、設計、試作、検証を行った。			
【年度実績概要】			
<p>1. 文化財サンプルを使用しての計測撮影実験 テックサイエンス社 Alicona 機を使用して計測撮影実験を3回行い、それらの結果をもとに撮影時の安全性についての考察を機器操作技術者とともに検討した。また、Tesco 社 X 線 CT スキャン機器においては、これまでに取得していた撮影データをもとに撮影時の安全性についての考察と検証を機器操作技術者とともにを行い、設計作業に移った。</p> <p>2. テックサイエンス社 Alicona 機と Tesco 社 X 線 CT スキャン機器での文化財撮影のための治具製作 両機器での測定撮影治具製作のために、試撮影、設計、素材の検討、部材製作を行った。</p> <p>3. 九州国立博物館見学 九州国立博物館でのX線CTスキャンをはじめとするデジタル撮影機器の見学を行った。文化財を撮影する際の手順、安全性への考え方、撮影後のデータ活用法について実現場を体験しながら意見を伺った。</p>			
 Alicona 機 試撮影実験			
 Tesco 社との治具制作			
【実績値】			
計測撮影実験 テックサイエンス社 Alicona 機を使用して計測撮影実験 3回 取得データ：文化財サンプル3件分 3Dデータ			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	B	A	
備考	<p>文化財撮影に関する安全性の検討について、実際に3回の試撮影を行った。また、X線CTスキャナなどのデジタル撮影機器を運用している九州国立博物館を訪問し、作業手順、安全性、データ活用について伺った。本研究で使用する機材での安全性を重視した治具製作はその他の撮影機材においても使用することを念頭に置いている点で今後の継続性に期待ができる。実際の機材を使用しての試撮影に費用がかかるため紙面上や試作治具での検討の結果後、機材を使用しての試撮影でのフィードバックとなるため、研究進行効率性に対する工夫が必要である。</p>					

2. 定量的評価

観点	調査回数	情報収集				
判定	B	A				
備考	<p>調査回数に関しては、Alicona機での1度目の計測撮影で再検討すべきと考えられた項目について、早い段階で再度試撮影を行えた。しかし、撮影費用からも3回の試撮影が限度であり、より安全性と作業手順を考慮した調査が必要になると考える。</p> <p>研究所年度での治具設計、基礎データ収集ということもあり、論文等の発表は行っていない。</p>					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財デジタル測定機器での撮影について、実験、検討、改善策の調査を実施した。これらの結果により、今後はより汎用性を持った撮影手順、治具についての検討を引き続きしていくことができる。また次年度では本年度の撮影データの質的評価を行い、それらの活用方法を念頭におきながら調査の内容をさらに充実したものにしていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	撮影機器に合わせた治具開発のための試撮影実験、調査、検討を行えた。それらの結果をもとに設計図を作成し、現在製作中である。次年度では製作した治具での試撮影を行い安全性の検討、改良を行う。また、より多くの文化財での撮影を目標に、調査意義、調査方法についての意見交換を職人、学芸員、撮影技術者の方々と相談していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 近畿地区(特に京都)社寺文化財の調査研究 ((5)-①- ii)		
【事業概要】 京都を中心とした近畿地方の社寺のうち、文化財がある程度集中して所蔵されている社寺を探り上げ、所蔵文化財の悉皆的調査を行う。 調査に際しては、各分野の専門研究員が極力同時に参加し、相互に情報・意見交換をしながら、調書の作成・写真撮影を行い、文化財に関する基礎情報の蓄積に努める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 西上実(学芸部長)、赤尾栄慶(上席研究員)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、久保智康(企画室長)、山下善也(連携協力室長)、浅湫毅(主任研究員)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、大原嘉豊(研究員)、羽田聰(研究員)、吳 孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)、比嘉飛鳥(列品管理室技術職員)			
【主な成果】 調査対象寺院については、既に長岡京市教育委員会による悉皆的調査が行われており、書画については特に新たな作品の発見はなかったが、制作時期・作者等について詳細な知見を得ることができた。一方、工芸品については江戸時代の花籠約 50 枚をはじめとして、これまでの調査では漏れていた作品を多数調査することができた。			
【年度実績概要】 調査予定の西山光明寺との間で、事前の打ち合わせを 2 回実施。 1月 26 日(火)に予備調査(下見)を実施。 2月 17・18・19・22・23 日に本調査を実施。			
【実績値】 調査日数 のべ 5 日 調書作成件数 308 件			
【備考】 調査報告書は、平成 22 年度以降に刊行の予定。 一部分野(書跡)について調査を完了できなかつたため、平成 22 年度に補足調査を実施の予定。			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

平成22年度に開催予定の「法然展」に関連する浄土宗寺院の調査であり、調査内容を展覧会に速やかに反映させることができ、蓄積された情報を今後さらに別の展覧会にも活かしうるので、適時性・発展性は高い。当該寺院の調査自体は、既に長岡京市教育委員会によっても一部行われているが、社寺調査自体は30年以上にわたって京都国立博物館が継続してきた事業であり、調査に基づく展覧会の開催は、京都国立博物館独特の方針として定着しており、外部からの評価も得られている。

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査件数				
判定	A	A				

備考

展覧会をはじめとする業務の著しい増大の中で、従来どおりのべ5日という調査日数を何とか確保することができた。

調査の良し悪しを、単純に数値の多寡だけで評価することには少なからず問題があるが、308件という調書作成件数は、昨年の262件、一昨年の230件を遥かに上回っており、すくなくとも否定的評価には結びつかないと考えている。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会準備や各種のサービス事業の急激な増大の中で、従来どおりの質を保ちながら、量的には従前を上回る調査を行っているため、A評価とした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究職員の繁忙化は既に限界近くに達しており、今後は調査研究の質・量が低下することが懸念されるものの、今年度については順調に計画(調査)を遂行することができたため。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 鎌倉仏教とその造形に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 鎌倉仏教の美術・造形にかかる作品や図像及び関連資料を収集、整備する。 報告書の刊行、シンポジウム(研究座談会)の開催により、成果を公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、羽田 聰(研究員)、淺漱 肇(主任研究員)、久保智康(企画室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、中村 康(文化財管理監)、村上 隆(保存修理指導室長)、吳 孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 仏教美術研究上野記念財団助成による研究発表・座談会「予言と調伏のかたち」を開催した			
【年度実績概要】 研究発表 「調伏のかたちとしての元三大師像」(当館 淺漱肇主任研究員) 「金沢称名寺における調伏のかたち—弥勒と愛染—」(金沢文庫瀬谷貴之学芸員) 「蒙古の調伏者」日蓮像の形成(東北大学 佐藤弘夫教授) 座談会 「予言の調伏のかたち」(司会／筑波大学 近本謙介、パネラー／発表者全員) 鎌倉時代半ばに集中的に造像された元三大師像が蒙古調伏を目的としたものである可能性、舍利・生身信仰が愛染明王を中心とした調伏にも通じていたことが確認され、日蓮が蒙古調伏者として知られるにいたつた要因の検討がなされた。 以上は、近年仏教美術史において注目されつつある論点が調伏像についても該当し、またこの問題意識が仏教史・仏教文学史にとっても有益であることなどの議論が活発に展開された。 また特別展覧会「日蓮と法華の名宝」に展示中の日蓮像の造形を理解する上でも大いに有益であった。 その後、博物館に会場を移し、同展覧会を見学した。			
【実績値】 ○公開研究会開催 1件 ・研究発表・座談会「予言の調伏のかたち」を開催 ○調査報告書 ・仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第37冊「研究発表と座談会 予言と調伏のかたち」を編集中。 刊行は平成22年度の予定である。			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考	鎌倉仏教の美術について多面的に調査研究し、多岐にわたる資料を収集し、展覧会や特集陳列などに関連した研究発表と座談会を開催し、近年の美術史・宗教史で議論されているテーマも含めた成果があつたので、適時性・独創性・発展性・正確性については評価できる。ただし会場を他へ移しての開催形式をとらざるをえず、効率性の点で問題を残した。					

2. 定量的評価

観点	公開研究会					
判定	A					
備考	研究発表及び座談会「予言と調伏のかたち」を開催し、47名の参加者を得て活発な討論がなされた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業「鎌倉仏教とその造形に関する調査研究」の初年度として、本研究成果を早速特別展覧会に反映することができ、また会期中に研究発表・座談会を開催することで、学術的な深化を図ることができた。 また22年度自主企画展「高僧と袈裟」など以後の展観事業計画及び作品収集計画にも資すること大なるものがあった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	多岐にわたる分野の資料について収集・整備ができ、また、研究資料を広く公開することで、仏教美術研究の発展に資することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察(科学研究費補助金 ((5)-①-ii))		
【事業概要】 先史時代より明治時代に至るまでの、樹木を素材・主題とした美術工芸遺品を通じて、従来蓄積されてきた歴史学の諸成果をフィードバックしながら、日本の木の文化を、他の東アジア諸国との比較史的視座を援用しつつ、跡づけることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長 佐々木 丞平
【スタッフ】 西上実(学芸部長)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、大原嘉豊(研究員)、赤尾栄慶(上席研究員)、羽田聰(研究員)、淺湫毅(主任研究員)、中村康(文化財管理監)、久保智康(企画室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、村上隆(保存修理指導室長)、吳孟晋(研究員)、水谷亜希(アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 平成19年度に調査を行なった静岡建穂寺についての調査報告を当館発行の『学叢』第31号(平成21年5月発行)に発表した。また、20-21年度に行なった調査の結果を中間報告会にて報告するとともに、中間報告書をかねた資料集の発行を行なった(平成22年1月)。また浜松市の黄檗寺院である大雄寺と宝林寺において本調査を行ない、調書作成と写真撮影を行なった(平成22年3月)。			
【年度実績概要】 事業3年度の本年は、昨年度までの調査をふまえて引き続き調査を行なうとともに、今年度前半までの調査結果をふまえて中間報告会を行なった。 具体的な調査事例としては、初年度に購入したファイバースコープを援用することにより京都悲田院の阿弥陀像の像内より、鎌倉時代の仏師快慶の銘文を発見し、本像が快慶作であることが判明した。 社寺における組織的な調査としては、引き続き東西文化の分岐点である静岡県に焦点をあて、浜松市の黄檗寺院で調査を行なった。また、東日本の事例として、山形県寒河江市の平塩熊野神社において神像および神宝の調査を行なった。 これと平行して、各研究分担者は、自事業目的にそって個人研究を遂行した。たとえば、初年度に行なった静岡建穂寺に関して補足調査を行ない、前回は調査できなかった秘仏の本尊に関して調査を行なった。その際には専門の撮影技師が同行し、大判カメラでの撮影を行なうとともに、デジタルカメラによる撮影も行なった。 過去の社寺調査データの整理としては、昨年度に続き、これまで京都国立博物館が収集してきた京都社寺の所蔵品に関するデータの再整理および、昨年度あらたに調査で得られたデータを、事業目的に即して順次データベース化していった。			
【実績値】 <ul style="list-style-type: none">○調査実績データベース化 2000点○調査機材整備 1件(中型カメラ)○総合調査 国内 2件○個人研究出張調査 国内 4件○科研調査による成果の公表 3件○中間報告会の開催 1回○外部研究者の招聘 2件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	A	B	A	

備考

適時性については博物館事業における公開性及び緊張性を増す環境問題と絡む点、独創性・発展性については適時性での理由をもとにした人文系では先駆的総合研究である点、効率性に関しては各研究分担者の本務である博物館事業との兼ね合いにおける時間的投資量という点、正確性についてはデータの収集という点からみて、それぞれ評価を下した。

2. 定量的評価

観点	調査実績 データベース化	調査機材 整備	総合調査	個人研究 出張調査	成果の公表	中間報告会 の開催	外部研究 者の招聘
判定	A	A	A	B	A	A	A

備考

事業第3年度として、目標は概ね達成されている。
出張調査に関しては、新型インフルエンザの流行による渡航自粛もあり、当初予定していたドイツ等の欧洲における調査を断念せざるを得ず、残念ながら海外調査については当初の計画を遂行できなかった。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第3年度にあたる21年度は、昨年度の調査によって得られた成果を基に、さらに知見を深める方向で、発展的調査を行なった。それとともに、計画もなれば過ぎたところであり、これまでの調査結果をまとめることにも視野をむけて調査研究を行なった。その目標はほぼ達成されたが、博物館業務の多様化にともなう時間的制約の中で、22年度以降はより効率的、組織的に研究を深め、さらに充実した成果の公表へつなげる努力が一層必要であると考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	全研究職員を研究分担者とする競争的資金の導入によって、館全体の研究を活性化している点で意義が深い。 昨年度までの課題として、博物館業務の多忙化の中で複数の研究分担者による連携的な調査が充分に行なえていないというのがあったが、今年度は浜松および山形の調査において組織的な調査を行なうことができ、成果を挙げることができた。最終年度にあたる次年度には引き続き組織的な調査を行なうとともに、その成果を報告書としてまとめることを視野に置いた調査を行なう予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
<p>【事業概要】 建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類を順次調査し、それらの調書を作成し、それらの目録を作成する(科学研究費)。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
<p>【スタッフ】 (当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田 聰(研究員)、西上 実(学芸部長)、山本英男(美術室長) (外部研究者)興膳 宏、米谷 均、山城喜憲、藤本幸夫、井上 進、川本慎自、堀川貴司、宇都宮啓吾、梶浦晋、金 文京、柳田征司、住吉朋彦</p>			
<p>【主な成果】 8月、9月、12月と都合3回の調査を実施し、全体180箱のうち、第141箱から第160箱までの調査をほぼ終了している。</p>			
<p>【年度実績概要】 全体180箱のうち、第141箱から第160箱までの調査を実施し、各々の箱に納められている書跡・典籍類に関して、一冊ごとにその書名・法量・装訂・外題・首題・尾題・版式・行数・訓点・奥書・刊記などの書誌学的調査と内容に関する調査を実施し、それぞれを調書に記入した。</p>			
<p>【実績値】 全体180箱のうち、第141箱から第160箱までの約20箱についての調査をほぼ終了し、調書を作成した。 <input type="radio"/>調査回数 3回 <input type="radio"/>調査箱数 全180箱中20箱 </p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考
各方面から、蔵書目録の作成が望まれている状況にある。

2. 定量的評価

観点	終了箱数	調査回数				
判定	A	A				

備考
20箱の調査を終了した。箱の内容によって、調査の進み具合が一定しないこともあるが、全体的には順調に進行している。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	4カ年の継続事業のうち、第3年度の事業計画について達成できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年次計画を予定通り実施した。

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((5)-①-v)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 村上隆
【スタッフ】 淺漱毅(主任研究員)、伊東史朗(調査員)			
【主な成果】 平成 21 年度に新規搬入された作品の「修理計画書(設計書)」にもとづき、データを入力し、平成 19 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書(報告書)」にもとづき、データを追加、更新した。また、平成 16 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告』第 5 号に掲載した。また、修理時に発見された銘文 24 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。 過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行なった。 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修復中にしか得ることの出来ない情報(作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など)を収集し、分析を行なった。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 5 号に掲載する平成 16 年度修理作品のデータを整理するとともに、同年の修理で発見された銘文の解読作業を行なった。 また、これらの業務に調査員伊東史朗氏の協力を得た。			
【実績値】 <ul style="list-style-type: none"> ○データ収集件数 21 年度は 114 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、データベースへの登録を行なった。 ○データ追加更新件数 過去のデータに関して 3026 回追加、更新を行なった。 ○調査回数 修理所の巡回を 12 回行なった。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行なった。 ○報告書 22 年 3 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 5 号(16 年度分)を発行した。 			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	限られた期間中にあらゆる側面からの調査を行い、データ収集に努めた。					

2. 定量的評価

観点	データ収集件数	データ追加更新件数	調査回数	報告書		
判定	A	A	A	A		
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行なわれる修理作品から得られる情報はおおむね収集できた。 また、その成果を報告書に反映した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	21 年度に収集された情報をさらに充実させる為、他年度と関連づけながらさらなる情報の収集をはかりたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6)文化財の保存・修復に関する調査研究(奈良文化財研究所との共同研究) ((5)-①-vi)		
【事業概要】 奈良文化財研究所が保有するさまざまな科学分析装置を用いて、特に金属製文化財を中心とした材質と製作技術の調査を行う。また、その成果を踏まえた保存処理法の開発と実践を実施する。独法内の既存施設を横断的に活用することにより、効率的な調査研究の推進を図ることも視野に入れている。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 村上 隆
【スタッフ】 高妻洋成(奈良文化財研究所) 難波洋三(")			
【主な成果】 長野県中野市の柳沢遺跡は、東日本で初めて銅鐸と銅戈が同時に出土した遺跡として注目される。本調査研究では、この柳沢遺跡から出土した青銅器の材質調査と製作技術の検討を行った。			
【年度実績概要】 長野県中野市柳沢遺跡から出土した銅鐸は計5個、銅戈は8本である。本年度は、このうち、銅鐸3個の分析と保存処理を行った。また、銅鐸3個に対しては、X線CTによる内部状態の非破壊的調査を行い、埋蔵状態における銅鐸内部の土の状態を探った。			
【実績値】			
調査件数：3個 収集資料数：13件 調査概報：2件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	B	B			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	弥生時代を代表する銅鐸や銅戈の正確な分析はこれまでにほとんど行われてきていません。本調査研究は、歴史的金属製品の材質研究の専門家が考古学者とともに協議し、様々な観点から多角的な調査を行うことが特徴である。古代青銅器研究の基準となる研究と位置付けられる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	独法内の機関が、相互の特徴を生かした共同研究を行うことは、相互の活性化のためにたいへん重要である。ただ、作品を移動させなくてはならないというリスクを伴うため、実際に実施できる研究内容に制約を伴う。今後とも、少しづつでも事例を増やしていくことを考えている。

【書式B】

(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-7

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進								
プロジェクト名称	7) 近世絵画に関する調査研究 ((5)-①- ii)								
<p>【事業概要】 京都文化の一端を明らかにすることを目的として、客員研究員である同志社大学教授狩野博幸氏に、京都を中心とした近世絵画に関する作家研究、作品研究の実施を依頼した。「長谷川等伯展」、「上田秋成展」、「京狩野展」等、今後開催を予定している展覧会の助言を依頼し、当館連携協力室長と協力して展覧会に関わる研究を行う。</p>									
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	連携協力室長 山下 善也						
<p>【スタッフ】 狩野博幸(客員研究員)</p>									
<p>【主な成果】 京都を中心とした近世絵画に関する作家研究、作品研究については、着々と研究が進んでいる。 「長谷川等伯展」(平成22年度)、「上田秋成展」(平成22年度)等について、当館連携協力室長に、作品情報をはじめ、さまざまな助言を行った。</p>									
<p>【年度実績概要】 「長谷川等伯展」(平成22年度)、「上田秋成展」(平成22年度)等、同展実現へ向けての準備に不可欠なものであった。 狩野博幸客員研究員の洛中洛外図、伊藤若冲、曾我蕭白をはじめとする近世絵画研究は年々深化しているが、それを通じ、京都国立博物館館蔵品・寄託品の価値がいっそう高まっている。とともに、客員研究員から当館近世絵画担当研究員への適切な指導・助言が連携協力室長の調査研究の諸活動に対して実に大きな刺激と力を与えていることは、特筆しなければならない。さらに、同客員研究員および近世絵画担当研究員の著作活動を通じて、一般の人々の京都文化に対する興味を喚起し、ひいては博物館に対する理解を深めている。</p>									
<p>【実績値】</p> <table> <tr> <td>調査回数</td> <td>12回</td> </tr> <tr> <td>収集資料数</td> <td>200点</td> </tr> <tr> <td>調査概報</td> <td>4件</td> </tr> </table> <p>論文 「回顧と展望(近世-美術)」(史学雑誌 118編-5号)他6篇 口頭発表 「探幽のいた季節一二条城から館蔵品へ」(於『静岡県立美術館特別講演』9月)他3回</p>				調査回数	12回	収集資料数	200点	調査概報	4件
調査回数	12回								
収集資料数	200点								
調査概報	4件								
<p>【備考】</p>									

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会「長谷川等伯」(平成22年度4~5月)、特別展観「上田秋成」(平成22年度7~8月)の準備は順調に進んでおり、その進捗に客員研究員の助言等が大きな役割を果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	客員研究員の京都国立博物館の諸活動に対する指導・助言等及び近世絵画担当研究員と同客員研究員との協力により、近世絵画に関する調査研究は順調に進んでいる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8)訓点資料としての典籍に関する調査研究((5) - ① - ii)		
<p>【事業概要】 訓点資料のうち、平安時代の古写経や漢籍に付された訓点に関する調査研究を実施した。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
<p>【スタッフ】 (当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田 聰(研究員) (客員研究員)宇都宮啓吾</p>			
<p>【主な成果】 平安時代の古写経の訓点については、その成果の一部を9月発行の『訓点語と訓点資料』第一二三輯(訓点語学会)に「宝幢院点の成立に関する一考察—源信・寂照・延殷・皇慶を巡って—」と題した論文にまとめた(宇都宮氏)。加えて当館に保管されている古写経などに付された訓点の調査を行った。</p>			
<p>【年度実績概要】 古写経の訓点を中心とし、平安時代の訓点を調査研究を実施し、その調査研究の内容の一部を『訓点語と訓点資料』第一二三輯(訓点語学会)に「宝幢院点の成立に関する一考察—源信・寂照・延殷・皇慶を巡って—」として公表した(宇都宮氏)。</p>			
<p>【実績値】 論文を公表し、従来からの定説に新たな視点を提供した。 <input checked="" type="radio"/>論文発表件数 1件 「宝幢院点の成立に関する一考察—源信・寂照・延殷・皇慶を巡って—」『訓点語と訓点資料』第一二三 輯(訓点語学会)(宇都宮氏)</p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
当館所蔵の国宝『千手千眼陀羅尼經』残巻に付されている訓点が宝幢院点であることから、この訓点をめぐる問題を取り扱うことは、非常に有益であり、関連する資料を使っての論考は当館の客員研究員にふさわしい内容である。						

2. 定量的評価

観点	論文発表					
判定	A					
備考						
『訓点語と訓点資料』は、訓点語学会の中心的な学会誌であり、その成果を公表するには最も適した学会誌である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	従来から、宝幢院点は、池上阿闍梨皇慶乃至その弟子とされてきたが、その創始者を延般と見なすことなど、新たな視点を提供した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	館蔵品の訓点資料を順次、調査している。

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 彫刻に関する調査研究 ((5)-①-iii)		
<p>【事業概要】 当館に保管および寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 浅湫 肇
<p>【スタッフ】 井上一稔(客員研究員)</p>			
<p>【主な成果】 特別展覧会「日蓮と法華の名宝」出品作品に関して研究を進め、その成果を同展目録に作品解説として発表した。また、平成 19 年度に科研による調査を行なった、静岡県建穂寺の仏像についての調査報告を、当館発行の「学叢」第 31 号に執筆した。</p>			
<p>【年度実績概要】 当館が保管、あるいは当館が社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査および写真資料の収集を、新たに行なった。 社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行ない、一部作品は寄託していただいた。 上記調査作品の関連文献、史料の収集および研究を行なった。その成果に基づき「仏教美術研究上野記念財団助成研究会」主催のシンポジウムにおいて口頭発表を行なった。 これらの調査に際し、客員研究員の井上一稔氏の協力を得た。 過去の研究データに基づき特別展覧会の作品選定、展示、解説執筆を行なった。</p>			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○論文数等 2 件 「静岡・建穂寺の彫刻作品について」(『学叢』31 号)他 1 篇 特別展覧会『日蓮と法華の名宝』を開催にあたり、図録に作品解説の執筆を行なった。 ○調査回数 5 件 <ul style="list-style-type: none"> ・将来の特別展準備のための調査を三鈷寺等、浄土宗の寺院で行なった。 ・同じく展覧会準備のための調査を東京の永青文庫で行なった ・長岡市の光明寺において社寺調査を行ない、彫刻作品の調査を担当した。 ・科研による調査を静岡県浜松市の大雄寺、宝林寺で行なった。 ・その他、寒河江市・平塩熊野神社、静岡・建穂寺において彫刻作品の調査・撮影を行なった。 ○研究発表等 2 件 <ul style="list-style-type: none"> ・建穂寺の調査結果は、静岡のフェルケール博物館において平成 22 年 4 月より開催される「建穂寺展」(当館が特別協力)において公表する予定である。 ・口頭発表「調伏のかたちとしての元三大師像」(『予言と調伏のかたち』仏教美術研究上野記念財団助成研究会) 			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	彫刻作品の調査の成果を、特別展覧会の作品展示および、図録、解説等により公開できた。また、次年度以降の展観事業の準備として継続的に調査・研究を行っている。					

2. 定量的評価

観点	論文数	調査回数	研究発表等			
判定	A	A	A			
備考	計画的に調査を行い、その成果を報告書、展覧会図録および口頭による発表等に反映させることができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館の所蔵、寄託作品に関する情報は順調に得られており、館外での作品調査に際しても重要な情報が収集された。引き続き特別展覧会等で成果を公開したい。 一方、平常展示館が長期閉館することにより、平常展示においてこれまで行ってきた成果の公開が当面できなくなったが、報告書、論文等それにかわる成果公開を考えたい。今年度は科研の調査成果の中間報告において報告書を執筆するとともに、口頭発表を行なった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	継続的に、順次彫刻作品に関する情報は、順調に収集されている。 本研究によって得られた情報を将来の展覧会に生かせるよう、さらなる情報の収集を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究((5)-①- ii)		
【事業概要】 京都近郊の社寺や旧家などに所蔵されている陶磁器を中心としながらも、それらに関連する出土陶磁器の調査を行い、近い将来に開催を計画中の特別展覧会の充実を図るとともに、積極的に外部からの研究助成金の交付を受けて、所蔵陶磁器の詳細調査を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 谷口愛子(調査員) 橋倫子・森下愛子(調査・研究支援ボランティア) 梶山博史(兵庫陶芸美術館)			
【主な成果】 前年度から継続していた建仁寺両足院所蔵陶磁の調査を継続して実施し、建仁寺両足院の調査では、中国製の青花の鉢や碗など、近い将来に開催を計画している「清朝陶磁」展への出品候補となる作品を複数見いだすことができた。また、年度当初計画には含まれていなかったが、大阪市文化財協会の佐藤隆氏が交付を受けた西田記念東洋陶磁史研究助成金から、分担金の交付を受け、当館で所蔵している仁清御室窯跡出土陶片の基礎的整理作業として、実測図の作成に取り掛かることができた。			
【年度実績概要】 建仁寺両足院にて、上記スタッフの参加を得て調査を実施し、所蔵陶磁の悉皆調査を終えることができた。事業責任者である尾野が特別展の担当をしていたため、今年度は多くの時間を割くことができず、調査日数は前年度と較べて結果として3日減っているが、上記支援スタッフの集中的な参加を得ることができたため、1日あたりの調査件数は77.5件と、昨年の52.5件を大きく上回り、効率的な調査を行うことができた。 西田記念東洋陶磁史研究助成金による所蔵品整理作業は、年度末が近づいてから決定した事業であるため、平成22年度への継続事業として契約することとした。したがって、その成果については来年度報告することしたい。			
【実績値】 <input type="radio"/> 調査日数 のべ2日 <input type="radio"/> 調査件数 155件 <input type="radio"/> 外部からの研究資金の導入(西田記念東洋陶磁史研究助成金) <input type="radio"/> 紙上報告 「帝国京都博物館の西洋陶磁収集」(『学叢』第31号) 他3篇 <input type="radio"/> 講演会「磁器生産のはじまりと展開ー肥前磁器を中心にー」(於『徳島城博物館平成21年度美術アカデミー』6月)他2回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

近い将来に計画している特別展覧会への出品候補作を少なからず見いだすことができた。とりわけ、建仁寺両足院の調査では、従来の美術陶磁のみを対象とする枠組みを超えて、生活用品までを調査対象とした結果、思いのほか鎖国下の日本に海外陶磁が輸入されていることを明らかにできたことが大きな成果。

別記したように、調査日数自体は昨年度と較べて半減しているが、多くの支援スタッフの協力をえることで、1日あたりの調査件数を飛躍的に伸ばすことができたことは特筆したい。また、調査の支援スタッフが何年も継続的に参加していることから、経験をつんで迅速に高い質の調査を行うことができた。調査事業を継続的に行っていることによる効果が大きいと思われる。

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査件数	外部資金導入	紙上報告	講演会	
判定	B	A	A	A	A	

備考

昨年と較べて、調査日数自体は半減しているためB評価としたが、特別展覧会の担当を抱える傍らで行った調査としては、2日は満足すべき数値と考えている。調査件数に関しても、昨年度(262件)より減少しているが、1日あたりの調査件数が増大しているためA評価とした。また、外部資金の導入を図ることができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に対して順調に成果を挙げており、業務遂行上特に大きな改善の必要性を見いだしていないが、継続的に行ってきただけの建仁寺両足院の調査が一段落したため、次なる調査対象の選定が次年度の大きな課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度への継続事業(西田記念東洋陶磁史研究助成金による仁清御室窯跡出土陶片の基礎的整理作業)が終わっていないが、情報は着実に収集されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進						
プロジェクト名称	11) 近代建築に関する調査研究 ((5)-①- ii)						
<p>【事業概要】 帝国京都博物館は明治 18 年に伊藤博文が創設した内閣のもとで近世以前の美術の文化をその遺産とともに継承再生するための機関として構想された。コンドル、フェノロサの教えを受けた片山東熊と岡倉天心によって日本とヨーロッパの美術建築の歴史の中で育成された豊かで質の高い文化を結集した機能と構造と表現を持つ建築はともかくも完成し、今日では美術博物館の古典、文化遺産として大きな役割を果たしているが、竣工までの 10 年間には、産業の振興や生活の近代化への寄与や経費の削減などの要因との調整を余儀なくされている。その当初計画から竣工までの糾余曲折した道程を片山東熊が全工程を示すために整理保存した種々多様な設計図と現在の建築をもとに解説する。</p>							
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	文化財管理監 中村 康				
<p>【スタッフ】 中村 康(文化財管理監) 登谷伸宏(調査員)</p>							
<p>【主な成果】 本年度は、片山と岡倉が直接関与した基本設計図の選び出しと調査を行ない、以下の点を明らかにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都博物館の設計過程とその特徴 ・各設計図の設計過程における位置づけ ・設計に携わった技師の役割 							
<p>【年度実績概要】 本年度は、建築図面目録作成のための基礎的な調査を継続して行うとともに、これまでの図面の分類方法を再検討し、その成果にもとづき目録の構成案を作成した。</p>							
<p>【実績値】</p> <table> <tr> <td>調査回数</td> <td>16 回</td> </tr> <tr> <td>調査資料数</td> <td>521 点</td> </tr> </table>				調査回数	16 回	調査資料数	521 点
調査回数	16 回						
調査資料数	521 点						
<p>【備考】</p>							

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度の調査研究は、当初の予定通り進めることができた。次年度は、図面調査を進めるとともに、他の史料所蔵機関における史料調査、これまでの調査成果を論文としてまとめる作業を行い、京都博物館建築図面の特徴を多角的に検討していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	建築図面目録作成に向けて着実に調査が進んでいるが、より広い視野から調査研究を行うため、次年度は、他の史料所蔵機関における史料調査を行う必要がある。次年度は他機関における調査にも着手する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 漆工芸に関する調査研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 特別展覧会と新装オープン後の平常展示に関わる漆工芸部門の展示内容の充実をはかり、また、国内外の漆工芸に関する研究の交流を促進しするために、日本の内外に伝世する漆器を観察し、計測し、写真撮影を行うことによって基礎データを集積し、その分析を軸とした研究を行い、研究成果を公表する。			
【担当部課】	学芸部工芸室	【プロジェクト責任者】	主任研究員 永島明子
【スタッフ】 主任研究員 永島明子			
【主な成果】 当館に持ち込まれた作品の調査や個人コレクター宅での調査(琉球漆器・輸出漆器・根来など)、特別展覧会の準備(妙心寺展・日蓮展・THE ハップスブルク展・永青文庫展など)、科研調査(昨年度末のイタリア調査の内容を今年度整理)、社寺調査(長岡京光明寺)や個人調査(イギリス貴族の館・大英博物館)など、さまざまな機会に作品を観察、計測、撮影してデータの蓄積につとめ、これまでのデータの分析と文献調査による研究の成果を、当館開催の展覧会をはじめ、国内外の展覧会やシンポジウムに還元した(展覧会図録の作品解説を除く)。また、科学研究費を用いた調査で漆工品の CT スキャンも試みた。さらには、新規購入品 2 点を京都国立博物館の収蔵品に加えることもできた。			
【年度実績概要】			
<ol style="list-style-type: none"> 昨年度の輸出漆器に関する特別展覧会で借用したオランダの新出資料に関する調査内容を、オランダの学会誌上で公表した。 同じ展覧会で借用した V&A 美術館所蔵の作品に関わるシンポジウムに呼ばれ、江戸時代中期の京都における漆器制作に関する研究を発表した。 国内で開催されたいわゆる根来塗に関する特別展覧会の準備に協力した。 今年度の特別展覧会「THE ハップスブルク」の図録執筆をきっかけに、明治政府が初めての国賓に贈った品々の伝世を確かめ、周辺の史実の研究とともに公表した。 2006 年にアメリカで開催された環太平洋地域の美術交流をテーマにしたシンポジウムで発表した内容をデンバー美術館出版の書物で公表した。 輸出漆器の珍品 2 点を海外の研究者からの協力も得て評価し、収蔵品として購入することができた。 			
【実績値】			
撮影カット数: 5800 カット以上		調査回数: 16 回	
論文数: 4 件(①~④)			
研究集会発表件数: 1 回(⑤)			
購入件数: 2 点			
【備考】			
①永島明子「オーストリアに伝わるミカドの贈り物—明治新政府の文化外交—」国立新美術館・京都国立博物館・読売新聞東京本社編『THE ハップスブルク』読売新聞東京本社 2009 年 9 月			
②Meiko NAGASHIMA. "Japanese Lacquers Exported to Spanish America and Spain", <i>Asia & Spanish America: Trans-Pacific Artistic & Cultural Exchange, 1500–1850</i> . (Papers from the 2006 Mayer Center Symposium at the Denver Art Museum). Denver Art Museum. December 2009.			
③Meiko NAGASHIMA. "Over de Makie-Decoratie op de Lakkoker van Hendrick van Buijtenhem". <i>Asiatische Kunst</i> . (Publication of the Asian Art Society in the Netherlands c/o Rijksmuseum). Vereniging van Vrienden der Aziatische Kunst. December 2009.			
④永島明子「厨房具・膳具」河田貞監修『根来』根来展実行委員会 2010 年 3 月			
⑤Meiko NAGASHIMA. "Mid-Edo Period Lacquer Production seen through Historical European Collections" Conference: <i>Crossing Borders – The Conservation, Science and Material Culture of East Asian Lacquer</i> . Victoria and Albert Museum. Friday 30 – Saturday 31 October 2009.			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
日々の調査研究活動を形にするという基礎的な作業であるが、昨年度に当該スタッフが担当した輸出漆器に関する展覧会をきっかけに、この分野も京都国立博物館の研究テーマとして国外で評価され、アメリカ、オランダ、イギリスなどの研究機関の要請に応じることができた。研究成果に基づき、京都国立博物館に優れた収蔵品2点を加えることができた。						

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	購入件数	研究発表件数	資料収集数	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
他機関からの要請で研究成果を公表する機会を多く得た。調査回数は順調に重ねられている。他分野との調整の結果、今年度は漆工芸品の珍品を2点も購入することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	蓄積されたデータ数がそのまま成果に結び付くような研究ではなく、年度で区切って成果を評価するには向かない事業ではあるが、今年度は過去に行ったシンポジウムの発表や調査研究の内容について公表する機会を多く持つことができた。正確性は他機関が評価してくれたところと考えAとした。日本の漆工史を実物に即して通史的に把握しながら、国外に渡った漆器についても実物の熟観に基づいて総合的に研究する事業は稀であり、一方で各国における文化交流史的興味は高まっているので、独創性や適時性をAとした。また、十数年来続いている研究であり、今後も確実に行われる業務であるので、発展性、継続性もともにAとした。効率性については、一人の研究者が行っている割には多くの成果が得られたという点でAとしたが、今後は国内外の研究者との連携をより強め、情報の共有化を一段と進め、また一般観覧者によりわかりやすく情報を提供できるよう努めていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	漆工芸品の調査・研究を実施し、収集や公衆への観覧に活かすことができたばかりでなく、洋の東西に伝世した漆工芸品の調査・研究を通じて、京都で作られた漆工芸を世界史の中に位置づけることに寄与し、また、その研究成果を国内外の研究機関と共有することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 中国近代絵画に関する調査研究((5)-①-iii)		
<p>【事業概要】 近年相次いで当館に寄贈された中国近代絵画作品に関する調査研究をすすめ、2012年初めに開催を予定している「中国近代絵画」展にその成果を反映することを目的とする(文化庁 平成21年度美術館・博物館活動基盤整備支援事業「中国近代絵画に関わる国際研究交流」による事業)。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西上実
<p>【スタッフ】 吳孟晋(研究員)</p>			
<p>【主な成果】 国内外から研究者を招き、当館所蔵の中国近代絵画作品調査とその成果をふまえたワークショップ開催という二つの中核事業により、当該分野に関する新知見を多数得ることができた。とくに、昭和初期に中国・南京総領事だった須磨弥吉郎氏のコレクションに関する調査では日中間の芸術交流の多様性を確認できた。こうした成果をワークショップ論文集としてまとめ、関係者、関係機関等に配布した。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <ol style="list-style-type: none"> 当館所蔵の中国近代絵画に関する調査研究 2009年夏から秋にかけて、中国、台湾、香港など国内外の研究者10名に作品調査を依頼し、あわせて当館研究員と意見交換の場をもった。 ワークショップの開催 「中国近代絵画研究者国際交流集会」という題目で、2009年12月16・17日に国立京都国際会館でワークショップを開催した。参加者は2日間で計54名、うち発表者は19名であった。基調講演1件の後、2日にわたり研究発表18件と総合討議を行い、日本における中国近代絵画研究の意義などが議題となった。当日の成果は『中国近代絵画研究者国際交流集会論文集』として刊行した。 			
<p>【実績値】 作品調査招へい研究者数：10名 研究集会等開催数：1回(論文集①) うち参加者数：美術史研究者等54名 研究発表(論文)件数：19件 その他：1件(事業紹介②) 調査回数：6回</p>			
<p>【備考】 ①京都国立博物館編『中国近代絵画研究者国際交流集会論文集』、2010年3月 ②西上実「中国近代絵画と京都国立博物館：国際研究拠点をめざして」『清風会報』157号、2010年1月</p>			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

2012年初に開催予定の「中国近代絵画」展に向けた調査研究の一環として、これまで研究が立ち遅れていた当該分野の研究の進展に大きく寄与することができた。国内外の研究者と2009年の1年間に作品調査とワークショップの都合2回、会合の機会をもつことで活発な意見交換が可能となり、現在の研究課題を共有するとともに多くの新知見も得た。現代中国の発展にともない、社会全体で近代中国の文化芸術についての関心が高まるなかで、美術史研究の分野からも展覧会などを通じて広く情報発信できる素地が整ったといえる。

2. 定量的評価

観点	論文数等	調査回数	招へい 研究者数	研究会開催数		
判定	A	A	A	A		

備考

発表論文はワークショップ発表者19名による成果で、すべてワークショップ論文集に収録した。本論文集国内外の関係者・関係機関に配布しており、その成果は広く研究者の間で共有できるようにした。発表者各自の研究成果については、今後学会や学術雑誌等への公表により順調に進展するものと見込まれる。なお、ワークショップには美術史研究者を中心に54名が参加、19名の発表者のうち10名が夏から秋にかけて当館にて事前の作品調査を実施した。そのほかの発表者の多くは2009年以前に調査を行っており、いずれの研究成果も実作品に則した具体性のある新知見を盛り込んだ内容となっている。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国近代絵画を研究対象とした調査と情報収集、ワークショップの実施、論文集の刊行など、当初の計画通りの事業内容を実施することができた。中国近代絵画研究は日中戦争や文化大革命などの歴史的背景により実作品の多くが毀損され、研究の進捗が立ち遅れていたが、今回の事業により、日本側から研究成果を発信する基盤が整ったといえる。中国絵画研究や日本近代絵画研究など関連分野の研究者からの評価も高く、東アジア絵画史を通史的にかつ地域横断的に把握するための一助となることが期待できる。次年度以降は、今回の事業で明らかになった研究課題の究明、および展覧会開催に向けての準備をすすめてゆく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中国近代絵画に関する作品調査やワークショップ等を通じて、当該分野の課題等に関する検討を当初の計画通り進めることができた。本年度の成果を受け、次年度以降は、展覧会開催に向けての準備を加速させていく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究等を実施 ((5)-①- ii)		
【事業概要】 近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業(展示等)に反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、森實久美子(企画室員)			
【主な成果】 奈良を中心とする諸社寺への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を展示に反映させるとともに、今後の展示活動等に活用できる資料の蓄積、将来の調査に向けた調整などを行った。			
【年度実績概要】			
<p>①特別展「国宝 鑑真和上展」会期中に鑑真和上像(国宝)及び釈迦如来像(重文)のX線調査を行い、内部構造及び納入品の状況を検討した。</p> <p>②特別展「聖地寧波」会期中に泉涌寺(京都市)所蔵・楊貴妃観音像(重文)及び仁和寺(京都市)所蔵・觀音菩薩坐像のX線調査を行った。前者については調査時に得られた成果を報道発表した。</p> <p>③これまで紹介されることの少なかった、奈良地域所在の南北朝・室町彫刻の調査を寄託品を中心に重点的に行って特集展示「南北朝・室町時代の彫刻」を開催し、その成果を展示解説パネルや各種紹介記事等に反映させた。</p> <p>④信貴山朝護孫子寺において文化財調査を行い、その成果は学術協力を行った「信貴山秘宝展」の作品解説等に反映された。</p> <p>⑤将来の特別展・特別陳列の実施に向け、奈良豆比古神社(奈良市)・当麻寺(葛城市)・興喜天満宮(桜井市)と交渉し、総合的な文化財調査の計画を立てるに至った。</p> <p>⑥東大寺・醍醐寺における聖教調査への参加。</p> <p>⑦東大寺金堂鎮壇具の、蛍光エックス線を使用した材質調査。</p> <p>⑧東大寺法華堂諸像の、文様写真の整理と分析。</p>			
【実績値】			
<p>社寺等における調査回数 12回</p> <p>学会等発表回数 15回</p> <p>論文等 10件</p>			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。					

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会等 発表回数	論文発表本数			
判定	A	A	A			
備考	着実に調査活動を進めており、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近隣社寺を中心とした所蔵品の調査を着実に行って資料の蓄積を進めており、特別展「聖地寧波」への出陳を機に行った調査で得た成果が注目を集めなど、大きな実績をあげることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。21年度も特別展で借用した作品などを中心に調査活動を行い、将来、展覧会を開催するための資料蓄積を行うことが出来た。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 仏教美術の光学的調査研究(東京文化財研究所との共同研究) ((5)-①-vi)		
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、①高精細フルカラー画像の作成、②可視光励起による高精細蛍光画像の作成、③高精細反射近赤外線画像の作成、④高精細透過近赤外線画像の作成、⑤蛍光エックス線による非破壊分析、を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 [奈良国立博物館]：岩田茂樹(美術室長)、稻本泰生(企画室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(研究員)、北澤菜月(研究員) [東京文化財研究所]：田中淳(企画情報部長)、津田徹英(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、江村知子(研究員)、城野誠治(専門職員)			
【主な成果】 中国・南宋時代の仏教絵画の基準作として有名な重要文化財五百羅漢図(大徳寺蔵)82幅について、初めて本格的な光学調査を実施し、従来知られていなかった金泥の銘文を多数発見することができたことに加え、顔料や絵綱について高精細画像及び基礎データを入手できた。さらに前年度までに調査を開始していた聖徳太子及び天台高僧像(一乗寺蔵)と春日権現驗記絵披見台(春日大社蔵)についても追加調査を実施し、蛍光画像・近赤外線画像及び基礎データを入手することができた。			
【年度実績概要】 奈良国立博物館において、展覧会出陳を機会に借用した重要文化財五百羅漢図82幅(京都・大徳寺蔵)について、①高精細デジタルカメラによるフルカラー画像作成、②可視光励起による蛍光画像作成、③高精細反射近赤外線画像作成等の調査を実施し、肉眼では観察できない金泥銘文の解読、絵画技法の解明や絵綱の組成分析を行った。そこで得られた画像データ、分析結果をもとに両機関研究員の間で検討会を実施した結果、従来の肉眼観察では十数点しか発見されていなかった画中の金泥銘文を、新たに30点近く発見することができ、東アジア仏教絵画研究に極めて重要な資料を入手することができた。その成果は特別展「聖地寧波」の図録に銘文一覧として速報的に掲載し、学術研究成果の一般への普及にも努めた。また前年度に光学調査を実施した春日権現驗記絵披見台については、おん祭り展への出陳を機会に表具や下地の構造調査を実施し、今年度中の刊行を目指して報告書の作成を進めている。一方、平成19年度より継続的に調査を続けている国宝天台高僧像(兵庫・一乗寺蔵)についても、当館寄託分の7幅を中心に追加調査を実施し、未だ行っていなかった可視光励起による蛍光画像および近赤外線写真の撮影を完了した。			
上記によって得られた画像データや所見を踏まえ、東京文化財研究所において研究会を4回実施し、報告書の作成や追加調査計画について討議した。併せて次年度以降、信貴山縁起絵巻など新規調査対象選定についても検討を重ねた。			
【実績値】			
作品調査実施回数 4回：5/11～5/17、9/13～9/20、12/21、22 年3/1～5			
研究会開催件数 4回：東京文化財研究所で 4/22、6/15、8/25・26、11/5 に実施。			
調査概報 3件：			
① 特別展「聖地寧波」図録に光学調査で得られた大徳寺五百羅漢図 銘文データ掲載。(7/18)			
② 「春日権現驗記絵披見台 共同研究調査報告書」刊行(3/10)			
③ 「法隆寺金堂台座調査研究報告」(「鹿園雑集」第12号)刊行(3/31)			
調査作品数 3件 90点：重文 五百羅漢図(大徳寺蔵) 82点 春日権現驗記絵披見台(春日大社蔵) 1点 国宝 聖徳太子及び天台高僧像(一乗寺蔵) 7点			
			
視光の蛍光反応を用いた五百羅漢図銘文調査			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考 南宋仏画の名品として知られながら、数が多いためにその全貌に迫る調査がほとんどなされてこなかった大徳寺所蔵五百羅漢図について、初めて本格的な光学調査を実施することができ、多数の銘文を発見するという大きな成果を得た。また、すでに前年度調査を実施していた春日権現験記絵巻について追加調査を行い、報告書の刊行を進めることができた。いずれも展覧会出陳というまたとない機会を捉えた調査だった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考 両機関研究員の日程確保が難しい状況の中で、本年度はすでに1週間にわたる調査を2度も実施することができた。特に大徳寺五百羅漢図は82幅と多数にのぼったが、全点にわたって光学調査を実施したことにより、膨大なデータを収集することができた。またこれらのデータを踏まえた研究会を4回も実施し、両機関研究員の討議を重ねた結果、特別展「聖地寧波」図録への調査データの掲載に漕ぎ着けたほか、2件の報告書を刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすことができ、また文化財の保存・修理を将来行う上の指針となる詳細な現状記録を残すことができた。特に本年度は中国南宋時代と鎌倉時代の重要な絵画作品について詳細な調査を実施し、そこで得られたデータをもとに研究会を重ね、着実に報告書刊行につなげることができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施することができた。今年度調査したもののうち、大徳寺五百羅漢図と一乗寺天台高僧像については、いずれも点数が多いため未だデータの蓄積が十分ではない部分があるので、次年度に同様の追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげたい。また調査前・調査後の検討会をより綿密に行う一方、現在は1週間程度かかる1回あたりの調査実施期間を圧縮して、スムーズな日程調整を実現にするとともに、作品自体への負担を軽減したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 仏教美術写真収集及びその調査研究 ((5)-②- ii)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品および展覧会等に際して館外から借用した仏教美術を中心とする文化財について、写真撮影を行う。展覧会図録や美術書などには掲載されていない、作品の側面、背面、内側などの撮影を多数おこない、構造の理解や製作技法の解明に資する情報を収集する。写真資料の整理にあたっては、文化財の基本情報を整備するとともにデータベースへの登録を行い、学術研究や保存を目的とした利活用に対応できる体制を整える。			
【担当部課】	学芸部資料室	【プロジェクト責任者】	資料室長 宮崎 幹子
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室員)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、永井洋之(企画室員)、北澤菜月(企画室員)、森實久美子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 館内外の文化財のカラーおよびモノクロ撮影を多数実施し、資料を整備することができた。また、X線撮影をおこなうことにより、内部構造や製作技法に関して有用な情報を得ることができた。これらは情報システムに登録し、管理運用するとともに、インターネットを通して外部へも情報提供をおこなっている。また、特別観覧や写真カードにより、研究者・学術出版界・一般の利用にも供している。			
【年度実績概要】 今年度に特筆すべき点としては、特別展『国宝 鑑真和上展』、特別展『聖地寧波』等の開催に際して、多数の文化財の撮影をおこなったことが挙げられる。 特別展『国宝 鑑真和上展』では、日本最古の肖像彫刻として貴重な鑑真和上像についてX線撮影を実施したほか、多数の木彫像の写真撮影をおこない、上代彫刻の基礎資料の整備に努めた。 特別展『聖地寧波』では、清涼寺所蔵・釈迦如来立像、泉涌寺所蔵・觀音菩薩坐像(楊貴妃觀音)等の写真撮影をおこなったが、いずれも通常では調査の実施が大変困難な文化財であり、この貴重な機会を活用して多数の撮影をおこない、学術研究に供する資料の蓄積を図った。泉涌寺所蔵・觀音菩薩坐像についてはX線撮影もおこない、体内から五輪塔と見られる納入物の存在を明らかにすことができた。これについては別途記者発表がおこなわれた。また昨年度に引き続き、大徳寺所蔵・五百羅漢像(八十二幅)の撮影を実施し、中国仏教絵画を代表する本品の国内に伝わる全画像の写真を図録に掲載し、研究成果を公表するとともに図録の資料的価値を高めることができた。中国の港湾都市・寧波をテーマとしたこの展覧会では、他にも東アジア仏教美術を代表する名品が多数出陳された。東アジアの海域交流史については、近年学術的な関心の高まりが著しいが、写真撮影を多数実施することにより、博物館として基礎資料集成の面からも学界に貢献できたといえよう。 デジタル化に関しては、昨年度に引き続き、収蔵品、寄託品の写真原板のデジタル画像化を推進し、情報の蓄積に努めた。今後の高精細デジタル画像の蓄積や情報システムの構築については、情報技術の進展をふまえて新規技術を適切に導入し、情報の蓄積と公開がさらに推進されるよう研究と具体的検討をおこなっているが、その一貫として、写真情報システムのリプレイスを現在おこなっている。 また、文化財の撮影に使用しているタングステンライト用のポジフィルムが生産中止となつたこととともに、高精細デジタルカメラバックを導入し、本格的なデジタル撮影に対応出来る体制整備を進めている。			
【実績値】 <input type="radio"/> 収集資料数 収集した写真枚数は以下の通り。(収集資料数) カラー・ポジ(4×5) 2,733 枚、カラー・ブローニ 0 枚 モノクロ 2,800 枚、X 線 285 枚		 写真撮影風景	
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	この事業は継続性の高いものであり、短期的な成果や個別の画期性を期待すべきでなく、間断なく質の高い資料の蓄積を続けている点が評価できる。当館の展覧会開催・研究活動と密接に連携することで、重要領域の貴重な資料を重点的に収集し、全体として質の高いコレクションを形成している。					

2. 定量的評価

観点	収集資料数					
判定	A					
備考	撮影回数や収集資料数は多ければ良いというわけではないが、質や継続性を勘案しても、本年度は充分な調査と撮影をこなしており、資料の収集も豊富であった。また貴重な写真を図録に掲載するなど、独自の研究成果を多数公表することにも貢献した。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	写真撮影については、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均撮影枚数との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、歴史的・学術的に重要であり、撮影および調査の機会を得ることが通常では困難な文化財について、調査を実施し質の高い資料の収集が叶うことの意義は大変大きい。今後も調査や展覧会の開催と密接に連携した資料の蓄積を続け、仏教美術写真の一大コレクションとしての質の維持に努める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実績概要でも述べたとおり、昨年のポジフィルムの生産中止により、本格的なデジタル撮影への移行が必須となっている。機材と人材の確保を含めた長期的な展望が今後とも必要であると思われる。 貴重な仏教美術写真コレクションを維持し、これまでに引き続いて内外の研究者や学術出版界の利用に供する体制整備と、今日的な要請をふまえたデジタルアーカイブ化、情報公開に対応する必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の研究 ((5)-①-ii)		
【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、森實久美子(企画室員)			
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館等との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示及び図録等に反映させることができた。			
【年度実績概要】 ①学術交流協定を結んでいる中国・上海博物館に3名、同・河南博物院に2名、韓国・国立慶州博物館に1名を派遣した。また、中国・上海博物館から3名、河南博物院から2名、慶州博物館から2名の研究員を受け入れた。また正倉院展開催に際して慶州博物館から館長ほか1名を受け入れた。 ②特別展「国宝 鑑真和上展」「聖地寧波」開催に際し、中国の仏教文化がわが国に与えた影響に関するこれまでの調査研究の成果を、同展会場のパネル、展覧会図録、各種講座等に反映させた。 ③特別展「聖地寧波」の事前調査のために中国・浙江省に4名の研究員を派遣し、同展会場のパネル、展覧会図録、各種講座・シンポジウム等にその成果を反映した。またクーリエとして4名の研究員を中国・韓国に派遣し、併せて今後の両国における文化財調査に向けた情報収集を行った。さらに米・中・韓三国から中国で制作された文化財を借用し、クーリエとして研究者計14名(米国4名、中国6名、韓国4名)を、また中国・浙江省の文化財関係者4名を代表団として受け入れ、文化財を介した日中間の情報交換を活発に行なった。また同展会期中の8月8・9日に実施した国際学術シンポジウム「舍利と羅漢—聖地寧波をめぐる美術」では、外国人研究者3名(米国・中国・台湾)及び当館研究員を含む8名が東アジアの海域交流と仏教美術における日中関係に関する研究発表を行い、実りある討論を行うことができた。 ④特別展「第61回正倉院展」では、東アジア文化圏の中で正倉院宝物の意義を考察し、展示及び展覧会図録に反映した。また正倉院宝物の源流をシルクロードに探る取材のため研究員を派遣し、パネル展示や連載記事に協力した。 ⑤22年度の特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」開催の事前調査のため中国に2名の研究員を派遣し、中国で制作された関連作品を主たる対象とした事前調査・資料収集を行った。			
【実績値】 研究員の派遣 30名 研究員の受入 29名 学会、研究会等発表件数 7回 論文掲載件数 17件			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	わが国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。					

2. 定量的評価

観点	研究員の派遣人数	研究員の受入人数	学会、研究会等発表件数	論文掲載件数		
判定	A	A	A	A		
備考	展覧会企画に沿った調査研究ができ、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上海博物館(中国)・河南博物院(中国)・国立慶州博物館(韓国)の3館と研究員の交流を行うことで、広くアジア諸国を視野に入れた調査研究を行うことができた。特別展「国宝 鑑真和上展」では、鑑真が中国からもたらした仏教文化を多角的に紹介した。同「聖地寧波」も中国からの仏教文化受容の諸相を主軸に据えた展覧会であり、中国・韓国からも文化財を借用し、内容を充実させることができた。また中国で仏教関係文物の調査を展開し、その成果は特別展「聖地寧波」及び22年度開催の特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」の内容を充実させることになった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって22年度特別展「平城遷都1300年記念大遣唐使展」の内容を充実させることができた。23年度以降も中国・韓国との交流を内容に含む複数の特別展を計画中で、今後も引き続き調査研究を続けていく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 当館所蔵品についての調査研究(客員研究員) ((5)-①-iii)		
【事業概要】 従来からの収蔵品について継続的に調査研究を実施する。なお、新収蔵品については具体的な公開等を見越して重点的にこれを行う。調査研究の成果は、展覧会、印刷物、インターネット等を通じて公表し、広く斯界の学術的発展に資する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、森實久美子(企画室員)、客員研究員：根立研介(京都大学大学院文学研究科)、板倉聖哲(東京大学東洋文化研究所)、井手誠之輔(九州大学大学院人文科学研究所)、木村法光(元宮内庁正倉院事務所)、森郁夫(帝塚山大学人文学部) 調査員：藤岡穰(大阪大学大学院文学研究科)、高梨純次(滋賀県立近代美術館)、須藤弘敏(弘前大学人文学部)、橋詰文之(和泉市久保惣記念美術館)、稻城信子(元財団法人元興寺文化財研究所)、渡邊智山(関西大学文学部)			
【主な成果】 新収蔵品に対する調査研究を重点的に実施し、平常展での公開と併行して研究成果を広く発信することができた。従来からの収蔵品についても継続的に調査研究を行い、その成果を展示及び刊行物などに反映することができた。			
【年度実績概要】 ①平常展中の「注目の逸品」コーナーにおいて前年度購入した「道慈像」「聖徳太子像」、三年前に新発見された新たな寄託品「組法具(真光寺)」を受入後初公開し、同じく最近購入した「紫の水」「慈心金岡東庄寄進状」等も平常展で公開し、これら諸作品に対する調査研究の成果を展示会場での解説及び「奈良国立博物館だより」等で詳しく紹介した。 ②東京大学東洋文化研究所から寄託を受けた貴重図書の中で、特に重要な11件を特集展示「東京大学東洋文化研究所の貴重図書」で展示し、これら諸資料に対する調査研究の成果を展示会場での解説等で詳しく紹介した。 ③五條市猫塚古墳出土品に関して、細かな観察に基づく再検討を実施した。 ④特別展「聖地寧波」開催に向けて行った関連収蔵品調査の成果を、展示及び展覧会図録に反映した。 ⑤客員研究員と合同で、館蔵・寄託品の木工品・漆工品のエックス線撮影による構造調査を重点的に実施し、研究資料を蓄積した。 ⑥寄託品の東大寺金堂鎮壇具(国宝)について、蛍光エックス線を用いた材質分析を実施した。 ⑦寄託品の天台高僧像(一乗寺蔵、国宝)7幅のX線調査を実施した。 ⑧調査員と合同で、これまで紹介されることの少なかった、南北朝・室町彫刻の調査を館蔵品・寄託品中心に重点的に行い、院派仏師・椿井仏師・宿院仏師の活動状況と照合して得た研究成果をもとに特集展示「南北朝・室町時代の彫刻」を開催し、その成果を展示解説パネルや各種紹介記事等に反映させた。特に近年寄贈を受け、修理で面目を一新した館蔵品の「毘沙門天立像」「十一面觀音坐像」を初公開した点は、意義が大きい。 ⑨22年度の特別展「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」の開催に向け、出陳予定の収蔵品の予備調査を行った。			
【実績値】 <input type="checkbox"/> 図録の作成 展覧会図録 1冊 <input type="checkbox"/> 展示への反映 新収蔵品の調査研究の展示への反映 5回 <input type="checkbox"/> 学会、研究会等発表件数 3回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	収蔵品の調査研究は各部門による定期的継続的な点検調査を通して、平常展等で新たな成果を公開している。また、新収蔵品等についても集中的な調査を実施しており、この成果を公開しているのは前述の通りである。					

2. 定量的評価

観点	図録の作成	学会、研究会等 発表件数	展示への反映			
判定	A	A	A			
備考	調査研究成果について、質の高い図録等として発表することができた。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新収蔵品となった作品の調査研究を進め、その成果を平常展及び各種刊行物等に反映させた。また事前調査としての様々な館蔵品調査の成果が特別展「聖地寧波」に反映され、高い評価を得た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	従来からの収蔵品及び新収蔵品についての調査が継続的に実施され、その成果は評価の高い展覧会を生み、また展覧会図録等の出版物やインターネット等を通じて公表された。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 奈良時代の仏教美術と東アジア世界(科学研究費補助金) ((5)-①- ii)		
【事業概要】 奈良時代においてわが国で制作された、あるいは中国・朝鮮半島から舶載されたと考えられる仏教関連の美術工芸品の中から特に重要なものを選定し、綿密な調査と様々な角度からの検討によって、今後の議論の基礎となる資料を学界の共有財産として提供する。同時に唐・新羅との活発な交流が生んだこの時代の文化的国際性に特に留意し、東アジア文化交流史の全体像の中に奈良時代の仏教美術工芸史を位置づける。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	館長 湯山賢一
【スタッフ】 研究代表者：湯山賢一 研究分担者：西山厚、鈴木喜博、岩田茂樹、内藤栄、稻本泰生、吉澤悟、谷口耕生、宮崎幹子、野尻忠、清水健、岩戸晶子、斎木涼子、北澤菜月、永井洋之、森實久美子(以上学芸部) 連携研究者：有賀祥隆(東京芸術大学)、東野治之(奈良大学)、前園実知雄(奈良芸術短期大学)、根立研介(京都大学)、藤岡穣、高橋照彦(以上、大阪大学) 研究協力者：杉本一樹、成瀬正和、尾形充彦、西川明彦(以上、宮内庁正倉院事務所)、山崎隆之(前愛知県立芸術大学)、梶谷亮治(東大寺総合文化センター設立準備室)、中島博(名誉館員)			
【主な成果】 前年度から3カ年の計画で、①蛍光X線分析装置による光学調査を中心に、東大寺金堂鎮壇具(国宝)についての基礎データを収集し、その体系化を行う。②東大寺法華堂諸像の修理時に(財)美術院によって撮影された彩色文様写真を研究資料として活性化し、文様史的検討を加える。③館蔵及び寄託の古写経に関する基礎データの集積と料紙分析を行い、国籍問題の解決を図る。という三つの課題を柱として、研究計画調書に記載した体制で研究を進めている。			
【年度実績概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・様々な素材で構成される東大寺金堂鎮壇具(国宝)について蛍光X線による定性・定量分析を継続的に実施し、データの蓄積を行った。 ・前年度に着手した東大寺法華堂の乾漆造四天王立像、同梵天・帝釈天立像、同金剛力士立像、塑造伝日光・月光菩薩立像(すべて国宝)の彩色文様写真のデジタル画像化を完了させ、ついで研究分担者と技術者が合同でこれらすべてに色補正を加え、その作業を終えた。その上で次年度に行う文様史研究等の観点に立った分析・検討に供するため、画像目録を作成した。 ・顕微鏡による料紙観察を中心に館蔵・寄託の古写経の調査を進め、基礎データを収集した。 ・当該テーマに即して研究分担者各人が進める調査研究の成果を、各種学会・学術論文等で発表した。 			
【実績値】 <input type="radio"/> 調査回数 調査・作業日数 延べ35日。 <input type="radio"/> 収集資料数 写真資料デジタル画像化及び色補正作業 2017カット分 <input type="radio"/> 研究用資料集の制作 1冊 <input type="radio"/> 学会等発表回数 9回 <input type="radio"/> 論文発表本数 2本			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
この事業は当館の伝統と実績をふまえて企画された他ではなしえないプロジェクトであり、古代東アジア文化に関わる全ての学問領域の研究者の待望する、重要作品の精査に基づく基礎資料の整備を順調に進めている。また東アジアの文化交流史上に奈良時代の仏教美術を位置づけるという視点を堅持して研究を進めており、最終年度である次年度に結実する成果が、国際的規模で学界に貢献するとの展望をすでに得ている。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究用資料集の制作	学会等発表回数	論文発表本数	
判定	A	A	A	A	A	
備考 実作品及び写真資料に対する調査研究を継続的に進めて基礎資料の整備を進めており、特に膨大な量に及ぶ仏像文様写真の画像データ化・加工・編集作業を完了させ、研究資料としてほぼ完璧なものとできた点は特筆される。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	3年計画の中で、調査研究は順調に進んでいる。次年度は最終年度であり、蓄積した資料をとりまとめるだけでなく、多角的な観点から分析・考察を加えて、充実した研究成果報告書を刊行したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	規模・内容ともに国内最大の仏教美術の研究拠点である当館に相応しいプロジェクトであり、計画にそって着実に実績を挙げている。23年度以降も継続して競争的資金の獲得に努め、拠点としての体制・設備をさらに充実させ、関連学界の要請に応える総合的な研究活動を開拓する必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 統一新羅期の道具瓦集成(科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
<p>【事業概要】 日本の瓦生産において大きく影響を与えたと考えられる朝鮮半島の様相を日本と比較検討することを目的として、特に研究が遅れている道具瓦を取り上げる。これまで文様に偏りがちだった鬼瓦と鴟尾について出土数が多い統一新羅の資料を対象に集成を行い、これまで研究・調査によって明らかにしてきた技術的観点から見た古代日本の鬼瓦の様相とを比較検討しつつ、製作技術など技術的観点にもとづくデータを採取し、基礎的資料を作成する。</p>			
【担当部課】	学芸部工芸考古室	【プロジェクト責任者】	工芸考古室員 岩戸 晶子
<p>【スタッフ】</p> 			
<p>【主な成果】 2008年度から3ヵ年の計画で、韓国国内で最も多い所蔵資料数を誇る韓国国立慶州博物館(以下、慶州博)ほか、韓国国立中央博物館や東国大学校博物館などの所蔵資料を中心に、実測や写真撮影、熟覧を行い、資料化を進めている。</p>			
<p>【年度実績概要】 今年度は慶州博所蔵の雁鴨池出土の一括資料について集中的に調査を行う予定であったが、調査先とのスケジュールが合わず、2月初旬の短期の調査のみになった(今後の成果発表に向けて、次年度早々に調査を行う予定である)。そのため、今年度はこれまでの調査のデータ整理や分析を始めた。 また、10月の韓国瓦学会では韓国の瓦研究者との有意義な意見交換を行うことができた。</p>			
<p>【実績値】 <input type="radio"/>調査回数 のべ5日。 <input type="radio"/>収集資料数 40点</p>			
<p>【備考】</p> 			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
韓国における古代瓦の研究は文様を対象としたものに偏重しており、道具瓦も例外ではなかった。そういった意味では独創的であり、基礎データを提示することによって以後の研究の進展が期待できるものである。また、本調査は、プロジェクト責任者のこれまでの研究成果はもちろん奈良国立博物館における慶州博との学術交流などの人的交流の成果を基に可能となったものである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	B	B				
備考						
先方とのスケジュール調整がうまくいかず、長期の調査を行うことができなかつた。この調査分については次年度に行なうことがすでに調整済みである。 これまでの調査データの整理や分析は順調に進められた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎資料の蓄積と大量の調査データの整理を果たし、今年度も相応の評価が得られると思われる。最終年度ではあったが、調査が先送りせざるを得なかつたが、次年度はこれまでの成果を基に、韓国人研究者との検討も行いつつ研究の深化をはかる。次年度に行なうことになった調査を進めると同時に、概要を公表する準備をすすめ、年度中に公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	韓国での調査は、次年度への繰越はあるが、これまでの莫大な調査成果の整理や分析を行なうことができ、調査の完了とその成果発表に向けて、研究計画としては順調に推移していると言える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 古墳時代中期における対外交渉の特質と地域圏の形成・展開過程(科学研究費補助金)((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究は、日本の国家形成をみる上で基点となる古墳時代中期に焦点をあて、外来的な文化要素を徹底して検討することを目的としている。ケース・スタディとして奈良県五條猫塚古墳の出土品を選定しており、その再整理と詳細検討を行う中から生じた問題を、他の地域や遺跡出土の資料に当てはめ、新たな視点から外来的要素の発現メカニズムを探る計画である。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 吉澤 悟
【スタッフ】 研究分担者；岩戸晶子(工芸考古室員)、魚津知克(大手前大学講師) 研究協力者；岩本崇(島根大学文学部)、加藤一郎(宮内庁書陵部)、阪口英毅(京都大学大学院文学研究科)、川畑純(京都大学大学院)、初村武寛(京都府立大学大学院)			
【主な成果】 過去2ヶ年の実測図作成に引き続き、X線写真や4×5フィルムへの撮影を行い、基礎情報を充実させた。さらに報告書作成のため各メンバーに遺物別の分担を割り振り、それぞれ図版の作成とデータのとりまとめを推進した。			
【年度実績概要】 実測図作成やX線撮影など、これまで基礎資料の蓄積とその作業の中から新知見の発見を行い、多々の成果を挙げてきた。本年度はこれらを取りまとめ、正式な報告書の発行に結びつける作業を進めることを目標としてきた。 年度の前半において、五條猫塚古墳出土の鉄製品の実測図をほぼ全点揃えることができた。その時点で各メンバーを招集して検討会を行い、報告のための役割分担をとりきめた。年度の後半は、個々のメンバーが自身のペースで図版の作成、データの整理をすすめ、年度末の報告に向けてとりまとめを行っている。 さらに五條猫塚古墳の性格や、出土遺物がもつ特殊性、大陸・半島との繋がりなどについても各メンバーが部門ごとに検討を進めており、互いに意見交換を行いながら全体認識を形成してきた。 これらの成果の一部は、本年度末発行の奈良国立博物館の紀要『鹿園雑集』に掲載するほか、2010年5月の日本考古学協会総会の研究発表において公表する予定であり(2月中に入稿)、年度の終わり近くにはそのための準備を精力的に進めることにした。			
【実績値】 五條猫塚古墳の武具、農耕具、埴輪ほかの実測図を通算で約750枚。 X線写真、4×5ポジフィルム等の撮影数約200枚。 上記のデジタルデータ化。 全体検討会1回、小検討会3回開催。 2010年2月に日本考古学協会総会の研究発表資料を入稿(2頁分)。 2010年2月に『鹿園雑集』の原稿を入稿(18頁分)。			
 五條猫塚古墳出土 蒙古鉢形冑			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

五條猫塚古墳出土品の正式報告書の刊行は、国内の研究者のみならず韓国研究者の間でも待望のものである。その基本情報が揃えられた点で、本研究は大きな成果があったと考えられ、今後の発展性にも期待をもつことができる。なお、報告書の印刷は来年度以降に別途予算を確保しながら進める予定である。

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				

備考

古墳時代の鉄製品の若手研究者の力を借りて、今日的な水準による図面や基礎データを多く蓄積することができた。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査後、45年を経てようやく出土品の全貌が分かる情報を蓄積することができた。今日の考古学の水準で観察した成果は、40年前の報告書の見直しを迫るものであり、今後の研究に大きく寄与するものと思われる。また、劣化の著しい鉄製品を保存修理に出すにあたっても、現況図面と接合関係の確認がとれたために、今後の修理活動をスムーズに進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	最終年度として順調に成果をあげた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	1) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)-①- ii)					
【事業概要】						
JICA 草の根技術協力事業「文化財の保存と観光資源としての利活用」として、タイにおいて文化財の保存活用センターとしての役割を担う博物館としての立場から、専門家派遣、研修生受け入れを実施。佐賀・高伝寺所蔵巨大涅槃図の修復事業に伴い、日本と韓国の仏教寺院における大掛軸の修理を実施および法会に関しての展示ならびに国際シンポジウムを実施。						
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	企画課長 小泉恵英			
【スタッフ】						
森田稔(副館長)、原田あゆみ(文化財課研究員)、赤司善彦(展示課長) 藤田励夫(保存修復室長)						
【主な成果】						
タイ王国芸術局、国立博物館事務局と共同研究を実施した。タイ芸術局の研究員 3 名を受入れ、文化財保存と展示、地域共生について研究を実施。研究員 3 名をタイに派遣、現地シンポジウムで日本の建造物保存、タイの博物館の市民共生プログラムについて相互に発表した。これを踏まえ平成 22 年度に日タイの文化を比較する展覧会を開催する。 日本と韓国の大掛軸をテーマとする展示、国際シンポジウムを開催した。						
【年度実績概要】						
JICA の草の根技術協力事業「文化財の保存と地域の活性化」をテーマに共同研究を実施した。7/16~8/8 にタイ王国芸術局研究員 3 名を受入れ、文化財保存、平常展示、特別展示、遺跡保存、地域共生、無形文化財としての工芸技術保存についての研修を実施。タイ側から同テーマにおける現状の報告を受けた。 11/23~30 に、日本から研究員 3 名を派遣、タイ・バンコク国立博物館において、日本の建造物保存、タイの漆芸文化、博物館の地域共生などをテーマとしたセミナーを実施した。11/23~29 に平成 22 年度に実施予定の日・タイの文化比較を主テーマとする展覧会開催に向けて、展示内容の構築に向けて準備を進めた。九州国立博物館の文化財保存修復事業として、平成 20~21 年度に佐賀市指定・高伝寺所蔵大涅槃図(15.2m × 6.1m)の保存修理を実施した。このような巨大な仏画を用いた法要は韓国では広く行なわれており、仏教儀礼の源流を考える上で興味深い。そこで日韓の大掛軸の修理、法会について調査を実施し、映像記録を撮り、その成果を、トピック展示ならびに国際シンポジウムの形で示した。 4/29~5/6、10/22~10/25 に韓国の事例の調査をした。平成 22 年 2/21~3/28 に「巨大掛軸をめぐる文化交流 祈りと暮らしのかたち」と題したトピック展示を実施し、韓国国立中央博物館、公州博物館、古宮博物館などから研究員を招聘し、3/14 に日韓両国の巨大掛軸の歴史とその修理について、国際シンポジウムを開催した。						
【実績値】						
7/16~8/8 タイから研究員 3 名受入れ、研修実施。 11/23~11/30 タイへ研究員 3 名派遣、セミナー実施。 「タイの英知の活性化のためにシリントーン王女が開始された東洋螺鈿に関する研究」シリチャイ ワンチャラントラカル(タイ芸術局保存部長) 「日本における建造物の保存と活用」田上稔(福岡県文化財保護課) 「博物館ネットワークの構築と促進の方法」シリン・ユアンヤイディー(バンコク国立博物館) 「地域社会の強化のための博物館プランニング」プラパバーン・スリスック(サワン ワラナーヨック国立博物館) 「コミュニーンとしての博物館 ー博物館の発展のための収入源と地域連携ー」ウサー・ヌオンピエンパーク(芸術局国立博物館事務局) 「太宰府市 市民遺産によるまちづくり」城戸康利(太宰府市都市整備課) 11/23~11/29 タイへ研究員 3 名派遣、展覧会準備会議実施。 4/29~5/6 韓国に研究員派遣、作品調査、撮影実施。 10/22~10/25 韓国に研究員派遣、作品調査、撮影実施。 3/12~17 韓国から研究員 7 名受入れ、国際シンポジウム実施。						
【備考】						



バンコク国立博物館のセミナー

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
博物館がもつ使命である文化財の活用と、地域との共生とを関連させた事業は、高い公共性を持つものであり、今後の博物館の社会の中での位置づけを考える上でも極めて重要な取組である。また、作品の修復を通じ、日韓両国の共有する文化を研究することは、独創的な取組であり、そこで得られた成果は、アジアの文化財行政の多角的な取組に新たな視点を提示している。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員派遣数	研究員受入数			
判定	A	A	A			
備考						
派遣、招聘とも、文化財行政の現場の第一線で活躍するメンバーで行なわれ、各々の滞在期間中に、研修、セミナー、将来の展示会準備、シンポジウムと実際的な活動が行なわれ、高い効果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の活用、保存修復を通じての諸外国との活動は、国立博物館がわが國のみならず海外に向けてその技術、経験を広く伝えるという点において、文化財行政という観点で極めて大きな貢献をしているということができる。また、その結果を展覧会やシンポジウムに結実することで、広く市民に対しても活動の成果が還元されている。翌年度に実施予定の海外展準備も順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3カ年にわたるタイとの交流は、相互に博物館の地域共生という問題についての成果をあげており、さらに展覧会の開催へと事業が継続している。 韓国との交流については、修理技術や学術面での情報交換が行なわれたことで、今後の両国間の文化財を通じた交流に大きな足跡を残した。今後の人的交流、文化財の貸借などの事業に向けての土台作りの役割も担ったものといえる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((5)-①-v)		
【事業概要】 九州国立博物館において、X線CTを用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の健康状態や制作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することを目的とする。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津節生
【スタッフ】 臺信祐爾(文化財課長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、市元墨(企画課研究員)、楠井隆志(展示課主任研究員)、坂元雄紀(展示課研究員)			
【主な成果】 国宝阿修羅展に出品された八部衆・十大弟子像など、奈良時代の脱活乾漆像の保存状態と内部構造をデジタル情報として記録できた意義は大きい。この情報は今後の保管管理に役立つだけではなく将来の修理の基礎情報や脱活乾漆像の製作技法を解明する学術的な基礎情報として役立つことが期待される。			
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1年間で約300点のCT調査を実施した。得られた成果は、常設展での展示の際に活用している。 また、特別展で借用した阿修羅像ほか八部衆の調査では、脱活乾漆像の保存状態や製作工程などを明らかにした。阿修羅像の調査成果は新聞紙上にも掲載され大きな話題となった。今回のCT調査によって、阿修羅展に出品された脱活乾漆像の健康状態と内部構造を客観的に記録できた意義は大きい。この情報は今後の保管管理に役立つだけではなく将来の修理の基礎情報や脱活乾漆像の製作技法を解明する学術的な基礎情報として役立つことが期待される。 外部との連携としては、住友コレクションとして世界的に著名な泉屋博古館の所有する中国青銅器について中国古代青銅器の展示に合わせX線CTスキャナ、精密三次元計測、三次元プリンタを中心とする科学的な調査を実施した。その結果、中国古代青銅器の製作技術を非接触非破壊で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会と東アジア文化遺産保存学会中国考古学会で発表した。また、トピック展示(進化する博物館Ⅱ—みる・きく・ふれる、神々の青銅器への誘いー)では、作品の理解を助けるハンズオンの複製展示として活用した。			
【実績値】			
調査件数 約100件	5件		
日本文化財科学会での発表	5件		
文化財保存修復学会での発表	3件		
東アジア文化遺産保存学会での発表	1件		
中国考古学会での発表	1件		
殷周青銅器の構造解析と複製のハンズオン展示			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
効率性では、安全・敏速に撮像できる体制が整った。国内各博物館等からの調査要請が多く、我が国の文化財科学情報のセンターとしての期待が高まっている。得られたデータを展示で活用するために、三次元プリンタを活用した複製品を作製し、実物作品の理解を進めるためにハンズオン展示した。 今後は、さらに展示への活用、デジタルデータの共同利用に向けて研究を進めたい。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会発表数				
判定	A	A				
備考						
保存修復学会には約 600 名、文化財科学会には約 400 名の研究者が参加した。また東アジア文化遺産学会には中国・韓国・日本の研究者が約 200 名参加した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。泉屋博古館、徳川美術館、興福寺など国宝・重要文化財を保有する機関との連携研究も具体的に進んでいる。 22 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めると共に、展示への活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置で文化財所蔵者と共同調査し成果を上げることで、他の博物館との連携が進みつつある。本年度は、得られた成果を本博物館のトピック展示として公開したが、22 年度はさらに広い範囲で展示に活用したい。

【書式B】

(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	3) 博物館における文化財保存修復に関する研究 ((5)-①-v)					
【事業概要】 当館文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。						
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 志賀 智史			
【スタッフ】 篠崎悠美子(客員研究員)、村田忠繁(特任研究員)、藤田励夫(保存修復室長)、松尾かをる(研究補佐員)、藤岡春樹(国宝修理装こう師連盟九州支部長)、平河智恵(国宝修理装こう師連盟九州支部技師)、木下陽介(国宝修理装こう師連盟九州支部技師)						
【主な成果】 吉備国際大学から2名、九州産業大学から2名、別府大学から3名の合計7名が参加した。少人数のため、実践的な研修が実施できた。						
【年度実績概要】 別府大学の篠崎悠美子教授を客員研究員とし、保存修復施設を利用し、地域の大学との協業を果たすことを目的とした短期インターンシップ研修プログラムを平成17~20年度の実績を踏まえ検討、改善した。成果は8月17日(月)~21日(金)の5日間にわたり国宝修理装こう師連盟の協力を受け、吉備国際大学と九州産業大学、別府大学の学生7名に対して、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」として開催した。研修では障壁画下貼り作製に関する講義と実習を通して、文化財保存修復についての理解と研鑽を深めた。						
【実績値】						
研修開催実績	平成17年度より5回目					
今年度研修参加学生	吉備国際大学 九州産業大学 別府大学 計	2名 2名 3名 7名				
 研修風景						
【備考】						

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				
備考	短期の実習としては適切な数である。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財を伝えるため修復技術者の育成は必要不可欠であるが、学生・大学院生に対してこのような研修を行っている機関は極めて少ない。少数の研修生で毎年継続することに意味のある事業であり、平成 22 年度以降も実施する計画である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成 17 年度より少人数の実習を継続的におこなっており、参加者数も安定している。平成 22 年度以降も同様な研修を実施する計画である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																		
プロジェクト名称	4)博物館危機管理としての市民協同型IPMシステム構築に向けての基礎研究 ((5)-①-ii)																		
【事業概要】 平成21年度文化庁美術館・博物館基盤整備支援事業「市民と共に ミュージアムIPM」を、地域の博物館等と連携協力し、実施した。本事業は、地域に展開可能なミュージアムIPM支援者育成プログラムを策定し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のミュージアム支援者層の拡大に寄与するものである。 連携機関及び当館のボランティア等の市民にモデル研修会、ワークショップへ参加いただきその意見をもとに支援者育成プログラムの策定をはかるとともに、公開シンポジウムを開催し地域や市民への普及に努めた。																			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	博物館科学課長 本田光子																
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、森田稔(副館長)、高田裕康(交流課長)、神谷真美(総務課長補佐)、村田忠繁(特任研究員)、今津節生(環境保全室長)、鳥越俊行(環境保全室主任研究員)、上野智彦(交流課主任研究員)、上野敦子(研究補佐員)																			
【主な成果】 研修会等参加登録者は、九州国立博物館および地域連携機関のボランティアからなるが、毎回大変熱心な参加状況であり、市民の関心の高さがうかがえ、積極的な意見を集約することが可能となり、ミュージアムIPM支援者育成プログラム案策定に充分活かすことができた。今後は、本プログラムにより支援者育成を具体的に進める目途が得られた。公開シンポジウムでは市民の活動報告と専門家の講演により、市民の理解を深めることができた。																			
【年度実績概要】 1. 人材育成プログラムの策定 「ミュージアムIPM支援者育成プログラム策定会議」を開催し、これまでの取り組み実績や九州国立博物館で実施している現行のIPMボランティア活動内容を評価検討し、人材育成プログラム案を策定する。ワーキンググループによるプログラム案を協力者会議で検討し、問題点や課題を検討している。 2. 研修会・ワークショップの実施 文化財の保存科学と生物被害の基礎を学ぶ研修会と、文化財環境保全のための調査とIPMを進めるための基礎スキルを体験するワークショップを、各2回開催する。50名の登録者を募り実施し、研修会は終了、ワークショップ最終回を11月末に実施。 3. 公開シンポジウムの開催 公開シンポジウムを開催し、市民協同型ミュージアムIPMの必要性や重要性を広く社会へ紹介するとともに、その担い手であるボランティアやNPO法人等支援者達からのメッセージを地域社会へ直接伝える場とする。5名の市民による報告会と専門家による講演5本および座談会の構成で、11月末に開催した。																			
【実績値】 <table><tbody><tr><td>モデル研修会等参加登録者</td><td>50名</td></tr><tr><td>ガイダンス</td><td>4回 各回40名程度参加</td></tr><tr><td>研修会開催回数</td><td>4回 各回40名程度参加</td></tr><tr><td>ワークショップ開催回数</td><td>4回 各回40名程度参加</td></tr><tr><td>施設見学</td><td>4回 各回40名程度参加</td></tr><tr><td>公開シンポジウム参加者</td><td>190名</td></tr><tr><td>協力者会議</td><td>2回</td></tr><tr><td>ワーキンググループ検討会</td><td>6回</td></tr></tbody></table>				モデル研修会等参加登録者	50名	ガイダンス	4回 各回40名程度参加	研修会開催回数	4回 各回40名程度参加	ワークショップ開催回数	4回 各回40名程度参加	施設見学	4回 各回40名程度参加	公開シンポジウム参加者	190名	協力者会議	2回	ワーキンググループ検討会	6回
モデル研修会等参加登録者	50名																		
ガイダンス	4回 各回40名程度参加																		
研修会開催回数	4回 各回40名程度参加																		
ワークショップ開催回数	4回 各回40名程度参加																		
施設見学	4回 各回40名程度参加																		
公開シンポジウム参加者	190名																		
協力者会議	2回																		
ワーキンググループ検討会	6回																		
【備考】																			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	協力者会議 開催回数	ワーキング グループ 検討会	ガイダンス、研 修会・ワークシ ョップ・見学会 開催回数	ガイダンス、研 修会・ワークシ ョップ・見学会 延参加者数	シンポジウム 開催回数	シンポジウム 参加者数
判定	A	A	A	A	A	A
備考 モデル研修会等参加登録者は 50 名であり、各回とも 80%以上の出席であった。						

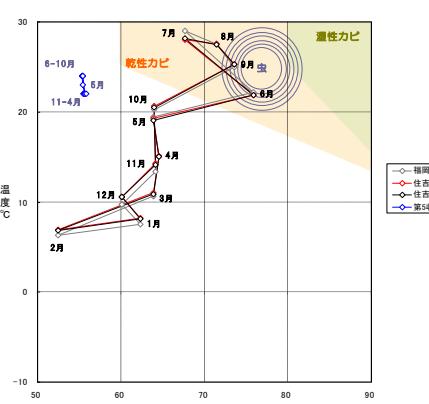
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今回の事業が、IPM をひとつの切り口とした、九博の着実な取組を多くの方々に理解していただく契機になるとともに、館の規模や設置形態を超えて、広く参考となるモデルを示すことができた。次年度には、本プログラム案を基にした研修実施計画を検討、開催し、地域との連携を深めながら、より広範な普及をはかるようする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の支援者層の拡大充実を図ることで、市民や機関との連携を深めながら、より積極的に文化財に関する調査及び研究を推進した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5)文化遺産の保全に寄与する保存環境の構築 ((5)-①-i)		
【事業概要】 近年の温暖化による影響のためか、地域の寺社が所蔵する文化財のカビ被害について、その処置および改善計画の助言に関する要請が増加している。これを受け、主として収蔵庫の環境調査を継続して実施し、地域の文化遺産保全のための保存環境についてその実体把握を行うと共に、地域の文化財保護行政や所有者を含めた保存環境管理システムを構築することを目指す。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	博物館科学課長 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六(館長)、森田稔(副館長)、伊藤嘉章(学芸部長)、村田忠繁(特任研究員)、藤田励夫(保存修復室長)、志賀智史(保存修復室研究員)、松尾かをる(研究補佐員)			
【主な成果】 平成 18 年秋の特別展に福岡市内の神社が所有する市指定品の絵馬を借用した所カビ被害が認められたので、同年当館保存修復施設で処置を実施し返却した。翌 19 年に再度カビが発生し、当館が指導助言依頼を受け、処置を行うと共に、神社宝物庫についての環境調査を平成 21 年 11 月まで実施し、保存環境ならびに日常管理の改善が必要であることがわかった。			
【年度実績概要】 国や県市の指定文化財を所有する福岡市内の寺社三ヶ所について、環境調査を継続している。 今年度は神社宝物庫の庫内・棚・桐箱内等の温湿度計測による環境調査の区切りがつき、改善策の提案を行った。年間を通してその神社がどのような温湿度環境で推移しているかをデーターで示し、宝物庫については、その清浄度の維持及び空気循環の促進また必要に応じた細やかな除湿等による日常管理を徹底することが望ましいことを提案した。しかしながら、そうした作業への配置を行うことは俄に無理のことであり、結果として、当館へ寄託の申し出を受けた。 継続調査中の他の 2 例についても、ほぼ同様な状況であり、地域の文化遺産の保存環境は多くの場合、細やかな日常管理を継続することで、より良好な状態を維持することができるところがわかつた。 継続した環境調査の必要性はもとより、こうした環境調査や日常管理を担うサポート的な人材育成も視野に入れた保存環境システム構築の必要性が明らかになってきた。			
 <p>温湿度データの回収</p> <p>福岡県・住吉ロガー-3・5 クライモグラフ</p>  <p>神社宝物庫に関するクライモグラフ</p>			
【実績値】			
<input type="radio"/> 調査件数 寺社宝物庫環境調査 3 件 <input type="radio"/> 調査期間 (A) 1 年、(B) 2 年、(C) 5 年 <input type="radio"/> 従事研究員数 4 名			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	社会性
判定	A	A	A	B	A	A

備考

地球温暖化の影響を受けていることもその要因の一つであると考えられるような、寺社所有文化財のカビ被害について、継続的対応をしつつ、地域の文化財保存管理の一端を担うシステムを構築する取り組みは、社会的な貢献を果たす。従来、博物館による寺社調査は、文化財の内容や保存状態の把握にとどまることが多かったが、気候や社会の動きに応じて、今後はさらに必要となる役割である。しかしながら、現体制での作業は効率性に欠ける所があり、サポート要因養成も含めやや改善が必要である。

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査期間	従事研究員数			
判定	A	A	B			

備考

地域からの要請に応じた形で開始される調査が主となるため、調査件数・期間とも、文化財所有者の事情によるところが大きい。これまでの所は、要請に応えながら、成果をあげてきたが、今後は寺社関係者のみならず、地域のサポーター育成に取り組む必要がある。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地元の文化財保護行政や文化財所有者への支援を継続しており、地域における文化財保存修復の拠点として、ナショナルセンターの役割を果たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の支援者層の拡大充実を図る他のプロジェクト「ミュージアム支援者育成事業」との連携を深め、積極的に取り組む方向性の検討を始めることにより、成果をあげができる。

【書式B】

(様式 1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCOとの共同) ((5)-①- ii)		
【事業概要】 絵画、書跡、古文書等の文化財修復には、伝統的な材料と技術を用いた手漉き紙が不可欠である。東アジア各国では、伝統手漉き和紙の技術が廃れ、良質の手漉き紙を入手することが困難になってきており、いずれは消滅してしまう危機に瀕している。そこで、日本、中国、韓国を中心とする手漉き紙の技術について、現地調査を実施し、保存策策定のための資料を得る。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 藤田 励夫
【スタッフ】 森田稔(副館長)、本田光子(博物館科学課長)、志賀智史(研究員)			
【主な成果】 中国においては UNESCOとの共同調査により、貴州省内の少数民族布衣族と苗族の手漉き紙技術について調査した。 日本においては、美濃、越前、金沢、富山の手漉き和紙製作現場 5 カ所を調査した。			
【年度実績概要】 日本および中国の調査地においては、動画撮影、写真撮影、聞き取り調査、調書作成、サンプル収集などを実施した。 また、中国の調査地においては、中国各地から集まった文化財関係者とともに研究会を開催し、主に中国各地の手漉き紙製作についての発表が行われた。日本から九州国立博物館のスタッフのほか、高知県立紙産業技術センターの研究員、紙文化財の修理技術者の代表が出席した。			
【実績値】 調査地 海外：中国 2 件(貴州省衣族、苗族) 国内： 5 件(美濃、越前、金沢(2 か所)、富山)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	B	B	B	B	B
備考						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査				
判定	B	B				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国、国内共に効率的に手漉き地生産地を調査し、資料入手することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	ほぼ計画通りに実施されている。次年度以降、収集した調査結果を集約し、修理現場へ還元していくことが望まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築 (科学研究費補助金) ((5)-①-ii)		
【事業概要】 本研究では、日本列島に分布する装飾古墳を対象とし、写真測量技術を応用して壁画に影響を与えることなく、石室全体を客観的に記録する方法を開発した。この技術を活用して装飾古墳の記録・管理の事業を展開し、博物館やweb上で展示・公開するためのデジタルアーカイブを構築する。これにより装飾古墳を3次元的に記録する研究基盤を確立する。また、装飾古墳の現状記録としては、石室構造や文様の写真を高精細画像として撮影する。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	文化交流展示室長 河野一隆
【スタッフ】			
研究分担者	赤司善彦 (九州国立博物館)		
研究協力者	池田朋生 (熊本県装飾古墳館)・嶋村一志 (泉崎村教育委員会) 前田達男 (佐賀市教育委員会)・吉田東明 (福岡県教育委員会) 原田保則 (武雄市教育委員会)・渡部俊哉 (白石町教育委員会) 武廣正純・天賀光広・村上浩明 ((株)とっぺん) 小堀昇 ((財)日本地図センター)・堀耕平 (南相馬市教育委員会)		
【主な成果】 今年度の研究では、装飾古墳のうち石室4基(佐賀市西限古墳・宗像市桜京古墳・武雄市勇猛寺古墳・みやこ町古墳)、横穴墓2基(泉崎村泉崎横穴・南相馬市羽山横穴)を対象とした。その結果、本研究によってデジタルアーカイブされた装飾古墳の総数は、石室12基・横穴墓6基で、福岡・大分・佐賀・熊本・福島の各県に亘った。特に、福島県の彩色壁画をもつ横穴墓の調査ができたことは、研究の広がりを考える上で大きな成果となった。また、今までの研究の中間報告として、報告書の作成と裸眼立体視による映像を作成して当館で展示を行った。			
【年度実績概要】 本研究では、九州以外の横穴墓をも視野に入れるために、福島県の装飾横穴墓の調査を行った。特に、横穴という狭小な空間で彩色壁画の安全で迅速な記録を遂行することを検証することも目的とした。本研究は、人手による実測図や写真によって記録・管理されてきた装飾古墳に対して、写真測量技術を応用して、非接触によって壁画に影響を与えることなくVR画像を作成し、石室全体を客観的に記録するための方法の開発と実践的研究である。これにより、石室と壁画の記録方法が従来の実測図の作成と比べて飛躍的にスピードアップしただけではなく、壁画とカビ等の汚損や石室の崩壊などの石室内における位置関係を3次元的に記録できるようになり、装飾古墳の保存のためのデータ基盤が確立した。また、長らく閉塞されていた石室(宗像市桜京古墳)や新たに発見された装飾古墳(みやこ町皆見大塚古墳)の記録方法としても本研究の一環としての要請を受け、研究だけでなく文化財行政の現場にも大きな寄与があった。これらの方法で製作したVR画像データは、通常は内部に立ち入れない装飾古墳を博物館で映像展示することにも活用できる。VR画像は文化財の保存・普及に新しくかつ最適な記録手段であることを提言したい。			
また、今年度は4ヶ年の研究期間のうち3年目に該当することから、今までの研究成果の中間報告として、報告書の作成とVR画像を裸眼立体できる映像として作成した。前者は今までのVR画像の成果を印刷出力という形で示すだけでなく、全国の装飾古墳の総覧となるような構成で編集を進めてきている。後者は立体でデジタルアーカイビングされているデータを立体で出力し、博物館展示に組み込む試みである。これは、当館文化交流展示室にて開催される「進化する博物館II みる、きく、ふれる～神々の青銅器へのいざない～」(平成22年2月9日～3月28日)で成果公開し、その効果を検証した。			
【実績値】			
○VR画像数	<ul style="list-style-type: none"> VR画像の作成を行った装飾古墳は、石室墳4基および横穴墓2基の計6基である。蓄積された古墳数は通算で18基となった。 九州以外の横穴墓のVR画像化を行い、研究に広がりが出てきた。 発掘調査と連動して、本研究を組み込むことができ、文化財行政の面でも大きな前進があった。 平成19年度からの研究の中間報告として、報告書を纏め、映像作成を行った。 		
○調査回数	6件		
○調査概報	1件		
月刊文化財 第574号「古墳壁画の保存と活用」 2009年 『史跡で読む日本の歴史』2 古墳の時代 2010年			
【備考】			



羽山横穴墓計測風景

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
・年度当初の計画通り実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	VR画像数	調査概報			
判定	A	A	A			
備考						
・着手が諸般の事情により若干遅れたが、年度当初の計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	・おおむね、年度当初に描いた通りの計画が遂行できた。とくに、本研究が九州だけではなく、福島県の装飾横穴墓に対しても適用でき、研究の広がりをはかることができた意義は大きい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	・昨年からの蓄積では、調査回数・地域とも順調な拡大を続けている。

【書式B】

(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-8

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	8)近代工芸の美術史・産業史・地域史の基礎資料としての内国勧業博覧会出品作品の研究(科学研究費補助金)((5)-①-ii)					
【事業概要】 日本の近代史の展開に大きな意味を持った工芸の展開について、その展開の契機となった内国勧業博覧会の出品作を中心とした基礎資料を整備する。						
【担当部課】 学芸部 【プロジェクト責任者】 学芸部長 伊藤 嘉章						
【スタッフ】 小川幹生(名古屋市博物館学芸課学芸員)、土井久美子(大阪市立美術館学芸課学芸員)、高橋美奈子(山種美術館学芸部長)						
【主な成果】 第一回内国勧業博覧会、第二回内国勧業博覧会の出品作品について、現存作品についての情報を収集し、それらについての画像データ集成を行なった。第二回内国勧業博覧会については当時出版の博覧会を紹介する文献から、画像による作品データが残されており、これもデジタル化して収集した。						
【年度実績概要】 現存作品についてのデータを各自収集し、これを情報検討会で集約した。その中で、工芸の分野別によるデータ整理の分担及び、情報収集、整理作業について協議するとともに、これまでの調査成果を共有することとした。関連すると思われる近代工芸を所蔵する機関・個人について、作品の調査を実施し、作品のデータ化を行なった。各図書館に所蔵されている文献から、関係記事・画像を収集した。内国勧業博覧会出品が明らかな作品について新たな撮影を実施した。地域の研究者に研究データの一部を提供し、新たなデータ入手した。						
【実績値】 ○収集資料数 第一回内国勧業博覧会・・・写真帖データ(211件)、褒章授与人データ(1182件)の複合データベース化。 第二回内国勧業博覧会・・・写真帖データ(137件)、褒章授与人データ(1621件)の複合データベース化。 東博購入寄贈作品(680件)データ化 当時刊行の文献の画像のデータ化。 第三回以降 内国勧業博覧会 関連絵画資料の収集。 ○調査回数 作品調査……15回 資料調査…… 8回 情報交換…… 6回						
 <p>『第二回内国勧業博覧会列品図録』佐々林信之助編 大島勝三郎の出品作</p>						
【備考】						

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
本研究は、今後の研究の基礎となるデータを集成するものであり、従来の文字情報のみに頼るものから、実際の作品にまで迫ることを目的とすることに独創性がある。これによって当時の評価も研究の対象となることが可能となる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考						
第一回内国勧業博覧会については写真帖データ、褒章授与人データの複合データベースによりデータ化し、第二回内国勧業博覧会については、帝室博物館購入データ、当時刊行の文献から絵画資料を収集してデータ化を進めている。 地域研究者との情報交換を進めつつある。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出品目録のデータ化は早くに行なわれたが、実際の作品については個別のデータとしてあるのみというのがこれまでの状況であった。今回の研究によって、写真、絵画、さらに文献で紹介の画像、そして現存作品といったデータを収集した。それによって、内国勧業博覧会に出品された作品の実像が明らかになる。さらにそれらに対する評価についても、作品とあわせることで、より正確な理解が可能となった。これらから、近代における工芸の展開をより立体的に捉えることが可能となる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文字データベースに画像のデータが加わることで、実際の展開を考える基礎データを作ることが出来た。今後、さらにこれを充実させる必要があり、各地の研究者への情報提供をすることで、さらなる情報の集積を図っていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) トルキ山遼墓出土品から見た唐滅亡後の東アジアにおける工芸技術（科学研究費補助金）((5)-①-ii)		
【事業概要】 907年の唐滅亡後、遼、宋、高麗、日本の諸国は、唐の制度・文化を規範としつつ、それぞれに独自の文化を醸成してきたことはよく知られている。まだ十分な基礎的研究条件が整っていなかった遼代文化についても、ようやく近年、内蒙古自治区トルキ山遼墓など、各地で重要な発掘が相次ぎ、考古学的情報を伴う実物資料が飛躍的に増えた。現地で調査研究を実施している内蒙古文物考古研究所と工芸技術の変遷を軸に遼代文化研究の基礎固めとなる共同研究を実施するものである。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	文化財課長 臺信祐爾
【スタッフ】 今津節生(博物館科学課環境保全室長)、伊藤信二(企画課特別展室長)、市元墨(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 フホトの内蒙古文物考古研究所および内蒙古博物館の作品資料調査2回(延べ5名)と内蒙古自治区内の赤峰博物館、巴林右旗博物館、上京博物館などの資料調査(延べ4名)を実施したほか、内蒙古文物考古研究所研究員らを招聘し、関西地区の資料調査および関係機関見学を実施した。			
【年度実績概要】 8月にスタッフ2名が赤峰博物館、敖漢旗博物館、白塔文物管理所、巴林右旗博物館、林西博物館などの資料調査を実施したほか、内蒙古文物考古研究所および内蒙古博物館で資料調査と意見交換を実施した。また別のスタッフ1名がトルキ山遼墓から出土した木棺に関する技術的な調査研究を現地スタッフとの協力の下継続して実施した。 9月にはスタッフ2名が京都国立博物館における遼時代並行期を取り扱う「東アジアにおける金属工芸に関する公開国際セミナー」に出席し、韓国・中国および日本国内における金属工芸研究の動向など最新の学術情報を入手することができた。 3月には内蒙古文物考古研究所関係者(4名)を招聘し、スタッフ2名とともに遼時代と並行するわが国平安時代や高麗時代の作品調査を京都国立博物館や木下美術館などで実施し、関係者と意見交換するほか、平安時代仏教美術の粹が今日まで保存されている教王護国寺、比叡山延暦寺や平等院鳳凰堂・鳳翔館の見学なども実施した。 3月にはスタッフ2名が内蒙古文物考古研究所、内蒙古博物館、上京博物館などを訪問し、資料調査と意見交換を実施した。			
 八角七層白塔 (内蒙古自治区赤峰市巴林左旗所在)			
【実績値】 <input type="radio"/> 調査回数 3回 <input type="radio"/> 収集資料数 150件 <input type="radio"/> 研究発表 1件 今津節生・臺信祐爾ほか 「内蒙古自治区吐爾基山遼墓出土彩色木棺の保存 2 -三次元計測と保存修復-」 第31回文化財保存修復学会研究発表(於倉敷市)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
発掘調査を各地で実施し、出土品に関する修復や調査研究を実施している内蒙文物考古研究所および展示に活用している内蒙博物館との密接な共同研究体制を構築できたため、本研究の研究成果を当館における展覧会の形で広く一般に公開する体制構築の方向性が確認できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究発表			
判定	A	A	A			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内蒙文物考古研究所および内蒙博物院関係者との共同研究体制が構築でき、現地調査および国内共同調査についても引き続き実施できたため、順調に推移しているといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は中期計画に沿った内容として遂行できたと考える。 来年度は最終年度であり、引き続き現地調査および国内共同調査を通して、本研究の基礎的資料収集を行うとともに総括を行う。あわせて内蒙文物考古研究所関係者ならびに国内専門家も招聘して一般向けの遼代文化に関する講演会を当館において企画実施したいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 室町時代の仏教絵画を中心とする東アジアの宗教美術に関する調査研究（科学研究費補助金）((5)-①-ii)		
【事業概要】 室町時代に政治権力者や有力寺院が関与して制作・受容された仏教絵画について基礎的な調査研究を行う。その造形的・文化的な意義を中国・朝鮮を含めた東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的として実施する。			
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 畑 靖紀
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は当該テーマについて次の二つの観点から研究し、下記の成果を得た。 (1)足利将軍家が所蔵した中国仏画に注目し、これらに対する歴史的な認識を考察した。その陳列方法を分析することを通じて、室町時代の道釈画に対する意義付けについて知見を得た。 (2)新出の『印譜集』(ハーバード大学燕京図書館蔵)を中心に、中国仏画に依拠して絵画を制作した室町時代の水墨画家に関する基本資料を収集した。			
【年度実績概要】 従来、室町時代の仏教絵画についての研究成果は非常に少ないが、この研究の状況に対して本調査研究では、当該の領域に関する基礎的なデータを収集して歴史的な意義を考察し、それらを東アジアの宗教美術のなかに位置付けることを目的としている。この目的を達成するために、今年度は「主な成果」に記した観点から研究を遂行した。 まず(1)足利将軍家所蔵の中国仏画に対する室町時代の認識については、会所における陳列の方法を分析し、その意義付けを同家の対外関係を重視する政策との関わりから解釈して、仏画を中心とする唐物飾りに対する評価・意義付けを考察した。 また(2)室町時代の水墨画家に関する基本資料については、新出資料である『印譜集』(ハーバード大学燕京図書館蔵)を調査研究した点が特筆される。本資料はアーネスト・フェノロサ(1853~1908)の手稿であり、朝岡興禎(1800~1856)の『古画備考』とともに日本絵画史に関する研究資料として重要である。とくに室町時代の画家に関する記述が多く、室町水墨画の研究における基本文献とみなされるため、これを調査研究したことはとくに大きな意義があると考える。			
【実績値】			
論文掲載数 2回 ・東アジア美術文化交流研究会編 『寧波の美術と海域交流』 ・展覧会カタログ『特別展京都妙心寺』			
調査回数 6回 収集資料数 200個 調査概報 2回		研究対象資料 『印譜集』部分 ハーバード大学燕京図書館蔵	
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
定性的評価については、国際性・オリジナリティ・多様性・人的投資・基礎性・達成値の観点から、充分な成果が認められると判断される。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報	論文掲載数		
判定	A	A	A	A		
備考						
定量的評価については、「調査概報」にかかる目標値である「論文掲載数」1回をこえる実績値をのこしており、充分な成果と判断される。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価についてはとくに国際性とオリジナリティの観点から、定量的評価については公表した成果の実績値から、別記の総合的判断が妥当であると考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。 科学研究費による本事業については、今後も外部資金などを積極的に活用する方法により、調査研究を継続してゆきたいと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進												
プロジェクト名称	11)近世初期日本絵画における粉本使用例の基礎研究（科学研究費補助金）((5)-①-ii)												
<p>【事業概要】 粉本の流通過程と使用例に注目し、16世紀における絵画制作の実態を明らかにするための粉本の基礎調査を行う。従来美術史研究の対象から外されていた町絵師作とされる作品を含め、図様の継承を網羅的に行うこと、これまで文字史料に依存していた絵師の情報ネットワークの再構築を試みる。</p>													
【担当部課】	企画課	【プロジェクト責任者】	研究員 金井裕子										
<p>【スタッフ】</p>													
<p>【主な成果】 昨年度までの調査成果を踏まえ、主に以下の点で成果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 「平家物語図屏風」(アメリカ・バークコレクション)や「三十六歌仙扁額」(福岡・宗像大社)など粉本を使用したと思われる16世紀の絵画作品のうち、代表的な2件についての基礎調査を行った。 2) 東京芸術大学が所蔵する「住吉家鑑定控」の基礎調査を行った。 													
<p>【年度実績概要】 室町時代末期から江戸時代初期にかけてのいわゆる近世初期は、日本絵画の需要の拡大に伴い、粉本を用いて同図様の作品が制作される機会が飛躍的に増加した。その例は、同図様を共有する作品群として確認できるものの、実際の粉本の現存例は少なく、その使用例を含めた制作の実態は明らかでない。 本年度は昨年度に引き続き、16世紀の日本絵画作品のうち、粉本使用が顕著な作品の基礎調査を行い、特に以下の2点について成果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 粉本使用の代表例とされる「北野天神縁起絵」「平家物語絵」「三十六歌仙絵」などの主題のうち、本年は特に「平家物語絵」「三十六歌仙絵」について調査を進めた。特に「三十六歌仙絵」については、過去に調査した鹿児島県出水市所蔵本と極めて近似した福岡県宗像大社所蔵本のデータを得ることで、図様の伝播についても考察を進めることができた。 2) 近世初期の粉本は現存例が極めて少なく、江戸時代初期から活躍した絵師である狩野家、土佐家、住吉家の鑑定控は非常に重要な史料である。このうち、狩野家と土佐家の鑑定控や史料は出版・刊行され研究が進んでいるものの、住吉家史料は手付かずの状況であった。本年度はこの住吉家史料のうち、「住吉家鑑定控」を特に調査をすすめ、絵師の色認識や形状把握の実態について大いに成果を挙げることができた。 													
<p>【実績値】</p> <p><論文掲載数> 特別展「京都 妙心寺」展覧会カタログ 1回</p> <p><調査回数></p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">2009/7/13</td> <td>福岡・宗像大社 作品調査</td> </tr> <tr> <td>2009/11/2</td> <td>バークコレクション 作品調査</td> </tr> <tr> <td>2009/11/4</td> <td>メトロポリタン美術館 作品調査</td> </tr> </table> <p><収集資料数></p> <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">調査撮影写真</td> <td>978枚</td> </tr> <tr> <td>複写資料</td> <td>73枚</td> </tr> </table>				2009/7/13	福岡・宗像大社 作品調査	2009/11/2	バークコレクション 作品調査	2009/11/4	メトロポリタン美術館 作品調査	調査撮影写真	978枚	複写資料	73枚
2009/7/13	福岡・宗像大社 作品調査												
2009/11/2	バークコレクション 作品調査												
2009/11/4	メトロポリタン美術館 作品調査												
調査撮影写真	978枚												
複写資料	73枚												
<p>【備考】</p>													



「平家物語図屏風」部分 バークコレクション蔵

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
定性的評価については、独創性・多様性・国際性・基礎性・達成値の観点から、充分な成果を挙げることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	論文掲載数			
判定	A	A	A			
備考						
年度当初の計画通りに遂行することができ、調査回数や収集資料数などを鑑みても、充分な成果を挙げることができた。						

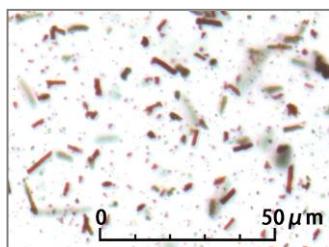
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国内調査1回、国外調査2回の作品調査と、それに付随する文字資料調査の回数、および調査内容の独創性と国際性を鑑み、A評価が妥当であると判断した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は、研究内容の水準を保ちつつ、順調に遂行できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 塗輪に認められる赤色顔料についての基礎研究（科学研究費補助金）((5)-①-ii)		
【事業概要】 塗輪に認められる赤色顔料について、粒子の形態分類や組成による分類を行い、編年や地域性を検討することを目的として実施する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 志賀智史
【スタッフ】			
【主な成果】 塗輪に認められる赤色顔料は、全てベンガラであった。出土ベンガラは直径 $1\text{ }\mu\text{m}$ のパイプ状粒子を含むものと、これを含まないものに大別されるが、中国・四国、近畿地方ではパイプ状粒子を含むベンガラを用いる地域と、これを含まないベンガラを用いる地域があることがわかった。			
【年度実績概要】 今年度は中国・四国、近畿地方を中心に調査をおこなった。塗輪に認められる赤色顔料は、全てベンガラであった。出土ベンガラは直径 $1\text{ }\mu\text{m}$ のパイプ状粒子を含むもの(以下、ベンガラ(P))と、これを含まないもの(以下、ベンガラ(非P))に大別されるが、四国と近畿地方ではベンガラ(P)を用いる傾向があること、中国地方ではベンガラ(非P)を用いる傾向があることがそれぞれ判明した。 昨年度の調査結果でも、北部九州地域では玄界灘周辺でベンガラ(非P)を用い、筑後川下流域では、ベンガラ(P)を用いることが明らかになっており、西日本一帯で塗輪に使用されているベンガラに地域性が認められる可能性が指摘できる。 ベンガラ(P)に含まれるパイプ状粒子については、湖沼に生息する鉄酸化細菌を焼成して得られたものであることが先行研究で判明している。ベンガラ(非P)については、現段階では原料が何であったのか不明である。また、この地域性が何を意味するのかも今後の検討課題である。			
【実績値】 ○調査概報 志賀智史 2009 「巨大なパイプ状のベンガラ粒子について」 『日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会、196-197頁 ○調査回数 16回 ○収集資料数 約100点			
 パイプ状ベンガラ			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	B	B	B			
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	埴輪の赤色顔料の材質についてのはじめての調査研究である。これまで知られていなかつた地域性が明らかになりつつある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	地域性があることが明らかになりつつある点は大きな成果であり、目的を順調に達成しているといえる。しかし、編年については、現時点では変化は認められない。次年度以降は対象をさらに北へ広げ、3年間の研究成果を纏めたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13)被災した近現代歴史資料の救済のための簡便な真空凍結乾燥法の開発（科学研究費補助金）((5)-①-v)		
<p>【事業概要】 可搬式の簡便な真空凍結乾燥装置を開発、作製して被災時に行える文化財救済方法のひとつとして真空凍結乾燥法の応用の可能性を探る。とりわけ、紙素材の水濡れ資料や劣化のために頁が固着した資料を対象に本装置の機能性や安全性を確認し、災害時の活用に備える。</p>			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	特任研究員 村田 忠繁
<p>【スタッフ】 川本耕三(元興寺文化財研究所) 大久保治(元興寺文化財研究所) 藤田浩明(大阪市文化財協会)</p>			
<p>【主な成果】 昨年度の歴史資料に続き本年度は写真資料での応用を試みた。被災を想定して、写真プリントを劣化させその要因や速度を考察した。水損によるプリントの固着も試し、原因を調べた。劣化条件の異なるサンプルを、真空凍結乾燥法で救済することが可能かを、本科研で作製した可搬式の簡便な真空凍結乾燥装置で試験をした。</p>			
<p>【年度実績概要】 奈良県生駒市の元興寺文化財研究所において、被災した写真プリント資料を想定して、色見本(カラーチャート)を撮影したサービス版プリントを20枚まとめたものを、ポケットアルバムに入れたものとそのまままとめたものを、水道水、純水、池、川、放置した水に漬け置き劣化させた。</p> <p>それぞれの水の化学分析を行い腐敗物質の確認をしたところ、一般生菌が池、川、放置水から検出し、大腸菌群は池から検出した。リン酸、硝酸の値が高かったのは放置水であった。また、川、放置水での資料に固着が認められた。</p> <p>pHは、純水 5.83、放置水 6.39、水道水 6.69、池 6.74、川 7.61 の値を示し、処理後も中性域の中であった。</p> <p>最大14日間漬け置きさせたこれらの資料を劣化状況ごとに分類し、水損資料の劣化開始の状態を確認した。</p> <p>その後、可搬式の真空凍結乾燥装置で処理を施した。結果は良好であったが、凍結乾燥を必要とする資料と風乾で問題ない資料との選別が必要となつた。</p>			
 <p>試験に使用した水</p>  <p>3日目に確認したプリントサンプル</p>			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○試験回数 写真資料の劣化試験 劣化した写真資料の真空凍結乾燥試験 ○試験資料数 150 件 ○学会研究会発表 文化財保存修復学会第31回大会 			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	B	B
備考	可搬型の簡便な装置を作製し、紙素材の被災資料の救済に備えるための試験を実施できたことは、文化財の災害対策に有効な試みといえる。特に写真資料の劣化において、その速度や要因から救済方法を提示できたことは研究の更なる発展性が認められる。					

2. 定量的評価

観点	試験回数	試験資料数	研究発表件数			
判定	A	B	A			
備考	写真資料のサンプル数に制限があり、想定した劣化状況が完全に作れなかつたが、多くのデータが得られ救済の目安を提示できる状況になった。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	3年間の研究期間を効率的に試験実施できた。初年度の装置開発作製、次年度の古文書を含む歴史資料での試験実施、今年度の写真資料での実施と計画に沿った試験・研究が行えた。それぞれの試験結果については学会での報告を行うことができて、多くの意見を集約できた。本研究で明らかになった改善策等を新たな課題として研究対象とすることが必要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	写真資料の劣化試験、真空凍結乾燥試験が定性定量的に実施できたことは、被災時の資料救済の目安やマニュアル作成に寄与できた研究である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14) 近世初期対馬藩の政治構造と日朝交流(科学研究費補助金)((5)-①- ii)		
【事業概要】 本研究の目的は、中近世日朝交流史を「偽使」「偽書」というキーワードによって連続的にとらえるとともに、とかく日朝外交事件としての側面が注目されがちである「柳川一件」について、対馬藩の御家騒動としての側面に重点をおいて再検討することである。具体的な研究テーマとしては、(1)「中近世日朝交流と偽使・偽書」、(2)「柳川一件の政治史的分析」を設定している。			
【担当部課】	文化財課	【プロジェクト責任者】	荒木 和憲
【スタッフ】			
【主な成果】			
【年度実績概要】 プロジェクト責任者が、平成 21 年 3 月 31 日付で退職(文化庁文化財部文部科学技官採用)したため、年度実績なし。			
【実績値】			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点						
判定						
備考						

2. 定量的評価

観点						
判定						
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
F	

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等

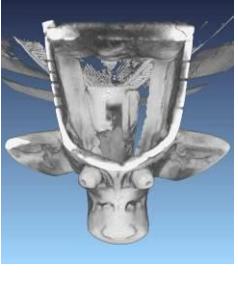
【書式B】

(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-15

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) X線CTスキャナによる中国古代青銅器の構造技法解析((5)-①-ii)		
【事業概要】 九州国立博物館において、X線CT、精密三次元計測機、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて文化財の内部構造調査を行い、文化財の状態や製作技法を理解し、得られた成果を展示に活用することとする。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	環境保全室長 今津節生
【スタッフ】 森田 稔(副館長)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、市元墨(企画課研究員)、鳥越俊行(博物館科学課主任研究員)			
【主な成果】 泉屋博古館の所蔵品を中心に、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この成果を基に、中国側の古代鋳造技術研究者とも協力して共同研究を展開した。さらに、科学的な調査結果と広く観覧者に公開するためにトピック展示を実施した。			
【年度実績概要】 九州国立博物館の展示に借用する文化財を中心に、1年間で約60点のCT調査や精密三次元計測を実施した。得られた成果は、常設展での展示の際に活用している。 本研究は、X線CTスキャナならびに3次元計測器を使用して得られたデジタルデータを蓄積しアーカイブを構築し、そのデータを活用した共同研究・博物館展示の可能性を探るものである。とくに、X線CT装置では複雑な形状の青銅器の内部構造の解析、精密3次元計測では青銅器表面に施文された精緻な文様の記録などを行った。共同研究では3次元データの相互比較から得られる製作技法の抽出などを行った。また、博物館展示では、銘文や青銅器表面文様の拡大パネルや3次元モデルとして出力し活用した。 その結果、中国古代青銅器の製作技術を非接触非破壊で解明することができた。この研究成果は日本文化財科学会と東アジア文化遺産保存学会中国考古学会で発表した。また、トピック展示(進化する博物館II—みる・きく・ふれる、神々の青銅器への誘いー)では、作品の理解を助けるハンズオンの複製展示として活用した。			
 <p>X線CTによる中国古代青銅器の調査</p>			
【実績値】			
調査点数 約60点	1件		
日本文化財科学会での発表	1件		
東アジア文化遺産保存学会での発表	1件		
中国考古学会での発表	1件		
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
独創性と効率性では、国内外の研究者から注目を集めた。発展性では取得したデジタルデータから三次元プリンタで正確な複製品を作製する技術を開発し展示に活用した。正確性では高精度を保った計測を行いデジタルデータを蓄積している。今後は、さらに展示への活用、デジタルデータの国際的な共同利用に向けて研究を進めたい。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	学会発表数				
判定	A	A				
備考						
文化財科学会には約 400 名の研究者が参加した。また東アジア文化遺産学会には中国・韓国・日本の研究者が約 200 名参加した。また、中国人研究者を招聘して研究協議を行った。今後はさらに国際的な共同研究を進めたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財用の X 線 CT としては、世界的で最も優れた装置の一つであり、国内外の研究者からその有用性について高い評価をいただいた。京都泉屋博古館、中国上海博物館・南京博物院など外部機関との連携研究も具体的に進んでいる。 22 年度は、より幅広い他機関との連携を目指しデータの活用を進めると共に、展示への活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	九州国立博物館では展示に際し文化財を常に借用するため、X 線 CT スキャナ装置、精密三次元計測装置等を活用しながら成果を上げることで、国内外の博物館との連携が進みつつある。22 年度はさらに広い範囲で展示に活用したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)博物館環境デザインに関する調査研究 ((5)-②-i)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 矢野賀一(デザイン室 主任研究員)			
【主な成果】 展示のデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、過去の事例や、他館における具体的な事例を調査した。 また以上の技術・手法を、当館においてどのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、実現可能なものについては館内の展示において実施した。			
【年度実績概要】			
東洋館 耐震改修工事にともなう代替陳列『表慶館 アジアギャラリー』8月4日～継続中(写真) <ul style="list-style-type: none"> LED照明システムによるアジア・仏教彫刻への照明手法 多国語対応(日/英/中/ハングル)による、展示解説システムの導入 			
② 平成館 特別展『染付 -藍が彩るアジアの器』7月14日(火)～9月6日(日)(写真) <ul style="list-style-type: none"> 館所蔵の「歴史的展示ケース」(明治時代)をリニューアルした展示手法 ガラスに低反射フィルムを張り、新たに光ファイバー照明を設置した。 皿や壺など陶磁器の質感を効果的に見せるため、色温度変換フィルター等を使用して、きめ細かい色温度調整を行った。 			
③ 本館 特別5室 文化庁海外展 大英博物館帰国記念『国宝 土偶展』 2009年12月15日(火)～2010年2月21日(日)(写真) <ul style="list-style-type: none"> 土偶の姿勢を固定する展示具、照明効果を考慮したアクリル展示台の作成。 演出的な案内誘導サインの作成、およびアンケートシステムの試行的導入。 			
【実績値】			
研究会発表件数	5回		
<ul style="list-style-type: none"> 東京インテリアプロンダ協会 講演会 JAGDA神奈川 講演 日本美術解剖学会 講演 等 			
論文掲載数	3回		
<ul style="list-style-type: none"> 『文化資源學』 等 			
他館調査	約12回		
<ul style="list-style-type: none"> 故宫博物院(台湾・台北市) 故宫博物院、国家博物館(中国・北京市) 大阪市立自然史博物館(大阪) 山種美術館(東京) 根津美術館(東京) 大英博物館(ロンドン) V&A美術館(ロンドン) 等 他約5件 			③『国宝 土偶展』
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
博物館における展示・公開は技術的な裏づけの調査研究に基づき、時代に会った見せ方と見え方の評価が求められる。またデザインのクオリティの向上を成立させるための設計技術や、デザインを実現・維持するための現場監理・物品管理に関する技術について、他館における具体的な事例調査を行った。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文掲載数	調査回数			
判定	A	B	A			
備考						
研究・調査によって明らかになった技術・手法を、当館の特別展および平常展において、どのようなシステムで導入・実施が可能かを整理し、研究会・論文等で発表した。また実現可能なものについては館内の展示において実施し、継続的に調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画的に導入を継続している、質の高い展示・照明システムにより、展示のバリエーションが広がったといえる。さらに照明器具の問題点についてメーカーと改良を進めている。具体的には22年度予定の特別展・平常展への導入・実施に向け、デザインを進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、独創的アイデアの創出と技術開発および館内展示システムの充実に力を注ぎたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)博物館美術教育に関する調査研究 ((5)-②- iii)		
【事業概要】 当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、平常展示と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果の一部をミュージアムマネジメント学会等で発表する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島勝
【スタッフ】 鈴木みどり(博物館教育課教育普及室主任研究員)			
【主な成果】 本館20室「みどりのライオン」での博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、制作工程模型展示は年間で10万人を超える利用者があり、当館における博物館教育プログラムとして定着している。加島及び鈴木は、このプログラムを博物館教育の見地から調査研究し口頭発表した。			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> 当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、スライドショー「東京国立博物館ガイダンス」、ハンズオン体験コーナー「日本のもようでデザインしよう！」、制作工程模型展示「孔雀明王像ができるまで」の博物館教育事業を実施した。 上記事業を博物館教育の一事例として、その理論と実践について以下のように発表した。 加島勝「博物館活動におけるボランティアの活用」(文化庁美術学芸課主催 平成20年度「第6回指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー。口頭発表) <p>鈴木みどり「誰のためのミュージアムリテラシー?」(ミュージアムマネジメント学会第一回基礎研究部門。口頭発表)</p>			
【実績値】 セミナー発表回数 文化庁美術学芸課主催「指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー1回 学会発表回数 ミュージアムマネジメント学会 1回 その他研究発表 4回(第三回博学連携ワークショップ等)			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」での平常展示と密接に関連した博物館教育事業を関係学会やセミナーで報告できたことは、今後の国内外の博物館教育研究に寄与するところがきわめて大きい。					

2. 定量的評価

観点	研究会回数					
判定	A					
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館本館20室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」では、博物館のガイダンス機能にくわえ、各種レクチャーと体験型プログラム、制作工程模型展示などを、一般から学校団体まで幅広い層に向けて展開することが可能となった。これは当館の博物館教育を推進する上でも大きな成果といえる。またこの事業を通して博物館教育の理論と実践について、担当研究員が研究し、その内容を広く内外に発信できたと思う。今後もさらに研究を続け、博物館美術教育に関する情報発信を精力的に行っていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館美術教育に関する調査研究は、教育普及課の研究員を中心とした研究計画にそつたかたちで順調に進められていると考える。今後も有形文化財を活用しながら博物館美術教育理論の構築ならびに実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築(科学研究費補助金)((5)-②)-iii)		
【事業概要】 博物館教育・普及事業の事例分析を通して、日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
【スタッフ】 加島勝(博物館教育課長)、鬼頭智美(企画課国際交流室長)、小林牧(広報室長)、白井克也(列品管理課平常展調整室長)、鷺塚麻季(博物館教育課教育講座室長)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、鈴木みどり(博物館教育課教育普及室主任研究員)、神辺知加(博物館教育課教育講座室研究員)、藤田千織(博物館教育課ボランティア室研究員)、遠藤楽子(企画課国際交流室研究員)、高梨真行(調査研究課書跡・歴史室主任研究員)			
【主な成果】 本年度は4年間の研究期間の最終年度にあたるため、これまでの調査研究成果を踏まえ、実験的な博物館教育プログラム「応挙館で美術体験」、博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができるここと」を開催し、研究のまとめをおこなった。			
【年度実績概要】 前年度までに実施した内外の美術館・博物館へのアンケート調査を集計し、内容を整理した。また、同じく前年度までに実施した内外の美術館・博物館における現地調査でえられたデータについても整理した。さらに本年度は本調査研究の最終年度なので、実験的な博物館教育プログラム「応挙館で美術体験」を行ないアンケート調査を実施し、さらに博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができるここと」を開催し、研究のまとめをおこなった。			
【実績値】 ・博物館教育プログラム 1回 ・研究会開催数 国際シンポジウム 1回 ・研究発表 4件			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
本研究において現代的な博物館教育事業のあり方について、多方面から有益な情報を得るとともに、その情報をもとに国際シンポジウム等での討議・分析を行い、その成果を実際の当館の教育普及事業に反映させている。						

2. 定量的評価

観点	研究会	博物館教育 プログラム	研究発表			
判定	A	A	B			
備考						
適宜、博物館教育プログラムや国際シンポジウムを開催し、当館招へい海外研究者を交えての意見交換も行った。						

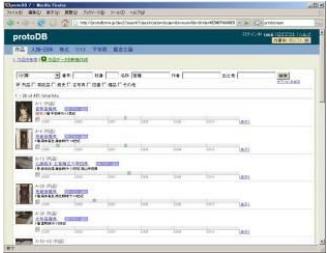
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究の最終年度として概ね良好な進捗状況であった。実験的な博物館教育プログラムや国際シンポジウムの開催によって、海外における美術館及び博物館教育に関する参考とすべき先進的な教育・普及プログラムの情報をえることができ、さらに研究者間の交流も深めることができた。 前年度までの研究成果をふまえ、今後の博物館・美術館における意義深い教育・普及活動の実践のための理論と、それに基づいたプログラムをまとめることとする予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、研究スタッフの協力の下、概ね研究計画にそったかたちで順調に進められたと考える。本調査研究の成果にもとづき、将来の日本の伝統文化に関する博物館における先駆的教育・普及理論を構築し、実践的プログラムを開発すべく努力していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務情報の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理および蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 丸山士郎
【スタッフ】 村田良二(博物館情報課情報管理室研究員)			
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能の各機能を継続的に運用し、改善すべき課題を抽出するとともに随時改善を重ねて性能向上を図った。また、鑑査会議管理機能における修理関連機能の機能要件を調査のうえ実装した。さらに、文化財移動情報登録システム等の外部システムとの連携について検討・実装を進めた。			
【年度実績概要】 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、運用経験から改善のための課題を抽出した。これらの課題については、随時システムを更新することにより迅速に対応した。特に、貸与管理機能と鑑査会議管理機能における定型文書の出力についてきめ細かい改善を積み重ねた。 鑑査会議管理機能においては、修理議案については運用がされていなかつたが、改めて機能要件について調査を行ない、実装を進めた。 収蔵品管理システムとは別に開発した文化財移動情報登録システム(プロトタイプ)と連動して、所在情報の一元管理に向けた機能を試験的に実装した。また保存修復情報のために開発中のシステムとの連携について検討を進めた。			
 収蔵品管理システム (プロトタイプ)			
【実績値】			
作品データ件数	180,299 件	平常展データ件数	2,039 件
鑑査会議データ件数	19 件	貸与データ件数	492 件
○研究会等での発表 6 件 村田良二「東京国立博物館 収蔵品管理システム開発経験から」(第4回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム 於東京国立博物館) 平成21年12月4日 Ryoji Murata, "Collection Management System of Tokyo National Museum," PNC Annual Conference 2009, Taipei, 平成21年10月8日 村田良二「デジタル資料管理モデルに関するコメント」(デジタル化された博物館資料に関する情報記述法の研究 公開研究会 於国立歴史民俗博物館) 平成21年10月23日 ほか3件			
○論文等掲載数 3 件 村田良二「デジタル資料情報記述モデルに関するコメント」,『デジタル化された博物館資料に関する情報記述法の研究』公開研究会資料集, 国立歴史民俗博物館, 平成21年10月23日 村田良二「東京国立博物館 収蔵品管理システム開発の経験から」, 第4回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム『日本のアート・ドキュメンテーション—20年の達成』予稿集, アート・ドキュメンテーション学会, 平成21年12月4日 田良島哲「博物館における業務情報の共有とIML(Inter-Museum Loan)システムの可能性」, 情報知識学会誌 Vol. 19 (2009), No. 2 pp. 70-73, 情報知識学会, 平成21年5月1日			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考	博物館のシステムに必要な機能を着実に開発しており、業務の円滑化と情報の効果的な蓄積につながっている。最新の技術も取り入れており、博物館におけるシステムのあり方を先導的に示すものとなっている。					

2. 定量的評価

観点	収集データ件数	研究会等 発表件数	論文掲載数		
判定	A	A	A		
備考	効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れのなかで効率的に無理のないデータ収集が可能になっている。				

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積を行えることが確認された。今後はさらに未実装の業務支援機能、特に特別展関連の機能等の開発を進め、さらに総合的な博物館情報システムとして発展させることが課題である。また、収蔵品データを外部へ公開する場合のシステムの要件についても具体的な検討を進める必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者と連携をとりながらシステム開発を継続し、博物館におけるシステムの参考実装となるよう、さらに調査研究を進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進 5) 凸版印刷と協同で、ミュージアム・シアターでの公開に向けた研究を実施する ((5)-②)- i)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示環境について調査研究し、今後の展示環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島勝
【スタッフ】 金子啓明(特任研究員)、谷豊信(列品管理課長)、富田淳(調査研究課長)、丸山士郎(博物館情報課情報管理室長)、田良島哲(列品管理課登録室長)			
【主な成果】 東京国立博物館と凸版印刷のスタッフが共同で、本年度は東京国立博物館の収蔵品の中から洛中洛外図屏風 舟木本(重要文化財)について①デジタルアーカイブによる情報蓄積、②VR(バーチャルリアリティ)手法を用いたコンテンツの開発、③ミュージアム・シアターでのコンテンツの一般公開に関する調査研究を行なった。			
【年度実績概要】 ① 当館所蔵の洛中洛外図屏風 舟木本(重要文化財)の高精細なデジタル写真撮影を行なった。 ② 洛中洛外図屏風が描かれていた当時の京都の様子を再現するために、京都の寺院などにおいて撮影取材を行なった。 ③ ①②でえられたデジタルデータをもとに、東京国立博物館と凸版印刷のスタッフが共同で調査研究を実施し、VR手法を用いて当時の洛中洛外の様子を再現するコンテンツ「洛中洛外図屏風 舟木本」を作成した。 ④ ③のコンテンツを館内のミュージアム・シアターで試験的に上映し、VR手法を用いたコンテンツ利用した常設展示品の新たな鑑賞法の開発に関する調査研究を行なった。 ⑤ ④の結果、VRでは展示では見えない個所、今は失われている個所、製作された当時の使用状況など具体的に再現できるので、VRを見た後での展示室での作品鑑賞することや、逆に展示室で作品鑑賞の後でVRを観ることによって、シアターと展示室を結ぶ双方向でのこれまでにない美術品鑑賞方法を提示することができた。 ⑥ 洛中洛外図屏風 舟木本の公開にあわせ、本館 2 階にVR手法を用いたコンテンツを元に作成したタッチパネルを置き、同屏風鑑賞の補助とした。			
【実績値】 コンテンツ作成数 1:「洛中洛外図屏風 舟木本」			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ作成数					
判定	A					
備考	VR手法を用いて製作当初の灌頂幡姿を復元し、コンテンツ「洛中洛外図屏風 舟木本」を作成した。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収集したデジタルデータを基に制作した、コンテンツ「洛中洛外図屏風 舟木本」を利用して、これまでにない常設展示活用法に関する調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の最終年度として順調に進捗した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) クウジット株式会社と協同で、アイ・フォーン(携帯端末機)を利用した作品鑑賞補助実験「LocationAmp for 法隆寺宝物館」を実施する((5)-②-i)		
【事業概要】 東京国立博物館法隆寺宝物館における文化財の鑑賞方法について調査研究し、今後の作品鑑賞環境の向上に結びつけることを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 加島勝
【スタッフ】 浅見龍介(博物館教育課教育普及室長)、藤田千織(博物館教育課ボランティア室研究員)			
【主な成果】 クウジット株式会社が開発した位置測位システムを用いたアイフォーン(携帯端末機)に、東博と共同で製作した法隆寺宝物館に展示されている国宝灌頂幡ほか以下の7作品の解説データコンテンツを入力し、博物館来館者に実際に利用いただく実験を行い、博物館の作品鑑賞補助ツールに関する調査研究を行った。			
【年度実績概要】			
○解説データコンテンツ作成 7件			
① 法隆寺宝物館展示作品の中から7作品を選び、わかりやすい展示解説に関する調査研究を行った。			
② ①にもとづき、音声や文字情報にくわえイラストやアニメーションを用いた展示解説を作成した。			
③ ②で作成した展示解説をアイフォーン(携帯端末器)で利用できるコンテンツを作成した。			
○アンケート調査 1247件			
① 一般の来館者に実験的に利用してもらい、アンケート調査を実施した。			
② アンケート結果をもとに、将来、恒常に利用できる具体的な方法を検討した。			
【実績値】 コンテンツ作成数 7:「法隆寺宝物館」「国宝灌頂幡」「重要文化財如来三尊像」「重要文化財摩耶夫人及び天人像」「国宝竜首水瓶」「国宝海磯鏡」「重要文化財蜀江錦綾幡」			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	B	A	
備考						
アイフォーン(携帯端末機)を用いた博物館展示室内での作品鑑賞補助ツールの実験を行った。						

2. 定量的評価

観点	コンテンツ 作成数	アンケート 調査件数				
判定	A	A				
備考						
2010年1月21日～2月7日まで(16日間)「LocationAmp for 法隆寺宝物館」を実験的に行ない 1285人の利用をえた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	アイフォーン(携帯端末機)を用いた作品鑑賞補助ツールの常設展示活用に関する調査研究を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	順調に進捗した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 彫刻におけるデジタル立体造形の可能性と表現方法の研究・教育への応用(科学研 究費補助金)((5)-②-iii)		
<p>【事業概要】 芸術分野における立体表現として、アナログ的な造形彫刻の新しい表現研究に伴い、デジタルによる造形表現の可能性を相互反映し、その両面における可能性について探り、アーカイブとしてのデータベース研究活用と教育研究としての新しい芸術表現の獲得を目的とした基礎研究を行う。</p>			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
<p>【スタッフ】 北郷 悟(東京芸術大学副学長)、木戸修(東京芸術大学美術学部教授)、橋本明夫(東京芸術大学美術学部教授)</p>			
<p>【主な成果】 東京芸術大学美術館所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究ならびにコンピューター造形システムによる各入力プロセスの造形表現の研究を継続的に行ってきました。こうした研究におけるさまざまデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①東京芸術大学美術館所蔵品の立体データアーカイブ作成の研究とデジタルデータによる教育としての応用研究 <ul style="list-style-type: none"> ・石膏原型ロダン作と重要文化財・荻原守衛の作品「女」の彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成し、これを如何に教育的に利用すべきかを検討した。 ②コンピューター造形システムによる各入力プロセスの造形表現の研究 <ul style="list-style-type: none"> ・数学的構想による立体造形の可能性を研究し、新しい表現としてのデジタルによる表現研究を行った。 			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①作品の高精細データ 2 件 「触れる彫刻」の研究に関する調査回数 5 回 			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

備考

本研究において作成したさまざまなデータをベースにしたレプリカを作成し、専門的な教育利用としての「触れる彫刻」の研究に反映させている。こうした研究は、その成果を展覧会の中に組み込むことなどで社会利用の可能性が増幅するとともに仮想空間の造形表現の展開と表現の可能性の広がりについても多方面から期待されている。

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料件数				
判定	A	B				

備考

彫刻研究のためのアーカイブとしての高精細データを作成するとともに「触れる彫刻」の教育的利用のための調査を行った。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	彫刻研究のためのアーカイブとしての三次元高精細データの取得と解析出力による作品制作が良好に進展。こうした成果をもとに展覧会の中での「触覚展示」の可能性が大幅に広がったことは大いに評価される。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は概ね研究計画にそったかたちで順調に進められていると考える。調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、最終年度のまとめに向け、特に教育的利用に関する具体的な提案を行っていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究 ((5)-②- ii)		
【事業概要】 当館のウェブサイトは、コンテンツの豊富さ(収蔵品データベースなど)から定評があるが、さらにトップページを更新し、多くのページで質の充実をはかった。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 久保智康
【スタッフ】 山田 横治(客員研究員)			
【主な成果】 当館のホームページや文化財情報システムに関する調査研究を実施 現情報システムの現状調査と検討会の実施、およびシステム改良の実施 ウェブサイトのコンテンツ充実のための検討 管理サーバ導入に伴うシステム変更の検討			
【年度実績概要】 ・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における現状調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・SEと共に検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出、見直しを行い、改良を加えた。 ・e-国宝に向けて国宝・重要文化財高精細画像コンテンツの拡充の検討を行った。 ・ウェブサイトにおけるトップページの一新、重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。 ・管理サーバ導入に伴うシステム変更、とくにセキュリティ強化に関する検討を行った。			
【実績値】 ・システムの現状調査 6回 ・システム検討会 11回 ・ウェブサイトコンテンツの検討 6回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考						
当館のウェブサイトは、コンテンツの豊富さ(収蔵品データベースなど)から定評があるが、さらにトップページを更新し、多くのページで質の充実をはかった。						

2. 定量的評価

観点	検討会	システム現状調査	ウェブサイトコンテンツ検討			
判定	A	A	A			
備考						
システムとウェブサイト・コンテンツの検討を随時行い、定期的な検討会を実施した(計11回)。 e-国宝に向けての国宝・重要文化財高精細画像のコンテンツの拡充をはかった。 ウェブサイト・トップページの更新、重要文化財高精細画像データベース「KNM Gallery」の拡充、公開収蔵品データベースの拡充、研究紀要「学叢」バックナンバーPDF版の拡充、館外貸出作品一覧の追加、展覧会混雑情報の追加、メールマガジンの配信などの充実をはかった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	システムの改良を実施し、ウェブサイトもトップページの更新ほか、質・量ともに格段の充実をはかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算をフルに活用し、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている。特に4館共通のe-国宝に向けてのコンテンツ整備の達成度はきわめて高い。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 西域出土文献に関する調査研究((5)-②- ix)		
<p>【事業概要】 サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の中央アジアおよびエルミタージュ美術館所蔵の西域資料についての調査研究を行い、その成果に基づいて特別展覧会を実施した。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
<p>【スタッフ】 (当館研究者)赤尾栄慶(上席研究員)、羽田 聰(研究員) (調査員)高田時雄</p>			
<p>【主な成果】 サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションとエルミタージュ美術館の西域関係資料を調査し、展覧会用にロシア科学アカデミー東洋写本研究所からは 127 件、エルミタージュ美術館から 1 件を借用することとした。これらの成果に基づいて、特別展覧会「シルクロード 文字を辿って—ロシア探検隊収集の文物—」を開催した。</p>			
<p>【年度実績概要】 サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションおよびエルミタージュ美術館の調査を実施し、特別展覧会を開催した。</p>			
<p>【実績値】 ロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の西域文献とエルミタージュ美術館の西域関係資料を調査し、展覧会用にロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵から 127 件、エルミタージュ美術館から 1 件を借用した。これらの成果に基づいて、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所との共催で、特別展覧会「シルクロード 文字を辿って—ロシア探検隊収集の文物—」を開催した。 研究書としても使えるように配慮した解説付き目録も作成した。</p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

2. 定量的評価

観点	特別展覧会開催					
判定	A					

備考

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<ul style="list-style-type: none">・サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー東洋写本研究所所蔵の東洋写本コレクションおよびエルミタージュ美術館の調査を実施し、特別展覧会の作品リストを確定した。これらに基づいて、特別展覧会を開催した。・海外との文化交流を実施した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事前調査・出陳交渉を行い、質の高い特別展覧会を開催した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 京都十六本山をはじめとする日蓮法華宗寺院所蔵文化財の調査研究(特別展覧会「日蓮と法華の名宝」準備調査)((5)-②-iv)		
【事業概要】 妙満寺など京都十六本山に所蔵される文化財の調査研究により、特別展覧会「日蓮と法華の名宝」展の開催に反映することを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	研究員 大原 嘉豊
【スタッフ】 西上実(学芸部長)、赤尾栄慶(上席研究員)、若杉準治(列品管理室長)、山本英男(美術室長)、山下善也(連携協力室長)、久保智康(企画室長)、羽田聰(研究員)、淺漱毅(主任研究員)、中村 康(文化財管理監)、尾野善裕(工芸室長)、山川暁(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、宮川禎一(考古室長)、村上隆(保存修理指導室長)			
【主な成果】 京都日蓮法華宗関係資料を調査し、その歴史的位相を把握することができた。特に、新出資料または長年所在不明だった作品が多数発見されたことは特筆に値する。特に、高麗の弥勒下生変相図は、重要文化財級の新発見として、記者会見も行い全国紙でも好意的に報道された。			
【年度実績概要】 1月13日 妙満寺調査を行った。重要な新発見が多数あった。特に、高麗・至元31年(1294)の弥勒下生変相図は、世界に三番目に古い高麗仏画の紀年銘作品であり、高麗宮廷画家の作としては最古の作であることが判明し、新聞等で大きく報道された。本作は、展覧会後、平成21年度京都府の有形文化財に速やかに指定されるに至っている。			
【実績値】			
○調査回数 1回 展覧会開催年ということもあり、事前調査を終えることが出来た。業務多端のおりから、日蓮法華宗の京都十六本山の調査を完遂することが出来た。関係寺院ご協力のおかげだと考えている。おそらくこのように形で十六本山の調査が行われたのは初めてのことと考えている。			
○調査概報 報告書類刊行の企画はないが、展覧会図録においてこの成果は十分に反映させることができ、一般の方々、及び研究者からも好評を博すことができた。			
○論文件数 2件 大原嘉豊「日蓮法華宗美術試論」『日蓮と法華の名宝—華ひらく京町衆文化』展図録 他1件			
○収集資料数 50点			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

平成21年の秋に開催した展覧会の事前調査を兼ねており、時間的制約が多かったが、悉皆調査に準じた水準の高い調査も相当数こなすことができたのは、意義が大きかったと考えている。展覧会にも調査成果を十分に反映させることができ、日蓮法華宗美術の研究に大きく貢献することができた。

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	A	A	A			

備考

展覧会開催にあたる最終年次であったため、最後に残っていた一寺院の調査を完遂することができた。京都十六本山全体に学術調査を及ぼし得たのは初めてのことであり、学術的な意義は計り知れないものがある。この成果については、初公開作品37点・新発見作品12点という形で展覧会図録にも反映させることができ、高い評価を得ることができた。調査概報については、まとまった形で公刊を予定していないが、展覧会図録に十分反映させ得たため、昨年より評価を上げている。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展覧会実施に向けた事前調査が計画の端緒にあるが、その時間的・規模的制約にもかかわらず、研究員全員による体制を敷き、悉皆調査に準じた調査を実施した。新出作品の発見はいうまでもなく、また、調査によって得られた文化財情報を調査先寺院に伝えることで、文化財保護の意識を高めることにも貢献しており、意義が頗る大きい。ことに、工芸関係は調査能力のある研究者が限られているため、価値の再認識という点で所蔵者には非常に感謝されている。完備した報告書刊行に連動させられないことが残念であるが、展覧会図録にその成果を十分盛り込むことができ、所蔵者、研究者、一般の関心を喚起することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会計画の中で、調査研究は順調に進めることができた。予定通り、京都十六本山の調査を終えることができ、計画を完遂することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進					
プロジェクト名称	4) 長谷川等伯に関する調査研究 ((5)-②-iv)					
【事業概要】 全国の美術館・博物館、社寺等が所蔵する長谷川等伯関連の作品および資料の調査研究を行う。社寺調査への参加と協力を行う。						
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 山本英男			
【スタッフ】 山下善也(連携協力室長)、奥平俊六(客員研究員)						
【主な成果】 長谷川等伯展に出品する候補作品のすべての調査を完了し、新たな視点からの検討を加えた。その中には信春時代に制作されたと推定される、きわめて重要な新発見の金碧花鳥図屏風も含まれている。その詳細は、京都国立博物館研究紀要『学叢』第31号(平成21年5月)に「信春時代の等伯筆金碧花鳥図屏風」と題して論じた。						
【年度実績概要】 前年度は主に長谷川等伯の出身地である石川県の寺院や美術館に所蔵される作品(約30件)と京都・東京に所在する作品(約25件)を調査したが、本年度は京都・東京での調査(10件)を継続するとともに、滋賀県や兵庫県、岡山県や大阪府など各地に残る作品(約20件)を調査し、整理分類した。						
【実績値】						
○調査件数 約30件 京都・東京に所在する作品を調査した。(約10件) 滋賀・兵庫・岡山・大阪に所在する作品を調査した。(約20件)						
○論文件数 5件 ・山本英男「信春時代の等伯筆金碧花鳥図屏風」京都国立博物館研究紀要『学叢』第31号(平成21年5月) ・山本英男「長谷川等伯、天下を取る—上洛後の二十年—」特別展覧会「長谷川等伯」図録(平成22年2月) 他3篇						
【備考】						

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

備考

長谷川等伯関連の作品調査の成果として、徹底した作品資料の調査と、綿密な分析を行うことができた。それにより、これまで曖昧な状況にあった等伯の画風展開を明確にするための基礎作りができたといえる。

2. 定量的評価

観点	調査件数	論文件数				
判定	A	A				

備考

長谷川等伯関連作品の所在と保存状況、伝来など詳細なデータの記録と整理を行えたことで、特別展覧会「長谷川等伯」開催のための準備が整い、同展図録の執筆・作成も完了した。

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	長谷川等伯は桃山時代の巨匠だが、その遺作が各地に分蔵されるため、その詳細な整理分類はなかなか行えない状況にあった。それだけに、悉皆調査に近い形での本調査は等伯研究にとってきわめて価値のあるものといえる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究はすべて終了した。その成果は、平成 22 年度の特別展覧会「長谷川等伯」において披瀝されることになる。

【書式B】

(様式 1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4522-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けての調査研究 ((5)-②)-iv)

【事業概要】

- ①特別展覧会「高僧と袈裟」の開催に向けて、室町時代以前に製作された袈裟を中心に、僧侶の肖像画(頂相)・袈裟に関連する古文書などの関連資料を、広く調査・研究する。
 ②京都国立博物館に寄託されている袈裟の綿密な調査と顕微鏡撮影を行い、詳細な作品調書を作成する。

【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	主任研究員 山川 曜
--------	-----	-------------	------------

【スタッフ】

モニカ・ベーテ(調査員)

【主な成果】

- ①国および地方公共団体の指定文化財を中心に、全国の袈裟・頂相・袈裟に関する古文書の所蔵状況調査を行い、とりわけ注目される作品については、実見調査と顕微鏡撮影を行った。その中には、これまで知られていなかった作品も含まれており、そのうちの一件については地方紙で大きく報道された(高知新聞)。中国・杭州にて、関連する出土作品を調査し顕微鏡撮影を行った。
 ②寄託されている袈裟の約半数について詳細な調査と顕微鏡撮影を行い、それらのデータを蓄積するデータベースを構築した。

【年度実績概要】

毎月一回、調査員モニカ・ベーテ氏と寄託品の調査と顕微鏡撮影を行い、順次データの整理を行った。

4月 30日	清淨華院(京都)調査
7月 8日	吸江寺(高知)調査
10月 12日	曇華院(京都)調査
10月 16日	仁和寺(京都)調査
10月 21日	妙興寺(愛知)調査
11月 2日～5日	シルク博物館(中国・杭州)調査
12月 15日～16日	天龍寺(京都)調査
1月 20日	遊行寺(神奈川)調査
2月 16日	瑞石寺(福岡)調査
2月 17日～18日	光明寺(京都)調査
3月 16日～21日	江西省徳安県博物館(中国・徳安)調査

【実績値】

- ①京都国立博物館に寄託される袈裟の調査および顕微鏡撮影。(約 20 件)
 上記のデータベース作成。(約 15 件)
 ②館外での袈裟の調査および顕微鏡撮影(約 20 件)
 ③論文 1 件
 「禪と伝法衣 事実と作為と」『美術フォーラム 21』美術フォーラム 21 刊行会 5 月

【備考】

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	B	A	A
備考						
<p>これまでにも感じてきたことだが、中世に遡る袈裟は脆弱化が進んでおり、この時点で調査をして何らかの保存策を講じなければ、いずれは塵芥となってしまう。現時点での正確な調査は、今後の保存策の検討において、たいへん重要な意味を持つと考える。</p> <p>染織史および仏教史という視座からの袈裟の綿密な研究はこれまで実績がなく、基礎データを蓄積することに傾注した一年であったが、顕微鏡撮影に基く徹底した織物の組織分析により、染織史の立場からの製作年代の推定が可能になった。</p>						

2. 定量的評価

観点	調査件数	顕微鏡撮影数	データベース作成数			
判定	A	A	B			
備考						
<p>調査件数は予定通りであったが、小さな織機や紙テープを使って織組織モデルを作成し、分析結果を検証していくため、データの解析に思いのほか時間を取られた。今年度の成果をもとに来年度はより効率的に解析を進め、データベースを充実させたい。</p>						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中世以前の染織品が伝世品としてかなりの量伝えられているのは、染織の先進国であった東アジア文化圏では日本だけであり、その研究は、日本のみならず染織史の発展を考えるうえで、極めて重要な意味を持っている。世界的に見ても重要な作品群を綿密に調査し、欧米の研究者とも共有しうる分析データを公開していくことは、これまでにも望まれていたところであり、その実現に向けて取り組んだ本年度の業務は、予定以上の成果があったと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究は順調に進展している。 来年度は展覧会の実現に向け、出陳作品を絞り込み、特別展覧会の展示および図録作成に取り組みたい。また図録については、調査員のベーテ氏と協議し、可能な限り英訳を試みたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 南都諸社寺等に関する計画的な調査研究成果の一部を「国宝 鑑真和上展」「聖地寧波」並びに特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」及び「お水取り」に反映させる ((5)-②-vi)		
<p>【事業概要】 近隣社寺へ奈良国立博物館に対する積極的な協力の働きかけを行って所蔵文化財の調査研究等を行い、その成果を事業(展示等)に反映させる。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
<p>【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、森實久美子(企画室員)</p>			
<p>【主な成果】 唐招提寺、東大寺、春日大社及び「聖地寧波」に関する文化財を蔵する諸寺への働きかけを行って所蔵文化財の調査を実施し、その成果を特別展・特別陳列に反映させるとともに、報道発表などを通して発信した。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 前年度に行った唐招提寺の収蔵品及び同寺金堂基壇発掘時における出土品(橿原考古学研究所所管)の調査の成果を、特別展「国宝 鑑真和上展」の展示解説パネル、展覧会図録等に反映させた。 ② 特別展「聖地寧波」における出陳作品の事前調査を行い、その成果を特別展「聖地寧波」の展示解説・展覧会図録等に反映させた。特に大徳寺五百羅漢像(82幅)の調査によって、新たに30点近く金泥銘文が発見されたことは大きな成果であった。また会期中には泉涌寺(京都市)所蔵・楊貴妃観音像(重文)のX線撮影を行った。この調査では像内納入品の納入状況・形状の確認という大きな新知見があつたため報道発表を行い、画期的成果として、各種メディアで大きく取り上げられた。 ③ 春日若宮おん祭に関する文化財調査を実施し、その成果を特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映した。特に前年度に実施した「春日権現驗記披見台」の光学調査等の成果を会場でパネル展示するとともに、新知見を会期中に実施されたサンデータークで披露し、大きな反響を呼んだ。 ④ これまで紹介されることの少なかった、奈良地域所在の南北朝・室町彫刻の調査を寄託品中心に重点的に実施して特集展示「南北朝・室町時代の彫刻」を開催し、その成果を展示解説パネルや各種紹介記事等に反映させた。 ⑤ 江戸時代における東大寺二月堂の火災時の状況を伝える、貴重な史料「両堂記」(東大寺蔵)を調査し、特別陳列「お水取り」で初公開した。 			
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○調査回数 10回 ○展覧会への反映 関連調査の展覧会への反映回数 4回 			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	南都諸社寺等に所蔵される文化財の調査は、奈良に立地する当館の基本的不可欠な作業の一つであると位置づけられる。こうした調査を通じて、近隣社寺との交流・信頼関係が一層深まりつつあり、今後の当館の企画・事業に好影響が期待される。					

2. 定量的評価

観点	調査回数	展覧会への反映				
判定	A	A				
備考	展覧会企画に沿った調査研究が中心になっており、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展「国宝 鑑真和上展」、同「聖地寧波」に出陳した近隣社寺を中心とした所蔵品の事前調査の成果は展示及び展覧会図録に反映され、高い評価を得た。春日大社の若宮おん祭及び東大寺修二会に関する文化財調査の成果は特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」「お水取り」に反映された。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術と奈良の文化を調査研究展示活動の主眼としている当館にとって、近隣社寺の宝物調査は必須の事業である。21年度も東大寺や春日大社を始めとする社寺の宝物調査を行うことにより、展覧会を活性化させ、学術的成果をあげることもできた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 我が国における仏教美術の展開と、中国・韓国の仏教文化が及ぼした影響の調査 研究成果の一部で平常展の充実を図る。 ((5)-②-vii)		
<p>【事業概要】 仏教美術の専門館であり、日本仏教美術に関するもののみならず、広くアジアを視野に入れた展示を構成している奈良国立博物館の特長に鑑みて、中国や朝鮮半島における文化財とわが国の文化財の比較研究を実施する。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 西山 厚
<p>【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】鈴木喜博(上席研究員)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、稻本泰生(企画室長)、吉澤悟(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、斎木涼子(列品室員)、岩戸晶子(工芸考古室員)、野尻忠(情報サービス室員)、清水健(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、永井洋之(企画室員)、森實久美子(企画室員)</p>			
<p>【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で研究員の派遣・受け入れを行い、活発な研究交流・情報交換を行うことができた。また特別展開催の前提として行った、中国・朝鮮半島で制作された文物に対する調査研究の成果を、展示に反映させることができた。</p>			
<p>① 常設展彫刻部門では、中国及び朝鮮半島の石仏・金銅仏から日本の仏像に至る様式の流れを体系的に展観した。また小金銅仏・檀像・塑像・塼仏のコーナーを中心に、隋唐時代の中国で流行した仏像の諸類型がその信仰背景とともに古代日本に伝來したこと、平安初期木彫における用材觀と中国檀像との関係などについての近年の研究成果を、展示構成・作品解説・展示パネルなどに反映した。 ② 常設展工芸部門において中・韓・日の舍利容器・密教法具の比較研究の成果に基づき、各地域の作例の比較展示を行った。</p>			
<p>【実績値】 平常展への成果の反映 3回 企画展示への成果の反映</p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
備考	わが国の仏教美術を研究する上で、中国・韓国をはじめとする海外の仏教文化研究は必要不可欠である。そのために数箇所の研究機関と学術交流協定を基軸として効率的に調査研究を進め、その成果を当館の特別展等に反映させるように努めている。					

2. 定量的評価

観点	平常展への反映	企画展示への反映				
判定	A	A				
備考	調査研究の成果を積極的に反映させており、その点では必要十分な条件を満たしている。					

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	学術交流協定を締結している上海博物館(中国)・河南博物院(中国)・中国国家博物館(中国)・国立慶州博物館(韓国)との研究員の交流などをとおして行った、アジア諸国を視野に入れた調査研究の成果を平常展・企画展(特別陳列等)に反映させることができた。その過程で、中国・韓国・日本の三国の作例を比較展示してその共通点・相違点を浮き彫りにするなどの工夫を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	わが国とアジア諸国との文化交流に関する文化財の調査研究は次第に蓄積を増しており、こうした成果によって 21 年度平常展の内容を充実させることができた。今後も引き続き調査研究を続け、その成果を展示に反映していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)高齢者・障がい者・外国人等の利用者の視点に立った、展示の内容・方法、施設整備、管理運営面からの研究・実践(UMP:Universal Museum Project)を展開する。((5)-②-i)		
【事業概要】 ユニバーサル・ミュージアムという観点から、高齢者・障害者・外国人等、多様なニーズを持った来館者に快適な鑑賞環境を提供するため、設備・サイン・演出・運営等、総合的に研究と実験を行い、すべての方が利用しやすい快適な観覧環境づくりを目指す。			
【担当部課】	総務課	【プロジェクト責任者】	総務課長 樋口 理央
【スタッフ】 神谷真美(総務課長補佐)、永野間一成(総務係長)、北原麻美(財務係長)、 安藤英崇(施設係主任) 森田昌嗣(九州大学大学院芸術工学研究院教授)、曾我部春香(九州大学大学院芸術工学研究院准教授)、 石橋伸介(九州大学大学院芸術工学研究院学術研究員)			
【主な成果】 当館は1階エントランスホールが広いため、来館者をそれぞれの目的の場所へスムーズに誘導するための方策について検討してきた。 今年度は、九州大学芸術工学研究院森田研究室と共同で来館者への調査や検討会を実施したことにより課題が明らかになり、改善のための方策を確立することができた。			
【年度実績概要】 ① 館内サインや休息スペース等の現状調査を行い、以後の調査方法について検討。 ② 現状調査の結果及び調査方法の検討を踏まえ、新たにピクトを考案すると共に同ピクトやフロアマップ等を掲載した来館者誘導のための館内案内板のデザインについて検討。 ③ 館内案内板の模型を館内に設置し、来館者の反応等の行動観察、対面による聞き取り調査を実施。 ④ ③で実施した調査結果の取りまとめ。 ⑤ スペースの効果的利用を目的とした館内設置のコインロッカー使用状況調査を実施。 ⑥ 各調査の結果の分析。 ⑦ ⑥の分析結果を踏まえ、来館者が案内所、観覧券売場、館内外の情報提供スペースを快適かつ有効に利用できるためのグランドデザインを策定。			
【実績値】 現状調査：2回 聞き取り調査：1回 行動観察：1回 調査報告書：1冊 検討会：10回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
備考						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数				
判定	A	A				
備考						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	数回にわたる調査及び検討会での結果を踏まえたエントランスホールのデザインの改善案を策定することができた。 次年度は策定した改善案の実施を計画しており、来館者の利便性向上が期待できるため、総合的評価をAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定どおり計画が進捗していることから、順調に進んでいると判定した。 次年度はこれまでの調査・検討結果を踏まえた改善案を実施する予定である。

【書式B】

(様式 1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 平成 20 年度特別展「工芸のいま 伝統と創造」に関連した九州・沖縄の伝統工芸作家への調査を受けて、継続的かつ発展的に調査研究活動を行なう。((5)-②-ix)		
<p>【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸の作家の創作活動について、調査研究を行なう。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。昨年度調査を行なった作家について継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。</p>			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 伊藤 嘉章
<p>【スタッフ】 原田あゆみ(文化財課研究員)、赤司善彦(展示課長)</p>			
<p>【主な成果】 平成 21 年度西部伝統工芸展、日本伝統工芸展など、今年度開催の工芸展で作品調査を行なった。陶芸部門では、西部工芸会陶芸部会の研究会に参加し、新たな創作活動の展開について調査し、これまでに対象となっていたいなかった若手作家も調査に加わった。 タイと共同で開催する展覧会の中に伝統工芸を位置づけ、日本の伝統技術によって現代に展開する工芸を紹介することとし、そのための予備調査を行なった。</p>			
<p>【年度実績概要】 九州・沖縄の伝統工芸の中で最も層の厚い陶芸で、調査の継続と研究会への参加を行なった。西部工芸展、日本伝統工芸展、西部工芸陶芸部会展、九州・山口陶芸展の出品作品の調査を行い、新たな創作の動向とこれまで調査対象となっていたいなかった新しい人材の発掘を行なった。その一方で、日本工芸展の審査に限り、全国規模での陶芸の状況の把握をつとめた。 陶芸に続いて層の厚い染織では、久留米絣技術の調査を行なった。博多織については、若手作家の制作について調査を行った。 タイからの研究者を受入れタイでの共同展覧会の開催の準備を行なう中で、工芸技術の伝統という側面から有田での陶芸の伝統技術について共同調査を行った。</p>			
<p>【実績値】 第 106 回 九州・山口陶芸展、第 44 回西部工芸展、第 56 回日本工芸展で九州・沖縄の工芸の調査と全国的な工芸の状況の調査。 秋季、冬季の西部工芸会陶芸部会研究会に出席し、九州・沖縄の陶芸の現状調査と研究発表。 7/16~8/8 タイからの研究員受入で、有田で柿右衛門窯などの共同調査 ○収集資料数 268 件</p>			
 <p>日本工芸展審査会場での調査</p>			
<p>【備考】</p>			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
備考						
伝統工芸への取り組みは近代美術館を持たない九州地区にあって、無形文化財を扱う役割を果たすとともに、地域にある博物館として伝統工芸の発展を通して地域貢献を果たすというものである。これらについて、前年度の展覧会での成果から、さらなる上積みを目指しての継続的な事業であった。工芸作家の中にこの活動に対する期待も大きく、また既に昨年度のこの事業によって九州・沖縄の工芸は確実に新たな展開を示しつつある。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究会			
判定	A	A	A			
備考						
個別調査主体から、展覧会出品作による追跡調査を行っている。さらに全国レベルでの工芸の状況へと調査対象を広げている。それらの成果の一部は、工芸作家とともに行なう研究会によって公表している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	地域に根ざした博物館として、九州・沖縄の伝統工芸の発展に寄与している。 こうした活動が他地域にも伝わることで、各地で新しい動きを求める声が出始めており、これは日本の工芸技術が後世に伝える面で大きな役割を果たしつつある。 日本以外の工芸技術の実情調査、保護といった新たな研究の広がりがあり、文化交流を視座に置く九州国立博物館としては今後さらに広げる必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前年度の展覧会の成果を受け、加えて全体的な広がりを大きくもてたという点は評価できる。陶芸、染織といった層の厚い分野では、より活発な研究活動が行なわれているが、今後は層の薄い分野での活動を深めていく必要がある。 海外での工芸技術の実情と保護という面について、更なる研究が望まれる。